薔薇のマリア Ver1

つぼみのコロナ

十文字青
Ao Jyumonji

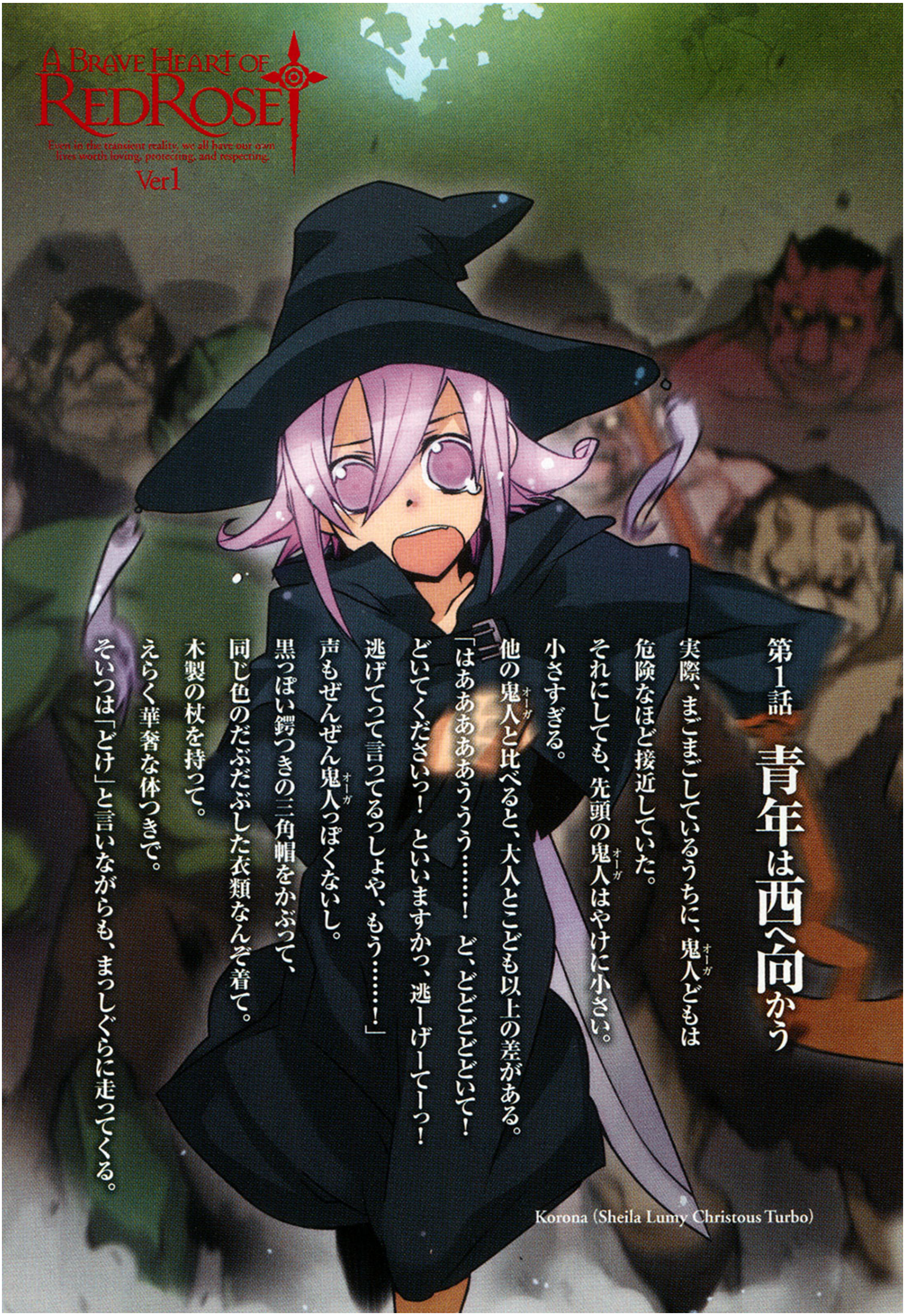


A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

Ver1

角川スニーカー文庫


A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
Ver1
第1話　青年は西へ向かう
実際、まごまごしているうちに、鬼人どもは
危険なほど接近していた。
それにしても、先頭の鬼人はやけに小さい。
小さすぎる。
他の鬼人と比べると、大人とこども以上の差がある。
「はああああうううう……！　ど、どどどどいて！
どいてくださいっ！　といいますかっ、逃ーげーてーっ！
逃げてって言ってるっしょや、もう……！」
声もぜんぜん鬼人っぽくないし。
黒っぽい鍔つきの三角帽をかぶって、
同じ色のだぶだぶした衣類なんぞ着て。
木製の杖を持って。
えらく華奢な体つきで。
そいつは「どけ」と言いながらも、まっしぐらに走ってくる。
Korona (Sheila Lumy Christous Turbo)

第2話　この旅は終わらない



Lenny & Korona

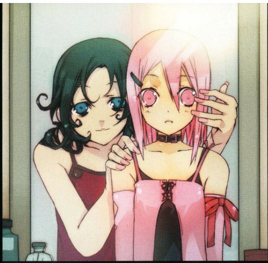


Lenny (silver eyes)



Rom Four

第3話　人は一人では生きていけない



Donna & Korona



Donaderizel Tomoyo Ful-Quel-Merill GANZEN-YUROH


たとえ咲かなくたって、
——俺はいつまでも待ってやるよ。
Lenny & Korona

薔薇のマリア　Ver1

つぼみのコロナ

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ver1

— BUDS' WAY —

Ao Jyumonji

First published 2006 in Japan

By

Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

A BRAVE HEART OF RED ROSE
Ver1

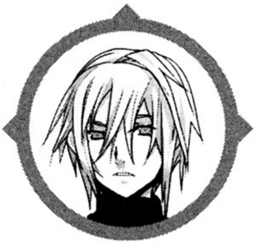
CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Ver1

MAIN CHARACTERS



Nero
ネロ

コロナの兄弟子。



Rom Four
ロム・フォウ

深い森の黒真珠。



Korona
コロナ

魔術士の少女。15歳。



Conte des Conte & Pinte des Pinte
コント・デ・コント&ピント・デ・ピント

エルデンの《侵入者(クラッカー)》の兄弟。



Tomoyo
トモヨ

文書館の女王様。



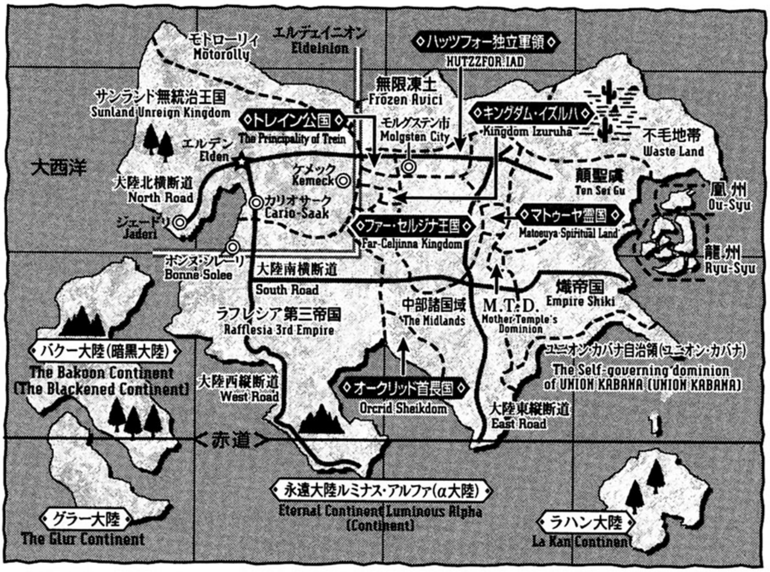
Lenny
レニィ

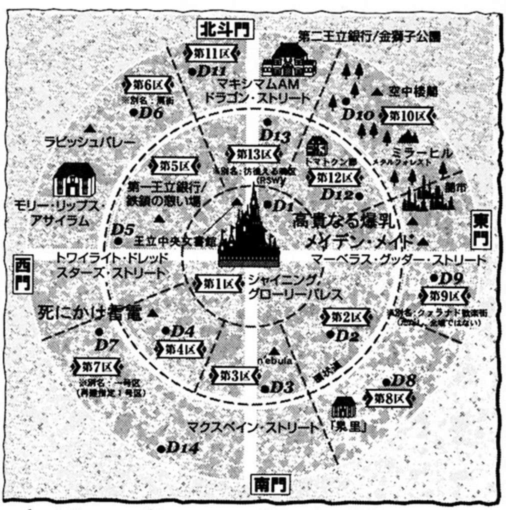
ハッツフォー出身の少年。16歳。

and the others

BaBadoa Moddoo ババドア・モッドー
Electra & Electric Murder エレクトラ&エレクトリック・マーダー
Funny Frank ファニー・フランク
Mikael & Donna ミカエル&ドナ
Angy & Bongo アンギー&ボンゴ
etc.

The World of “A BRAVE HEART OF RED ROSE”





Elden: the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics

illustration ： *BUNBUN*
design work ： *designCREST*

第Ⅰ話

青年は西へ向かう

1

ガトランズ。

その名を聞いてぴんとくるやつは、たぶん堅かた気ぎじゃない。十数キルメーテル南に下れば、ちゃんと舗ほ装そうされていて、国によっては厳重に警備もされている大ノ陸ー北ス横ロ断ー道ドがあるのだ。まともな人間なら、こんな山道つづきの、荒あれ果てた、そもそもちゃんと整備されていない裏道を通りはしないだろう。あえてガトランズを選ぶのには、それなりの事情があるということだ。

たとえば、お尋たずね者だとか。それを追う立場の者だとか。重度の対人恐きよう怖ふ症しようだとか。種類を問わず、えらく値が張る物品を運うん搬ぱん中だとか。

レニィが護衛として雇やとわれた隊商も、おそらくわけありでガトランズを西進している。

荷馬車三台に、客馬車四台。替かえもふくめた馬が七十頭。さほど大きな隊商ではないと思うが、五十名もの傭よう兵へいと二十名の専属私兵が護衛についている。それだけ経費をかけても儲もうけが出るような品物を運んでいるのだろう。

その品物とやらがなんなのか、レニィは知らない。知りたくもない。知れば今以上にもっと胸むな糞くそが悪くなるに決まっているからだ。

ハッツフォー独立軍領モルグステン市から、目的地のサンランド無統治王国首都エルデンまで、およそ三千キルメーテル。レニィとしては、とにかく金をかけず、できるだけ早く、この距きよ離りをゼロにしたかった。そのためには、隊商護衛の仕事にありつくのが一番よさそうだと考えたのだが、何しろレニィはまだ若い。よほどの幸運に恵めぐまれるか、誰だれかの口くち利ききでもないかぎり、まっとうな商人にはまず雇ってもらえないだろう。そして、レニィには、ケチくさい幸運の女め神がみが偶ぐう然ぜん目の前に落っこちてくるまで待つ時間はなかったし、商売人にコネがあるわ

けでもなかった。

　だから、仕方ないのだ。

　同どう僚りようの噂うわさ話ばなしどおり、荷馬車に積まれているのが禁制品のたぐいだとしても、レニィの知ったことではない。犯罪行こう為いの片棒を担かついでいるようで気分は悪いが、もうとっくに国境を越こえた。ここはサンランド無統治王国だ。この国には法などない。奪うばうも、盗ぬすむも、殺すも、自由だ。そのかわり、いつ自分も奪われ、盗まれ、殺されるかわからない。

　まあ、すべて人づてに聞いた話だが。

　モルグステン市の下町で育ち、なんの因果か屋や敷しき町に移り住んで、独立剽ひよう騎き士しになりそこねたレニィは、市外のことなんてろくに知りもしない。興味がなかったとはいわないが、異国に行く未来などまったく想像の埒らち外がいだった。

　そんなレニィが国を出ざるをえない羽目になれば、選せん択たく肢しはたいして多くなかった。

　騎士見習いとして、武芸一いつ般ぱんと型どおりの教養学問をなんとか身につけただけで、まだ一人前には程ほど遠い十六歳のひよっこが、どうやって一人で金を稼かせぎ、生きてゆけるのか。

　悩なやむまでもなかった。洟はな垂たれ小こ僧ぞうでも知っているα大陸の常識に従えばいい。サンランドに行くしかない。エルデンで、侵入クラツ者カーとやらになるのだ。

　さいわい、剣けんはまあまあ使えるほうだ。武芸指導教官のルォン・ホドムル仁将アラドも「態度は最悪だが、筋はいい」とけなしつつ褒ほめてくれた。あんな偉えらぶったチョビ髭ひげのオッサンに褒められたところで、嬉うれしくもなんともなかったが、実際、レニィには喧けん嘩かの強さくらいしか取り柄えがない。下町で悪わる餓が鬼きどもとやりあっていたころから、それは変わらない。ある時期を境に、背だけ伸のびて肉はあまりつかず、筋力の面でやや不安はあるものの、たぶん成長期の、一過性の現象だ。体はそのうち、自然とできてくるだろう━野垂れ死にせずに、ちゃんと飯を食えれば。

　悪路、坂はん路ろは徒歩で、平へい坦たんな道は少しでも急ぐた

めに激しく揺ゆれる客馬車に押しこまれて、もう四十日目。

　ババドア・モッドー氏率いる隊商は、ガトランズ最大の難所、鬼オーガヶンピ峰ークも無事に突とつ破ぱして、あと三日ほどでエルデンの姿を拝むことができそうな地点に達している。

　今日までの行程で、戦せん闘とうらしい戦闘といえば、鬼オーガヶンピ峰ークで鬼人オーガの群れに遭そう遇ぐうしたときくらいか。

　それも、総勢七十名もの戦闘要員で、五匹の鬼人オーガを袋ふくろ叩だたきにしただけだ。悪あく魔まと人間の混血だという鬼人オーガは、標準的な成人男性より遥はるかに大おお柄がらで凶きよう暴ぼうで手て強ごわい相手だが、五匹に七十人でかかれば、さすがに勝利は堅かたかった。

　結果、死者は傭兵二名。負傷者は私兵と傭兵あわせて十二名。死んだのは、なんで雇われたのかわからない耄もう碌ろくしたジイサンが頭を粉ふん砕さいされたのと、戦闘中に崖がけから転落した間ま抜ぬけだから、笑い話にしかならなかった。

　ともあれ、もう少しだ。レニィは客馬車の隅すみっこで短くため息をついて、鞘さやごとの長剣をぎゅっと抱だいた。この獣けもの臭しゆうが充じゆう満まんした馬車のなかで、流れゆく時をひたすら数えるのにもすっかり慣れたが、本音をいえば一刻も早く解放されたい。口を開けば、同僚の傭兵に悪態をついてしまいそうなので、声をかけられても返事をせずに黙だまっているくらいだ。

　そういえば、親父おやじ殿どのによく言われた。「お前は正直すぎる。口は災わざわいのもとだ。言葉を選べ。口を慎つつしめ。少しは頭を使え。世間体ていというものを考えろ」と。それなら──と、口をつぐんでいたら、今度は反はん抗こう的な目つきだとか、納なつ得とくしていないのが見え見えだとか。

　いったい、どうすればよかったのか。この目つきの悪さは生まれつきだ。べつにいつも機き嫌げんが悪いわけじゃないが、へらへらして愛あい嬌きようをふりまくのが苦手なだけだ。結局、あれか。たとえば、この目玉を抉えぐりだしてさしだせば、あの男は満足したのか。いや──

「違ちがう、か……」

　レニィが低くそう呟つぶやいたときだった。

　ものすごい音がして、馬車が急停車して、外で怒ど号ごうが飛び交かいはじめた。なんだ？　何が起こったんだ？　わからない。が、レニィは「鬼人オーガだ！」という声をたしかに聞いた。鬼人オーガだって？　もう鬼オーガヶンピ峰ークは抜ぬけたはずなのに……？　不ふ審しんに思いながらも、他ほかの傭兵たちと一いつ緒しよに急いで馬車から飛び降りた。

　唖あ然ぜんとした。

　レニィら傭兵二十名をつめこんだ客馬車は、隊商の最さい後こう尾びにつけていた。先頭は騎き馬ばの私兵や傭兵で、それから私兵どもの客馬車、モッドー氏の客馬車、傭兵十八名が乗りこんだ客馬車、荷馬車三台の順でつづいていた。

　今、そのうち前から三台目までの客馬車が横転していて、荷馬車はぜんぶ玉たま突つき衝しよう突とつして停とまっている。完全に無事なのは、レニィたちの客馬車だけだ。

　わりあい平らだとはいえ、両側を鬱うつ蒼そうと生おい茂しげる木々に挟はさまれた細道での大事故だ。

　しかも、事故の原因がまたとんでもない。

　鬼人オーガだ。

　それも、一匹ぴき二匹じゃない。十匹二十匹ですらない。とっさには数えられもしない。

　ぱっと見たかぎりでは、右側から私兵の客馬車に突つっこんでいる鬼人オーガが、数匹。それ以外の鬼人オーガは、馬車から這はいだしてきた私兵やら、傭兵やら、商人の小間使いやら、召めし使つかいの女やらに襲おそいかかろうとしているところだ。

　すでに、騎馬の私兵と傭兵が応戦を開始しようとしているが、何せ相手の数が多い。兵たちも浮うき足立っている。戦闘を指揮する立場にある、私兵隊長ダグラス・セダンの姿が見あたらないのもまずい。これでは統とう率そつのとれた集団戦闘なんて望むべくもないだろう。

「やばいぞ、こいつぁ……」

　レニィの隣となりで、中年の傭兵が冷や汗あせをかいている。たしか、ドニとかいう名だったか。小こ狡ずるそうに顔全体が引きつっていて、あまり使えそうもない小男だが、唯ゆい一いつ、傭兵としての状じよう況きよう判断は的確そうだ。たとえ報ほう酬しゅうの後金をもらえなくても、雇やとい主を見捨てて逃にげるべき時を心得ているという意味において。

「おい、小僧。てめえはこの商売まだ長かねえだろう。悪いことは言わねえ。こいつはとんずらしちまったほうがいいぜ。いいか、忠告はしたからな。俺は逃げる。あばよ」

「ああ」

　しかも、若造に親切ぶってから森へ逃げこむあたり、うまく自分の良心と折りあいをつけて生きるすべも承知しているというわけか。

　もっとも、レニィはドニに追従するつもりはない。逃げるべきだという意見には賛成だが、もう少し状況を見てからでも遅おそくはなさそうだ。なぜなら、鬼人オーガどもは向かって右側から隊商に襲いかかるばかりではない。兵たちを無視して、ドニが逃げこんでいった左側の森に突とつ入にゅうしてゆく鬼人オーガもいたからだ。

　だが、わからない。そもそも、鬼人オーガの大集団が、なんで突然こんな場所に現れたのか。同どう僚りようの傭兵たちは、鬼オーガヶンピ峰ークを越こえれば鬼人オーガに出くわすことはないと話していた。あれは嘘うそだったのか。嘘をついてどうなる？　自分たちも危険な目に遭あうというのに、嘘をつく馬ば鹿かはいまい。だったら、どうして？

「知るかよ」

　レニィは馬車の陰かげから顔を出して様子をうかがった。勇ゆう敢かんなのか、阿あ呆ほうなのか、鬼人オーガと戦っている騎馬が七、八騎。徒歩の兵は十人から十五人の間。対する鬼人オーガは十や二十ではきかない。どう考えても、勝ち目はなさそうだ。さらに、だ。

　ドニが逃げこんでいった森のほうから、悲鳴と咆ほう哮こう、足音が聞こえてきた。近づいてくる。いったん森へ突っこんでいった

鬼人オーガどもが、引き返してこようとしているのか。果たして、ドニの運命はいかに──なんて、他人のことを考えている場合じゃない。もう木々の合間に鬼人オーガどもの影かげがちらちら見える。しかも、都合の悪いことに、連中が目指しているのはレニィのいるあたりだ。

「やめてくれよな……」

　レニィは兜かぶとをかぶり、方形盾たてを構えて、腰こしの鞘から長ちよう剣けんを抜いた。もう二度と戻もどることはない──いや、最初からレニィの居場所ではなかった家の倉から持ちだした装備は、この他、鎖くさり帷子かたびらに板金鎧よろい、手て袋ぶくろ、靴くつ、客馬車に置いてきた背負い袋など、どれも骨こつ董とう品一歩手前の古道具ばかりだ。長剣だけは念入りに手入れしているが、鬼人オーガの分厚い皮ひ膚ふと皮下脂し肪ぼうを相手にするための武器としては、正直、心こころ許もとない。

　ようするに、戦うなんて無む謀ぼうだ。どうせ、ババドア・モッドーの隊商は終わりくさいし、鬼人オーガとまともにやりあうメリットなんかどこにもない。中年傭兵ドニが言ったように、そして、レニィ自身も考えていたように、逃げるしかない。

　問題は、どこへ、どうやって逃げるか、だが。

　左右の森からは鬼人オーガの群れが飛びだしてきているわけで、前方は戦せん闘とう中というか、ほとんど一方的に人間たちが殺さつ戮りくされ中だから、退路は後ろしかない。

　そうだ。

　隊商が進んできた道をとって返すのだ。

　こちらめがけて駆かけてこようとしている鬼人オーガどもに背を向けて、やつらに追いかけられて。

「駄だ目めだろ」

　わりとカッカしやすいものの、慌あわてたり、焦あせったりはそれほどしない。レニィは自分のことをそう理解しているが、さすがにこの状況では少々錯さく乱らん気味らしい。地面をしっかり踏ふみしめているのに、宙に浮いているかのように足許がおぼつかないし、頭の回転も鈍にぶっているようなかんじがする。

　実際、まごまごしているうちに、鬼人オーガどもは危険なほど接近していた。

　それにしても、先頭の鬼人オーガはやけに小さい。

　小さすぎる。

　他の鬼人オーガと比べると、大人とこども以上の差がある。

「はあああああううう……！　ど、どどどどいて！　どいてくださいっ！　といいますかっ、逃にーげーてーっ！　逃げてって言ってるっしょや、もう……！」

　声もぜんぜん鬼人オーガっぽくないし。

　黒っぽい鍔つばつきの三角帽ぼうをかぶって、同じ色のだぶだぶした衣類なんぞ着て。

　木製の杖つえを持って。

　えらく華きや奢しやな体つきで。

　そいつは「どけ」と言いながらも、まっしぐらに走ってくる。

「──って、人間かよ！」

　しかも、こどもだ。見たところ、レニィよりもっと幼い。声からして、女か。年下の、妙みような恰かつ好こうをした、やせっぽちの、貧ひん弱じやくそうな、少女──あとから考えると、そんなことを意識してしまったのが失敗だった。

「なんだってんだ、いったい……！」

　レニィは少女にぶつからないように、鬼人オーガどもに向けて方形盾を投げた。立てつづけに長剣まで投じたのは、我ながら思いきりがよかった。

　もっとも、額や顎あごに角状の突起があって、尖とがった耳と鋭するどい牙きば、色とりどりの肌はだと硬かたそうな体毛を持つ、屈くつ強きようで凶きよう暴ぼうな鬼人オーガが、そんなもので怯ひるむはずがない。レニィだって、それでどうにかなると考えたわけではなかった。ただ、両手を自由にして、身軽になる必要があっ

た。身軽に？　それで俺はどうするつもりだ？

「こい！」

　レニィの手が、突とつ進しんしてきた少女の手首を、すれ違ちがいざまに握にぎった。俺は馬鹿か……？

　少女が勢いあまって転びそうになった。レニィはすかさず少女の手を引っぱるようにして支えた。「はふ？」少女が変な声をもらした。意外な成り行きを不思議がっているようだ。俺だって不思議だ。なんだって俺はこんなことを。

　だが、やってしまったからにはしょうがない。一いつ瞬しゅんで吹ふっ切れた。レニィは少女の手を引いて走りだした。迫せまりくる鬼人オーガどもの鼻先をかすめるようにして、森へ──左側の森へと飛びこんだ。鬼人オーガどもを引き連れた少女は、こっちのほうからやってきたのに。やばいんじゃねえのか……？

　いや、これでいい。根こん拠きょなんかない。単なる勘かんだが、この勘ってやつは馬鹿にならない。これでもレニィは、生きるか死ぬかの瀬せ戸と際ぎわを何度か経験してきている。そのすべてをどうにか切り抜ぬけてこられたのは、いつも勘に従ってきたおかげだ。とっさの判断では何より逡しゅん巡じゅんが命とりになる。だから、自分のやっていることを疑ったりしない。背の高い草をかきわけて樹木をよけて蔦つたを振ふり払はらい、やや下り勾こう配ばいの森のなか、ひたすら足を進めた。少女も黙だまってついてきた。後ろは振り返らなかった。足音や、「Ｏ□Ｏ□Ｏｏｏｇ！」といったかんじの声、その他の物音からして、鬼人オーガは間違いなく追いかけてきているが、それなら余計、わざわざやつらの姿を目で確かく認にんする必要はない。そんなことをしたって、前方及および足許不注意で足がもつれてすっ転ぶだけだ。

　まあ、絡からみあうようにびっしり生えている下草の丈たけがやたらと高くて、前も足あし許もともよく見えはしないのだが。

　視界も足場も最悪だ。

　あげく、その足場自体が、急に──

　消失した。

「あ？」

「ほ？」

　そのとき、ようやくレニィは少女の顔をまじまじと見た。

　とっさにかき抱いだいた少女の瞳ひとみは、信じがたいことに、スミレ色だった。

　モルグステン市はハッツフォー独立軍領の本ほん拠きょ城じよう塞さい市しで、黒い目、黒い髪かみの典型的なハッツフォー人だけじゃなく、外国の人間もよく見かけるが、こんな色の瞳は見たことがない。ついでに、三角帽からはみだした髪の毛も、眉まゆ毛げも、同じ色だった。

　──スミレ。

　去年だったか。野外行軍教練のとき、ミザカイマ山でスミレを見た。

　そんなことを思ったときだった。

　背中にものすごい衝しよう撃げきを受けて、少女を放してしまいそうになったが、レニィはあいにく意地っ張りだった。放すかよ。放してなんかやるか、ボケ。冗じよう談だんじゃねえ。けど、痛いてえ。マジで痛え。痛えぞ、畜ちく生しよう。痛えっての。まったく……洒落しやれに、なって……ねえ──

2

　小便くさい餓が鬼きだったころから、父母が実の親じゃないってことは知っていた。

　やつらはあたりまえの親みたいに子供を抱だいたり、あやしたりしなかったし、叱しかることもなかった。俺に何かあるたび、俺が何かするたび、やつらはただおろおろしていた。まるで大事な預かり物の扱あつかいに困っているみたいだった。

　やけに身なりのいい男が、家を訪ねてきたことが何度かあった。

　いつだったか、その男が、おとなしそうで、品のよさそうな餓鬼を連れてきた。俺と同い年くらいのそいつは、ひかえめだが、どこかなれなれしいやつで、キオと名乗った。

　でも、キオはいいやつだった。下町では手に入れられそうもない、めちゃくちゃ甘くてほっぺたが落ちそうなくらい美う味まい菓か子しをくれた。

　それから――「内ない緒しよだよ」と言って、銀色の、ロケットつきの首くび飾かざり。

　ロケットのなかには、精せい巧こうな肖しよう像ぞう画がが塡はめこまれていた。ほっそりした、きれいな女だった。誰だれだよ、この女、と訊きいた。「お母さん」「お前の？」「違う」「じゃあ誰の」キオは答えず、曖あい昧まいに笑った。なぜか俺はそれだけでわかった。ああ、俺の母さんか。これが、俺の、本当の母さん。俺はそれ以上、尋たずねなかった。

　そのあとキオとは、誰にも秘密で、二人だけで、回数を覚えていないくらい何回も何回も会った。一人でこっそり下町にやってきたキオは、いつも少し楽しそうで、少しだけ悲しそうで、ちょっぴり苦しそうだった。



　俺は下町の遊びをキオに教えた。誰もこない路地裏に作った隠かくれ家がを教えてやった。キオは俺に字を教えた。本をくれた。剣けんを教えてくれたこともあった。二人で酒を飲んで、煙草たばこを吸ってみたこともある。俺は人前で笑うのがあまり好きじゃないが、あのときは腹を抱かかえて笑った。キオがひどい顔をして

「お、おおお、おいしいよ」と強がるものだから。キオも同じように笑った。俺が同じように顔をゆがめて「うっ、う、うめえ」と言ったからだ。

　最後に会ったのは──そうだ。キオはもう教練所の寮りように入っていた。夜、こっそり寮を抜けだして、俺に会いにきたんだっけ。

　キオはあまり喋しやべらなかった。夜が明ける前、帰り際ぎわにキオは「またね」と俺に言った。「ああ」「じゃあ」キオは三度も足を止めて振り向いた。なんだか様子が変だった。

　それから一巡じゆん月げつくらいたった、ある日。

　家の前に馬車が停とまって、俺は嘘うそつきで偽にせ者ものの父母と一いつ緒しよにそれに乗せられ、屋や敷しき町へとおもむいて、ブランディク家の門をくぐった──そのときにはもう、キオはとっくにいなくなっちまってたんだ。

　あいつは、いいやつだったのに。

　騎き士しになろうとしていたわりには、弱そうだったけれど。

　頭がよくて。やさしくて。

　キオは死んだ。

　キオが死んだから、俺は屋敷町の家へと戻もどることになった。

　ハッツフォー独立軍領で、五代つづけて独立剽騎士を輩はい出しゆつしている、武門ブランディク家。

　当代ドル・ブランディク智将ウイラドは、独立剽騎士団第十六這はい虎こ兵へい隊隊長。次期第一飛龍兵隊隊長と目され、ゆくゆくは独立軍領と独立剽騎士団の頂点に君臨する軍王ガハムドの手足である五剽騎士ジイラドになることが確実視されていた俊しゆん英えい。

　その嫡ちやく男なんキオ・ブランディクは、弱じやつ冠かん十歳にして、独立剽騎士団主しゆ催さいの盤上戦術オルナム演習・トル勝抜戦ナメントで優勝し、独立戦争でハッツフォー独立軍領初代軍王ガハムドニオ・ザイレンを援たすけた稀き代たいの名軍師、〝モルフォ党〟党首キプリス・モルフォの再来とまで呼ばれた天才児

だった。

　しかし、キオは十四歳で死んだ。

　事故死だった。

　いや、違う、そうじゃない。

　殺された。

　事故を装よそおって、謀ぼう殺さつされたんだ。

　俺がキオの手紙を見つけたのは、嫡子認にん定ていなど法律上の手続きが終わり、ドル・ブランディクの命令で騎士見習いのお仕着せを着せられ、教練所に押しこまれて、毎日しごかれ、いいかげんそれに嫌いや気けがさして寮を抜ぬけだした夜だった。下町をぶらついてから、ふと思い立ってあの隠れ家に行った。そこに隠してあった。

　キオが残した手紙だった。

　父でも、母でも、同どう輩はいの友人でもなく、半分しか血の繫つながっていない、兄宛あてに。

　俺に。

　その手紙には、なぜキオが殺されなければならなかったのか、その理由が書いてあった。

　くだらねえ。

　少なくとも、俺にはくだらないとしか思えない、腐くさった理由だった。

　そんな理由で、キオは──最後に俺に会いにきた日はもう自分の死を覚かく悟ごしていて、その手紙を書いて、隠れ家に隠したのだ。しかも、蠟ろうで密閉した小さな缶かんに入れて、天てん井じよう板いたと天井板の間に挟はさんで。俺が腹立ちまぎれに隠れ家を解体しちまおうなんて馬ば鹿かげた考えを起こさなければ、あの手紙が見つかることはきっとなかっただろう。

　俺はそいつをドル・ブランディクに見せてやった。「親父おやじ

殿どの、あんた、これでも俺に騎士になって欲しいのか。かわいい息むす子こを、こんな薄うす汚ぎたない理由で殺す騎士ってやつに、あんたはあくまでしがみついていたいのかよ」

　ドル・ブランディクは顔を真っ赤にして、それから真っ青になって、肩かたを震ふるわせていた。

　ざまあみろ、と思った。

　わかっただろう、親父殿。父と呼ぶのも汚けがらわしい、俺の大事な、目の上のたんこぶみたいな、たった一人の親父殿。ブランディク家の小間使いだった俺の母に手をつけて孕はらませておきながら、ほとんど同時期に正妻をも身み籠ごもらせて、邪じゃ魔まくさい母を追いだした。そうと見せかけて、落ちぶれた傍ぼう系けいの家のとある意い地じ汚きたない夫ふう婦ふに金を渡わたし、母の面めん倒どうを見させた。

　母は、俺を産んで、死んだ。

　俺は、金のおかげで、金のために育てられた。

　その金が罪つみ滅ほろぼしのつもりか。あんたは金で罪を洗おうとしたが、叶かなわなかった。あたりまえだ。金で買えるものはたしかに多いが、売り買いできないものだって、世の中にはあるんだ。キオはそれを知っていた。キオはあんたのかわりに、あんたの罪を背負おうとした。

　だから、キオは俺の前ではつらそうだった。悲しそうだった。でも、やさしかった。いいやつだった。あんたが隠かくし持っていた俺の母の肖しよう像ぞう画が入りのロケットをくれた。複雑な心境だったろうが、キオが俺に母親の顔を教えてくれたことは事実だ。

　聡そう明めいなキオは、自分の存在が、どうして、どうやって、誰だれを傷つけるのか、たぶんよく理解していた。そのうえで、その傷をどうにか少しでも癒いやすことができないかと考えていた。

　それは残ざん酷こくなやさしさだった。

　でも、純じゆん粋すいで、尊くて、捨て身で──俺は、そんなキオを嫌きらいになんか、とうていなれなかった。

　ひるがえって、親父殿。あんたは家を存続させるために、下げ賤

せんの、いとおしい、美しい、だが、体面やらちっぽけな誇ほこりやらのために捨てた女の血を引く俺を、平然と連れ戻した。いかにも、いいことを━償つぐないをしている、みたいなむかつくツラで。俺を騎士にしようとした。

　その騎士の正体が、これだ。

　キオを殺した糞くそ虫むしどもこそが、誇り高いはずの、騎き士し様だ。

　こんなのって、ない。

　かわいそうだ。

　キオが、かわいそうだ。

　しかも、ドル・ブランディクの唐とう変へん木ぼくは、何を血迷ったか、「大法院に告発する」と俺に告げた。お笑い種ぐさだった。

　大法院は、ハッツフォー独立軍領の最高司法機関で、五人の大法官で構成されるが、そのうち三人が元五剽騎士なのだ。汚お濁だくにまみれた、騎士の総そう元もと締じめどもだ。親父殿、あんた、馬鹿じゃねえのか。脳が膿うんでるんじゃねえのか。だが、親父殿は本気らしかった。「このままではキオが浮うかばれぬ。魂こん魄ぱくとなって天に昇のぼったとはいえ、子は永遠に子のままだ。親としてやらなければならぬことがある」

　ああ、そうかい。

　じゃあ、俺は？

　俺はあんたの、いったい何なんだ……？

　それから五日後だった。告発の準備を進めていたドル・ブランディクとその妻メリル・ブランディクは、治安維い持じ騎士団に拘こう束そくされた。

　容疑は、二級外がい患かん罪。機密漏ろう洩えい。

　俺は一度取り調べを受けて、知らぬ存ぜぬで通して釈しやく放ほうされたが、たぶん時間の問題だった。釈放されたということは、

ドル・ブランディクが告発の証しよう拠ことしてどこかに隠したはずの例の手紙は、まだ連中の手に渡っていないのだろうが──何しろ、あの手紙の宛あて先さきは俺だ。俺はすべて知っている。そのうち俺もまた拘束されるだろう。次は簡単には釈放してはもらえまい。あるいは、まだ餓が鬼きの俺をなんらかの罪に問うことが難しければ、消すか。キオのように。

　そんなわけで、俺は逃にげた。

　金目の物は、証拠品押おう収しゆうの名目でだいたい治安維持騎士団に略りやく奪だつされてしまったので、倉からぎりぎり使えそうな剣けんやら鎧よろいやらを持ちだして、生きるために、逃げたのだった。

　口をきくこともほとんどなかった、無表情で、人形みたいで、年をとらない、何を考えているのかわからない、不気味なメリル・ブランディク。憎にくんだこともあったが、あんたのことは存外、すぐに忘れられそうだ。

　親父殿、ドル・ブランディク。あんたのことはなかなか忘れられそうもない。でも、あんたが憎たらしかったおかげで、キオを恨うらまずにすんだ。

　どっちにしても、さようなら。

　俺は遠くへ行く。一人で生きていく。

　そんな予感は、なんとなく昔からあった。

　俺は一人だ。俺は誰にも頼たよりたくない。ああ、でも──キオ、お前と、なんの問題もない、ごく普ふ通つうの兄弟みたいに育てられでもしていたら、何か違ちがっていたかもしれないけれど。

「……で、俺は死んだわけか」

　声が、ちゃんと出る。

　指に力を入れると、動いた。

　聞こえるのは、木々の葉が風に揺ゆれて、こすれあう音か。

　瞼まぶたを押しあげると、真っ黒い天てん井じようのところどこ

ろに濃こい青が見えた。

　空、だ。暮れかけた空。もしくは、明けかけた空か。

　それにしても、体の左半分が妙みように重い。これは体の内側の異状じゃなく、外側から圧あつ迫ぱくされている重みだ。たとえば、何かにのしかかられている。というより、しがみつかれている？　何に……？

　自分の体にしがみついているそれに手を伸のばそうとした瞬しゅん間かん、すぐそばで誰かが身動きする気配がした。

　誰か。

　そう──それは、人だった。

　聞き覚えのある声がした。

「目が覚めたか」

「ババドア・モッドー……？」

　レニィは身を起こして声の方向へ目をやった。かなり暗いので、よく見えないが、いる。地面にうずくまるように座っている、男が一人。それから、レニィにしがみついていたものの正体も明らかになった。

　あの少女だ。

　スミレ色の目をした少女が、身にまとっている衣類にくるまりつつ、レニィに抱だきついている。どうやら眠ねむっているらしい。背中が上下しているし、寝ね息いきも聞こえる。

「──くそ……何なんだ、この状じよう況きようは」

「私が把は握あくしているかぎりのことは説明してやってもいいが」モッドーらしい人物が、嘲あざけるようにひっそりと笑った。「さして参考になるとは思えんよ。それでも聞きたいかね」

「聞きたいね」レニィは髪かみの毛を乱暴にかきまわした。兜かぶとはどこかへ行ってしまったようだ。しかし、少女を揺り起こしていいものかどうか。「いや、あんたは俺の雇やとい主だったな。こ

んな口のきき方はねえか」

「今さら雇い主も糞もあるまい」

　こんな薄うす闇やみのなかでなく、日の光の下で見るモッドーは、三十半ばくらいで、痩やせていて、傲ごう慢まんそうで、かつ卑ひ屈くつそうで、神経質そうな男だった。何かやばいものを扱あつかっている商人らしいということしか知らないが、よほど稼かせいでいるらしく、両手あわせてぜんぶで十本の指に、それぞれ一つか二つずつ、派手な指輪を嵌はめていたのが印象に残っている。ただ、レニィら傭よう兵へいにとって、直接の上司は私兵隊長のダグラス・セダンだったから、モッドーには近寄る機会さえなかった。それが、まさかこんな形で話をする羽目になるなんて。

「積荷をすべて失い、私兵も壊かい滅めつして、君らに払はらった前金も無む駄だになった。依頼主にどう弁解したものか。ひどい損害だよ。まあ、よく聞く話だがね。自分がその立場に立たされると、こいつはきつい。正直、へこんでいるよ。死にたい気分だ」

　あまつさえ、泣き言を聞かされるとは。

　レニィはため息をついてみせた。

「あんたが死ぬのは自由だけどな。俺は死にたくなんかない」

「君はいくつだね」

「十六」

「なんと、私の半分以下か。そりゃあ死にたくないだろうな。どうせ、今はしがない傭兵だが、いつかどこぞの国に仕官して、騎き士しになりあがってやるとか、夢みたいなことでも考えているんだろう」

「考えてねえよ。つーか、そんなことはどうでもいいんだ。何がどうなったのか、あんたが知ってる範はん囲いで教えてくれるんじゃなかったのか」

「ふん。どうなったも何も、いきなり鬼人オーガの群れに襲おそわれて、みんなぶち壊こわされて殺されて、私は命からがら逃にげている最中、斜しゃ面めんを滑すべり落ちた。鬼人オーガが追ってくる様子はなかったが、途と方ほうに暮れてそこらを這はいずりま

わっていたら、君らがいた。それだけのことだよ」

「俺とこいつが？」

　レニィが少女をつつくと、モッドーはうなずいたようだった。

「感謝するんだな。そのこは意識のない君を甲か斐い甲が斐いしく世話していたよ」

「感謝、ね」

　素す直なおにそういう気分になれないのは、こんな目に遭あった原因が、この少女にもあるように思えてならないせいか。

　だいたい、なんでこいつは鬼人オーガに追われていたのか。旅慣れていないレニィでも、こどもが一人でこんな場所をほっつき歩いているなんて、おかしな話だということくらいわかる。加えて、少女の恰かつ好こう。これじゃあまるで昔話のなかの魔ま術じゆつ士しだ。モルグステン市でもたまに魔術士を見かけたが、誰だれもこんなレトロな衣い装しようは身につけていなかった。まあ、年に一回、餓が鬼きどもがさまざまな仮装をして家々を訪ねてまわる万マル霊ザレ祭ロのときなら、ありえなくもないが。

　ということは、まさか、仮装？

　それこそ、ありえない。

「──それで、疲つかれて寝ちまったわけか、こいつは」

「そのようだね。気を失っていた間、かなり苦しそうにしていたが、君はもういいのか」

「体はあちこち痛いてえけどな。まあ、大だい丈じよう夫ぶらしい。なんか知らねえけど、体調は悪くねえよ。あんたは怪け我がしてねえのか」

「私は」モッドーはそこで口ごもってから、なぜか不ふ機き嫌げんそうな口調になった。「なんともないよ。ともあれ、君にとっては不幸中の幸いだったというわけだ。そのこが口移しでのませた薬が効いたんじゃないかね」

「はあ？　口移し……？」

　レニィは思わず口の周りを押さえて、少女を見た。少女はすやすやと規則正しくのんきな寝息を立てている。スミレ色の少女。背はそうとう低くて、体つきもかなり細っこい。明らかに対象外だ。

「餓鬼が」

「私もそのこに訊ききたいことはあったんだがね。君の世話に夢中で、ぜんぜん話を聞いてくれなかった。でも、キスシーンは微笑ほほえましくて、なかなかよかったよ」

「うっせえな」

「照れるほどのことでもないだろう」

「照れるか、ボケ」

「初う心ぶなんだな。おおかた傭兵働きも日が浅いんだろう。さては初仕事だったか」

「あんたの知ったことじゃねえ」

「図星か。やれやれ。もし次があったら、もっとマシな傭兵を揃そろえなけりゃならんな」

　モッドーの嫌いやみったらしい笑い方は、だが、どこか空々しくて、嘘うそくさかった。レニィがあやしんで眉まゆ根ねをよせると、モッドーは軽く頭を振ふって声をひそめた。

「ところで……」

　まるで、何かを恐おそれてでもいるかのように。

　あるいは、気味悪がっているみたいに。

「ずっと、気になってはいたんだが──もしかして、君は、あれか。人間に見えるが、じつは猫ねこか何かの仲間なのか」

「なんだと？」

　唐とう突とつに意味不明なことを言いだすやつだ。なぜここで猫が出てくるのか。新手のジョークとも思えないし、実際それは冗じよう談だんでも戯ざれ言ごとでもなんでもなかったのだ。

　モッドーがゆっくりと手をあげて、レニィを指さした。

「だって、君の目、光っているじゃないか。銀色に」

3

　ハッツフォー独立軍領は、中部ミツド諸国域ランズの北部に位置している。昔はダィグリアル・プロフェジアと呼ばれていて、ファー・セルジナ王国の部プロフ国エジア（まあ、属国みたいなものだ）の一つだったが、オーメネイジ七一八年に独立を果たした。領民の大半は、遊牧騎き馬ば民族ハッツフォーの血を受け継ついでいて、体毛と瞳ひとみの色は黒か黒に近い褐かつ色しよく、肌はだの色はやや黄色みを帯びている。外見的特とく徴ちようは、いわゆる東部人とさほど変わらない。

　レニィもそうだった。少し前までは。

　今は、違ちがう。

　日が昇のぼりはじめてから、モッドーが投げ渡わたしてくれた手鏡を使って、自分の目で確かく認にんした。

　──銀色の、瞳。

「どういうことだ、くそったれ……」

　何か知っているんじゃないかと、かなり前から少女を叩たたき起こそうとしているのだが、ぜんぜん駄だ目めだ。少女はレニィの左足を両手両足で抱かかえこんだまま熟じゆく睡すいしている。揺ゆさぶったり呼びかけたりしても、左足をぎゅうぎゅう締しめつけてくるだけで、いっこうに目を覚まさない。

「俺は抱だき枕まくらじゃねえ」

「いっそ、今度は君からキスしてやったらどうだい」モッドーが嘲あざ笑わらいながら口を出してきた。しばらく顔を伏ふせて黙だまっていたから、寝ているのかと思っていたが、起きていたのか。さすがに声に元気はないが。「西のお伽とぎ噺ばなしにそういうの

がある。湖の畔ほとりで昏こん々こんと眠ねむりつづける姫君を、口づけで目覚めさせる亡国の騎き士しの物語。聞いたことはないかね」

「ふざけるな！」

「あまり大声を出すと、そのこが起きるよ」

「万ばん々ばん歳ざいだ。起こしてえんだからな」

「ふん……そうだったね」

　モッドーはまたうつむいた。というよりも、自分の両りよう膝ひざの間に顔を挟はさむような体勢で、かすかに頭を振っている。なんだか様子がおかしい。レニィはモッドーに声をかけようとしたが、思いとどまった。不意に少女が身じろぎしたからだ。

「…………んん…………」

　少女は小さな呻うめき声をもらし、じつにゆっくりと、今にも停止しそうな速度で、レニィの左足から両手両足を外した。

　それから体を起こすまでも、かなり時間がかかった。あくびをしながら目をこする動作も、緩かん慢まんなことこのうえなかった。

　そして、少女はそこで止まった。

　長い静止だった。

　いつ動きだすのか。あるいは、もう永遠に止まったままなのか。

　レニィの予測が後者に傾かたむきかけたころだった。少女は明けはじめた空をようやくのっそりと振り仰あおぎ、自分の腰こしのあたりをまさぐった。ぱっと見ではわからないが、衣服にポケットがついているらしい。そこから小さな袋ふくろをとりだして、さらにそのなかから何やら丸薬のようなものをつまみだした少女は、うんざりしたように顔をしかめて、それを飲んだ。飲みくだした。

「……まずぅ……」

　本当に、すごくまずそうだった。

　少女は泣きそうな表情になって両手で胸を押さえ、次いで口を手で塞ふさいだ。もしかして、吐はく？　吐くのか？　少女自身も葛かつ藤とうして、格かく闘とうしているようだった。少女が嘔おう吐との衝しよう動どうに打ち勝つまで、ずいぶんかかった。

　やがて顔を上げた少女は、レニィを見つめ、モッドーに視線を移して、またレニィに向きなおってから、ぺこりと頭を下げた。

「おはようございます」

「……おはよう」レニィはとっさにそう返してしまったが、すぐさま違うだろと内心で自分にツッコんだ。「──って、のんびり挨あい拶さつなんかしてんじゃねえ！　てめえには訊ききたいことが山ほどあるんだ。いったいてめえはなんだってあんな場所、一人でほっつき歩いてやがった？　どうして鬼人オーガに追っかけられてたんだ？　俺の目が銀色に変わっちまったのはどういうわけだよ？　てめえ、俺に薬みてえなもんを飲ませやがったらしいじゃねえか。何か知ってんじゃねえのか。どうなんだ、ええ？」

「あ、あう、そ、そのように、一度に、矢や継つぎ早に、たくさん尋たずねられましても……」

「じゃあ、一つずつだ。てめえはあのとき、何してやがった」

「あのとき、と……申されますと？」

「鬼人オーガに追っかけまわされて、俺のほうに走ってきた、あのときだ」

「おーが？」

　少女は首を傾かしげてまばたきをした。まさか、鬼人オーガを知らないのか。エルデェイニオンから中部ミツド諸国域ランズ、α大陸東部にかけて広く分布していて、三歳の餓が鬼きでも知っている化ばけ物ものなのに。

「人みたいな姿で、角があって、やたらとごついデカブツだ。てめえ、昨日──そうだ、もう昨日だよな、やつらと一いつ緒しよに森から飛びだしてきただろうが」

「ほ？」

「ほ、じゃねえ！　昨日の今日だぞ！　鬼人オーガだ、鬼人オーガ！　忘れたとは言わせねえ！」

「えと……はい、その、おーが、さん……ああ！」少女は両手をぱちんと打ちあわせてうなずいた。無む駄だに何度も。「そうです、おーがさん！　ご高名はかねがねうかがっておりましたが、あの方々がおーがさんだったのですね。コロ、あ、わたし、初めてお目にかかりました。ですが、おーがさんは、コロナの話に聞く耳を持ってくれませんで──」

「話ぃ？　馬ば鹿か、あたりまえだ。やつらは人間の言葉なんて話さねえ。やつらに通じるのは悪あく魔まの言語だけだって、昔話なんかにも出てくるだろうが」

「そ、そうなのですかっ？　ですから、コロナが必死で自己紹しよう介かいをしても、先方のお返事は、ぐおー、とか、がおー、とかだけで、いきなりコロナを手て籠ごめにしようと襲おそいかかってきたのですね！　納なつ得とくです」

「いや……てめえみたいな餓鬼は、手籠めにはしないんじゃねえか……」

「そ、そんな、コロナもれっきとしたおんなのこですのに！」

「何がオンナノコだ。ちんまりしやがって」

「むむ！　ひどいです、あんまりです、失礼です、断固抗こう議ぎします！　コロ、あ、わたし、これでも十五歳ですよ。こどもだってばんばん産んでしまえる年です。おーがさんだって、きっとばりばり射程内です！」

「ああ、たしかに射程内かもな。食欲的には。あいつらは口がでかいから、てめえみたいなちんちくりんなんか、まるのみにしちまえそうだ。骨ばっかで、食うところはあんまりなさそうだけどな！」

「ふんっ、です！　コロナ、これでも脱ぬぐとすごいんですよ！　ぼんっ！　きゅーん！　ぼーん、です！　見たこともないくせに、てきとうなこと言わないでくださいっ！」

「中身なんか見なくたって、それくらいわかるっつーの！　だいたい──」

俺、何やってんだ……。

レニィは肺活量の限界に挑いどむような深いため息をついてから、かすかに頭を振ふった。

「……とりあえず、説明しろ。どうしてあんな場所で鬼人オーガに追われてた」

「えと、そ、そ、それは、ですね……」少女は──たぶん、コロナという名なのだろう、右手の人さし指で左手の人さし指をつつきながら、少し考えこんだあと、上目づかいでレニィを見た。「じつは、その……恥はずかしながら、旅の途と中ちゆう、道に迷ってしまいまして」

「道に？　どこからどこに行こうとしてたんだ。つーか、お前、一人か」

「あっ、は、はい。道連れのいない、嬉うれし寂さびしいぶらり一人旅です。それで、カリオサークを出まして──えと、あの……
そっ、そうです、エルデンへ」

「ふうん」

とりあえず、目的地はレニィと同じだったわけだ。

しかし、カリオサークといったら──カリオサーク？

レニィは、教練所の地理学科課程で何度も見せられた大陸全図を頭に思い浮うかべた。

サンランド無統治王国は大陸北西部のエルデェイニオンにある。首都エルデンは、まあ、だいたいサンランドのまんなかあたり。カリオサークも結構有名な大都市だ。位置はエルデンの南南東、ラフレシア第三帝てい国こくとの国境へと向かう途中だったか。レニィの記き憶おくによると、カリオサークとエルデンは、大陸西ウエスト縦断道ロードでばっちり結ばれているはずだ。

ちなみに、ガトランズは、サンランド東国境を突とつ破ぱしたあと、しばらくすると途切れる。エルデンまで行くには、結局、どこかの地点で大ノ陸ー北ス横ロ断ー道ドに入らなければいけない。

レニィは右手の人さし指で地面の一点をコロナに示してみせた。

「いいか、よく見ろよ」

「ほ？」おかしなやつだが、素す直なおなことは素直なようだ。コロナはレニィの人さし指をじっと凝ぎよう視しした。「はい」

「ここがエルデンだ」レニィは人さし指を固定したまま親指を下にのばして止めた。「で、ここがカリオサーク」

「はあ、なるほど」

「だいたいこれくらいの距きよ離りだ。わかるか。人さし指と親指の間な。で、今はここだ」レニィは中指を横に移動させた。人さし指、中指、親指を置いた場所が頂点になって、いびつな三角形を形作っている。「──どう思う？」

「あ、はい……えと、その、とても、わかりやすいご説明でした」

「そうか。そいつはよかった。そこで、質問だ。カリオサークからエルデンまで行くのに、どこでどう道に迷ったら、こんなとこまできちまうんだ？」

「……さあ？」

　レニィは悟さとった。こいつは駄だ目めだ。

　そもそも、この時点でもう、話は大いにそれまくっている。レニィ自身も、コロナに何を問い質ただしたかったのか、一生懸けん命めい思い出さなければならないような有様だ。頭が痛い。

「もういい……とにかく、てめえは道に迷ったんだな。それで、鬼人オーガの群れに出くわして、自己紹介しようとして、襲われそうになって、追いかけられて、逃にげて──」

「はっ！　なにゆえにコロナの行動を？　もしかして、何なに某がしさんは占うらない師さんですか？」

「今のはぜんぶ、てめえがその口で言ったことを整理して、ちょっと補足しただけだ」

「そうでしたか。ということは、ストーカーさんでもないのですね？」

「あたりまえだろうが。なんで俺がてめえをつけまわさなきゃならねえ」

「えと……す、好き、だから？」

　コロナは恥ずかしそうに顔中を真っ赤に染めた。あまりにも馬鹿馬鹿しくて、レニィは怒おこる気にもなれない。

「叩たたき殺すぞ？」

　殺意は抱いだいたが。

　いずれにせよ、こうしてまた関係のない方向へと話が流れかけている。いけない。軌き道どう修正しないと。レニィは指でこめかみのあたりを押しながら一つ息をついて、周囲を見まわした。それで、気づいた。

「……おい」

　モッドーが変だ。全身をぶるぶる震ふるわせている。

「おいって」声をかけても反応しないので、近づいて肩かたを揺ゆすってみた。「大だい丈じよう夫ぶか？」

「……ああ」

　ようやく返事をしたモッドーの声は、低く、かすれていた。ぜんぜん大丈夫そうじゃない。原因は、すぐにわかった。モッドーの足あし許もとの下草が黒っぽく湿しめっている。

「──血……？」

　見れば、やわらかそうな生き地じのズボンの、右の脛すねから下が赤黒く染まっていた。裂さけている部分もあった。もちろん、切り裂かれているのはズボンだけではないだろう。傷を負っているらしい箇か所しよに巻かれた布きれが、どす赤くぬれている。かすり傷ではなさそうだ。

「……ふん、横転した馬車から抜ぬけだすときに、ね……何かで切ったらしい。血はもう止まりかけてる。たいしたことはない……」

「そのざまでたいしたことねえだと？　馬ば鹿か野や郎ろう。てめえずっと我が慢まんしてやがったのか」

「だって……どうするんだ。どうしようもなかろう？　医術士がいるわけでもなし……」

「そりゃあ」

　レニィは舌打ちをした。モッドーは一応、自分で止血を試みたらしく、右みぎ膝ひざのあたりをベルトと布できつく縛しばっている。医術士どころか、応急処置の道具もないこの状じよう況きようでは、たしかにこれ以上の手当ては無理だろう。

　しかし、もっと早く言ってくれれば━どうしていた？　だいたい、隊商が壊かい滅めつした以上、護衛の仕事は終わったのだし、この男のために何かしてやる義理なんてあるのか？

　レニィがもう一度舌打ちをして頭をかきむしっていると、コロナがおずおずとモッドーの様子をうかがいにきた。

「あの……どうかなさったのですか？」

「どうもこうもねえ。怪け我がしてやがるんだ、こいつ」

「あららら。た、たいへんです。ち、血がいっぱい。コロ、あ、わたしごときでは、たいしたことはできませんが……もしよろしければ、お師し匠しよう様からいただいたおくすり、のんでみられますか？」

　コロナはモッドーのそばにしゃがみこみ、ローブのポケットからまた小さな袋ふくろをとりだして、そこで手を止めた。

　漠ばく然ぜんとだが、かなりいやなかんじがした。

　コロナがいきなりこっちを見て、すぐさま顔をそむけた瞬しゆん間かん、レニィの心臓の鼓こ動どうが少なくとも一・五倍くらいに速まった。

　これは━恋こい？

　阿あ呆ほう。そんなわけがあるか、ボケ。

「怒おこらねえから、今、てめえがその薄うすっぺらい胸にしまいこもうとしたことを、正直に言ってみろ」

　レニィは嘘うそをついた。ここは、だが、嘘のつきどころだった。コロナは、何度も何度もしつこいくらい「本当の本当の本当の本当ですか？」と確かく認にんしてから、昨日、気絶していたレニィにのませ、今、モッドーにのませようとしていたおくすりの正体を明かした。

4

　レニィはババドア・モッドーを背負って森のなかを歩いていた。

　馬鹿コロナが四、五メーテル離はなれてついてくる。

　たまに、なんで俺はこんなことをしてるんだと自問するたびに、同じ答えにたどりついた。

　知ったことかよ。

　モッドーはあくまで元雇やとい主ぬしで、現在はレニィとなんの利害関係もないことなんて百も承知だ。モッドーが後ろ暗い商売をしている男だということも、むろんわかっている。

　それでも、この瘦やせ我慢好きのちんけな男を置き去りにすることが、どうしてもできなかった。そんなことをしたら、なんとなく後こう悔かいしそうな気がした。理由といったって、ただそれだけのことでしかない。

　まあ、コロナは自分の足で歩くことができるのだから、やつがどうするかはやつ自身の自由意思にもとづいているはずで。レニィを道案内に見立てるのも、やつの勝手だ。

　ただ、コロナと口をきくつもりはない。やつと話をしていると、明後日あさつてのほうへと話題が飛びまくって疲つかれるだけだし、面めん倒どうばかり起こりそうなので、これ以上は係かかわりあいになりたくない。

厄やつ介かいごとはもうたくさんだ。

コロナの馬鹿がレニィにのませた薬の効用は、滋じ養よう強きよう壮そう・体力増強・体質改変（改善ではなく）で、コロナの阿呆に言わせると、立派な魔術師マギだというお師匠様曰いわく、「魔術士以外は決して口にしてはいけない」たぐいのものだったらしい。コロナの間ま抜ぬけは、ありがた特大迷めい惑わくなことに、絶対に忘れるべきではない「魔術士以外は決して口にしてはいけない」の部分をうっかり失念して、「ひょっとしたら効くかもしれない」と思い、失神していたレニィにその劇薬をのませやがったのだ。

結果、薬をのまされたあと、レニィはものすごく苦しんでいたとのことだ。

さいわい、ぜんぜん覚えていないが。

で、のたうちまわるレニィを懸けん命めいに押さえつけているうちに、コロナは寝ねてしまった。本人の弁では、さんざん鬼人オーガに追いかけまわされて、疲れていたせいもあったのだという。なんでも、かれこれ半日近く鬼人オーガどもと追いかけっこをしていたのだと、ぼんくらコロナは主張した。半日だと？　ふざけてやがる。

とにかく、レニィの体がやけに軽くて妙みように体調がいいのは、薬の効能かもしれない。そして、あてになるのかどうかあやしいコロナの推測によると、レニィの目が銀色になってしまったのは、薬の副作用かもしれない。

たわけコロナの話を信用すれば、コロナのおたんこなすは魔ま術じゆつ士しらしい。

本格的な魔術士は、魔術の訓練以外に厳しい訓練や薬物投とう与よによって体質改変を行い、魔力の利用効率を向上させたり、魔術との親和性を高めたりする。物心がついたころからそうやって養成されなければ、力のある魔術士にはなりえないのだという。

もっとも、色々と手をかけたからといって、全員がちゃんとした魔術士に育つわけでもないようだ。なんだってそうだが、向き不向きというものがある。ようするに、素質ってやつか。落ちこぼれはどうしても出てくる。たとえば、コロナのような。

　コロナは薬の正体を告白したあとで、気まずそうな笑え顔がおを浮うかべて語った。「コロ、あ、わたしは不ふ肖しようの弟で子しでして。お師匠様もずいぶんがんばってくださったのですが、実用的な魔術はほとんど使えるようになれず、とうとう見放されてしまいました。おくすりは、お師匠様からの餞せん別べつです。それから……これも」と、コロナが地面から拾いあげてみせたのは、鞘さやに納められた長めの長ちよう剣けんだった。

　魔術士に、長剣。記き憶おくをたどると、コロナは昨日もたしかにその剣を背負っていたが、変な組みあわせだ。弟子も弟子なら、師匠も師匠、というわけか。

　いずれにしても、実用的な魔術を使えない魔術士など、なんの役にも立たない。ましてや、魔術士以外服用禁止の薬物を一いつ般ぱん人じんに投与するなんて論外だ。レニィの目は、そのせいで銀色になってしまったのかもしれないのだ。

　まあ、目が銀色になって、何か困ることがあるのかというと、とりたてて思いつかないのだが、なんの問題もないかといえば、違ちがうような気がする。

　歩きはじめてから、どれくらいたっただろう。

　コロナは一度も声をかけてこない。

　レニィも黙もく々もくと足を進めている。

　ガトランズには戻もどらず、とにかく西へ。方角はわかるし、ガトランズから大きく外れているわけでもない。このまま行けば、いつかはエルデンにたどりつけるだろう。順調にいっていれば、あと三日の距きよ離りだったわけだから、徒歩だとおそらく、六日から八日といったところか。ちなみに、コロナのローブにしまわれている魔術士用の栄養食品以外は、食しよく糧りようも、水もない。ついでに、これからの道のりが安全だという保証もない。というか、たぶん危険だろう。

　じつは、出発する前に、レニィは一人で昨日滑かつ落らくした斜しや面めんを登ってガトランズに戻ってみた。状じよう況きようを確かめておきたかったし、できれば水、食糧、武器等の装備も手に入れておきたかった。結局、目的の後半部分については、斜面の半ばで見つけた誰だれかの安そうな長剣と円形盾たてだけが成果だっ

たが、それもやつらがいて現場に近づけなかったせいだ。

　ざっと数えただけでも、十匹ぴきはいた。

　鬼人オーガどもが、壊かい滅めつした隊商の残ざん骸がいを漁あさっていたのだ。

　もっと正確にいえば、死骸を食い散らかしていた。

　また、寝ね転ころんで鼾いびきをかいている鬼人オーガもいた。酒に酔よったように、ふらふらとそこらをうろついているやつもいた。

　一晩無事にすごせてしまったので、鬼人オーガどもはもう遠くへ行ったのではないかと、ひそかに期待していたのだが。

　甘かった。甘すぎた。

　しかも、昨日、隊商を襲おそった鬼人オーガの数はあんなものではなかった。他ほかの鬼人オーガは、ねぐらに帰ったのか。それとも、まだどこかそのあたりにいるのか。どっちにしても、また鬼人オーガに出くわす可能性は考こう慮りよに入れなければならないだろう。

「……君……」

　と、背中のモッドーが唸うなるようにレニィを呼んだ。今にもくたばりそうな声だった。

「なんだ」

「……ずっと、私を背負って歩いているが……疲つかれないのか」

「べつに」

　強がりではない。もともと、体力は結構あるほうだが、それにしても快調すぎる。モッドーはさして大おお柄がらではないとはいえ、男一人を背負っているのだ。自分のことながら、もう少しつらくてもいいんじゃないか。

　まるで、見えない何ものかに、こっそり手を貸してもらってでもいるみたいだ。

　気味が悪い。

「なんでもねえよ、これくらい」

「……今さらだが、どうして……私を連れて行く」

「さあな」

「……良心、かね」

「どうだかな」

「老ろう婆ば心しんから言わせてもらえば……傭よう兵へいで食っていくつもりなら、そんなものは……邪じや魔まになるだけだよ」

「傭兵をつづける気はねえ」

「ふん……じゃあ、エルデンで、侵入クラツ者カーでも……やるつもりか」

「うっせえな。黙だまってろ」

「……何か話さないと……気が遠くなりそうで、ね……」

「だったら、寝ねてろ」

「眠ねむるというか……死にそうだ」

「勝手に死ね」

「死ねと言いながら、私を助けようとしている……矛む盾じゆんしていると……思わないか」

「あんたはどうなんだ」

　レニィは足を止めずにモッドーを背負いなおした。

「死にたいのかよ」

「……正直、微び妙みようだね……」

　モッドーにしてみれば、いっそ死んでしまいたいほど痛みがひどいのかもしれない。けれども、レニィが彼の苦痛を肩かた代がわり

してやれるわけではないし、したくもない。

　もしモッドーが死ねば、レニィはその死体を捨ててエルデンを目指すだろう。

　いくらこの男を見捨てれば後こう悔かいしそうだといっても、そこまでが限度だ。

「いいか。死ぬなら勝手に死んじまえ。死んだら置いてくだけの話だ。それから、どうしても死にてえんだったら、はっきりそう言え。死にたがるやつは嫌きらいなんでな。痛くて我が慢まんできねえから死にたいっていうなら、今すぐ息の根を止めてやる」

　モッドーは返事をしない。レニィも答えをうながさなかった。口をついて出た自分の言葉に心をとらわれていた。

　死にたがるやつは嫌い、か。

　そうだ。キオ。頭のいいお前は自分がどうなるかわかっていたはずなのに、どうしてその運命を拒こばもうとしなかったんだ。手紙なんか残すよりも、他にやるべきことがあったんじゃないか。俺に相談してくれていたら、一いつ緒しよに逃にげてやったものを。

　それとも、なげうつには惜おしい、捨ててはいけない、命よりも大事なものがあったのか。

　たとえば、ブランディクの家名とか、体面とか。

　表向き、キオは演習中に事故死したことになっている。

　ミザカイマ山での山さん岳がく地野戦特別演習中に、切り立った崖がけから転落して死亡。

　教練所で年に一度実じつ施しされる十五泊はく十六日の山岳地野戦特別演習、通つう称しよう「特演」は、ほぼ毎年、死傷者を出すことで悪名高い。今まで何度となく中止を検討されながら、そのたびに独立剽騎士団の「荒ぶギアラる魂ンドロウ」を叩たたきこむためには必要不可欠な訓練であると結論づけられ、結局、恒こう例れい行事でありつづけている。そんなわけで、教練所における訓練中の死亡は、あまり名めい誉よなこととは見なされないが、この特演だけは別だ。戦死扱あつかいになる。だから、キオ・ブランディクの位い牌はいは、戦場で勇ゆう敢かんに戦って散っていった者たち

と同じように、今も英ミス霊レア廟ムの霊れい壇だんに並べられている。

　だけど、なあ、キオ。

　それって本当に名誉なことなのか。

　百ひやつ歩ぽ譲ゆずって、嘘うそ偽いつわりない本物の戦死はいいとしよう。でも、演習中に、もしくは戦場で、味方に騙だまし討うちされたやつがそのなかにいないと断言できるか。お前みたいな死に方をしたやつも、その英霊とやらのなかにいくらかいるんじゃないのか。

　勇敢に戦って前のめりに斃たおれた兵も、単なる臆おく病びよう者ものも、後ろから薄うす汚よごれた刃やいばに背中を突つかれたやつも、ぜんぶ一緒くたにして、「栄はえある我らが軍士を未来永えい劫ごう天上から守り給えよ、勇ゆう猛もうなる御み霊たま、穢けがれなき英霊」か。

　都合のいい話だ。

　あまりに都合がよすぎて、片腹痛くて、笑いが止まらなくて、暴れだしたくなる。

　ただ、暴れるのはあとにしたほうがよさそうだ。

　レニィは足を止めて振ふり返った。

「止まれ」

「ほ？」コロナはきょとんとしているが、一応、立ち止まった。「──あの……？」

「喋しやべるな」

　レニィはコロナにそう命じてから、耳を澄すませてあたりを見まわした。自分とコロナ、二人の足音以外の音がしたような。気のせいか。いや。違ちがう。気のせいなんかじゃない。いる。南西。距きよ離りは、どうだろう。五十メーテルくらい離はなれているか。木々のせいで見通しがよくないから、見えては消え、消えては見えるといったかんじだ。歩いている。ゆっくりと。鬼人オーガだ。とりあえず、一匹。

「静かに……音を立てるな。こい」

　レニィは小声でコロナに指示を出してから、近くの大木に身をよせた。くそったれ。コロナの面めん倒どうなんて見たくないが、やつが下手な動きをして鬼人オーガに気づかれでもしたら、こっちにまで被ひ害がいが及およびかねない。コロナもコロナのくせに事情を察したようで、注意深く足あし許もとをうかがいながら、そろそろとレニィに近づいてくる。それでも、草やら枝葉やらが散乱している地面だ。どうしてもカサカサ音がしてしまう。まあ、この程度なら大だい丈じよう夫ぶだろうが。

「あ、あの……」

「しっ。じっとしてろ」

　レニィはコロナを黙だまらせて、大木の根もとにモッドーを降ろした。モッドーは目を閉じてされるがままだ。呼吸が荒あらい。かなり汗あせをかいている。脂あぶら汗あせだ。傷が膿うんでいるのか。かすり傷ではないにしても、ちゃんと適切な手当てをすればなんてことはない負傷なのに。放ほうっておいたら、死ぬ―かもしれない。とくに、もし本人もそう思っていて、気持ちが折れてしまっていたら、たぶん助からない。それならそれでしょうがねえけどな。レニィは舌打ちをした。

「おい、てめえ」

　頰ほおをぴしゃりと叩かれたモッドーは、薄うす目めを開けたものの、声は出さなかった。レニィは少しだけ迷った。何を言えばいい？　何か言ってやる必要なんてあるのか？　ない、はずなのに。

「……人間ってやつは、そう簡単に死んだりしねえ。わかったか」

　何が、わかったか、だ。レニィは自分の馬ば鹿かさ加減に呆あきれるしかなかったが、モッドーはかすかに皮肉っぽく頰をゆがめて、うなずいてみせた。畜ちく生しよう。この腐くされ外げ道どうの闇やみ商人め。図に乗るなよ。せっかく背負ってきてやったのに、死なれでもしたら、卦体けつた糞くそが悪い。ただそれだけなんだからな。レニィは内心で毒づきながら、そっと長ちよう剣けんを鞘さやから抜ぬいて、腰こしにつるしていた円形盾を左手に持った。鬼人オーガとやりあう気はないが、備えはしておかないといけない。コロナはモッドーに寄り添そうような恰かつ好こうでおとな

しくしている。息を整えて。吸って。吐はいて。吸って。吐いて──よし。

　レニィはしゃがみこみ、背にしていた大木から顔を四分の一だけ出して、さっき鬼人オーガがいた場所のあたりに目をやった。いた。まだ、いる。さっきより近い。四十メーテルか、三十メーテルか。だが、今は足を止めている。少し顎あごを上げて、首をめぐらせ、あれは何か探さぐるような仕し種ぐさだ。においを嗅かいでいる？　鬼人オーガの嗅しゆう覚かくってのはどうなんだ。なんとなく、人よりは鼻がききそうだが、教練所の訓練で想定されている敵は基本的に人間だから、よく知らない。知らないことだらけだ。糞が。こんなことで、俺はこの先やってけるのか。

　不安。危き惧ぐ。恐おそれ。臆おく病びよう風かぜが吹ふく。

　すべてが急激に、一気にふくれあがる。鬼人オーガが──

　動いた。こっちだ！　こっちに向かってくる！　嘘うそだろ。マジかよ。やめてくれよ。てめえの鼻は犬並みかよ。足どりは、歩くでもなく、走るでもなく、小走りくらい。レニィはちらりとモッドーとコロナを見た。逃げるのは無理だ。乾かわいた唇くちびるを舐なめた。そういえば、喉のどが渇かわいている。今のところ、空腹は感じないが、鬼人オーガの肉って食えるのか。めちゃくちゃまずそうだ。つーか、あいつらは人肉を食う。駄だ目めだ。ああ。駄目だ。そうだ。集中だ。覚かく悟ごを決めろ。やるしかねえ。やりすごせる可能性もゼロじゃないが、いざとなったら先手をとる。やってやる。鬼人オーガ。鬼人オーガ。鬼人オーガ。鬼人オーガだ。鬼人オーガめ。すでに障害物はほとんどない。はっきり見える。赤っぽい肌はだで、額と顎が角みたいな突とつ起きだらけだ。粗そ末まつな皮革製の服を着ている。でけえ。筋骨隆りゆう隆りゆうで、二メーテルはゆうにある。ずばりここを目指しているというより、こっちの方角に向かっていて、そのコース上にレニィたちがいるというかんじだ。体勢を低くしているレニィに気づいた様子はない。けれども、結果としては同じことだ。やつはザッザッザッと迫せまってくる。もうすぐだ。あと十歩くらい。レニィは息をつめた。くる？　くるのか。やるぞ。いいか。やるからな。出るぞ。いや。待て。

　やつが、立ち止まった。

　大木の手前、五メーテルくらいか。

　レニィは思わず顔を引っこめた。そっと息を吐いた。そのときだった。

　ドンッ……！　大木が激しく揺ゆれて、葉ずれの音がした。「ゃっ──」コロナが声をもらして、自分で自分の口を押さえた。なんだ。何が起こった。ドン！　ドン！　木が。葉っぱが。阿あ呆ほう。何がも糞もあるか。やつはわかってるんだ。大木のこっち側に何かが、俺たちが、獲え物ものがいるってことを。察知したうえで、脅おどかそうとしているのか、からかっているのか。レニィは剣の柄つかを握にぎる右手に力をこめた。くそったれ。鬼人オーガの一匹ぴきや二匹、どうってことねえ。行くぞ。やるぞ。殺すぞ。殺せ。じつは、虫を潰つぶしたり、鶏にわとりを絞しめたり、野外訓練での狩かり以外、生き物を殺したことはないのだが。敵だ。やつは敵だ。やばい敵だ。殺やらなければ、殺られる。レニィは大木の陰かげから飛びだした。鬼人オーガは大木に飛び蹴げりをぶちかまそうとしていた。身体からだが浮うきかけていた。万ばん全ぜんな体勢じゃない。レニィはそこに突つっこんでいった。円形盾たてで顔と左半身を極力かばって、長剣を前に突きだして。体ごとぶつかってゆく。武芸指導教官のチョビ髭ひげルォン・ホドムル仁将アラドが言っていた。「剣技など達人のものだ！　貴様ら青二才はただひたすら突進し突とつ貫かんし特とつ攻こうして突き殺せ！」あの言葉自体より、反へ吐どが出るほど反復させられた突とつ撃げき訓練が肉体に染しみついている。「うおおおおおお……！」レニィはそれをやった。鬼人オーガが跳とびあがって大木を蹴ったくり、着地する寸前だった。土手っ腹だ。一いつ瞬しゅんで距きょ離りをつめて、懐ふところに入りこんで、突き入れた。巨きょ体たいを押し倒たおした。硬かてえ──が、剣身がズズッとめりこんでゆく手て応ごたえはあった。でも、浅い。まだ浅あせえ。もっとねじこまねえと。硬え。駄目だ。なんでだ。剣が、止められている。鬼人オーガの糞でかい左手が、剣をがっちりつかんでいる。馬鹿な。痛くねえのか。顔を上げると、鬼人オーガと目があった。「Ｏｏｏｇ……！」ドガッときた。鬼人オーガの右みぎ拳こぶしだ。とっさに盾を出して防いだが、吹っ飛ばされた。ひっくり返って、尻しり餅もちをついた。やべえ──と思い、すぐに盾を出した。またぶっ飛ばされた。蹴り！　すげえ回し蹴りだ！　怖こえええ！　ンなもの食くらったら死ぬって！　口から胃が飛びだしてきそうだったが、レニィは目をつぶらなかった。横向きにゴロンゴロン転がって身を起こすと、鬼人オーガはとどめとばかりに組んだ両手をゆっくりと振ふりあげたところだった。舐めやがって。余よ裕ゆう綽しやく々しやくかよ！　「……だあっ！」レニィは円形盾を投げて、片手用の

長剣を無理やり両手持ちした。円形盾は鬼人オーガの胸にあたったが、びくともしない。それはそれでいい。レニィは踏ふみこんで渾こん身しんの力をこめて長剣を振るった。鬼人オーガの脛すねを狙ねらった。空振った。鬼人オーガが飛び下がってかわしたのだ。レニィは、だが、空振りした勢いのまま一回転して、さらに斬ざん撃げきを繰くりだした。今度は、かすった。鬼人オーガは━横！　右だ！　ここで、レニィは突きに転じた。力強く地面を蹴って突っこんだ。やれる、と思った。

　ところが、だ。

　消えた。

　鬼人オーガが。

　違ちがう。

　やつは、前まえ屈かがみになって━レニィは、やつの背中にのっかる恰好になった。下から突き上げてきた。というか、鬼人オーガは前に倒した体を起こしただけだ。それだけで、レニィは前方に放ほうり投げられた。完全に、してやられた。俺は鬼人オーガに見事に一本とられて、投げられて、背中を打って、息がつまって━死ぬ？　殺されるのか？

「……ぐっ……」

　立たないと。遅おそいかもしれないが。それでも、立たないと。レニィは必死に起きあがろうとしていた。鬼人オーガがすぐそばでレニィを見下ろしている。「残念だったなあ、蛆うじ虫むし。所しよ詮せん、てめえじゃ俺は殺せねえよ」みたいな態度で。

　不意に、声が聞こえてきた。

　この声は━コロナ……？

「熔Ｄｅｌ隷Ｙｏ誹」

　意味不明で、独特の韻いん律りつ。上古ハイロ高位語メオンか。そうだ。コロナは魔ま術じゆつ士しだ。いつの間にか大木の陰から出てきていたコロナは、何か触しよく媒ばいらしき物体を指に挟はさんだまま、両手で木の杖つえを持って、呪じゆ文もんを詠えい唱しようした。魔術は完成して、発動した。

　火だ！

　コロナの両手指の先から、おびただしい赤、緑、青、黄色の火花がすごい勢いで━って。

「あつ！　あちゃあつあちゃちちっ……！」

　てめえが熱がってどうする。

「うおわ！」

　つーか、俺も熱いって。

「Ｏｗ……！」

　鬼人オーガまで熱がってるし！

　もっとも、所詮は火花だ。熱いといってもたかが知れている。コロナもレニィも鬼人オーガも吃驚びつくりして飛びのいたが、我が慢まんしようと思えばできただろう。花火職人なら熱がることさえなかったかもしれない。これが、魔術だと？　手品の間違いじゃねえのか？

　ただ、おかげで助かった。それは事実だ。しかも、鬼人オーガはコロナの花火魔術に気を奪うばわれている。チャンスだ。そう思った瞬間だった。

　レニィは、後頭部から背筋にかけて、悪お寒かんとも震ふるえともいいがたい何かが走るのを感じた。

　なんだこれ。みなぎってくる。力……！　その力はかなり具体的なものだ。はっきりと目に見える。火花だ！　今もまだ「あつあちゃあちちち！」と走りまわっているコロナの両手からほとばしりつづけている火花が、吸いよせられるようにして、レニィの周りを渦うず巻まいている。

　集まってくる。

　手に。

　剣に。

　レニィの右手のなかにある長剣の剣身が、赤色の燐りん光こうを帯びて、ある力を宿している。

　それが何か、レニィにはわからない。しかし、今、自分が何をすべきかはわかっていた。

　斃たおせ。

　殺せ。

　敵を。

　鬼人オーガを。

　奔はしれ。

　近づけ。

　鋭するどく振るえ。

　剣けんを。

　力を宿したこの剣を。

「Ｏｏｏｏｇｒｅ……！」

　鬼人オーガはレニィの接近に気づいて、丸太のような右みぎ腕うでを振りまわした。

　レニィはまずそれを叩たたき斬きった。

　肘ひじのところできれいに斬れた。

　斬れ味抜ばつ群ぐんのモトロール刀であっても、腕がよくないと、こうはゆかない。

　むろん、レニィは達人なんかではないが、この剣は斬れる。

　斬れるだけではなく、傷口から血液とともに煙けむりのようなものが噴ふきだしている。

　焼けているのだ。

　切断面が。

　鬼人オーガはむしろ、きょとんとしていた。その間に、レニィは鬼人オーガの懐ふところに飛びこみ、腹を横一文字にかっさばいて、撥はねあげた剣を顎あごの下に叩きこんだ。頸けい骨こつを断たち斬るところまではゆかなかったが、傷はかなり深かった。気管も、左側の頸けい動どう脈みやくも切断した。レニィはすかさず鬼人オーガから飛び離はなれて、剣を構えたままあとずさりした。左手で首を、肘から先を失った右腕で腹を押さえた鬼人オーガが崩くずれ落ちるようにしゃがみこみ、仰あお向むけに倒たおれて、動かなくなるまで、決して目を離さなかった。それから、ようやく全身の力が抜ぬけて、ぺたんと地面に腰こしを下ろした。



　見れば、コロナも少し離れた場所に座りこんでいる。レニィと目があうと、ほっとしたような笑え顔がおを作ってみせたが、すぐに下した唇くちびるを噛かんでうつむいた。まあ、しばらくレニィに無視されていたわけだから、そんな反応が妥だ当とうだろう。でも、な―たしかに手品同然のしょっぱい花火魔術だったものの、あ

れがなかったら勝てなかった。だいたい、コロナを助けようとして斜しや面めんを滑かつ落らくしたのだって、やつに頼たのまれてやったわけじゃねえし、つまりは自じ業ごう自得で。やつは一応、俺を手当てしようとして薬をのませて、目は銀色になっちまったが、こうして生きてる。

事実は事実だ。

感謝すべきところは感謝して、きっちりけじめをつけておかねえと、気持ちが悪い。

「おい」

呼ぶと、コロナはびくっと肩かたを震わせて、こわごわと顔を上げた。

「……は、はい……」

「びびんなよ。怒おこってるわけじゃねえんだ」

「で、ですが、お顔が──その……とても、不ふ機き嫌げんそうですし……」

「もともとこういうツラだ。文句あるか」

「と、と、とんでもないです！　文句なんて、そんな！　申しあげられる立場では──だって、コ、コロ、あ、わたしなんて、すっごく間ま抜ぬけで、失敗ばかりで、才能なくて、お師し匠しよう様や他ほかのお弟で子しさんたちにも迷めい惑わくをかけてばっかりで、見捨てられて、い、今も……」

「あーうぜえ。そんなの知ったことかよ。てめえの自分語りなんざ聞きたかねえっつーの。俺は、ただ──」

レニィは頭を引っかきまわし、コロナから顔をそむけて、ため息をついた。

「ありがとな」

返事はなかった。

五秒くらいして、コロナのほうを見てみたら、やつは感かん極き

わまったように目をうるうるさせてこっちを凝ぎよう視ししていた。

「な、なんだよ」

「……生まれて初めてです。ありがとう、って、誰だれかに言ってもらえたの」

「そいつは……」

　ある意味、壮そう絶ぜつな人生だな、と思いながら、レニィは右手の長剣に視線を落とした。

　しかし──薬。銀色の瞳ひとみ。魔ま術じゆつ。火花。剣身に触ふれている下草が、黒く焦こげて、かすかに煙を上げている。左手をそっと近づけると、徐じよ々じよに冷めてきてはいるが、まださわれないくらい、剣身が熱い。いや、剣自体じゃなくて、剣がまとっている、もう消えそうな、赤い燐光。これが熱のもとか。こいつはなんだ？

　キオ。馬ば鹿か野や郎ろう。さっさと死んじまいやがって。てめえのことだから、死んでも妙みような義務感だとか責任感だとか気配り精神に駆かられて、きっとどこかで俺のことを見てやがるんだろう。だったら、教えろ。頼むから、教えてくれ。

　いったい、俺はどうしちまったんだ……？

第2話
この旅は終わらない

1

──キオ。

キオ・ブランディク。

肉親といえば、どういうわけか、半分しか血の繫つながっていないお前のことだけが思い浮うかぶ。

憎にくたらしかった親父おやじ殿どの、ドル・ブランディクも。やつの夫人とはいえ、俺にとっては赤の他人に等しいメリル・ブランディクも。放任といえば聞こえはいいが、ようするに俺をほったらかしにして、そうはいっても大事な金づるだから、最低限死なないように祈いのっていただけの養父母も。振ふり返れば影かげが見えるだけの単なる過去で、頭の隅すみにこびりついてはいるものの、いつか忘ぼう却きやくの彼方かなたに消えていくんだとわかっている滓かすみたいなもので──正直、どうでもいい。

でも、お前のことだけは、そういうわけにもいかないみたいだ。

どうしてだろう。不思議だ。お前とすごした時間なんて、たいした長さでもないのに。下町で糞くそ餓が鬼きどもとつるんで悪さをしていた時間のほうが、ずっと長かったのに。

地元の連中といるときはだいたい大人数で、お前とはいつも二人きりだったからか。

それもあるかもしれない。

ただ、それだけじゃない気がする。

こんな言葉、恥はずかしくて、面と向かっては言えないが、お前はもうどこにもいないから、あえて胸のうちでつぶやいてみるけれど──親友。兄弟というよりも、そんなかんじだった。なんだか、心の深いところで通じあっているような、わかりあえるような、妙な、得体の知れない、でも、貴重な、えがたい結びつきを、絆きずなを、お前との間に感じていたんだと、俺が言ったら──キオ、お前はどんな顔をするだろう？

俺か？

そりゃあ決まってる。

気色が悪い。野郎同士で、何が絆だ！

しかも、お前はもういない。つまり、絆なんてものがもしあったんだとしても、それは永遠に失われてしまった。もう二度と戻もどらないものにしがみついていたって、しょうがない。俺はあきらめがいいほうなんだ。お前が死んだことだって、今はすっかり受け入れている。いろいろ納なつ得とくできない部分もあるが、なんにしても、お前は死んだ！　俺に手紙なんか残して、お前は殺されちまった！

誉ほまれ高いハッツフォー独立軍領を独立国たらしめている、独立剽騎士団の第四牙が狼ろう兵隊隊長ギルァム・フィンデロゥ義将モラド。

同第二十一黒こく狐こ兵隊隊長ミゾゥ・ルパリー礼将コラド。

そして━独立剽騎士団の頂点に君臨する五剽騎士ジイラドの一人、伝統的に教練所の所長を兼けん務むする、緑剽騎士グバルンシジマァ・ジューデンレイ。

手紙を読んだかぎりだと、実際に誰が手をくだしたのかは別として、お前を殺したのはたぶんやつらだ。そうそうたるメンツだ。領民たちの尊敬を一身に集め、勇ゆう猛もう果か敢かん、不ふ撓とう不ふ屈くつ、大だい胆たん不ふ敵てき、清せい廉れん潔白の代名詞と目されている独立ヴアリ剽騎士ガントたちだ。

そんな連中が、まだ餓鬼で、将来有望で、いつかやつらと同等の、もしかしたらそれ以上の有ゆう為いな人材となったかもしれないお前を、暗殺した。

自分たちの不正を、闇やみに葬ほうむるために。

━まあ、このままじゃあ、俺もすぐそっちへ行く羽目になるかもしれないけどな。

「畜生シツト」

目の前には狼おおかみどもの群れ。

右手には使い古しの長ちよう剣けん。

左手にはゆがんだ円形盾。

背中にはほぼ役立たずの馬鹿コロナ。

それからお荷物ババドア・モッドー。

あと数時間でこの夜も明けるが、朝日を拝むことのできる保証なんか、どこを探したって見つかりそうもない。保証……！　そうだ。そんなものあるはずがない。俺は何もかも捨ててきたんだし、これからもっと大事な何かを失っちまうかもしれない。何しろ、狼どもはずいぶん餓うえているみたいで、ちょうど連中と同じように空すきっ腹を抱かかえている俺や、ちんまりしてまずそうなコロナや、怪け我がのせいで意識が朦もう朧ろうとしているモッドーを見み逃のがしてくれそうもない。

それにしても、狼ってのはこんなにでかいのか。背後をとられないように、森のなかのちょっとした崖がけに近い急傾けい斜しやを背にしているか弱い人間どもを取り囲む肉にく食しよく獣じゆうどもは、街育ちのレニィが想像していたよりもずっと大おお柄がらだ。個体差はあるが、犬の仲間だなんてとうてい信じられないくらい大きいやつもいる。それに、毛がやけに白っぽい。とくに、レニィの正面にいるひときわでかい狼は、頭頂部と手て脚あしの先や背が灰色がかっている以外、真っ白といっても過言じゃない。たぶんあいつが群れのリーダーだろう。しかし、よくわからないが、野生動物がこんなに目立つ色をしているのって、不自然じゃないのか？

「なあ、てめえら、ふつうの狼かよ」

Ｇｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒ……。

返事はリーダー狼のおっかない唸うなり声だった。その声に触しよく発はつされたのか、何頭かがぐっと肩かたを沈しずめた。おいおいやめてくれよ。飛びかかってくるつもりかよ。「しっしっ！　くるんじゃねえ！」すかさずレニィが長剣を振りまわして牽けん制せいすると、そいつらはとりあえず攻こう撃げき態勢をといたものの、一難去ってまた一難。どうやらレニィの行こう為いがリーダー狼の気に障さわったらしい。

わぉん……！

すごい吠ほえ声だった。本気で怖こわかった。冷や汗あせが出て、腰こしが引けそうになって、慌あわてて臆おく病びよう風かぜを振り払はらおうとしたが、うまくゆかない。ドクドクドクドクドクうるせえぞ、この心臓め。おさまれ。静かにしろ。相手は獣けものだ。びびってると思われたら、やられちまう。まあ、びびってなくたって、やられそうだが。つーか、切り抜ぬけられるのか、このピンチ。駄だ目めっぽくねえ？

「……あ、あのう、もしよろしければ……」

と、後ろからコロナの声がした。

「なんだ。今めちゃくちゃ忙いそがしいから手短にすませろ」

「は、はい、えと、非常にお困りのご様子ですので、コロ──あ、わたしにも何かできることはないかと」

「いや。お前にできることはたぶん何一つねえと思う」

「そ、そんなことないです！　コロナ、昔からわんちゃんさんたちにはとっても好かれるんです！　イケイケのモテモテです！　きっと話せばわかっていただけると思いますっ！」

「……じゃあ、今、俺たちを食べちまおうとしてるワンチャンサンたちに、お前から話してみたらどうだ」

「やってみます！」

コロナはさっそくレニィの前に出て、リーダー狼に向きなおると、一つ咳せき払ばらいをした。

「おっほん」

狼どもが一いつ斉せいにコロナに注目した。

だが、どうしてか、連中のまなざしから凶きよう暴ぼうな敵意が失うせたような。

まさか、予想に反して、人間にとっては疫やく病びよう神がみのちんまり馬ば鹿かコロナが、獣的にはマジで親しみやすい生き物

だったりするのか。そういえば、なぜか犬だの猫ねこだのにやたらと好かれるやつがいたりする。コロナはまさしくそれなのか。

「えと……」

　コロナはそこで一呼吸置いてから、左手でぎゅっと胸をおさえた。

　そして、リーダー狼をにらみつけたまま、高らかに咆ほう吼こうした。

「ぱお～ん！」

「…………犬語か？　犬語なのか？　違ちがうよな？　それ、なんか別の生き物の鳴き声だろ？　つーか、そもそもそういう問題でもねえよな？」

「ほ？」

　コロナはきょとんとしている。見れば、狼たちも毒気を抜かれたような体ていだ。ということは、これはこれでよかったのか。意気をくじかれた獰どう猛もうな狼どもが、このままおとなしく立ち去ってくれればの話だが。

　もちろん、そんなわけはない。

「──だあっ！」レニィは退ひかずに前に出て長剣を鋭するどく振ふるった。よっぽどコロナの勘かん違ちがい犬語講座（？）が腹に据すえかねたのか、一頭の狼が躍おどりかかってきたのだ。レニィの長剣はそいつの首をとらえたが、重い！　なんとか吹ふっ飛ばしただけで、斬きるなんて上等なことはできなかった。それは何もレニィの膂りょ力りょくや技量だけのせいじゃない。剣けんだ。自分の得物はなくしてしまったので、もともと拾い物なのだが、とんだなまくらじゃねえか。誰だれだ、こんな剣を持って偉えらそうに傭よう兵へいだの私兵だの名乗ってやがったのは。まあ、他人のことを言えた義理じゃないし、また別の狼おおかみがきた！　今度は三頭一斉に……！

「チィッ……！」

　やばい。一度に三頭は止められない。どうする。糞くそが。思考と体が分ぶん離りする。手が足が心臓みたいに勝手に動く。レニィ

はさらに前へ出た。そうして一頭の狼に円形盾たてごと体当たりをぶちかましながら、別の一頭に長剣を叩たたきこんだときだった。

しまった。

コロナとモッドーが。

はっとして振り向きかけた瞬しゅん間かん、背筋が凍こおりついた。殺気だ。でかいリーダー白狼！　速い。正面から低い姿勢で突つっこんでくる。こいつは──無理だ、こんな鈍にぶい、華きや奢しやな武器で、やつをどうこうするなんて。

というか、すでに反応が遅おくれている。やつがぶつかってきた。ドンッ！　とっさに盾で防いだが、レニィの体が浮ういた。ふんばれない。倒たおれる。押し倒される。「──くっ！」狼に組み伏ふせられたレニィは、必死に顔から首のあたりを円形盾でカバーしようとした。ガリガリガリガリ嚙かんでやがる。前ぜん肢しと後肢でレニィを押さえつけて、首根っこを牙きばで食いちぎるつもりか。そうやって即そく座ざに獲え物ものの息の根を止めるやり方が、身に染しみついているのだ。こいつは眠ねむっていても一咬かみで人間を殺せる凶暴な肉食獣だ。そんな相手と互ご角かく以上に戦うため、人間には武器がある。そうだ。剣を使え。突き刺させ。レニィは長剣をやつの横っ腹に突き立てようとした──と、いきなり圧力が消えた。やつが逃にげた？　いや、かわされたのか。レニィはその隙すきに跳とび起きようとしたが、上半身を起こす前にまたやつが襲おそいかかってきた。なんて素す早ばやい！　しかも、判断が的確だ。それとも俺がとろくさくて間抜けなのか。

そして、間抜けな俺には、死を。

俺は、こんな場所で、エルデンにたどりつけもしないで、獣に殺やられる。

その間ま際ぎわだった。

何かが頭上をよぎった。

暗い色の、何か。

「やあっ……！」

そいつはレニィをぴょんと飛び越こえて前に出るなり、手にした

剣を振り下ろした。シュッ、といい音がした。なかなか悪くない斬ざん撃げきだった。少なくとも、リーダー白狼がザッと方向転てん換かんして逃げるくらいの太た刀ち筋すじだった。

　コロナだった。

　ただ、呆あっ気けにとられている場合ではなかった。狼は一頭じゃない。右側から他ほかの狼がコロナに飛びかかってくる。コロナはやつの小さな身体からだには長すぎる剣を振りまわして、なんとかそれを追い払はらったが、左からも。前からも。「はわわっ」「どけ！」レニィは跳び起きざま、パニくりかけたコロナを押しのけて、正面の狼は盾でぶっ飛ばし、左のやつは十分引きつけて鼻はな面づらに蹴けりを叩きこんだ。キュウン。狼どもは子犬みたいに鳴いて引き下がったものの、これで終わったわけじゃない。というより、むしろこっちがいつ終わるかだ。ちなみに、そのときはそんなに遠くなさそうだった。レニィは後ろから何か不ふ穏おんな気配を感じて振り返った。振り返ってしまった。

　──モッドー。

　一頭の狼がモッドーに目をつけて、迫せまろうとしている。

　モッドーの野や郎ろうは、土や木の根が剝むきだしになった、さして高くもない絶ぜつ壁ぺきに背中を押しつけて、もうどうせ無理という顔つきだ。たしかに、レニィが今から駆かけ戻もどったところで、たぶん間に合わない。だとしたら、あきらめる？　その選せん択たく肢しが頭に浮かぶより早く、レニィは長剣を投げた。これが見事、狼に命中した。まあ、石ころだの遊びで作った投げ槍やりだの喧けん嘩か用の投げナイフだの、餓が鬼きのころから投とう擲てきは得意だったから、こんなものだ。

　で、当然の結果として、レニィは武器を失った。

　おまけに、リーダー白狼の恐おそろしげな吠ほえ声が、すぐそばで聞こえた。

　ああ──やっちまったか。

　そう思った。

　ギャン。

そんな痛そうな狼の鳴き声を耳にしても、それが福ふく音いんだなんて考えもしなかった。ドサッと何か大きなものが地面に倒れこむ音がして、顔だけ振り向かせ、この目でそれを見るまでは。

「……あ？」

リーダー白狼が地面に横たわって、四し肢しをぴくぴくさせていた。

その側頭部と肩かたと腹部から、棒みたいなものが生えている。

いや、刺さっているのだ。

あれは━矢？

矢だと？　誰だれだ？　どこから？　レニィの頭のなかをそんな疑問が駆けめぐっている間にも、矢はヒュンヒュン飛んできた。次々と狼どもをとらえていった。正確な射しゃ撃げきだ。でたらめに射うってるんじゃねえ。ちゃんと狙ねらってやがる。すげえ腕うでだ。射手は何人だ？　複数？　いや、矢が飛んでくる角度からすると、まさか、一人……？

あっという間に射殺された狼が、リーダーをふくめて三頭。射撃はそこでぴたりとやんだが、生き残った狼どもは、すっかり怖おじ気づいてキャンキャン鳴きながら逃げてゆく。

結局、矢はレニィたちにはかすりもしなかった。助かったようだ。違ちがう。助けられたのだ。

レニィは訝いぶかりながらも、モッドーのそばで死にかけている狼から自分の長剣を回収し、一瞬だけ迷ったあと、とどめを刺してやった。これでレニィがしとめたのは二頭。今はぽかんとしているコロナが一頭。それから、何者かの矢で三頭。ぜんぶで六頭。

レニィは目を凝こらして、矢が飛んできた方向を見た。この薄うす暗ぐらいなか、あれだけの超ピン精密ポイント射撃ショツトを、しかもそれこそ矢や継つぎ早にやってみせるなんて、ただ者じゃない。教練所で一通りの軍事訓練を受けたレニィは、むろん弓矢も使えるが、それだけにあの武器がいかに扱あつかいづらいかよくわかっている。風。湿しつ気け。道具の癖くせ。体調。精神状態。照準を狂くるわせる条件がめちゃくちゃたくさんあって、それらを補正するための理り屈くつはあっても、言うは易やすく行うは難かた

しだ。たとえ頭で理解していたって、なかなか実行できるものじゃない。

　それをものの見事にやってみせたやつが、ゆっくりと近づいてくる。

　そいつは──

　あたりまえの話だが、人間だ。

　結構背が高くて、意い匠しようの凝った皮革製の上下や外がい套とうをまとった身体からだは、ほっそりして見える。

　女、か。

　細く何本にも編んだ黒くろ髪かみ。

　褐かつ色しよくの肌はだ。

　──エメラルドグリーンの瞳ひとみ。

「す、すごい……とってもエキゾチック美人さんです……」

　珍めずらしくコロナと意見があってしまった。ハッツフォーには黒い肌の人間なんて滅めつ多たにいないが、それでもあの女が美しいということはわかる。だが、なんというか、同じ種族の雌めすではなく、むしろ野生の獣に感じる美に近い。第一、おかしな動きをしたら、いまだ彼女の手にあり、こちらに狙いを定めている弓矢が、すぐさまレニィを射殺すだろう。

「……まだこどもか」

　静かな、夜みたいな声で彼女は告げた。

「敵意がないのなら剣けんを鞘さやに納めるといい。そうすれば、あたしも弓をおろす。そのイヌはこの森の獣じゃない。鬼人オーガの飼いイヌだ。どうするにしても、急いだほうがいいよ」

「──なんだと……？」

　レニィたちが敵対する意思はないことを示すと、女は迅じん速そくに行動した。狼おおかみたちがちゃんと事切れていることを手早く確かめたあと、モッドーの負傷に気づき、無言で包帯がわりの布をといて怪け我がの具合を見た。女は「膿うんでいるね」と短くもらし、傷口にペースト状のものを塗ぬって新しい布を巻いてから、何やら油紙に包んだ粉末状のものをとりだしてモッドーに与あたえた。飲め、ということらしかった。モッドーはそれを少し指先につけて舐なめると、「なるほど」と唇くちびるをゆがめ、女がさしだした水すい筒とうの水で一気にのみくだした。ちなみに、そのあと、水はレニィやコロナにも振ふる舞まわれた。気前のいいことだった。そうして一息ついたところで、女がモッドーに命じたのだ。「さあ、立って歩くんだ」と。

　それで、レニィが女につめよったのだった。「──なんだと……？」

　女はエメラルドグリーンの瞳でレニィを一いち瞥べつした。

「彼はまだ自分の力で動けるよ。それに、今、痛み止めをのませた」

「痛み止め、って──」レニィが言葉につまると、小生意気にも馬ば鹿かコロナが眉まゆをひそめてあとをついだ。「それは……でも、たしかに痛みは緩かん和わされるかもしれませんが……コロ、あ、わたしが間違っているかもしれませんけど……もしかして、阿あ片へん、ではないですか？」

「そうだよ」

　平然と女がうなずいた瞬しゅん間かん、レニィの頭のなかでプチンと音がした。

「てめえ……どういうつもりだよ」

「何が？」

「何がじゃねえ、阿片ってのは麻ま薬やくだろうが！　麻薬なんて……」

「使い方をあやまらなければ、とくに問題のない薬だよ」

「薬だと？　そいつのせいで──」言いかけて、はっとした。俺は、何を今さら。モッドーの荷馬車にだって、きっとその手のブツが満まん載さいされていたに違いないのに。そんなやばい隊商に雇やとわれて、金までもらって、エルデンを目指して。エルデンでは合成も天然も麻薬なんてありふれているという。その自由と悪徳の街に行こうとしている人間が、正義漢ヅラして何を言ってやがる。
「……くそったれ……」

　女はわずかに首をかしげただけで、表情は変えずに、もう一度モッドーをうながした。

「立つんだ。生きたいのなら。あのイヌたちは、もともと無フロー間ゼン凍土アヴイシで雪ゆき鹿じかやときには雪熊さえ獲え物ものにしていた勇ゆう敢かんで強きよう靭じんな種族だ。それを鬼人オーガたちが飼い慣らして友とした。近くに鬼人オーガがいるよ。逃にげないといけない」

「……あ、あの」コロナがおずおずと口を挟はさんだ。「その方は、とてもお一人で歩ける状態ではなくて、それで、今までも……」

「それを決めるのはきみじゃないよ」

　女は揺ゆるがない。強い。むかつくほど強い女だ。レニィは知った。この女が美しいのは、外見だけじゃない。この強さのせいだ。

「死期を悟さとった獣けものは、皆みな、みずから死んでゆく。彼もここが死に場所だと思うのなら、死ぬことを自分で選べばいい。まだ死にたくないのなら、それを自分で決めるんだ」

　モッドーが、ふらふらしながらも自力で立ちあがろうとするまで、それほど時間はかからなかった。すると、女はすぐさま手をさしのべた。モッドーを助け起こして、肩かたを貸してやろうとした。その光景をまのあたりにして、レニィは猛もう烈れつに恥はずかしくなった。そうか。そういうことかよ。言葉面づらに過か剰じよう反応して、反発して。俺はなんて了りよう見けんが狭せまいんだ。ちいせえ。ちいせえ男だ。レニィはいたたまれなくなって、強ごう引いんに女を突つきのけ、モッドーの左脇わきに体を入れて肩を貸した。女は少しだけ口くち許もとをゆるめたようだった。でも、馬鹿にされたかんじはしなかった。だから、傷つきはしなかったが、やっぱり恥じ入るしかなかった。見れば、コロナの馬鹿も、

モッドーの右脇にちょこんと収まっている。まったく──それで役に立ってるつもりかよ。阿あ呆ほうめ。

「とりあえず、イヌたちの気配がする範はん囲いから離はなれよう。話はそれからだよ。ついてきて」

　こうしてレニィたちは、女の先導に従って黙もく々もくと歩いた。途と中ちゆう、水を飲ませてもらったり、乾ほし肉をわけてもらったり、何度か短時間立ち止まっただけで、ほとんど休まなかった。さすがにモッドーはかなりつらそうだったが、やつは弱音を吐はかなかった。というより、誰だれもほとんど口を開かなかった。ただひたすら女の背中を追って歩いた。

　それは奇き妙みような状じよう況きようだった。

　ついさっき出会ったばかりの正体不明の女に、自分たちの命運を託たくしているのだ。

　けれども、女の足取りには少しも迷いがなかった。こっちに不安を抱いだかせなかった。女にはそこにいるだけで信しん頼らいできそうな雰ふん囲い気きがあった。その印象は時間とともに強まっていった。

　この女は、きちんと相手の目を見て話し、殺すだろう。他人の寝ね首くびを掻かくような真ま似ねは決してしないだろう。張りつめすぎていることもなく、もちろんだらけてもいなくて、嫌いやになるほど自然体で──なんだか、やたらとかっこいい女だ。一人で、すっと背筋を伸のばして、まっすぐ立っているかんじがする。誰の助けも借りないで、それでいて、無理をせずに他人を助けてしまう。そんなやつが現実にいるなんて。

　いや、いるのだ。

　ここに。

　レニィの目の前に。

「あんた、名前は」

　どれだけ歩いただろう。ためらった末に、レニィは訊きいてみた。女は顔を半分だけ振り向かせたが、答えてはくれなかった。咎とがめるでもない、問いかけるような、その眼まな差ざし。神秘的

な、深い、エメラルドグリーンの瞳ひとみ。レニィはおのれのあやまちに気づいた。

「あ……俺は、レニィだ。レニィ・ブランディク」

　その名を口にした瞬間、肩を貸してやっているモッドーが、びくりと体を震ふるわせたような気がした。だが、そんなことはどうでもよかった。女が足を止めて、レニィに向きなおった。女はやはりレニィの目を見て名乗った。

「あたしはロム・フォウ。好きなように呼んでくれてかまわないよ。きみのことはレニィと呼んでもいいかい」

「あ、ああ！　もちろん──」

「コロ──あ、わたしはコロナです！　これでも魔ま術じゆつ士しでして、真マ名ナもあるのですが、ちょっとだけ長いので！　以後、お見知りおきを！　ロム・フォウさん！」

「うん。よろしく、コロナ」

「よろしくお願いします！　ううっ。なんだか、コロナ感激です。ちゃんと人間扱あつかいされているみたいなかんじがして……」

「いつも人間扱いされてなかったのかよ、てめえは……」

「……じつはコロナ、お師し匠しよう様のところでは、渾あだ名ながポチでした……」

「犬かよ！」

「ふふ」

　ロム・フォウがひっそりと笑った。笑え顔がおになると、意外と愛あい嬌きようがある。というか、本当に飾かざらない女なんだ。なんだよ、この女。もう完かん璧ぺきじゃねえか。年、いくつなんだ。まあ、十六の俺よりはだいぶ年上だろうが──つーか、何を考えてやがる、俺。

　レニィはため息をついて頭を振ふった。ロム・フォウが笑ったりするものだから、ついつい安心しちまった、なんて、他人のせいにするんじゃねえよ。頭を冷やせ。気を抜ぬくな。と、冷静になって

みたら、モッドーがやけに重い。見れば、かなり呼吸が荒あらいし、死人みたいな顔をしている。そういえば、もう日が昇のぼって結構たつ。かなり歩いた。いいかげん限界なのか。モッドーの様子に気づいたロム・フォウが、あたりを見まわしてから、近くの大木を指し示した。「少し休もう。さっきよりいくらかましな手当てもできるかもしれない」

　レニィとコロナがモッドーを大木の根もとに座らせると、ロム・フォウはそのそばにバックパックをおろした。さして大きくないが、かなり詰つめ方を工夫しているようだ。ずいぶんいろいろなものが入っていて、それだけで彼女が旅慣れているとわかる。モッドーの傷の具合を確かめて、膿うみをふきとったり、ペースト状の湿しつ布ぷを塗ぬりかえたりする手つきも、逡しゅん巡じゅんとは無む縁えんで、まったくよどみがない。

　褐かつ色しよくの肌はだ。エメラルドグリーンの瞳。卓たく絶ぜつした弓矢の腕うで前まえ。いったいどういう女なのだろう。レニィはあらためて不思議に思った。というか、興きよう味み津しん々しんだった。少なくとも、ハッツフォーでは決してお目にかかれないタイプの女だ。まあ、その意味ではコロナも同じだが、やつの場合、できればお目にかかりたくないタイプの女、というより、餓が鬼きで。

　とにかく、いろんな人間がいる。

　見たことのないものだらけだ。

　広い。

　──これが、世界。

　世界、か。

　そうだ。ここはもう、生まれ育ったモルグステン市から三千キルメーテル離はなれた、サンランド無統治王国だ。

　俺は二度とハッツフォーには戻もどらない。俺は何もかもをかなぐり捨てて、新しい自分になる。生まれ変わる。そのために故国を飛びだしてきた。たしかに、国を出ざるをえない状況ではあった。そうしないと、ろくでもないことになるとわかっていた。でも、それだけじゃない。俺はずっとあのくそったれな街から出たかった。

薄うす汚ぎたない卑ひ屈くつな下町も、上品ぶった厚こう顔がん無む恥ちな汚お物ぶつどもが群れをなす屋や敷しき町も、大だい嫌きらいだった。血が繋つながっていなかったり、繋がっていたり、どっちにしても形ばかりの家族も。俺がブランディク家の跡あと取とりになると、いきなり掌てのひらを返したようにつれなくなった下町の仲間たちも。妾しよう腹ふくで育ちの悪い俺を、陰いん湿しつないじめの標的にした教練所の同窓生どもも。当然やり返してやったが、あの街で生きているかぎり、やつらの顔を見なけりゃならない。やつらとの不毛な罵ば倒とう、陰いん謀ぼう合戦、ときには肉にく弾だん戦、もしくは胸むな糞くその悪い無視シカトごっこがえんえんつづく。そんなのやってられねえ。冗じよう談だんじゃねえ。俺は飽あき飽あきしてた。うんざりだった。だから、今はせいせいしてる。ああ、晴れ晴れとしたもんだ！　これからも、あの街を懐なつかしいと思うことなんてないだろう。できれば記き憶おくのなかから消し去りたいくらいだ。

　なかったことにしたい。

　俺は忘れたいんだ。

　キオ、お前がいて、お前が殺されて、そのせいでなんだか割りきれない思いを抱かかえてるってこともぜんぶ、俺は忘れちまいたい。きっと無理だろうが。

「ロム・フォウさんは、お一人で旅をされているのですか？」

　モッドーの手当てが終わり、ロム・フォウが地面に腰こしを下ろすと、待ってましたとばかりにコロナが質問をはじめた。無む邪じゃ気きなやつだ。遠えん慮りよってものを知らない。だが、ロム・フォウはべつに嫌いやそうでもなく、面めん倒どうくさがる様子もなかった。だったら、まあ、いいか。それに、ロム・フォウに何か訊きくなんて、俺にはできそうもない。レニィはひそかに、少しだけ、コロナに感謝してもいいかと思った。

「旅をするときはいつも一人だよ」

「……旅をなさっていないときは、どうされているのでしょう？」

「どうだろう。たぶん、また旅をしたいと考えているんだと思う」

「これまで、どんなところに？」

「大陸中を歩いたよ。山や海や森ばかりだけれど」

「街には行かれないのですか？」

「人がたくさんいる場所は苦手なんだ」

「そうなんですか。えと、コロ──あ、わたしは、エルデンに行く途と中ちゆうなんです。レニィさんも──同じでしたよね、レニィさん」

「ああ」

「エルデンだと、ここからあと六日はかかるね。もしきみたちが望むのなら、大ノ陸ー北ス横ロ断ー道ドまで案内するよ」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

「でも、迷めい惑わくじゃねえのか」

「急ぎの用があるわけでもないから、べつに平気だよ」

「そうか……それなら──」

　正直、かなり心強い。いや、それどころの話じゃない。レニィとコロナとモッドーだけでは、無事にエルデンまでたどりつけるかどうか。ふつうに考えれば、控ひかえめに言ってもそうとう難しい。もっと正確に言うなら、難しいかどうかさえよくわからなくて、まるで見通しが立たない。大おお袈げ裟さでもなんでもなく、ロム・フォウは深い闇やみを照らしだす光みたいなものだ。さらには、目の保養にもなって、心の滋じ養ようにもなる。言うことなしとはこのことだろう。

　レニィがそんな安あん堵どや浮うき立つ気持ちを押し隠かくそうとしている間にも、コロナはさかんにロム・フォウに話しかけている。ちゃんと受け答えしてくれる相手がいることが、嬉うれしくて仕方ないのかもしれない。

「ですが……お一人で、山とか海とか森とかばかりですと、寂さびしくありませんか？」

「そういうときもあるよ。でも、木々や草花、動物、いろいろな生き物たちに囲まれていることを思い出すと、だいたいあまり気にな

らなくなる」

「動物さんたちは、わたしも大好きです！」

「そう。ただ、彼らは必ずしも人間を好いているわけじゃないよ。そのことは覚えておいたほうがいい」

「好かれていないんですか……ちょっぴり残念です。みんな仲よくできればいいですのに」

「仲よくしなくても、共存することはできる。お互たがい、適当な距きょ離りを保っていればね」

「うぅ……それは、わたしには少しむずかしいかもしれないです。なぜか、いつもうまくいかず──そうだ、失礼ですが、ロム・フォウさんのご家族などは？」

「いないよ。父も母も死んでしまった」

「あ……も、申し訳ありません、コロナったら……」

「気にしなくていい。もうずいぶん前のことだから。それに、あたしには家族同然の仲間がいる。仲間に会いたくなったら、帰ることにしているんだ」

「かえる……」

　コロナが呆ぼう然ぜんとしたようにそうつぶやき、三角帽ぼうを手で押さえて空を振ふり仰あおいだ。そういえば、コロナは魔ま術じゆつの才能がないせいで、師し匠しように見放されて追いだされたのだった。何しろ、師匠からの餞せん別べつが剣けんだったというから、本当に見こみがなかったのだろう。実際、小さな体であの長い剣を振りまわし、狼おおかみを一頭倒たおしてしまったところを見ると、魔術よりも斬きりあいのほうが向いているのかもしれない。その意味では、コロナの師匠とやらの見立ては正確で、的確な餞別だったということもできそうだ。

　とはいえ、魔術士ってやつは、素質のある幼おさな子ごをさらって魔術士に仕立てあげるんだと、昔から言われている。餓が鬼きのころ、誰だれでも耳にするそんな話が、じつは噂うわさでも創作でもなんでもない、真実だと知るのは、身のまわりで同年配のこどもが「神かみ隠かくし」に遭あったときだ。レニィも行方ゆくえ不明

になった近所のこどもを二人ばかり知っているし、悪餓鬼どもを指揮して、彼らの捜そう索さくにあたったこともある。だが、彼らの親以外の大人たちは、たいてい最初から無む駄だだとあきらめていた。モルグステン市は「神隠し」が多い街で、それが本当は魔術士の仕し業わざだということも、よく知られている事実なのだった。こどもたちも、年をとって親になると、年長の者たちから言いふくめられるのだ。「魔術士にさらわれてしまわないように、夜はしっかり赤ん坊ぼうを抱だいて寝ねるんだよ」と。行商からインチキくさい呪じゅ符ふを買って家のなかにベタベタ貼はりまくる風習も、魔術士除よけのためだ。まあ、レニィは、養父母に抱かれて眠ねむったこともなければ、呪符だって自分の家では見たこともなかったが。

　とにかく、魔術士はそうやって魔術士を作る。

　きっと、コロナも同じようにどこからかさらわれてきて、師匠だかなんだかに育てられたのだろう。

　そこから追いだされた、ということは、つまり──コロナには、もう帰る場所がない。

「俺は……」レニィはそこで言いよどんだ。俺は、何を言おうとしてるんだ。よくわからない。でも、何か言わなきゃいけないような気がした。「──俺も、故く郷にを出てきたんだ。理由があって、もう戻もどれない。でも、後こう悔かいはしてねえ。少しもだ」

「レニィ──さん……」

　コロナがこっちを見ている。スミレ色の、でかい目を瞠みはって、うるませて、なんでこいつは泣きそうなんだ？　意味不明だ。馬ば鹿かじゃねえのか。俺はただ、思いつきで、事実を事実のまま言っただけで。マジで、それだけにすぎなくて。

「そんなに目ぇ見開くんじゃねえよ。目ん玉がとれちまうぞ」

「はっ……！　め、目の玉さんって、とれてしまうものなんですか！　コロナ、ぜんぜん知りませんでした、気をつけないとっ！　あの！　い、今は大だい丈じょう夫ぶでしょうか？　まだとれてませんか？」

「……とれてたら、見えねえだろ」

「それでは、コロナの目は大丈夫ですね！　安心しました……」

　コロナが両手で胸を押さえてほっと息をついた。ロム・フォウがまた微笑ほほえんだ。いい笑顔だった。まぶしくて、まぶしすぎて、頭がぼうっとする。

　まあ、女子禁制のむさ苦しい教練所に叩たたきこまれてから、まともな女とはほとんど縁えんがなかったし。当然、モッドーの隊商にいた下女や商売女とうまくお近づきになれるほど、女慣れしてもいなかった。同どう僚りようの傭よう兵へいのなかには、彼女らとねんごろになって、それを仲間に自じ慢まんするやつもいたが、彼らの直ちよく截せつ的で卑ひ猥わいな話を耳にしても、「あーそーですか」くらいの感想しか抱いだかなかった。いや、抱けなかった。そんなもの、自分とは無関係の、別世界の話としか思えなかった。

　そこで出会ったのが、やさしいだけじゃなく、峻しゆん烈れつで猛たけ々だけしくもある、美しい森の妖よう精せいみたいなロム・フォウだ。

　なんというか、「あこがれ」と表現しても、少し遠いように思える。大おお袈げ裟さにいえば、女め神がみ。そう、森のなかで、いきなり女神に出くわしちまったというかんじだ。

　世界は、広い。

　こんなことで世界の広さを実感するなんて、馬鹿げているかもしれない。

　だが、こんなことでも実感できるほど、世界は広いのだ。

　キオ。

　お前もそれを感じられればよかったのに。

　国なんか、さっさと出ちまえばよかったんだ。どうとでもなったはずだ。俺と二人で──いや、一いつ緒しよでなくたってかまわない。別々だっていい。国を出て、旅をして、いろんなものを見て回る。どこかで野垂れ死ぬまで、ちゃんと生きる。お前にもできたはずだ。俺はまだ若い。お前だって若かった。お前はもっと、生きられたはずなのに。

「あたしは近くを見まわってくる。水と食べ物を置いてゆくから、きみたちはもう少し休んでいるといいよ」

　女神が立ちあがって、離はなれてゆく。

　話し相手がいなくなったコロナは、レニィをちらちら見て、声をかけようとするたび、思いとどまる。

　べつに、とって食いはしねえのに。俺は今、よっぽど変なツラをしてるのか。声をかけづらい雰ふん囲い気きか。だとしたら、妙みようなことを思い出しちまったせいだ。キオ。お前だ。やっぱり俺は、お前のことを忘れないと駄だ目めみたいだ。そうしないと、いつまでもぐるぐる回っている。胸のうちでお前に語りかける気色の悪い癖くせもやめたい。キオ。キオ・ブランディク。てめえはもういねえんだ。消えろ。俺の頭のなかから消えちまえ。

「──ところで……」

　と、不意に、モッドーが半分呻うめき声みたいな聞きづらいかすれた声を出した。

「物は相談なんだが」

「……なんだよ、いきなり」

「いや、たいしたことじゃないんだ」

　モッドーはやおらロム・フォウが置いていった水すい筒とうに手をのばした。つかんで、口をつけて、少し水を飲んだところまではよかった。だが、やつは何を思ったか、それからいきなり水筒を逆さにした。残りの水を地面にぶちまけようとしやがった。

「──おい、てめえ！」

　むろん、レニィは止めた。モッドーの手から水筒を奪うばいとって、それだけでは気がすまず、やつを突つき飛ばした。大木に背を打ちつけたモッドーは、しかし、痛がるでも、抗こう議ぎするでもなく、全身を波打たせるように笑いだした。薄うす気味が悪かった。こいつ、どうかしちまったんじゃねえのか？

「くくく……いや……そんな目で見ないでくれ。ふふふ。べつに、頭がおかしくなったんじゃない。そうじゃなくて、ようするに……

私が言いたいのは、もう限界だということなんだ」

「限界だと……？　何が限界なんだ」

「ぜんぶさ。何もかもだよ。傷は痛いしね。疲つかれたし。もう歩きたくない。すっかり嫌いやになってしまった。だから、私のことは、もういいよ」

「いいって──どういう意味だよ。置いてけってことか」

「それ以外に解かい釈しやくのしようがあるなら、是ぜ非ひ教えて欲しいね」

「馬鹿野や郎ろう！　てめえはまだ死んじゃいねえ。生きてるんだぞ。それに、状じよう況きようはよくなってきてる。あきらめる必要がどこにある！」

「そ、そうですよ、コ、あ、わたしでは、なんのお役にも立てないでしょうが、ロム・フォウさんが──」

「うっせえ！　コロナ、てめえは黙だまってろ！」

「は、はいっ！　申し訳ございまするっ！」

「何なんだ、その気の抜ぬける謎なぞ言葉は……」

「あぅ、ご、ごめんなさいです……」

　レニィはコロナをとっちめたい衝しよう動どうをこらえ、気をとりなおしてモッドーにつめよった。

「ババドア・モッドー。こんなことは言いたかねえが、てめえを背負って歩いた時間が無む駄だになるなんて冗じよう談だんじゃねえ。歩く気力がねえっていうなら、引きずってでも連れて行くからな」

「私は──」

　モッドーはレニィから目をそらして、顔をうつむけた。

　なんだか、一気に十歳くらい年を食ったみたいだった。

「……そうじゃない、レニィ・ブランディク君。歩く気力じゃなく

て、生きる気力がないんだ。もういい。たくさんだ」

「死んじまいたいってのかよ」

「ふん……そこまで積極的な自殺願望じゃあないかもしれないけどね……これでも、いろいろ考えてさ。この先のことをね。これから、エルデンに行って──そりゃあ、いくらか蓄たくわえもあるし、しばらく食いつなぐことくらいはできるが……それで、どうなるんだ？　モルグステン市に戻もどっても、商売をつづけられるかどうか。何せ、積み荷を全損してしまった。大損害だ。依頼主にどう説明すればいい？　私には……考えつかないな。うまい言い訳なんてさ。つまり、一からやりなおしだ。気が遠くなるよ。こんな人間でもね、それなりに苦労してきたんだよ、レニィ・ブランディク君。君は薄うす汚ぎたない闇やみ商人風ふ情ぜいが、と思うだろうけどね。私は……そうだ、私の渾あだ名なを教えてやるよ」

　モッドーは自じ嘲ちようげに含ふくみ笑いをした。

　やつの口を閉じさせることなんて簡単なはずだが、どうしてかレニィにはできなかった。

「マァゴ。鼠ねずみという意味だよ。下町のなかでも一番治安が悪くて、人間扱あつかいされない貧しい連中が住むゴアテア地区で、鼠扱いされて私は育ったんだ。親なんて知らんよ。兄弟も親類もいなかった。自分のこどもが死んでおかしくなった女が、私に乳を飲ませていたらしい。あとから聞いた話だがね。物心がついたときから、私は生きていくためになんでもやっていた。ゴミ漁あさりも、盗ぬすみも、頭のおかしい大男にケツを貸して食べ物を恵めぐんでもらうことも、私にとっては生活の一部だった。治安維持騎士団に捕つかまったことも一度や二度じゃない。それでも悔くいあらためたりはしなかったよ。当然さ。反省したって飯は食えないからね。結果的に……私は、うまくやったんだ。あのころ、マァゴを蔑さげすんで足あし蹴げにしていた滓かす虫むしどもなんて問題にならないくらい、出世した。今や麻ま薬やくの運び屋だ。単なる売人じゃないよ。お偉えらい人たちのお抱かかえで、大量の麻薬を運んで売りさばく仕事さ。あのマァゴが、だよ。くくく……すばらしいだろう？」

　レニィの心臓の鼓こ動どうが速まりはじめた。

　お偉い人たち、だと……？

麻薬の──運び屋？

ただの闇商人じゃなくて？

「私の依頼主が誰だれか教えてやろうか、レニィ・ブランディク君」

なぜ、モッドーは、さっきからレニィのことをフルネームで呼んでいるのか。

どうして、「ブランディク」に力をこめて発音するのか。

「──シジマァ・ジューデンレイ。現げん役えきの緑剽騎士グバルンだよ。教練所の所長も兼かねているあの立派な剽騎士様はね……宿舎のなかに麻薬の倉庫を造ったんだ。建前上は軍王宮のなかですら捜そう索さくできることになっている治安維持騎士団の手も、神聖なる国士教育の場である教練所には及およばないらしくてね。下げ賤せんの私には意味不明だが。美しく着き飾かざって、きれいに化け粧しようをして、とりすました顔をしている人間にかぎって、自分の手を汚よごさずに、他人の手を汚させることに長たけていると、マァゴは身にしみて知っているからね。ああ、話がそれた。それから──」

第四牙狼兵隊隊長ギルァム・フィンデロゥ。

モルグステン市の警護を司つかさどっている、二十一黒狐兵隊隊長ミゾゥ・ルパリー。

──そうだ。

そいつらだ。

そいつらが、キオを殺した。

「彼らも一味だ。とくに、ルパリーのおかげで、麻薬を満まん載さいした私の荷馬車が、ノーチェックで、堂々と正門をくぐれる」

そのとおりだった。レニィも不ふ審しんに思いはした。いかにもあやしげな、荷馬車の数に比して連れている傭よう兵へいの人数が多すぎる、この隊商を──正門の番兵たちは、なんで厳しく調べなかったのか。番兵は、荷馬車ではなく、客馬車のなかをざっと見ただけだった。それだけで「通ってよし」だった。そんな馬ば鹿かな

ことがあるか。あっていいはずがない。ふつうだったら。

　そういう事情がなければ。

「そうして、私は……エルデンで麻薬を売りさばいて、その金でエルデンでしか手に入らないお宝を買い入れ、意気揚よう々ようとモルグステン市に戻るわけだ。まあ、そのほとんどがジューデンレイのお屋や敷しきに飾かざられて、適切な時期に換かん金きんされるわけだけどね。私の儲もうけなんて、彼らが手にする財貨に比べれば雀すずめの涙なみださ。正直、実入りのよさでいえば、もっといい商売がないわけじゃない。私だってまるっきり無能というわけじゃないしね。これは自画自賛じゃなくて、ババドア・モッドーといえば、その筋では知られた名なんだよ。曰いわく、ずるがしこくて、しぶとくて、口が堅かたい。これでもいろいろ武勇譚たんがあるんだ。たまに言われることもある。なんでもっとでかい商売をやらないのかとね。なんでかって？　──だって、社会的に尊敬されている、一流の人間とつきあえるんだよ。五剽騎士ジイラドの一人とさ。それだけじゃない。私はやつの弱みを握にぎる。領民たちに崇あがめ奉たてまつられている緑剽騎士グバルンが、私腹を肥やすために、ちんけな悪事に手を染めているんだ。そら見ろ、やつも腹黒い、ただの人間なんだ！　私と、マァゴと変わらない、弱い、欲深な、薄汚い人間だ……！　そうやってほくそ笑えむことが、私にとっては快感なんだ。気持ちよくてたまらないんだ。天下の緑剽騎士グバルン様が、私の前で威い張ばりくさりながら、その目に一いつ瞬しゅん、怯おびえが、恐きよう怖ふが走る。それを見るたびに胸のすく思いがする！　わかるかい、レニィ・ブランディク君、これは復ふく讐しゆうなんだ。この私が、緑剽騎士グバルンの罪を援たすける。助長させる。緑剽騎士グバルンが汚れていく。その気になれば、私は緑剽騎士グバルンを破は滅めつさせることだってできるかもしれない。うまくやればね。ああ……でも、やっぱり、その前に消されてしまうだろうね。レニィ・ブランディク。君の──あれは、弟ということになるのかな？　キオ・ブランディク。有名なこどもだったからね。私も知っているよ。かわいそうにと思ったものさ。もちろん、本心からじゃないが。それから、君のお父上も、そのうちみずからの悲運を嘆なげいて自殺することになる。いや、はっきり言おうか。暗殺されるんだ。これが、差だよ。この力が。マァゴと、緑剽騎士グバルンの。埋うめがたい差なんだ。私はいくらがんばっても、マァゴでしかないんだ。当然、知っていたが、なんだか……疲つかれた。阿あ呆ほらしいよ。ついでに、私には生きている値打ちもあまりなさそうだから、ここでけだものに食い殺さ

れるのも、まあ悪くないと思ってね」

　最後のほうは、ほとんど聞いていなかった。

　俺は一国を出るしかなくて。一人で生きていくため、金をかけずに、エルデンに行こうとして。それと知っていたわけじゃないが、麻薬を運ぶ隊商に雇やとわれて。ババドア・モッドー。やつが運んでいた麻薬は、教練所内に造られた秘密の倉庫に入っていたもので。

　その存在を、キオは知ってしまった。あいつは自分の明めい晰せきな頭脳と好こう奇き心しんの犠ぎ牲せい者しやだった。

　レニィも教練所にいたから知っているが、真夜中に物音がする、人の話し声がする、亡ぼう霊れいがいるのではないかと噂うわさされている場所が、宿舎のなかにある。まあ、お定まりの怪かい談だんみたいなものだと思っていた。違ちがったのだ。それは大だい胆たんにも共同集会場の地下にあって、宿舎の敷しき地ち内にある秘密の入り口から出入りできるようになっていた。キオはほんのお遊びのつもりで、同期の騎き士し見習いたちと怪談の真相を追ううちに、それを探さぐりあててしまったのだ。だから、キオが特別演習で事故死したとされたあと、「亡霊の祟たたりではないか」という声が一部であがったらしい。ちゃんちゃらおかしい。キオはそれを見つけてしまったことを、知られてしまったのだ。そりゃあそうだ。キオは怪談の謎なぞを突つき止めようとしていたのであって、見張りを立てた不正の根源を探していたわけじゃない。キオは見張りに姿を見られた。その報告を受けた緑剽騎士グバルンは、だが、すぐにキオを処分しようとはしなかった。やつはキオに持ちかけた。このことを秘密にしておいてくれたら、君の将来についていろいろ便べん宜ぎを図ろう、君のよき協力者になろう、と。

　キオは断った。皮肉にも、父親と同じことを言ったのだ。「大法院に訴うつたえます」と。まっすぐな、まじめな、お前らしい。でも、愚おろかだ。キオ。お前は頭がよかったのに、馬ば鹿かだ。大馬鹿野や郎ろうだ。お前は本当に大法院に訴えようとした。誰だれにも迷めい惑わくがかからないように、一人で。だが、大法院の連中は、誰も、誰一人としてとりあってくれなかった。逆に、警告され、脅きよう迫はくされた。お前は恐怖するより、絶望した。終わりを予感して、最後に俺に会いにきた。そして、案の定、事故に見せかけて、殺された。手紙を残して。『この胸のなかだけに納めておくには、つらすぎる真実だから、レニィ、この手紙を書き残すこ

とを、君に重荷を背負わせてしまうことを、どうか許してください』だと？　偶ぐう然ぜんに偶然が積み重ならないと見つからないような場所に、その手紙を隠かくして、重荷だと……？

　阿あ呆ほうが。くそったれ。とんだ勘かん違ちがいだ。重荷は、その真実とやらじゃねえ。てめえが死んじまいやがったことだ。てめえの死が、俺だけじゃねえ、親父おやじ殿どのも、たぶんメリル・ブランディクも、何もかもぜんぶ、めちゃくちゃに引き裂さいたんだ！　どうして黙だまって殺されることを選んだりしたんだ……！

　そして──そして、ここに、目の前に、名めい誉よと汚お濁だくにまみれた緑剽騎士グバルンシジマァ・ジューデンレイやその一党の手下、使い走りがいる。

　ババドア・モッドー。

　経けい緯いや動機はどうあれ、この男はやつらの仲間だ。少なくとも、仲間だった。その男に、レニィは雇われた。それでもらった前金が、モッドーの、いや、もとをたどればシジマァ・ジューデンレイたちが麻ま薬やくを売って稼かせいだ、そのためにキオを殺した汚きたない金が、レニィの懐ふところの財さい布ふに入っている。

　その金で、レニィは当面食いつなごうと思っていた。糧かてにしようとしていた。たとえ闇やみ商人からいただいた薄うす汚ぎたない金だろうと、金は金だ、汚いもきれいもねえと自分を納なつ得とくさせていた。

　知らなかったからだ。

　こいつが、闇商人どころか、キオの仇かたきだったなんて……！

　すうっ、と、急激に腹の底が冷たくなっていった。

　──こいつを殺そう。

　やけに冷静にそう思った。

　冷静？

　違う。そうじゃない。

　今の俺はおかしい。明らかにまともじゃない。でも、いいだろ。こいつを殺したって問題ねえだろ。ここはサンランド無統治王国だ。殺したけりゃ殺せばいい。正当な理由なんていらない。なんとなくそう思ったから。そうすれば少しでも気が晴れるんじゃないかと思ったから。それでいい。都合よく、モッドーの野郎も死にたがってる。意見も利害も一いつ致ちしてる。殺してやればいい。こいつの血をキオに捧ささげればいい。それで何がどうなるってわけじゃないが。そう。どうにもならない。今さら何をしたって。それが何より苛いらつくんだ。だからこそ、この鼠ねずみを叩たたきつぶしちまえ。鬱うつ憤ぷん晴ばらしだ。

「……レニィ、さん……？」

　コロナに肩かたをつつかれた。うるせえ。さわるな。俺にさわるな。今の俺にさわるんじゃねえ。レニィは長ちよう剣けんの柄つかに手をかけた。モッドーが一いつ瞬しゆん、目のなかに怯おびえを走らせた。雑ざ魚こめ。びびってんじゃねえよ。わかってるんだろ。こうなるって、薄々わかったうえであんな話をしたんだろ。死にたいんだろ。だったら、堂々としてろ。黙って殺させろ。目を閉じろ。首をさしだせ。殺しやすいように。この震ふるえる手でも、やすやすと殺せるように。

　畜生。

　なんで震える。俺の手は。

「──事情はよくわからないけれど」

　と、落ちついた、なんてこともないというかんじの声がした。斜ななめ後ろだった。振ふり返って確かめるまでもない。ロム・フォウだった。

「彼をどうかするつもりなら、早くすませたほうがいい。イヌにかぎつけられた。鬼人オーガがくるよ。たぶん、まとまった数だ」

3

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……！　もとはとい

えばコロナのせいです、コロナが山奥の隠れ里か何かだと思い鬼人オーガさんの村に入っていって自己紹しよう介かいなんかしなければ、こんなことにはならなかったんです！　ずいぶん荒あれ果てた雰ふん囲い気きでおかしいとは思ったのですが、とっても、とっても道に迷っていまして、どなたかとお話しできるチャンスなのではないかと、つい……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいっ……！」

「あーもー糞くそうぜえから黙ってろ。今ここでてめえがいくら謝ったって、鬼人オーガどもが引き返してくれるわけじゃねえだろうが」

「はい……そ、そうですよね、まったくもって、ごもっともです……」

「チッ」

　レニィは馬鹿コロナを握にぎって潰つぶしてポイしたい気持ちを、舌打ち一つでどうにかまぎらした。ただ、それ以外に整理のつかない感情がたっぷりある。ありすぎる。おかげで、考えがまとまらない。どうすればいいのか。逃にげる？　ここで戦う？　俺はどうしたい？　レニィが鞘さやから剣を抜ぬいただけでぐずぐずしている間に、ロム・フォウは鉤かぎ爪づめ状の刃はを三本備えたナイフをモッドーに手て渡わたした。長さは三十サンチくらいか。珍めずらしい形だ。投とう擲てき用かもしれない。

「護身用に持っておいて。振りまわしてもいいけれど、投げてもいい。このトゥ・ルスはもともとそのための武器だから」

「……生きる気力のない者に武器なんか持たせても、無意味だと思うがね」

「そう思っていても、いざとなるとわからないものだよ」

「ふん……」

「みずから死を選ぶのも自由だけれど、戦いたくなったら戦えばいい。そのときは意地を張らないほうがいいよ」

「あいにく、へそ曲がりなんだ」

　モッドーはそう言って肩をすくめてみせたが、ロム・フォウは微

笑ほほえんだだけだった。それから弓矢を用意して、南東の方角に向きなおったところを見ると、逃げるつもりはないのか。ロム・フォウは戦う気らしい。だが、まるで慌あわてている様子はない。なんでそんなに静かに構えてられるんだ。迷いはねえのか。俺なんか、迷ってばかりで、どうしたらいいのかわからなくて、感情に流されそうになって、それが正しいことなのかどうかもわからない。何もわからない。今、ただ黙だまってロム・フォウに従うべきなのか。そんなことさえ判断がつかない。

　見れば、コロナはすでに覚かく悟ごを決めたみたいで、杖つえのかわりに餞せん別べつの剣を抜いて両手でしっかり持っている。

　俺は、コロナ以下だ。

　いいのか。それでいいのかよ、レニィ・ブランディク。よくねえ。いいはずがねえ。しっかりしろ。七しち面めん倒どうくせえことは、今は忘れろ。状じよう況きように対処しろ。死ぬぞ。死んじまうぞ。死にてえのか。モッドーみたいに死神に魅み入いられたのか。違う。俺は一生きる。キオとは違う。俺は、何がなんでも、生きる。キオ。俺は、お前のぶんまで生きる。

　生きてやる。

　そのために国を出てきたんだ。逃げてきた。

　でも、もう逃げまわるのは終わりだ。これからは戦いだ。生きるために戦うんだ。

　レニィは長剣と円形盾たてを構えて、ロム・フォウの隣となりまで進みでた。

「どれくらいの数だと思う」

「イヌはたくさんくる。鬼人オーガは、どうだろう。五から十の間くらいかな。彼らはこちらを侮あなどっているはずだから、大きな損害を受ければきっと退ひくだろう。勝算はあるよ」

「そいつは心強いな」

「信じることだ、レニィ。前を向いて戦うかぎり、勝利を疑ってはいけないよ。疑いが首をもたげたら、そのときは生き抜くために逃げるか、大切なひとを守って死ねばいい」

「ずいぶん簡単なんだな」

「難しいと思うのは、たぶん、自分で難しくしているからだよ」

「……かもしれねえ」

「愛して、憎にくんで、生きて、死ぬ。それが人生のすべてだ」

「かっこいいな」

「父の言葉だよ」

「親譲ゆずりかよ、その人生観」

「そう。でも、受け入れるかどうかは自分次し第だいだ。あたしはあたしのことを自分で決める。レニィ、きみもそうすればいい。コロナ、ババドア・モッドー、きみたちもだ」

「はいっ！」とコロナが返事をした。レニィも口のなかで「ああ」とつぶやいた。モッドーはわからない。やつはまだ地べたに座って大木に背をもたれさせている。位置的にもレニィの背後だ。知ったことじゃない。気にしている余よ裕ゆうもない。ロム・フォウが矢を放った。どこを狙ねらってるんだ？　まだ迫せまってくる敵の姿なんて見えないのに。矢は山なりに飛んでゆき、遥はるか遠くに落ちた──らしい。よくわからないが、ロム・フォウはもう第二射を放っていた。さっきと同じように、矢が飛んでいった。

「そろそろだよ」

　三射目の前に、ロム・フォウが低く言った。そのとおりだった。見えた。近づいてくる。狼おおかみか。狼の群れだ。その先頭にいる狼に、三射目の矢が命中した。頭のてっぺんだ。すげえ。狼はもんどり打って倒たおれた。だが、拍はく手しゅ喝かっ采さいしてばかりもいられない。予言者みたいなロム・フォウの声が。「──次、散開するよ。頭のいいイヌだ」当然のようにそれは的中した。それまで固まってまっすぐこっちを目指していた狼たちが──二十頭ばかりいるだろうか、やつらが、突とつ如じょとして、バラバラに、横に広がった。ロム・フォウは立てつづけに二頭、矢でしとめたが、三頭目のやたらと大おお柄がらな、目立つ狼が、驚おどろくべき芸当を披ひ露ろうした。ロム・フォウの矢をよけてみせたのだ。ついでに、狼たちの向こうに、獣けものじゃない、人ひと形がたの影かげが見えた。

　鬼人オーガだ。

　四、五匹か。

　さらに、あれは──騎き馬ば？　いや、馬ではなさそうだ。毛むくじゃらで、べらぼうにでかくて、そんな四足獣に鞍くらをつけ、またがっている鬼人オーガが一匹混じっている。というより、間ま違ちがいなくあれがこの群れの親玉だろう。コロナがあっと声をあげた。

「あれは、村長さんでは……！」

「村長ぉ？」

「はっ、はい、鬼人オーガさんの村で、一番偉えらそうな方でしたから、コロナが勝手にそう思っただけですが……」

「コロナの言ったことは間違っていないよ。あれは酋長チーフだ」ロム・フォウは言いながら矢を放つ。また狼を一頭。「──どうりでいいイヌを従えているはずだよ」さらに、もう一頭。「いくつものイヌの群れを束たばねている大おお長おさか。殺したくはないけれど……」ロム・フォウはそう呟つぶやきながらも、際きわだって大きく、純白の被毛を持つ狼を狙い射うちにした。ところが、二本、三本と矢が外れる。樹木を盾にしたり、小刻みに走る軌き道どうを変えたりすることで、巧たくみに回かい避ひしているのだ。狼たちはもう危険な距きょ離りまで迫ってきている。あと三十メーテル。ロム・フォウはあきらめたのか、他ほかの狼を狙って、つづけざまに二頭を射殺した。それでもやつらはまったく怯ひるむことがない。くる。十四頭まで射ち減らされた狼たちが襲おそいかかってくる！　Ｇａｗ！　Ｂｏｗ！　Ｗｏｗ！　レニィは円形盾で身をかばいながら前に出た。すぐ横をロム・フォウの矢がヒュンと通りすぎていった。この距離でもまだ弓矢を使うのか。ゼロ距離射しゃ撃げき、接射ってやつか。はたから見るよりずっと難しい芸当だ。が、それよりレニィは目の前の敵をどうにかしないといけない。違う。殺せ！　レニィは飛びかかってくる狼の鼻はな面づらに円形盾を浴びせた。そのつもりだったのだが──ガガッ！　狼は前ぜん肢しで円形盾を蹴けって、後ろに飛びさがり、すぐに突とつ進しんしてきた。低い。レニィは長ちょう剣けんを振ふり下ろす。あたれ！　しかし、やつはすんでのところで長剣をかわし、素す早ばやく右脇わきに回りこんで、そこからさらに速度を上げた。畜生が。いや、俺が畜生以下なんだ。狼が懐ふところに入ってこようとする。させる

かよ……！　すでに長剣の間合いじゃないから、レニィは剣を握にぎったままの右手を裏うら拳けん打ちの要領で鋭するどく振った。今度は命中した。レニィの右手首と肘ひじの中間あたりが狼の頬ほおをとらえた。そうして殴なぐり倒した狼の首筋に、長剣を叩たたきこんでやった。渾こん身しんの力をこめた。やつをケダモノだなんて思わなかった。やつは血を噴ふいて倒れた。やつは死ぬだろう。そして、俺はまだ戦う。生きるために、俺は戦う。やつの屍しかばねを糧かてにして、俺は生きる。

　キオ。外見は立派で中身はどろどろの独立剽騎士団だが、気に入っていたことが一つだけあったんだ。やつらが標ひよう榜ぼうしている、あの「荒ぶギアラる魂ンドロウ」ってやつだ。「生きることは戦いである。戦いのみが生存の道である。戦え。戦え。ただひたすらに戦え」べつに剣を振りまわすだけが戦いじゃないと思うけれど──いろんな戦い方があってもいいし、ときには逃にげる必要だってあるだろうが、やっぱり俺たちは明日に立ち向かって、戦わないといけないんだ。そうしないと、生き残れない。俺はそう思うんだ。キオ、お前はどう思う？　今、どう思ってる……？

　レニィは答えを待たずに両手をやや広げて、二頭目の狼を誘さそいこむ。さあ、こい。きやがれ。Ｂｏｗ！　そうだ！　きた……！　レニィは長剣でそいつの頭を殴りつける。斬きるんじゃない。叩く。ぶっ叩く。ようやくわかった。これは下町の喧けん嘩かとも、教練所のチャンバラとも違う。あれは戦いの真ま似ね事ごとか、練習で、これは戦いそのものだ。狼たちは、勇ゆう敢かんな戦士たちは、本気でレニィらの命をとろうとしている。こっちだって同じだ。そんなときは、全身を猛たけらせて、それでいて頭はクールに、油断せず、相手を見くびらず、決してびびらずに、勇気を持って、糞くそ度胸で勝負する。技術はもちろん大事だが、いくら剣術がうまくたって、戦う意志のないやつは絶対に勝利をつかめない。敵を叩きつぶす。その意志を効率よく力に変へん換かんするものが技術だ。それを理解できないやつは、負けて死ぬ。

　狼たちは、イヌたちは、おのれのすべてを賭かけて向かってくる。レニィもそれにこたえようとする。三頭目。やつは四頭目と連れん携けいしてレニィを眩げん惑わくし、左足に嚙かみついてきた。その頭をすかさず長剣で刺さし貫つらぬいた。四頭目はコロナがばっさりやった。しかし──こいつの剣、わりとよく斬れるじゃねえか。それよりか、このちんまりした体のどこにそんな馬ば鹿か力ぢからがあるんだ。とにかく、コロナは一メーテル以上ありそうな

お師し匠しよう様の餞せん別べつを体全体で操あやつって、これで二頭目を葬ほうむったところだった。ロム・フォウは接射で五頭くらいやっつけて、もう残る狼は三頭になっている。そのなかにはもちろんあの大長、やたらとでかくて真っ白な、美しいといってもいい狼もいる。やつは二頭の若くてたくましい狼を従え、ロム・フォウから距離をとって、何か機会をうかがうように激しく左右に動いていた。いや、左右だけじゃなく、たまに前進してきて、さっと後退する。隙すきあらば一気に接近してきて、喉のど笛ぶえを掻かき切ってやるという態度だ。おかげで、さしものロム・フォウも、やつらから目を離はなすことができない。当然、その間に、鬼人オーガたちが近づいてくる。ひょっとして、あの大長は、主人のために時間稼かせぎをしてやがるのか？　つーか──あれ……？　狼の数が。

　変だ、と思った瞬しゆん間かん、ロム・フォウが大長に矢を向けたまま鋭く叫さけんだ。「レニィ！　後ろを……！」レニィはその声に頬をひっぱたかれたみたいに振り向いた。Ｇａｗ！　Ｂｏｗ！　まだいた！　狼おおかみが。二頭。やつらは左右から同時に襲いかかろうとしていた。大きく迂う回かいして背後をとり、まずは一番簡単にしとめられそうな人間に狙ねらいを定めたということか。

　大木の根もとに座っていた、ババドア・モッドーに。

「──くっ……！」

　間に合うか。ほんの五メーテルかそこらだが、狼たちは足が速い。レニィのように鎖くさり帷子かたびらや板金鎧よろいで身を固めているならまだしも、モッドーはふつうの衣服を着ているだけだ。急所をやられたら、ひとたまりもないだろう。コロナもレニィにつづいて動きはじめたが、やや遅おくれた。駄だ目めか。こいつは無理かもな。たぶん、間に合わねえ。でも。そうだとしても。それが──それがどうした？

　あれはモッドーだ。ババドア・モッドー。キオを殺した連中の一味。死にたがりの糞野や郎ろう。じゃあ、死ねばいいんじゃねえのか？　何か不都合があるか？　あいつが死んだとして、何か困ることでも？

　ない。まったくない。むしろ、死ねばいい。そうだ。殺す手間が省けるってものだ。俺も後味の悪い思いをしなくてすむ。狼様々

だ。さあ、俺のかわりに、さっさとやつを血祭りにあげてくれ。素早く、きれいに、やつを殺してくれ。その恐おそろしい牙きばで、死にたがっているモッドーの、マァゴの、鼠ねずみの命を華はな々ばなしく散らせてやってくれ。

　レニィの足が止まりかけた。

　これで、いいんだよな。そうだろ。俺は間ま違ちがっちゃいねえよな、キオ？　それくらい、お前の死は俺にとって痛手だったんだから、八つ当たりに近いかもしれないが、これくらいの復ふく讐しゆう、許されるよな？

「……うわあっ！」

　だが、あたかもキオが首を横に振ふったかのように。

『いけないよ、レニィ』

　キオがそう言ったかのように。

　モッドーが、引きつった、ものすごい表情でわめいて、ロム・フォウが渡わたした三みつ叉またの投げナイフを右側から迫せまってくる狼に投げつけた。ナイフは、あたりはしなかった。かすっただけだった。ただ、レニィの胸のまんなかに何かがズダンと命中した。それは重かった。重い、とても重い、何かだった。ところが、不思議なことに、レニィの身体からだは逆に軽くなった。レニィは盾たてを捨てて、飛ぶように駆かけた。風になったかのごとく。誰だれかに運ばれているみたいに。レニィは五メーテルの距きよ離りを一瞬でつめ、モッドーが投げナイフをかすらせた狼の頭を蹴け飛とばして、ほぼ同時に長ちよう剣けんを投とう擲てきした。長剣は左側の狼の顔面にめりこんだ。蹴飛ばした狼が、すぐに態勢を立てなおして猛もう然ぜんと躍おどりかかってきたが、レニィは慌あわてず騒さわがずそいつを待ち構えた。若い、血気盛さかんな狼だった。引きつけて、引きつけて、十分に引きつけて、眉み間けんに冷れい徹てつで強きよう烈れつな手刀の一いち撃げきをお見み舞まいしてやった。ギャン。それでやつは地面に倒たおれこんで動かなくなった。

「──そう思ってても、いざとなるとわからねえ、か」

　レニィはモッドーをちらりと見た。モッドーはなんともばつの悪

そうな顔をしていたが、レニィの視線をしっかりと受け止めて、目をそらさなかった。

「本当だな。わからねえもんだ」

「……同感だ」

　モッドーはかすかに苦く笑しようしたようだ。笑ってるんじゃねえ、糞くそが。レニィはそう思いながらコロナを呼んでモッドーのそばにいるように命じ、長剣と盾を拾ってロム・フォウの近くまで進みでた。戦場はいつの間にか静せい寂じやくに包まれていた。といっても、むろん、敵が去ったわけではない。ロム・フォウの弓には矢がつがえられていて、照準は真正面に定められている。

　そこには、毛むくじゃらの巨きよ大だい生物にまたがった鬼人オーガ酋長チーフと、その従者である鬼人オーガ戦ウオ士リアー四人が勢せい揃ぞろいしていた。白狼の大おお長おさと、二頭の若い狼もそのそばに控ひかえている。その一団は、まるでよく訓練された騎き士し団の小隊みたいに威い厳げんがあって、精強そうだった。

　だいたい、この鬼人オーガたちは、今までレニィが見た連中とは違う。粗そ末まつな服ではなく、革かわと金属でできた鎧よろい兜かぶとを身につけ、でかい戦せん槌ついを背にくくりつけていて、頭もそれなりによさそうだ。

「……鬼人オーガってのは、悪あく魔まと人間の混血なんだよな」

「さあ。それがさして根こん拠きよのない、俗ぞく信しんだということしか、あたしは知らない。ただ、彼らの社会に二つの階級があることは知っている」ロム・フォウはレニィを見ずに、静かに、ささやくように答えた。「支配する戦士と、支配される奴ど隷れい。彼らは戦士だよ。鬼人オーガの戦士たちは誇ほこり高く、名めい誉よと命を賭かけた戦いを何より重んじる。彼らは今、考えているのだと思う。あたしたちが戦うに値あたいする相手かどうか」

「値しないと思われたら……？」

「殺そうとするだろうね」

「じゃあ、値すると思われたら？」

「戦いを挑いどんでくるだろう」

「……同じようなもんだろ」

「違うよ」

　ロム・フォウがそう断じたときだった。やおら鬼人オーガ酋長チーフが毛むくじゃらの獣けものから降りて、背中から抜ぬいた戦槌で地面を叩たたいた。それで気づいたのだが、酋長チーフは鬼人オーガにしては背が低い。あれだと、二メーテルないのではないか。それでもでかいことに変わりはないし、無数の角で飾かざられた一番ごつい鎧を軽々と着こなしているとはいえ、従えている四人の鬼人オーガ戦ウオ士リアーより小こ柄がらなのは意外だった。だが、ロム・フォウの言うとおり、やつらが戦いに重きを置く戦士なら、偉えらいやつは強いはずだ。酋長チーフは体格の不利をおぎなう身体能力や技量を持ちあわせているに違いない。外見で人を判断すると痛い目を見る。鬼人オーガだってきっと同じだ。

　その酋長チーフが――全長一・五メーテルはありそうな戦槌をロム・フォウに向けて、いかにも発音が難しそうな、たぶん人間には無理なんじゃないかと思える言語で何か告げた。

「＄×♀§￡♭♯￥♂＊＝▽Å」

　ロム・フォウは首をひねって少しの間、考えこんでいたが、やがて短く返事をした。

「いいだろう」

「……って、わかったのかよ、あの言葉！」

「いや。言葉はよくわからないけれど、彼の言いたいことはなんとなく伝わってきた」

　ロム・フォウは弓と矢や筒づつを地面に置いて、腰こしにつっていた剣を鞘さやごと手にとった。

　左手で鞘の根もとを。

　右手で柄つかを。

　つかむなり、すらりと抜いた。

―業わざ物ものだ。

大いに乱れた刃は紋もんが魔ま性しようの輝かがやきを発していて、機術工場で大量生産されたものではなく、鍛か冶じ士しの手による刀だと、一見してわかる。モトロール刀だ。きっと名のある鍛冶士の作だろう。レニィはさしてくわしくはないが、剣を使う者にとってモトロール刀は一種のステータスだし、値段も性能も馬ば鹿か高い有名な鍛冶士の作品にはやはりあこがれる。独立剽騎士団でも、古風なオグマ・ボルトエルや奇き抜ばつなアラン・ガーランド、堅けん実じつなマーロン・ロドニーや、いわずとしれた名めい匠しようダグラス・トゥースの刀を所持している者は、それだけで一目置かれていたくらいだ。

あの質素でとにかく堅けん固ごそうな拵こしらえや、がっしりした刀身の風格からすると、もしかしたらマーロン・ロドニーの作かもしれない。

ロム・フォウは鞘を捨てて、左上段から右みぎ肩かたの位置まで右みぎ拳こぶしを下ろし、左足をやや前に出して、八はつ相そうの構えをとった。陰かげの構え、ともいう。相手の出方をうかがい、後の先をとって、疾しつ風ぷうのごとき多た彩さいな打ちこみでもって、斬きる―と言うのは簡単だが、よほど判断が速くて技わざがキレないと、なすすべなくやられてしまう。教練所でも、下手な者が試みれば、たちまち慢まん心しんか悪ふざけだと見なされて、木刀で尻しりを叩かれる構えだ。

当然、ロム・フォウにかぎって慢心しているはずがなく、戯ざれるようなシチュエーションでもない。

自信があるのだ。弓だけじゃなく、剣にも。すげえ。ものすごい気き迫はくだ。戦槌にすさまじい闘とう志しをみなぎらせている鬼人オーガ酋長チーフを前にして、たじろぐ様子がまったくないどころか、五分と五分。いや、贔屓ひいき目めかもしれないが、ロム・フォウのほうがむしろ圧おしているようにさえ見える。酋長チーフが、じり、じり、と前に出て、距きよ離りをつめようとしているのも、やつが内心しりごみして、焦あせっていることの表れなんじゃないか。動かないロム・フォウが、酋長チーフを意のままに操あやつっているんじゃないのか。始まる前から、勝負はもうついちまってるんじゃないか。

だが、酋長チーフが急に二歩、三歩と大おお股またで前進して戦

槌を振ふりまわした瞬しゆん間かん、レニィの肝きもが潰つぶれそうになった。楽観は吹ふっ飛ばされそうになった。ブオオオオオォォンッ！　なんて音だ！　あんなもの──かすっただけで、肉も骨も何もかも砕くだけちまう！　あれは人間や動物を殺す武器じゃない。たとえば建物とか、岩山とか、刃は物ものなんかじゃ文字通り刃が立たない巨きょ大だいな物体を破は壊かいするための道具だ。卑ひ怯きようだ。そいつを戦いに持ちこむなんて汚きたねえ。レニィは本気でそう思った。が、ロム・フォウはそんな泣き言をもらしたりしなかった。素す早ばやく体を動かした。それも、向かって左から襲おそいかかってきた戦せん槌ついに突つっこんでいった。嘘うそだろ。なんでだよ。どうしてそんな真ま似ねができるんだ。あの糞くそ恐おそろしい戦槌に自分から向かっていって、突とつ風ぷうにあおられたみたいに髪かみが乱れるくらい紙かみ一重ひとえでかわして、ロム・フォウは駆かけ抜けざまにモトロール刀を振るった。ザン、と音がした。酋長チーフの兜かぶとが割れた音だった。くそ、兜だけか。酋長チーフもたいしたもので、とっさに地面に身を投げだし、直ちよく撃げきをさけたのだ。が、もうちょっとだった。本当に、わずかの差だ。少なくとも今のレニィには立ち入ることのできない、高くて狭せまい、ぎりぎりの場所で彼らは戦っている。一歩足を踏ふみ外せば転落死する猫ねこの額ほどの土地で、恐おそれず、退ひかずに、彼らはしのぎを削けずっている。

　酋長チーフが即そく座ざに起きあがりながら吼ほえた。Ｏｏｏｏｏｏｏｇｒｅ……！　その瞬間、あたり一帯の空気が凍こおりついたみたいにビリビリした。それからがまさしく鬼おにだった。あの戦槌を、右から。左から。上から。下から。ブオンブオンブオンブオン。まるで棒きれみたいに扱あつかってやがる！　それを風になびくヤナギみたいにぜんぶかわしちまうロム・フォウも異常だ。おかしい。まるで、あいつらの周りだけ、世界がゆがんでるみたいだ。レニィは食い入るように見ていた。酋長チーフ。ロム・フォウ。その身のこなし。筋肉の動き。樹木を薙なぎ倒たおし、地を揺ゆるがす、戦槌のまがまがしいまでの破壊力。金属をやすやすと切断する、モトロール刀のとてつもない斬れ味。音。音。音。レニィは圧あつ倒とうされていた。ロム・フォウだけでなく、酋長チーフにも畏い敬けいの念を抱いだいた。すばらしい。種族なんて関係ない。あんたはすぐれた戦士だ。戦いにすべてを捧ささげる勇ゆう敢かんな戦士だ。あんたは飽あくことなく戦槌を振る。決して一本調子じゃなく、変化をつける。ときに樹木を利用して、ロム・フォウを追いこもうとする。

でも──あんたは、勝てない。

ロム・フォウを打ち負かすことはできない。

「終わりだ」

レニィはひっそりと呟つぶやいた。

そのとき、酋長チーフは、これが何十度目だろう、とにかくロム・フォウにするりと攻こう撃げきを回かい避ひされて、戦槌で地面を叩たたいた。そこから間かん髪はつを入れず、信じがたい筋力で戦槌を撥はねあげるのが酋長チーフの常じよう套とう手段だった。だが、今回は違ちがった。酋長チーフは戦槌から手を離はなした。そして、自分の横に回りこんでモトロール刀を繰くりだそうとしていたロム・フォウに、猛もう然ぜんと襲いかかった。もちろん、素手だ。ただし、その全身は角だらけの鎧よろいで固められている。ロム・フォウにしてみれば、巨岩がぶつかってくるようなものだ。人間の武器でどうこうできるものじゃない。多少斬ったり突いたりしたからといって、突撃の勢いが弱まるわけでもないだろう。無傷ではすまないかもしれないが、有効な手だ。有効なはずだった──ロム・フォウがそれを完全に読んでいて、絶ぜつ妙みようのタイミングで、ほとんど真上に跳ちよう躍やくしなければ。

ロム・フォウは酋長チーフの肩かたに足をついて、そこから体をひねって一回転し、音も立てずに着地した。

そして、たたらを踏んだ酋長チーフが振り向こうとしたときにはもう、神速の踏みこみでその背中に迫せまっていた。

──斬。

酋長チーフの首が地面に落ちる音と、噴ふきだす血潮の音が、静せい寂じやくの森に重く、低く響ひびいた。

ロム・フォウはモトロール刀についた赤黒い血を親指でぬぐい、おのれの唇くちびるにそれを吸わせた。

「きみのLa 血のbre 一滴はyon あたしAdra の肉woki となりma mee 力とdan li なるwoki だろうmana.。きみがAn 愛するLuke 夢のyo なかで、Love, きみよ、yo, 永遠にreut 眠れthuetol.」

レニィが聞いたことのない言葉だった。ただ、ロム・フォウはこ

の戦いと敗れた者に敬意を表したのだろう。それはわかった。

　酋長チーフの身体からだがゆっくりと倒れる。

　ロム・フォウは悠ゆう然ぜんとレニィのそばまで戻もどってきて、刀身の血ち脂あぶらを布でぬぐい、拾いあげた鞘さやに剣けんを納めようとしたが──やめた。

「……やっぱり、文化が違うと、いろいろと行き違いもあるようだ」

「え？」

「あたしは彼と一いつ騎き打うちをして勝てば退ひいてくれると思っていたのだけれど」



「けど……？」

「手前勝手な解かい釈しやくだったみたいだよ」

「──ってことは……」

目で見て確かく認にんするまでもなかった。殺気だ。ひしひしと感じられる。四人の鬼人オーガ戦ウオ士リアーたちがそれぞれ戦せん槌ついを抜ぬいて、やる気満々といった態度だ。まあ、いきなりかかってこないのは、それなりにこっちを、というよりロム・フォウの力を認めているせいかもしれない。それどころか、認めすぎて、これなら四対一でも卑ひ怯きようにはなるまいとか、余計なことを考えている可能性もある。あるいは、この四人が亡なき酋長チーフの後あと目めを争うにあたって、ロム・フォウを討ちとった者が、その権利をえるとか。

いずれにしても、戦いはさけられそうにない。

だとしたら、また俺は黙だまってここで観戦してりゃいいのか……？

たしかに、ロム・フォウだったら、四対一でもどうにかしてしまうかもしれないが──確実ではない。それに、レニィにもプライドというものがある。さっきの戦いは、いかにもな一騎打ちだったから、まだ自分を納なつ得とくさせられるが、今度はそうはゆかない。激強つええとはいえ、女の陰かげにこそこそ隠かくれて。それでいいわけがねえだろ。餓が鬼きじゃあるまいし。

そう。俺はもう餓鬼じゃない。十六といえば、ハッツフォーではまだ半人前扱いされる年だが、もうそれじゃ通用しない。俺はこの二本の足で、しっかりと、一人で立って、二本の手で自分を守って、顔を明日に向けて、戦ってゆかないといけない。

レニィは円形盾たてと長剣を構えて、ロム・フォウと肩を並べた。背はロム・フォウのほうがほんのちょっとだけ高い。思わず背せ伸のびをしたくなるが、そんなことをやってる場合じゃねえ。

「コロナ、てめえはモッドーを守ってやれ」

「……はっ、はい！」

コロナがそう答えたときだった。

始まった。動きだした。四人の鬼人オーガ戦ウオ士リアーたちが。そして、そのなかの一人が口笛を吹ふくと、大おお長おさと二頭の狼おおかみたちも走りはじめた。そうか。やつらもいるんだ。つまり、モッドーは完全な員数外として、こっちが三で、あっちが

七。しかも、相手は狼もふくめて手て練だれの戦士。こちらは達人と雑兵二名だ。もちろん不利だが、もうやるしかない。やるからには、勝つしかない。

　だから、勝利を疑うな。

　愛して、憎にくんで、生きて、死ぬ。

　それが人生のすべてだとして、俺はまだ十分に誰だれかを愛してない。

　俺の人生はまだまだ序の口だ。生きる。生きてやる。

「きやがれ、鬼人オーガ……！」レニィは気合いを入れて前に出ようとしたが、ロム・フォウに置いてゆかれた。やっぱ速はええ！　ロム・フォウはあっという間に先頭の鬼人オーガ戦ウオ士リアーを間合いにとらえ、やつの右手首を落として返したモトロール刀で、左手首を払はらって撥はねあげ、顎あごの下をザクンとぶった斬ぎった。斬られたほうは、むしろ唖あ然ぜんとしていた。そりゃそうだろう。レニィがやつの立場でも、一いつ瞬しゆん、何が起こったのかわからないに違いない。気づいたときには、もうおしまいだ。鬼人オーガ戦ウオ士リアーは地面に膝ひざをついた。だが、死出の旅はきっと寂さびしくないだろう。ロム・フォウはもう別の鬼人オーガ戦ウオ士リアーにつめよっていた。先頭の鬼人オーガ戦ウオ士リアーが倒たおれ、あとの三人は三頭の狼を従えてちょうど逆三角形の隊列を組んでいる恰かつ好こうだったが、ロム・フォウはその左側のやつを狙ねらった。もっとも、仲間が何か反応するいとまも与あたえられずにやられた場面を、そいつは見ている。ロム・フォウを接近させまいと、戦槌をブオオンと振ふりまわした。たしか、酋長チーフのときも似たようなことが起こった。ロム・フォウは戦槌を見切って外側へ、左へと回りこんだ。そして打ち振るわれたモトロール刀を、鬼人オーガ戦ウオ士リアーは前に転がってなんとかよけた──って。

　それってつまり、俺に突つっこんでくるってことじゃねえか！

「くっ……！」ロム・フォウの戦いを目で追う余よ裕ゆうなんて、きれいさっぱり消失した。鬼人オーガ戦ウオ士リアーも、ついでに目の前のこわっぱを始末してしまおうと考えたらしい。やつは前転から起きあがるなり、戦槌を振り下ろしてきた。すげえ迫はく力りよく！　食くらったら一発で挽肉ミンチになっちまう！　マジか

よ！　怖ッ……！　レニィは恐きよう怖ふを抑おさえきれず、それに支配されそうになりながら、逃にげた──と、ボォゥゴンッ！　それは地面がへこんだ音だった。もうちょっと遅おそかったら、レニィがあんな音を立てて木こっ端ぱ微み塵じんにされていたのだ。もう、昨日の鬼人オーガや、さっきの狼たちとはぜんぜん違う。正直、勝てる気がまったくしない。勝利を疑うな、だって？　無理言うなよ！　こんなのでただ勝つ勝つ勝つんだと自分に言い聞かせるなんて、単なる馬ば鹿かだろ、ありえねえだろ！　──でも、やらなきゃやられる。それが事実だということもわかっている。恐怖が呼び水になって、必要以上に自分が弱よわ腰ごしになっていることも自覚している。鬼人オーガ戦ウオ士リアーの身長が四メーテルくらいに見える。でけえ。でかすぎる。こんなやつを相手に、実際、俺はどうすりゃいいんだ……？

「のわっ！」そんなことを考えている間にも、鬼人オーガ戦ウオ士リアーは戦槌を振りまわしながら迫せまってくる。レニィはかわす。ひたすらかわす。とりあえず、必死でかわすしかない。周りのことなんてわからない。とにかくよける。体が動くかぎりは逃げつづける。ゴウゥン！　ブオオン！　ドオウッ！　ボグッ！　うわっ！　わあああぁっ！　畜生！　畜生！　こんちくしょうめ！　もういやだ！　こんな怖こえぇのはごめんだ！　いっそ楽になっちまいたい。あの戦槌に自分から飛びこんだら、楽に逝いけるんじゃねえか？　あの威い力りよく、破は壊かい力りよくなら、痛いとか感じる前に命自体が砕くだけるんじゃ？　そうしたら、こんな顔も体も心臓も肺のなかもビリビリヒリヒリしてまったく生きてる心ここ地ちがしない苦痛から逃のがれられるかも？　本当の「逃げる」ってのは、そのことなんじゃないのか？　もういいんじゃねえ？　どうせ、そのうち殺されそうだし、あきらめちまったっていいだろ？　大差ないだろ？

『──だめだよ』

　そっか。

『レニィは、だめだよ』

　そうかよ。

『レニィは僕とは違ちがうでしょう』

　そうだよな。

「コロナ、魔ま術じゆつをくれ……！」

　レニィは叫さけんだ。一気に頭のなかがすっきりして、視界がクリアになる。見える。戦場が見み渡わたせる。ロム・フォウはすでに鬼人オーガ戦ウオ士リアー一人と狼二頭を片づけて、残りの鬼人オーガ戦ウオ士リアーと大長を相手にしている。コロナたちは無事だ。そうか、だから俺はコロナに命じたんだ。俺はわかってた。本当はわかってたのに、わかってねえように思えるくらい、俺はパニクってた。恐怖に取り憑つかれてた。「──コロナ、魔術だ！　こないだのやつでいい！」何をまごまごしてやがる、と毒づきながら、レニィは今までと同じように鬼人オーガ戦ウオ士リアーの戦せん槌ついをかわす。そうだ。俺はかわせる。ビュンビュンかわせる。戦槌は一度たりとも、かすってさえいない。恐おそれる必要はない。あとは、こいつを倒す力。俺に不足しているのは、力だ。「コロナ、早くしろって！」「は、はははははいっ……！」でも、コロナに魔術？　俺はいったい何を……？

　いや、それだって本当はちゃんとわかっている。

　レニィは薄うすく笑いながら、まるでロム・フォウのように戦槌を見切って外側へ、左へ回りこみ、牽けん制せいのために長ちよう剣けんを振るった。だが、鬼人オーガ戦ウオ士リアーはよけなかった。右手の籠こ手てで楽々とはじき返した。レニィはそれを予測していた。さっと距きよ離りをとって、また鬼人オーガ戦ウオ士リアーを待ち構える態勢になった。そのとおりだ。この剣じゃあてめえをぶった斬れない。俺にはてめえをぶっ倒す力がない。それを──俺はこれから手にする。おそらく、あと数秒。

「熔Ｄｅｌ隷Ｙｏ誹」

　意味不明で独特の韻いん律りつ。上古ハイロ高位語メオン。きた！　きやがった……！

　ところが。

　想定外だった。

「きゃいっ……！」

　杖つえを握にぎったコロナの両手から爆音とともに撃ちだされたのは、この前みたいなちゃちな火花なんかじゃなかった。

　まっすぐ上へ。

　ドン………………ッ。

　それは、天空で咲さく。

　花火だった。でかい、めちゃくちゃでかい、赤と青の、まぎれもない、きれいな花火だった。モルグステン市でも大きな祭りや式典のとき以外はお目にかかれない、立派な花火だった。

　もちろん、これには誰だれも彼も意表をつかれた。というか、みんなたまげていた。あたりまえだ。しかし、レニィは驚おどろいても、忘れてはいなかった。自分が何をなすべきか。この後頭部から背筋にかけて走る、悪お寒かん、震ふるえ。しびれる。身体中が。みなぎってくる。力だ。空で花開いた火の粉たちが、レニィめがけて押しよせてくる。それだけじゃない。「いやあああ……！」コロナの両手から、また花火が発射されようとしていた。コロナは完全に腰こしが引けている。自分で自分を制せい御ぎよできないのか。そして、ドン……！　魔術士あらため花火師コロナの二発目の花火が、一ひと抱かかえほどもあるでかい火の玉が、今度は空ではなく、レニィを直ちよく撃げきした──って、俺かよ！

「うおおおおおおおおおおお……！」

　もう、何がなんだかわからない。あふれる。こぼれそうだ。俺は、ひきさかれる。何かが、俺のなかであばれている。俺は、ほんろうされる。俺は、誰だ？　俺は、どこだ？　俺は……なんだ？　俺は。俺は。おれは？　誰だ。そこにいるのは、だれなんだ。だれ？　そんなのどーでもいーよ。あそぼーよ。燃やしちゃおーよー。焼き払はらっちゃえ！　きみが好き。スキスキスキ！　きみってさーよく燃えるねー。ぜんぶ焼いちゃう？　いいよー。あはは。だれだてめえ。てめえら、だれなんだ？　で、おれ、は……？

　誰かの声が聞こえた。

「──あれは、魔法剣……！」

　まほうけん？

「そのまま敵を斬きるんだ、レニィ！」

　敵？　レニィ？　誰だ？

「レニィさん！」「レニィ！」「レニィ君！」『レニィ……！』

　──それ、もしかして、俺か？

　敵？

　目の前で、ぼけっとしてる鬼人オーガ戦ウオ士リアー、こいつが、敵……？

「があああああああああああ……！」

　レニィは長剣を振ふり下ろして、すべてを解放した。

　真っ赤な灼しやく熱ねつの力が、ほとばしり、炸さく裂れつして、鬼人オーガ戦ウオ士リアーをまっぷたつにした。

　燃やした。

　焼きつくした。

　消し炭に変えた。

　そのあと、渦うず巻まいて──どこかへ消え去った。

　途と端たんにレニィは猛もう烈れつな疲ひ労ろう感に襲おそわれて、立っていることさえつらくなった。疲つかれただけでなく、何か──大事な何かを持ち去られてしまったかのような感覚もあった。俺は今、削られた。もしくは、食われた。奪われた。それが何かはわからない。今の俺に欠けているものはなんだ？　さっきまでの俺と違ちがっている部分が、どこかないか……？

　なんにせよ、事態は終局を迎むかえようとしていた。

　見れば、コロナは茫ぼう然ぜん自じ失しつといったかんじだ。その後ろにいるババドア・モッドーも似たようなものだった。ロム・フォウは最後の鬼人オーガ戦ウオ士リアーを斬り伏ふせて、白狼の大おお長おさとにらみあっている。もっとも、大長はロム・フォウからずいぶん離はなれていて、その距離は少しずつ開いていっているようだ。全身の毛を逆立てて威い嚇かくの姿勢は崩くずさないが、徐じよ々じよに後退しつつ、ロム・フォウをじっと観察している。そんなふうにも見える。

「きみにやる気がないのなら、あたしは剣を引くよ」

　事実、ロム・フォウがそう言ってモトロール刀を鞘さやに納めると、大長はあとずさり、踵きびすを返して、こちらを振り向き、それを何度か繰くりかえしながら姿を消した。

　──終わった。

　ただでさえ、正体不明の欠損感と脱だつ力りょく感にさいなまれていたレニィは、思わずその場に座りこんでしまった。

　けれども、それだけでは今の気分や体の状態につりあわないようなかんじもする。寝ねちまえ。大の字になって。目を閉じて。レニィは深く息を吸って、吐はいた。木々と、土と、血と、獣けものと、何かが焦こげたにおいがする。かすかな風の息い吹ぶきが頬ほおにふれる。生きている。くそったれ。ちゃんと生きてる。俺は生きのびた。たくさんの命を踏ふみにじって、俺は生きてる。これからも生きてゆくつもりだ。何はともあれ、そういうことだ。そうやって俺たちは生きているし、それがどうしようもなく大事なんだ。だから、死にたくないと思い、自分を守ろうとして、何がなんでも生きようとするんだ。

「……俺には、弟がいたんだ」

　キオ。

　──キオ・ブランディク。

「そいつは、まあ、天才ってやつだった。賢かしこくて、俺にはよくわからねえ難しいことを考えてるみたいだった。たまにそれをわかりやすく俺に説明してくれたりした。やつは……それに、やさしかった。俺や、周りのやつのことを、自分のことみたいに思って、気配りして、行動した。俺はあいつが好きだった。あいつの頭のいいところが。気の利きくところが。自分を傷つけるくらいやさしいところが。たとえ誰かの傷をえぐっても、それが本当はそいつのためになると思ったら、ためらわないで踏みこもうとする勇気が。茶目っ気のあるところが。こどもっぽい冒ぼう険けん心しんが。負けず嫌ぎらいなところが。俺は……好きだったんだ。弟で、一番の友だちだった。でも──あいつは、死んだ。殺された。おとなの、薄うす汚ぎたない、くだらねえ、けちくせえ事情で、殺されちまった。あいつは、俺に手紙を残した。見つからなかったはずの手紙だっ

た。その最後に、あいつはこう書いてた。『レニィ、こんなことになってしまって、ごめん。きみに直接さよならを言うことさえできないのが、僕には一番つらい。兄さん。きみのことを自然とそう呼べるような、ふつうの兄弟だったら、もっと何か違っていたかもしれない』って。俺もそう思うんだ。あいつと餓が鬼きのころから同じ屋根の下で寝ね起おきして、同じ釜かまの飯を食って、遊んで、喧けん嘩かして──俺たちが、そんなありふれた兄弟みたいだったら。あいつは本を読んだりするのが好きだったから、偉えらい学者にでもなって。俺は家を継つぐために、ブースカ文句垂れながらも、出世はできないかもしれねえけど、一応、剽騎士になって。あいつは──死ななくてすんだんじゃねえか。そんな仮定の話は無意味だってわかってる。でも、考えちまうんだ。悲しいとか、寂さびしいとかよりも……残念なんだ。悔くやしいんだ。あいつがいねえってことが。俺は怒おこってるんだ……！　変な話だけど、あいつに一番腹が立ってるんだ！　なんで死んだ！　どうして殺されちまった！　キオ、馬ば鹿か野や郎ろう！　てめえ、ちんたら謝ってんじゃねえよ！　そんなことやってる暇ひまがあったら、さっさと戻もどってこいよ！　てめえの人生、まだまだこれからだったじゃねえか！　せっかく生まれてきたってのに、こんなに早く死んじまったら、何もかもぜんぶ台無しだろうが、ボケ……！」

　俺は、どうしてこんなことを長々としゃべってるんだろう。

　知るか。

　でも、たぶん、吐きだしたかったんだ。誰だれかに聞いて欲しかった。ぐちゃぐちゃ自分の頭のなかだけで考えて、片をつけたようなふりをして、それでもやっぱり割り切れなくて。そいつを抱かかえて、ひた隠かくしにしている時間に、俺はもう耐たえられなかった。

「──そんな話を聞かされて……」モッドーが呻うめくように言った。「私は、どうすればいいのかな。私は君の弟を殺した連中の使い走りをしていたわけで、まったく責任がないとはいえないわけだから……反省して、謝罪でもすればいいのかね」

「さあな」

　レニィは笑った。

　軽く、笑い飛ばした。

「てめえで考えろよ、ババドア・モッドー。俺は話したいから話しただけだ。あんたがどう思って、これからどうしようと、俺には関係ねえ。ただ──」

　そうだ。

「……ただ、キオ・ブランディクってやつがいて、そいつは死んだんだ。よかったら、あんたも覚えといてやってくれよ。死んだら、それでぜんぶおしまいで、忘れられるだけで、何もかもなくなるなんて、せつないだろ。だから、明日忘れてもかまわねえから、今日は覚えといてくれよ。キオのことを。あいつが生きて、死んだってことを」

4

　それから五日かけて大ノ陸ー北ス横ロ断ー道ドに出るまでは、まずまず平へい穏おん無事といってもいい徒歩の旅だった。何度かあの白狼の大おお長おさが遠くに姿を見せて、またどこかへ行って、ということはあったが、なぜか敵意はなさそうだった。ロム・フォウがやけにあの狼のことを気にしている様子だったので、案外、相手も同じなのかもしれない。そういえば、あの狼とロム・フォウとの間には、最初から目に見えない繋つながりみたいなものがあったようにも思える。理り屈くつじゃなく、そういうものは存在するのだ。出会いや経けい緯いがどうであれ、誰かと誰かがわかちがたく結びついてしまう、縁えんとか絆きずなってやつが。

　俺とロム・フォウとの間にも、それはあるのだろうか。

　ロム・フォウの処置がよかったのか、ふつうの速さで歩けるくらいまで回復したモッドーとは、エルデンで別れたら、二度と会わないような気がする。

　──馬鹿コロナとは……？

　いつだったか、野営の準備が終わったあとで、コロナに訊きいてみた。

「エルデンについたら、どうするつもりだ。何かアテでもあんの

か」

「いいえ。皆かい無むですっ！」

「皆無かよ……」

「はい。コロ、あ、わたし、今まで一人ではなんにもできませんで、みなさんにご迷めい惑わくをかけて、お世話してもらいっぱなしだったので、独り立ちできるようになりたいんです。ですから、とりあえず、一人で何かできることはないか、探してみるつもりです」

「お前みたいなやつに、エルデンは厳しいんじゃねえの、とか、ちょっと思わなくもねえんだけどな……」

「そうなのですか？」

「……いいけどよ、べつに。まあ、どっちにしても、魔ま術じゅつはあんまり使わねえほうがいいぞ。迷惑どころか、被ひ害がいが出ちまう可能性があるからな……」

「そ、それはもう……思い知りました。ごめんなさいです……」

　どうやらコロナは、レニィが鬼人オーガ戦ウオ士リアーを焼け焦こげのまっぷたつにした例の現象も、すべて自分だけのせいだと考えているらしかった。レニィにしても、あれをどう受け止めて、どう理解すればいいのかわからないので、否定はできないものの、それだけではないと思うのだが。

　とはいえ、レニィに魔術士専用の薬をのませるわ、たぶん、その結果、目が銀色になるわ、同じ魔術が火花になったり花火になったりだわ──魔術士としてのコロナは、役立たずとしかいいようがない。剣けんは並み程度に使えるので、いっそ剣士でも目指したらどうか。そう思わなくもないが、コロナはやはり魔術にこだわっているらしく、いつかまともな魔術士になりたいという夢を捨てきれないようだ。でも、それは個人の自由だし、他人がとやかく言うことじゃない。どうせ、エルデンについたら、別々の道を歩んでゆくことになるんだし。

「──それじゃあ」

　そんなこんなで、魔導王時代に造られたという大ノ陸ー北ス横ロ

断ー道ドにたどりつくと、ロム・フォウはレニィたちを見まわして、少しだけ微笑ほほえんでみせた。

「あたしはそろそろ自分の旅に戻もどるよ。きみたちの旅に幸さち多からんことを」

「ああ」

「はい！　ロム・フォウさんも、またお会いする日まで、お元気で！」

「……また会う気満々かよ」

「ほ？」

「縁があれば、黙だまっていてもまたいつか会うことになると思うよ」

「縁、か……」

　あるといいけどな。

　レニィが人差し指で鼻をこすっていると、モッドーが進みでてきてロム・フォウに深々と頭を下げた。

「君にはいろいろと世話になった。助かったよ。でも、金や物で礼はしないでおく。私らしくないようにも思うが、どういうわけか、そうしたくない気分でね」

「ババドア・モッドー。きみのしたいようにすればいい。あたしもあたし自身に従うだけだ」

「何より自分に忠実であれ、か。簡単なようで、難しいことだと思うがね」

　ロム・フォウは「そうでもないよ」とでもいうようにかすかに首を振ふってから、レニィに向きなおった。珍めずらしく、そのエメラルドグリーンの瞳ひとみが、迷いのようなものでかすかに揺ゆれていた。

「レニィ。これは訊こうか訊くまいか迷っていたんだけれど──もしかして、きみは精せい霊れい憑つきなのか？」

「せいれいつき……？」

　レニィが眉まゆをひそめると、ロム・フォウはやっぱりというかんじでうなずいた。

「自覚がないんだね。だったら余計、魔法剣はむやみに使わないほうがいいよ。あたしもくわしくはないけれど、精霊とうまくつきあうすべを知らないで、彼らの力を濫らん用ようすると、いつか魂アニマを奪うばわれてしまう。コロナは魔術士だから、よく知っているよね？」

「あっ。は、はい、え、えと……せいれいつき、ですか？　それは、その、魔術士の間では、とてもうらやましいとされている、特とく殊しゆな体質で──」と、コロナがうかがうようにレニィの顔をのぞきこんできた。「したっけ……？」

「……俺に訊いてどーする」

「は、はあ……じつは、コロナ、あまり物覚えがよくないものでして……」

「てめえ、何歳いくつだよ……」

「まあ、とにかく」ロム・フォウも、さすがにちょっとだけ呆あきれているようだ。「できたら、魔法剣は封ふう印いんしたほうがいいよ。機会があれば、知識のある魔術士に診みてもらったほうがいいかもしれない」

「あ、ああ……覚えとく」

「それから、エルデンで、どうしても困ったことがあったら──」

　ロム・フォウがその名を口にしたときの表情が、しばらくの間、レニィの網もう膜まくに焼きついて消えなかった。

　笑顔、でもない。

　かすかに苦しそうで。

　それでいて、やわらかくて。

　甘くて。

　ちょっぴり、ほろ苦い。

「トマトクンという人を探すといい」

「……は？」

　野菜？

「そう。変わった名前だから、その気になれば、見つけられると思う。あたしの名前を出せば、必ず力になってくれるよ。あたしの恩人で、大切な━仲間なんだ。あたしもいつかあの人のところへ帰る。でも、今はまだそのときじゃない。あたしは旅をつづけるよ。レニィ、コロナ、ババドア・モッドー。さよAl naなら nor.」

　ロム・フォウはそう言うと、背中を向けて去っていった。あっさりしたものだった。もう少し名残なごりを惜おしんでもいいんじゃないかと思えるくらいだった。



　だが、あれがロム・フォウの別れ方なのだろう。

　レニィたちは、しばらくの間、自分の旅へ、山へ、森へと帰るロム・フォウの背中を見つめていたが、いつまでもそうしてはいられない。

　大ノ陸ー北ス横ロ断ー道ドの果てに、こっちへ向かってくる隊商の姿が見えてきた。

　ババドア・モッドーがまだ高価な宝石を持っているから、そいつをあの隊商に渡わたして、エルデンまで同行させてもらう。旅の間に話しあった結果、そういう手て筈はずになっていた。

　そうしたら、エルデンはもうすぐだ。

　キオ。俺は生きる。これからも生きてゆく。俺には今日があって、明日がある。出会いがあれば、別れもある。悲しいことも、つらいことも、苦しいこともあるだろう。腐くさるほどあるだろう。でも、俺は生きてる。どうだ。うらやましいだろ。キオ。キオ・ブランディク。たった一人の、俺の弟。いつかこの世の果ての果てでお前に会う日まで、俺は精せいーいつ杯ぱい生きるつもりだ。迷わずに、歩くつもりだ。

第3話
人は一人では生きていけない

1

「――きみって、周りを引っかき回すだけ引っかき回して、自分だけは平然としてるタイプでしょ。よく言われない？　どっか行けって」

　たしかに、似たようなことを、何度か――何度も言われたことがある。あの真っ赤な髪かみのきれいなひとは、「金こん輪りん際ざい、僕の前に姿を現さないでね」と冷たくコロナに告げた。そのときは、ずきん、と胸が痛んだけれど、やがてなんともなくなってしまう。慣れているからだろうか。痛みも、悲しみも、寂さびしさも、どこかぼんやりしていて、とらえどころがない。

　そういえば、お師し匠しよう様のところで、一番親切にしてくれたお姉さん弟で子しに叱しかられた。「どうしてみんなにいろいろ言われても、へらへらしているの？　なんともないの？　何も感じないの？　あなたが何を言っても平気そうにしているから、みんなつけあがってあなたをいじめるのよ。あなた自身がしっかりしないと、何も変わらないのよ。ほら、また笑ってる！」

　ごめんなさい、ミヤお姉さん。でも、コロナ、平気でした。ぐずで、魔ま術じゆつがへたくそで、雑用もろくにこなせない、失敗ばかりしているコロナを、皆みなさんがかまってくれて――それだけでよかったです。何も変わらなくたってよかった。あそこにいられるだけで、よくて。たまに泣きたい気持ちになっても、おひさまがぽかぽか照って、その下でお洗せん濯たく物ものを干したりしていると、なんだか嬉うれしくなって。

　コロナ、お洗濯だけはわりと得意でした。ちょっとだけ、みなさんのお役に立てていたんじゃないかなあと思います。それに、お師匠様はコロナにやさしかったです。ミヤお姉さんも、心配してくれました。それは、いつも怒おこってばかりの怖こわい方や、服やお勉強道具を隠かくしたりとか、壊こわしてしまったりとか、ひどいいたずらをする方もいましたけど、全員がそうだったわけじゃないです。何もしない方もいました。

　ただ、コロナは、無視されるほうがいやでしたけど。

自分が、どこにもいないような気がして。

何もかもが、ぼんやり、ぽけーっとしている自分が、周りの人にまで無視されたら、消えてしまうように思えて。

「はあ……」

ため息をついてみた。

サンランド無統治王国首都エルデン。たしか、ここは──第五区、〝鉄鎖アイアンの憩チエインいスク場ウエア〟。

人が、たくさん、たくさんいる。お師匠様のお屋や敷しきがあったカリオサークも大きな街だったけれど、エルデンはやっぱりすごい。人が多いだけではなくて、服装も多種多様だ。「魔術と官能の街」カリオサークは、脱走フオー貴族レンたちがデザイナーズブランドを発はつ祥しようさせた土地で、みんなこぞって凝こった衣類を着ているが、上品で落ちついた雰ふん囲い気きがある。ここエルデンでも、おしゃれな人は見かけるものの、なんだか違ちがう。地味だったり、汚きたない恰かつ好こうの人もいれば、すごく派手な人もいて、思わず目を覆おおいたくなるような過激な衣い装しようを身にまとっている人──下着姿みたいな女の人や、体の線がくっきり浮うきでている、ぴったりした服を着た男女がいる。見ているだけで、くらくらしてくる。においも、すごい。鼻をつまみたくなるほどくさかったり、うっとりするほどいい香かおりだったり。いろんなにおいがする。とりわけ人通りの多い、露ろ店てんがびっしり並んでいる市場に迷いこんでしまったせいだろうか。

それにしても、露店の品しな揃ぞろえは、食べ物、着る物、金物、剣けん、鎧よろい、何に使うのかわからない、がらくたみたいな物まで、じつに雑多だ。コロナは一いつ軒けんの露店の前にしゃがみこんで、鏡みたいな素材でできた時計を手にとってみた。でも、これって本当に時計なのだろうか。文字盤ばんの字は見たこともない形で読めないし、針も動いていない。変なの──と思っていたら、突とつ然ぜん、店の主あるじがコロナを怒ど鳴なりつけた。
「おい、このチョンマゲ！　買う気がねえんだったら死ね！　今すぐ死ね！　さっさと死んで罪を償つぐなえ！　おお神よ！　お許しください！　ミニマムミニマム・エロエロマックス……！」

「ご、ごめんなさいですっ……！」

　それでびっくりして逃にげたら、何かに、いや、誰だれかにぶつかった。人だ。男の人。おっきい！　すごく、すっごく背が大きい。筋骨隆りゅう々りゅうで、なぜか上半身裸はだかで、しかも、見上げたら、白い仮面をかぶっていた。

「大だい丈じよう夫ぶか」

「ひゃぅっ」

　ひょっとして、これが有名な変態さん？　もしかして、もしかして、コロナを犯おかしてしまうつもりですか？　コロナのはじめてを奪うばってしまうおつもりですね……？　そんなことを考えつつ全身を硬こう直ちよくさせていると、仮面の人は意外にやさしい手つきでコロナの頭をそっと撫なでた。

「その様子。この街にきて、まだ日が浅いようだな」

「……え、えと……は、はあ」

「ここには、こどもだからといって容よう赦しやしない者が多くいる。気をつけることだ」

「あ、はい、そのう……」

「あら」

　と、どうやら変態さんではないらしい仮面の人の後ろから、女の人がひょいと顔を出した。胸むな元もとが大きく開いた服を着て、ぷっくりした唇くちびるの、若いようにも、おとなのようにも見える美人さんだ。というか、このひと──きっと魔術士だ。魔術の才能はからきしだけれど、コロナだって、お師匠様の訓練をずっと受けてきた。それくらいわかるのだ。

「いまどき珍めずらしいかっこしてるわね。あなた、魔術士でしょう？」

「え、ええ、いちおう……」

「一応？　一応も何もないわ。真の意味で魔術士たりえるかどうかは、最初から決まっているのよ。人には二種類あってね。魔術士か、それ以外か。あたしが見たところ──」

女の人は、少しかがんでコロナの瞳ひとみをのぞきこんできた。

なんだろう。すごく冷たい目だ。何もかも、見み透すかされてしまいそうで。

──怖い。

「あなたは魔術士よ」

でも、そう言ってふっと微笑ほほえんだ瞬しゅん間かん、その恐おそろしい輝かがやきが消え失うせて、少し茶目っ気のある、愛らしい表情が浮かんだ。

女の人は、仮面の人のパッキリ六つに割れている腹筋を、握にぎり拳こぶしで叩たたいた。

「さあて、行きましょ、リキエル。買わなきゃならないものが他ほかにもたくさんあるから」

「……まだあるのか」

見れば、仮面の人は左ひだり腕うでで大量の荷物を抱かかえている。とてつもない大男だから片手ですんでいるが、ふつうの体格なら、両手で持たなければならない量だろう。

「あたりまえでしょ。なんのためにあんたにつきあってもらったと思ってるのよ」

「………………」

「何か文句ある？」

「いや。承しよう諾だくしたのは俺だ。二言はない」

「それでこそ、ってやつね。ほんと、あんたはどこかの誰かさんと違ちがって、ころころ態度が変わったりしないし、嘘うそはつかないし、誠実だし、いい男だと思うわよ。あとはその恰好をどうにかすればねえ……」

「これは俺のスタイルだ。永遠に変えるつもりはない」

「あっそ。じゃ、永久に対象外だわ」

「残念だが、仕方ないな」

「あら。残念なの？」

「社交辞令だ」

「前言撤てつ回かい。つまんない男」

「自覚している」

　女の人は軽く肩かたをすくめてみせると、コロナに「See-Ya.」と軽く手を振ふって踵きびすを返した。仮面の人も黙だまって女の人についていった。二人の後ろ姿が人混みのなかにまぎれてゆく。コロナは呆ぼう然ぜんと二人の背中を目で追っていた。とりあえず、悪いひとたちではなかったみたいだけれど。というか、わりといいひとたちだった──ような気がする。でも。

『あなたは魔ま術じゆつ士しよ』

　あれは、どういう意味だろう。

　あなたは、魔術士。

　──魔術士。

　コロナは、わたしは、本当に、魔術士……なんだろうか？

　正直、自信がない。旅の途と中ちゆうに出会ったレニィさんにも、魔術が安定しないせいで、迷めい惑わくをかけてしまったし。それで、魔術は使わないほうがいいと忠告され、自分でもそう思い、エルデンに到とう着ちやくしてからは魔術を使っていない。これで、魔術士？　だいたい、魔術を使わなくたって、親切そうなおじさんにお金を稼かせげる場所だと教えてもらった鶏にわとりさんの地下迷宮で、赤い髪かみのマリアさんをたいへんな目に遭あわせてしまった。それなのに、コロナ自身はほとんど無傷なのだ。金こん輪りん際ざい、姿を現すなと言われてもしょうがない。そうだ。つまり、魔術がどうとか、そういう問題じゃなくて。

　コロナが、だめなんだ。

　──わたしが。

　何か、決定的に。

　致ち命めい的に、だめなんだ。

「あ……」

　コロナはぶんぶん首を振った。仮面の人が言っていた。ここには、こどもだからといって容赦しない者が多くいる、と。どう容赦しないのかよくわからないが、ぼーっとしていたら危険だということだろう。そう注意されたのは、ほんのちょっと前なのに、もう忘れかけていた。いけない。こういうところがだめなんだと思う。いつだったか、誰だれかに「お前はざる頭だ」と言われた。まったく、そのとおりだ。実際、目の粗あらいざるみたいだ。

　いったい、そうしてどれだけのものを失ってきたのだろう。いつもはそのことさえ忘れているけれど、ふと何かの拍ひよう子しで思い出すと、本当にいやになる。もしかしたら、お師し匠しよう様のことも、他のお弟で子しさんたちのことも、記き憶おくから抜ぬけ落ちてしまうかもしれない。自分が自分だということさえも、いつかわからなくなってしまうかもしれない。

　胸が苦しい。

　何かに押しつぶされてしまいそうだ。

『──そういうときは』

　コロナはローブのポケットに手を突つっこんで、小さな青い巾きん着ちやく袋ぶくろを出した。

『このおくすりをのみなさい。でも、あまりのみすぎてはいけないわよ。一日一回だけにしなさい』

　別れ際ぎわに、お師匠様がくれた。

　青い巾着袋のおくすり。

　巾着袋の裏側には、おくすりの成分を書いた防水紙も貼はりつけてあり、魔術士か錬れん金きん士しに頼たのめば買い足すこともできる。これ以外にも、朝起きたときのおくすりや、お昼ご飯のあとのおくすり、それに夜寝ねる前のおくすりが別々の袋にわけてあって、コロナはお師匠様の言いつけどおり、毎日それらをのむのだ。

ただ、朝はおくすりがないと頭がはっきりしないので、絶対にのむようにしているけれど、昼や夜は忘れてしまうこともある。とくに、夜のおくすりを欠かすと、だいたい次の日はあまり調子がよくない。

　昨日は、忘れた。

　──忘れた？　本当に……？

　レニィさんたちとエルデンの東門で別れたのは、昨日の夕方だった。それから、一人でエルデンのなかをさまよい、道行く人にいろいろ尋たずねているうちに夜になったので、ちょうどこの鉄鎖の憩い場で芝しば生ふを見つけて、そこで寝た。昨夜は、明日はどうしよう、そうだ、通りがかりのおじさんに教えてもらった鶏さんの地下迷宮に行こう、きっといいことがある、楽しいことがあるに違いない──と、わくわくしながら眠ねむりについた。お師匠様のお屋や敷しきでも、お弟子さんたちがベッドを使わせてくれなかったし、夜、外に追いだされることもあったから、コロナは野宿くらい平気なのだ。さすがに、舗ほ装そうされた道路の上では体が痛くなるものの、草の上だとむしろ気持ちいい。草は、生きているから、どこかやさしい感かん触しよくがあるのだ。

　苦くてたまらない、まずいおくすりなんて、もういらない、と思った。

　お師匠様には悪いけれど、本音を言えば──もちろん、お師匠様には言ったことがないけれど、おくすりは好きじゃない。それでも、今のおくすりはまだマシなほうで、以前はもっとひどいおくすりものんでいた。服用したあと、泣いてしまったり、全身が引きつるようなかんじがしたり、だるくなったり、熱が出たり、頭や目が痛くなったり。あの感覚が身体からだに染みついているせいかもしれない。立派な魔術士になるため、コロナもがまんしたし、お師匠様もがんばってくださったのに、だめだった。おくすりを見るたび、そのことを思い出してしまうからかもしれない。どうせなら、こういうつらいことも、すっかり忘れてしまえればいいのに。

　いっそのこと、おくすりをやめたら、忘れられるだろうか。

　昨夜、そんなふうに思ったような記憶が、おぼろげにある。

　ようするに、結局、自分のせいだ。おくすりをのまなかった自分

が悪い。自分がバカなんだ。どうしようもないバカだ。お師匠様の言いつけを守らないから、こんなことになるんだ。コロナは言われたこともできないバカだ。だから、いつもみんなに怒おこられていたんだ。何度も、何度も叱しかられた。「お前さあ、なんで言われたことを言われたとおりにできないわけ？　頭悪すぎ」「こんなこと言いたくないけど、あなた、目め障ざわりなの。いつもぐずぐずのろのろして、邪じや魔まなの。わかる？　わからない？　本当にバカね」「お前って、そこにいるだけで迷惑だよな。死ねよ、クズ」

　そのとおりだった。コロナは謝ることしかできなかった。

　ごめんなさい。申し訳ありません。許してください。

　でも、言葉をいくら重ねても、どれだけ頭を下げても無む駄だだった。みんなが欲しかったのは、きっとコロナの謝罪なんかではなかった。罵ののしらなくていいような、蔑さげすまなくてもいいような、こんな愚ぐ図ずじゃない、まともなコロナだった。コロナがちゃんとしていたら、みんな怒ったり、苛いら立だったりしなかったはずだ。やっぱり、コロナのせいだ。

　──おくすり、のまないと。

　コロナは巾着袋の口を開けた。袋のなかに指を入れたが、うまくおくすりをつまむことができない。こんなことも、できない。あげく、後ろから誰かがぶつかってきた。「はゃっ……」コロナは突き飛ばされて転んだ。それはいい。そんなことよりも、巾きん着ちやく袋ぶくろの口が開いていたせいで、お師匠様のおくすりを地面にぶちまけてしまった。たいへんだ！　たいせつなおくすりが！　おくすりがないと、いざというとき、困るのに……！　コロナは大おお慌あわてでおくすりを拾い集めようとした。でも、ここは狭せま苦くるしい市場の道のまんなかだ。たくさんの人が行き交かっている。おくすりを拾うためには、通行人たちの間を這はいずり回らなければならない。「あ？　んだぁ？　んなとこで何ちょろちょろしてんだ、蹴け飛とばしちまうぞ餓が鬼き！」「あ、ご、ご、ごご、ごめんなさいっ！」「──どけ、このチビグソ！」「あきゃっ！　も、も、申し訳ありません……！」だけど、拾わないと。おくすりを拾わないと。お師匠様がくださった、だいじなおくすりなのだ。粗そ末まつにはできない。コロナは、通行人に蹴られたり、怒ど鳴なられたりしながら、一つ一つ、おくすりを拾っては巾着袋に入れていった。

　十個。十一個。十二個。十三個。十四個。十五個。

　──十六個め。

　手をのばそうとした。

　その矢先だった。

　踏ふまれた。

　それは、コロナでもわかる。

　明らかに、わかっていてやった。コロナがそれを拾おうとしていると認にん識しきしたうえで、あえて踏みつぶしたのだ。そういう踏み方だった。どうして？　誰だれがそんなひどいことを……？

「まさかと思ったけど、やっぱりポチじゃん」

「……え、と……」

　コロナは四つん這ばいのまま、その人の足から少しずつ視線を上げていって、ついには顔を見た。ポチ。お屋敷にいたころの渾あだ名なでコロナを呼んだのは──当然、知っている人だった。白い髪かみの毛と、紅茶色の瞳ひとみ、端たん整せいな顔立ち、抜ぬけるような白い肌はだや、口紅をつけた女の人みたいに奇き妙みょうに赤い唇くちびるは、そう簡単には忘れられない。

「──マイケル、さん……」

「それ、やめたから」

「や、やめた、と、おっしゃいますと……？」

「ずっと嫌きらいだったんだよね、その仮カ名ナ。だから、今はネロって名乗ってる。でも、お前ごときに名前で呼ばれるとムカツクから、殿でん下かって呼べ」

「そ、それでは……殿下」

「マジで呼ぶなよ」

「で、では、どうすれば……？」

「とりあえず立てよ。みっともない。それとも、そのまま這って歩く？　べつにいいと思うよ。いかにもポチってかんじで、お前にはお似合いだし」

「……た、立ちます」

　マイケル──もとい、ネロは、お師し匠しよう様の弟で子しで、十五歳のコロナより二つくらい年上のはずだ。コロナとは違ちがい、すごく優ゆう秀しゆうで、お師匠様の評価もずば抜けて高かった。

　ただ、コロナはネロが苦手だった。今もそうだけれど、いつも黒っぽい魔術士衣を着て、すらりとしていて、あやしいほどにきれいなネロは、とても口が悪いのだ。また、自信家で、恵めぐまれた才能を鼻にかけているようなところがあったからだろうか。じつは、コロナだけではなく、他ほかのお弟子さんたちからも距きよ離りを置かれていた。

　でも、どうしてネロがここに？

　お師匠様は、他の魔術師マギと比べて、ゆっくり、じっくりと、時間と労力をかけて弟子を育てる。魔術師マギクレアといえば、その門下から多くの有能な魔術士を輩はい出しゆつしていることで、結構有名なのだという。コロナは十五歳で放ほうりだされたが、これは例外中の例外で、お師匠様はいつも「二十歳までみっちり訓練しないと、魔術の基き礎そは培つちかわれない」と言っていた。当然、ネロもお師匠様のもとから巣立つ年ねん齢れいではない。げんに、コロナがお師匠様のところから出たとき、ネロはまだ「クレアの屋や敷しき」にいたはずだ。

　コロナが立ちあがって巾着袋をローブのポケットにしまうと、ネロは「ついてこい」というふうにこちらを一いち瞥べつして歩きだした。

「あ、あの、どちらに……？」

「どこだっていいだろ。こないなら、こなくていいよ。僕、お前のこと嫌いだし」

　だったら、どうして「ついてこい」みたいな態度なのだろう。不思議だけれど、誰も彼もが見知らぬ人のこの街で、仲よしとはいえないまでも、知りあいがそばにいることは、正直、心強い。コロナ

は雑ざつ踏とうをすいすい進んでゆくネロについていった。ネロはコロナよりずいぶん背が高くて、歩くのが速い。コロナが遅おくれても、待ってくれたりもしない。追いかけるのはたいへんだった。でも、あてもなくぼんやりぶらぶらしているよりは、ずっといい。そうして市場を抜け、さらにしばらく進むと、向こうに大きい立派な建物ばかりが見える場所に出た。さっきまでとは打って変わって、すごく静かだ。人通りもあまりない。

「うざいんだよな。この街。うるさくて、下品でさ。首都だし、規模は大きいけど、カリオサークのほうがかえって洗練されてて、都会だよ」

「……は、はあ」

「でも、魔術にはいろいろ必要だろ。触しよく媒ばいとか。安く手に入れようとしたら、市場でいろいろ探しまわらなきゃならないじゃん。結構違うんだよ。店によって、値段。ああ、だけど、お前は触媒いらないよね。魔術ろくに使えないし。なんで市場なんかにいたわけ？」

「え、えと、行きがかりで……」

「ふうん。ま、べつに興味ないからいいや。ていうかさ、まさかお前なんかとエルデンで会うなんてな」

　それはこっちの台詞せりふだと思った。でも、言葉がうまく出てこない。考えてみれば、お屋敷にいたころもそうだった。お師匠様や、ミヤお姉さんなど、何人かとはわりとふつうに話すことができたのに、他のお弟子さんたちの前では、上手にしゃべれなくなってしまう。コロナにとって一番の話し相手は、藁わら人にん形ぎようのサリーだった。本当は魔術の練習に使うものなのだが、コロナはそれにぼろきれで作った服を着せて、頭の部分に白い布をかぶせて顔を描かき、お友だちにしていたのだ。

　ある日、サリーが行方ゆくえ不明になった。コロナは泣きべそをかきながら、必死で捜さがした。サリーは手足をちょん切られ、ぼろぼろにされて、庭の隅すみに捨てられていた。誰かのいたずらに違いなかった。腹は立ったけれど、それよりとにかくサリーがかわいそうだった。ただただ悲しかった。そんなこともあった。忘れていた。サリーを忘れてしまう自分が信じられなかった。

「訊きかないの？　どうして僕がエルデンにいるのか、とか」

「あ……は、はい」

　サリーのことを思い出してしょんぼりしていたコロナは、ネロの声で我に返った。でも、言われてみれば、たしかにネロがエルデンにいるなんて不思議だ。それに、「訊かないの？」と言われて訊かないのは失礼かもしれない。

「え、えと、マイ──いえ、その、ネロさんは、なぜエルデンにおられるのですか？」

「教えない」

「はぅ」

「嘘うそ。答えは簡単。お前のすぐあとにクレアの屋敷を出て、エルデンにきたから。だから僕はエルデンにいる。あたりまえだろ。ほんとに、相変わらず頭悪いね、お前」

「ご、ごめんなさい」

「謝ってその頭がよくなるなら、いくらでも謝ればいいけどね。無理だよな。どうせ。お前、コワされちゃってるんだし」

「……こわ、され……？」

「だろ。みんなそうじゃん。コワれてるんだよ。まあ、でも、魔術士ってそういうものなんだろうけどね。いくらお前でも、知らないわけじゃないよな。気づいてるだろ」

「き、気づく──って……何に、ですか……？」

「何って」ネロは立ち止まって振ふり向き、じっとコロナを見つめた。「お前、自分がどうしてそうなのか、とか、考えたことないわけ？」

「そう……って……」

「だから、ものすごく頭悪いだろ、お前。異常に」

「は、はい。申し訳ありません……」

「ほら。謝っても意味ないって言ってるのに、また謝るし」

「うぅ」

「呻うめくなよ。気持ち悪い。とにかくさ、お前の頭が悪いのは――もちろん、もともと出来がよくないってこともあるんだろうけど、それだけじゃないんだよ。だいたいお前、あそこにいて、変だと思わなかったわけ？」

「あそことおっしゃいますと……？」

「クレアの屋敷だよ」

　そういえば、ネロはさっきから、お師し匠しよう様のことをクレアと呼び捨てにしている。弟で子しはお師匠様のことを「師匠」か「先生」と呼ぶのがふつうだったので、それこそなんだか変なかんじだ。ちょっと無礼なのではないかという気もする。でも、ネロを相手に、そのことを注意する勇気なんて、コロナにはない。

「いえ、コロ――あ、わたしは、べつに……」

「お前はポチだし、アホだからね。しょうがないか」ネロは真っ白い髪かみをかきあげて、ため息をついた。「――だけど、ふつうは気になるはずだよ。たとえば、髪の毛。目の色。僕もだけど、お前だって、それ、最初からその色だったわけじゃないだろ」

「は、はい、ですが、これは、立派な魔ま術じゆつ士しになるためのおくすりで……」

「信じてるの？　クレアの言ったこと、そのまま、なんの疑いもなく？」

「もちろんですっ！　それに、この色、コロナは、結構お気に入りですし！」

「へえ。じゃあ、そのパッパラパーの頭も気に入ってる？」

「そ、それは、でも――コロナが、おバカなせいで……」

「本当にそうかな？」

　ネロは薄うす笑わらいを浮うかべて、いきなりコロナの三角帽ぼ

うに手をのばし、さっと脱ぬがして捨ててしまった。しかし、コロナは帽子を目で追うだけで、拾うことができない。体が動かない。

「──僕は優ゆう秀しゆうな生徒だったからね。クレアのおともで、いろいろな魔術士に会った。クレアと同じように、後進の育成に力を入れている魔術師マギも何人か知ってる。彼らの弟子のなかにも、僕らみたいに自然にはありえない髪や目の色をした魔術士がたまにいるんだ。ただ、ね。多くはない。ごく少数だよ。当然、僕は文ぶん献けんをあたってみたりもした。でも、薬物等を用いた体質改変は、昔から秘中の秘で、書物からえられる知識はかぎられてる。調べても、調べても、たいしたことはわからないんだ。それで、クレアは同じような立場の魔術師マギと意見や情報を交こう換かんして、自分の技術を発展させようと懸けん命めいなんだよ。だって、そうしないと、クレアみたいな力の弱い魔術士は、立つ瀬せがない。錬れん金きん術じゆつも、もともと力の弱い魔術士が創出したといわれてるけど、クレアも同じだ。本当は、魔術師マギを名乗るのもおこがましいって程度の力量しかないクレアは、別の魔術で名を上げようとしてる。つまり、人体改造術とでも呼ぶべき、技術でね」

「……そ、それは、でも……魔術士は、誰だれでも、やっていることで……」

「ああ、やってるね。ほとんどの魔術士は、肉体訓練や思考訓練を補助する目的で、古くから伝わる霊れい薬やくや秘薬のたぐいを使用しているはずだ。だけど、クレアは違ちがう。外げ道どうの錬金士や、汎Ｐ大陸Ｃ医術Ｍ士会Ａに所属していないもぐりの医術士と組んで、人間を別のものにつくりかえる薬物を研究、開発して、実験してる。僕は……お前は──」と、ネロはコロナのスミレ色の頭とう髪はつをぎゅっとつかんだ。「弟子なんかじゃない。クレアの被験体だ」

「……い、いたっ……！」

「この髪も、その目も、頭のなかも、クレアがお前をいじくりまわして、こうしたんだ」

「痛いです……！　は、離はなしてっ！」

「ああ。ごめん」

　ネロはあっさり手を離して、三角帽まで拾ってかぶせてくれたが、なぜだか、すごく冷たく感じた。コロナはネロが怖こわかった。話の内容と、あまり感情をうかがわせない声や表情との不ふ均きん衡こうが、ある種の不気味さとなってネロの周りを渦うず巻まいていた。でも、それだけだろうか？　この、不安。落ちつかない気持ち。胸が、どきどきしている。

「──とにかく、そういうわけで」ネロは自分一人だけ気をとりなおしたように、短く息をついた。「お前がバカでポチなのは、お前のせいだけじゃないかもしれないってこと。慰なぐさめにもなんにもならないだろうけど、恨うらむならクレアを恨めよ。もともとお前の魔力に目をつけて、どこからかさらってきたか、買ってきたくせに、薬でめちゃめちゃにしたあげく、やっぱり使い物にならないってわかった途と端たん、クレアはお前を捨てたんだからさ」

「……そ、そんな、言い方は……」

「でも、本当のことだろ？」

「違いますっ！　お師匠様は、コロナに、とっても、よくしてくださいましたし……」

「そうだな。実際、クレアはお前に甘かったよね。だけどさ、あたりまえだよ。お前は僕らのなかでも際きわだって優秀な、いい実験材料だったんだから」

「え……？」

「これ、他ほかの弟子連中は気づいてなかったかもしれないけど──」ネロは紅茶色の目を少しだけすぼめて、眉まゆをひそめた。「お前、とんでもなくいろいろな薬、のまされてたよね。それから、薬以外にも、なんか変なことされてただろ。夜、お前一人だけどこかに連れて行かれたりしてたの、僕、見たことあるんだよ」

「ひとり、で──」

　わからない。知らない。そんなことはない。事実じゃない。嘘うそだ。ネロは嘘を言っている。だったら、どうして、こんなに心が乱れているのだろう。一人で。夜。迎むかえにくる。お師し匠しょう様。白い服を着た知らない人。連れて行かれる。地下の黒い部屋。お師匠様が言う。怖くないわよ。立派な魔術士になるためよ。

がまんしなさい。大だい丈じよう夫ぶよ。あとで消してあげるから。お師匠様。怖い。怖い。怖い。痛い。痛い。頭のなかに何かがさしこまれる。耳から。鼻から。口から。体を切り開かれる。骨をコツコツ叩たたかれる。削けずられる。何か埋うめこまれる。痛い。痛い。痛い。痛い痛い痛い痛い痛いいたいいたいいたいいたい。これは──夢？　夢。そう、夢だ。嘘だ。

「……違い、ます……！　違います！　コロナは、そんなこと……ありません、だって、お師匠様は、コロナに、やさしくて……コロナのお話を、ちゃんと聞いてくださって……」

「でも、クレアはお前を助けなかったよね。お前がみんなにいじめられてることを知っていても、誰かを注意したりしなかった」

「それ、は──」

「どうでもよかったんだよ、クレアは。お前が従順でありさえすれば、他はどうでも。けど、ありとあらゆる方法をお前に試ためしたのに、副作用のデータばかりが積み重なって、効果は思うように表れなかった。弟子たちのなかに、いいかげん、お前を追放しろと声こわ高だかに叫さけぶ者も出てきた。それでクレアは、用済みになりかけていたお前を放ほうりだすことにしたんだ」

「……ち、違い……ます、お師匠様は、これからは、魔術にとらわれないで、自由に、生きなさい……って……」

「言葉を飾かざるのは簡単だな。ちなみに、お前の追放をクレアに進言したミヤも、似たようなことを言ってたよ」

「み、ミヤ、お姉さん、が……？」

「ああ。どうせあのこには魔術士の適性がないし、そろそろふつうの暮らしをさせてやったらどうか、とか。そのほうが屋や敷しきの秩ちつ序じよのためにもいいし、あのこのためにもなるんじゃないか、とかね。優等生気どりのミヤらしい言い種ぐさだな。まあ、あいつは陰かげでお前のことボロクソに言ってたから、まったく説得力ないけど」

「嘘です！　ミヤお姉さんは、コロナのお話を、いつも、聞いて、くれて……やさしく、してくれて……」

「お前のやさしさの基準って、話を聞いてくれるかどうかだけなん

だな」ネロは呆あきれ果てたように嗤わらった。「クレアもさぞかし騙だましやすかっただろうね。ふつう、お前みたいな扱あつかいを受けたら、誰だっておかしいと思うのに、お前ときたら──バカを超ちよう越えつしておめでたいっていうか、なんていうか。でも、案外、その性格もクレアに作られたものだったりしてね？　あの若作りのババアなら、それくらいやりかねないな」

「こ、コロナには何を言ってもいいですけど、お師匠様のことは悪く言わないでください！　お師匠様は、コロナのことを思って、いろいろしてくださって、だって、本当に、お師匠様は、コロナに──」何を。何をしてくれた？　たくさん。たくさんしてくれたことはある。魔術を教えてくれた。たくさんおくすりをのませてくれた。たまに、誉ほめてくれた。コロナはいいこね。そう。わたしの言うとおりにやっていればいいのよ。そのうちきっと立派な魔術士になれるわ。わたしを信じなさい。さあ、このおくすりを。痛いけれど、すぐに終わるわ。がまんしなさい。怖いことはちゃんと忘れさせてあげるから──コロナ、言いづらいのだけれど、あなたにはここから出ていってもらうことにしたの。大丈夫よ。あなたはきっとしあわせになれるわ。ここにいたときより、ずっといいことがあるわ。わたしを信じなさい。これが最善よ。あなたのためを思って決めたことよ。「……お師匠様は……」コロナは震ふるえる手で背中の剣けんにふれた。「こ、この剣だって、お師匠、様が……くださって……」

「仮にも魔術士に、剣、ね」

「と、とても、いいものだと……高価な品物で……コロナは、これで、狼おおかみさんも、ちゃんと倒たおして……自分で、身を守って……」

「それはお前の体が改造されてて、その体格に見合わない筋力が備わってるせいだろ。魔術はてんでだめなくせに、そんなところが強化されてるなんて、まさしく失敗作だよ、お前は。その剣が値打ち物だって……？」ネロは、あらがおうとするコロナの手を振ふり払はらってお師匠様の剣の柄つかを握にぎった。そして、鞘さやから剣を引き抜ぬき、剣身をざっと眺ながめるなり、鼻で笑った。「剣のことなんてよくわからないけど、高そうには見えないね。古くさいし、貰もらい物か何かだろ。どのみち、魔術士にとっては剣なんてガラクタ同然だよ」

「か、返してください……！」

「コロナ。いいかげん、お前も目を覚ませよ。お前はずっとクレアに騙されてきたんだ。今も騙されてるんだ。こんなもの、後生大事にとっておいたりしないで、金に換かえて生活費の足しにでもすれば？　いくらになるか知らないけど」

「そんなこと……そんなこと、できないです！　できるわけ──せっかく、お師匠様からいただいたのに……」

「ふん。所しよ詮せん、クレアがお前に与あたえたものは、この剣だけってことか。クレアごときじゃ、まあ、そんなところが関の山かもしれないね。魔術士として、あいつは三流だ」

「どうして……どうして、そんな、ひどいこと……マイケルさんだって、お師匠様に魔術を教えていただけなかったら……」

「そう。入り口の扉とびらを開けてくれたのはクレアだ。それに、どんな薄うす汚ぎたない手段を使ってでも、自分なりの高みを目指すっていうあいつの考え方も、勉強になったよ。薄汚いって思うこの感性が、魔術士的じゃないってこともわかった。でも、それがわかってしまえば、あいつから学ぶことは何もない。だから、僕は自分を高めるために、エルデンにきたんだ。二十歳までクレアの被験体としてじっくり観察されつづけるなんてごめんだしね」ネロは剣を放り投げて、コロナに背中を向けたが、すぐに振り返った。「──あと、僕はもうマイケルじゃない。ネロだ。マイケルって聞くだけで腹が立つ。お前の存在も同じくらい苛いらつくけどね」

　そう言い捨てて、ネロは行ってしまった。

　コロナはその場にしゃがみこんで、剣を拾うこともできず、いつまでもうなだれていた。

2

　──これが洗礼……ってやつか。

　エルデン生活二日目。

　ババドア・モッドーが紹しよう介かいしてくれた、第四区のとあ

る貸し宿の食堂で、やけになれなれしく声をかけてきた自じ称しよう・侵入クラツ者カー、痩やせぎすで骸がい骨こつみたいな顔のピント・デ・ピント（31）。

　最初はうさんくせえやつだと思っていたが、飯を食いながら話を聞いていると、これが妙みようにおもしろい。いでたちや年とし恰かつ好こうから、レニィがエルデン初ニユ心ービ者ーで、侵入クラツ者カー志望に違ちがいないとずばり言い当てると、軽妙洒しや脱だつな語り口で、街全体の紹介から、鉄鎖の憩い場の市場や闇やみ市いちでの買い物の注意点、クァラナド歓かん楽らく街がいでのお手軽な遊び方、怪け我がや病気の際はＰＣＭＡキャンプより第六区のモリー・リップス・アサイラムへ行ったほうが安くすむとか、あそこには近づかないほうがいいとか、ＳｍＣの刺青いれずみ持ちには気をつけろとか──それから、自分と他人の体験談を織り交ぜて「侵入クラツ者カー心得二十一箇か条じよう」とやらを滔とう々とうと弁じ立てたうえで、「よーし、じゃあ、レニィ。おめえさんが明日、侵入クラツ者カーデビューを飾かざるのにふさわしい場所を、これから俺と二人で決めるとしようじゃねえか。おっと、その前に──ずいぶんしゃべったもんで、喉のどが渇かわいちまったぜ。一いつ杯ぱいだけおごってくれよ。心配するなって。二杯目からは誓ちかって自分の金で飲むからよ。な、いいだろ？」

　あの「一杯だけ」ってのがクセモノだった。

　まったくそういった要求がなかったり、二杯、三杯と立てつづけにおごらされでもしていたら、おそらく、ピントの野や郎ろうの意見を採用したりしなかっただろう。きっと、あいつは慣れてやがるんだ。ああやって、いつも新しん参ざん者ものをたぶらかしているのに違いない。でも、何が楽しくてそんなことを……？

　ともかく、夜よ更ふかしと旅の疲つかれのせいか、目が覚めると十時すぎだったのだが、レニィはモノは試ためしとばかりにアンダーグラウンドへと向かった。その前に、第五区で中古の安い暗視鏡を買ったのも、あのクソ野郎モウフオ（という言葉もピントに教えられたのだが）の入れ知ぢ恵えだった。もぐる（と、侵入クラツ者カーは言うらしい）先も、やつの情報にもとづいて決めた。というより、ほとんどやつに言われるがままだった。

　なんでも、ピント曰いわく、そこはアンダーグラウンドに慣れていない初ニユ心ービ者ーにとって、最適な場所らしい。位置的にも、貸し宿から近いし、市場のある第五区もすぐそこだしで、いろ

いろな面で便利そうだ。で、そこにはどんな異界フリー生物クスがいるのかと訊きいたら、「なあに、たいしたことはねえ。ケダモノやら、獣人やら。地上とさほど変わらねえよ。まあ、あまり奥に行きさえしなけりゃ、怖こわいってこたあねえさ。ただ、地上にはいねえ種族だから、やつらの毛皮だの牙きばだの爪つめだのはわりと高く売れるし、なかには宝ほう珠しゆ持ちってのもいる。宝石みてえな目玉をしてるから、すぐにわかるぜ。もし、そいつを見つけたら──逃にがすなよ。しばらく遊んで暮らせるからな。へっへっへっ」

アンダーグラウンドＤ４〝常夜エヴアーのナイト大地ランド〟。

そこは、真っ暗だが、地下のくせに地上みたいで、太陽もないのに、奇き妙みような形とはいえ植物みたいなものが生おい茂しげっていた。どうやら、それらは木や草というより、大きさは別として、コケとかキノコに近いようだった。いずれにせよ、薄うす気味が悪かった。遠くから何かの叫さけび声らしきものが聞こえてきて、それもいやなかんじだった。だいたい、まるでひとけがなかった。おーい。初ニユ心ービ者ーに最適な場所じゃなかったのかよ。変だな、と首を傾かしげていたら──くるわ、くるわ。

でかい猫ねこみたいな獣やら、巨きよ大だい蝙こう蝠もりやら、四し肢しの長い猪いのしし（？）やら。

連中は、レニィを餌えさだと思ったのか、そこらじゅうからわいて出て襲おそいかかってきやがった。当然、レニィは逃げた。すると、今度は獣同士が殺しあいを始めた。連中、すこぶる仲が悪いらしい。しかし、うへ、と思いつつ、遠くからそれを見物していると、また別の生き物が出てきて、逃げるたびに、その先に違う生き物が──という具合に、まったくきりがなかった。レニィは殺されてむさぼり食われる前に、地上へ戻もどるしかなかった。なんて言えば簡単そうに聞こえるかもしれないが、実際は「やべえ」「駄だ目めかも」の連続だった。レニィは這ほう々ほうの体ていで退散してきたのだ。そして、地上に出てから、遅おそまきながら悟さとった。

一杯食わされた。

これでも、もともと下町育ちだし、独立剽騎士団の教練所では、かなりすれているほうだったのだが。エルデンでは、世間知らずの坊ぼつちゃんってわけか。記念すべき侵入クラツ者カーとしての第

一歩。ピント・デ・ピントに騙だまされて、死にかける。いやな記録だが、しょうがねえ。肝かん心じんなのは、引きずらないことだ。反省するだけ反省したら、あとは屈くつ辱じよくも落らく胆たんも忘れちまえ。まあ、死ななかったんだし。金をしぼりとられたわけでもねえし。

「でも、まあ……」

　落とし前だけはきっちりつけとかねえとな。

　今、レニィは、第四区のとある貸し宿の前にいる。その名も「死にダイングかけサンダー雷電ボルト」。レニィが部屋を借りている三階建ての宿だ。名前はちょっとアレだが、外観はこぎれいだし、なかも掃そう除じが行き届いていて、宿の主人が一階で経営している食堂の飯もうまい。なおかつ、料金も手て頃ごろだ。宿の主人エレクトリック・マーダーとその夫人エレクトラ・マーダーも、露ろ出しゆつ度どの高いぴったりした黒い皮革製の服を着ている点に目をつぶれば、感じのいい人たちだし、宿のなかで行き会う客連中も、多少（かなり？）人相の悪いやつはいるものの、因いん縁ねんをつけてきたり、肩かたをぶつけてきたりすることもない。別れ際ぎわにこの宿を紹しよう介かいしてくれたババドア・モッドーには、少しだけ感謝してやってもいいと思っている。少なくとも、しばらくの間はここでうまくやってゆけそうだ。ただし、同宿のピント野郎だけは別だ。

　レニィは玄げん関かんのドアを開けて、死にダイングかけサンダー雷電ボルトに足を踏ふみ入れた。入ってすぐのホールは食堂兼ロビーで、ちょうど昼飯時だから、それなりに混みあっている。店の主人エレクトリックは、奥の厨ちゆう房ぼうか。夫人のエレクトラは、例の刺し激げき的な黒くろ装しよう束ぞくの上に白いヒラヒラのエプロンをつけ、卓たくの間をくるくる回って忙いそがしげに立ち働いている。

　ちなみに、例の黒い衣装だけでなく、黒い帽ぼう子しに黒い色サン眼鏡グラスをかけているエレクトリックはたぶん三十代半ばから四十くらいだが、エレクトラはまだ若い。せいぜい二十二、三歳だろう。もしかしたら、もっと若いかもしれない。しかも、色白、黒目、黒くろ髪かみの美人だ。

　たぶん、死にダイングかけサンダー雷電ボルトの盛せい況きようぶりには、エレクトラもかなり貢こう献けんしている。実際、あの

恰かつ好こうとチグハグなかわいい声で「お帰りなさいませ」とか言われると、悪い気はしない。今もエレクトラは、レニィを見つけると、お決まりの台詞せりふを言った。

「お帰りなさいませ」

「……ただいま」

　思わず返事をしてしまって、恥はずかしくなった。エレクトラも、空き皿満まん載さいのトレイを持って踵きびすを返す前に、少しだけ笑いやがったような。くそったれ。でも、そんなことはどうでもいい。やつだ。ピント・デ・ピント。さすがに、都合よく食堂ですぐに見つけられるとは思っていないが──やつにも、レニィを騙くらかしたという意識はあるはずだし、ひょっとしたら、宿を引き払はらっているかもしれない。それならそれで、どうするか考えなければならないところだったのだが、その必要はなさそうだ。

　やつめ。

　昨日と同じ隅すみっこの席で、黙もく々もくと昼飯を食くらってやがる。

　レニィはつかつかとやつに歩みよっていった。やつは、それでも視線を上げることさえしない。やつが飯を食っている卓の脇わきに、こうしてわざとらしく立ってるってのに。レニィはいつまでもこっちを見ないやつに痺しびれを切らして、腿もものあたりで卓を軽く蹴けった。

「おい」

「……あん？」

　やつはようやく骸がい骨こつみたいな顔を上げたが、なんだか薄ぼんやりした表情だった。まるで、誰だれだこいつ、とでも思っているような顔つきだ。誰だはねえだろ、誰だは。レニィは卓に右手をついて、下町の悪わる餓が鬼きだったころのように両りよう眼めをすぼめた。

「てめえ、よくもペテンにかけてくれたな」

「ペテン……？　なんのことだ」

「なんのことだと？　とぼけるつもりかよ」

「とぼけるも何も――」やつは使っていたスプーンを卓に置き、薄うす汚よごれたハンカチで悠ゆう然ぜんと口の周りをぬぐってから、椅い子すに座ったままレニィに向きなおった。「本当になんのことだかわからねえんだが。第一、俺はおめえさんのことなんざ知らねえんでな。それとも、俺が忘れちまってるだけか」

「昨日の夜、長々と話しこんだ相手の顔をもう忘れてやがるなんて、ずいぶん出来の悪い骸骨頭だな」

「誰が骸骨だ！」

　どうやら、やつの前で「骸骨」は禁句だったらしい。やつは突とつ然ぜんいきり立ち、椅子を倒たおしてレニィにつかみかかってきた。もっとも、やつは顔が骸骨めいているだけじゃなく、体もかなり瘦やせている。背せ丈たけも、レニィよりやや低い。たしか、三十一歳だと言っていたが、それよりずっと老ふけて見えるし――昨夜より、なんだか老けて――昼間だからか……？　レニィは骸骨男を迎むかえ撃うって胸むなぐらをつかみながら、頭の隅にちょっとした引っかかりを覚えていた。が、骸骨男のほうは、すっかり激げつ昂こうしていて、それどころの騒さわぎじゃない。

「おい、おめえさん、言葉に気をつけろよ！　俺を骸骨呼ばわりしたせいで、今はもう墓の下で永遠の眠ねむりってやつについてるクソ野郎モウフオが、どれだけいると思う！　ええ！　どれだけいると思ってやがるんだ！」

「知るかよ！　つーか、唾つば飛ばすんじゃねえ。汚きたねえだろうが！」

「唾ぁ？　唾がどうしたって？　いやなのか。へえ。そうかい――じゃあ、思う存分、食くらいやがれ！　ぺっぺっぺっぺっぺっぺっ！」

「おわっ」骸骨野や郎ろうの唾攻こう撃げきは、かなり本気度が高かった。レニィは思わず飛び退のいてよけたが、おかげで後ろの卓にぶつかり、そこに座っていた客から抗こう議ぎの声があがった。いや、やたらと太ったその客は、抗議どころか逆上していた。「――やい餓鬼！　何すんだこら！　シ、シ、シチュゥが、俺のシチュゥが、こっ、こぼれたじゃねえか……！」「あ、わ、悪わりぃ」

「バッカヤロウ！　俺じゃなくてシチュゥに謝れ！」「え……」いくらなんでも、それは──とか、ためらっているうちに、骸骨野郎がまた「ぺっぺっぺっ」と唾を吐はいてくるわ、シチュゥデブが「シ、シ、シチュゥに謝れねえってのか、俺の大好きな、シチュゥに……！」と襲おそいかかってくるわ、二人をかわそうとして、また違ちがう卓の料理をひっくり返してしまい、別のスキンヘッド男の怒いかりを買うわで──もう、何がなんだかわからない。迫せまりくる骸骨とデブとハゲ。巻き添ぞえを食う大勢の客たち。飛び交かう皿。怒ど号ごう。悲鳴。で、この混こん沌とんとした状じよう況きようを作った原因は──俺？　俺かよ。うへ。もうこの宿にいられねえかも、とか、ちらりと思いつつ、レニィは卓の下にもぐりこんで、デブに足あし払ばらいをかけた。これが見事に決まって、盛大にすっ転んだデブに、ハゲが「むごはっ」と押しつぶされた。できあがった肉の山。ところが、骸骨野郎が身軽にそいつを飛び越こえて、レニィに躍おどりかかってくる！

「──チィッ……！」

　これはもう、血を見ずにはすみそうもないか。レニィは床ゆかに落ちていた皿を拾い、骸骨に向けて投げつけようとした。その寸前だった。ボグンッ！　いい音──って、目の前を、たくさんの星が、飛んで……？　もしかして、俺？　俺が、やられた……？

「う……つぅ……」

　レニィは首の後ろを押さえてうずくまった。

　なぜか、食堂が水を打ったように静まりかえっている。

　今がチャンスとばかりに、骸骨が襲いかかってきてもよさそうなものだが、それもない。

　──つーか、誰にやられた……？

「おまえたち、いいかげんにおし」

　女の声とともに、何かでピシッと床を叩たたく音がした。

　レニィは振ふり返って、仰あおぎ見た。

　そこには、右手にレニィを殴おう打だしたと思われるホウキ、左手に鞭むちを持ったエレクトラが、傲ごう然ぜんと胸を張って仁に

王おう立ちしていた。

「ここは食堂よ。みんなで楽しく食事をとるための場所だから、会話が弾はずんで多少騒がしくなるくらいならかまわないわ。でも、度をすぎるとマナー違い反はんになることくらい──」と、いきなり鞭がきた。ピシッ。「いでっ！」叩かれたのは手だ。いってえ。なんだか、ものすごくいやな、腹が立つ痛みだった。けれども、今のエレクトラには逆らえない。そういうオーラをまとっている。「わかるでしょう？　わからないブタがいるなら、しっかり体に刻みこんであげるから、手をあげなさい」

　もちろん、挙手する勇ゆう敢かんな者は一人もいなかった。

　エレクトラは、もう一度レニィにピシッ「いだっ」と鞭をくれてから、顎あごをしゃくってみせた。「小こ僧ぞう。おまえはしばらく外で頭を冷やしておいで。二度目は許さないわよ。覚えておきなさい」

「……あ、ああ。わかった」

「口の利きき方がなっていないわね」

「わ、わかりました」

「よろしい」

　そうして微笑ほほえんだ顔は、慈じ愛あいに満ちた女め神がみみたいだった。俺、騙だまされてる……？　とにかく、宿から追放されなかったのはありがたい。ようやく厨ちゆう房ぼうから出てきたエレクトリック・マーダーと、腰こしを振りつつ歌っているエレクトラ賛歌に見送られて、レニィは出口へと向かった。もっとも、ただすごすごと宿を出たわけじゃない。やつのことは忘れていなかった。骸骨野郎。あのくそったれは、どさくさにまぎれてレニィより少し早く宿から出た。レニィは邪じや魔まな客連中を押しのけて足を速め、玄げん関かんを出て五メーテルの地点で後ろからやつの襟えり首くびをつかまえた。

「おい」

「──ぐひっ」

「逃にがすかよ、阿あ呆ほう」

「あぁぐ……お、おめえ……」

「さあ、今度こそちゃんと話しやがれ。ピント・デ・ピント、てめえ、いったいなんのつもりで俺をはめやがった？　ああ？」

「だ、だから、俺は、おめえさんのことなんざ――あ？　ピント……？」

「え？」

3

「ここ、どこなのかな……」

　あれからどれくらい時間がたったのだろう。おくすりをのんで、やっと少し落ちついたので、剣けんを拾い、とぼとぼ歩いているうちに、すっかり道に迷ってしまった。

「なんだか、別の街みたい……」

　実際、ここは、市場がある第五区とも、さっきまでいた立派な建物が建ちならぶ一帯とも違ちがう。古い建物が多く、狭せまい道が迷めい路ろみたいに入り組んでいて、全体的に汚きたない。たまにすれ違う人も、ちょっとおっかない雰ふん囲い気きで、道を尋たずねる気になれない。

　でも、それは相手のせいだけではないのかも。今のコロナは、人間が、ちょっぴり――怖こわい。マイケル、じゃなくて、ネロさんにいろいろ言われて、ショックを受けたせいだろうか。けれど、それだってもう、あまりよく思い出せない。違う。思い出したくない。

　思い出すのは楽しいことだけでいい。

　いやなことなんて覚えていたくない。

　コロナが六歳のときに、ノギィ村がトーゾクダンに襲おそわれて、お父さんもお母さんもおじいちゃんもおばあちゃんもお兄ちゃんもおじさんもおばさんも殺されて――コロナや同じくらいの年のこ

どもたちはさらわれて、ドレイとして売られそうになったのだ。でも、コロナを買ってくれたのは、魔術師マギクレア、お師し匠しょう様だった。コロナはドレイにならずにすんだ。

　それに、お師匠様は、コロナが言いつけを守っていればやさしかった。だっこしてもらって、頭を撫なでてもらったことさえある。お母さんみたいなにおいはしなかったけれど、お母さんみたいにやわらかかった。それだけで、コロナはお師匠様が大好きになった。ずっとお師匠様のそばにいたかった。

　あのときの気持ちだけ、抱だきしめていたい。

　お師匠様がコロナを呼んで、少し険しい表情で「あなたにはここから出ていってもらうことにしたの」と告げたときの、胸がバリッと引き裂さかれたような痛み、絶望、あんなものは忘れてしまっていい。

　ある冬の日、お弟で子しさんたちに寝しん室しつから追いだされて、庭で震ふるえていると、ミヤお姉さんが毛布を持ってきてくれた。ミヤお姉さんはコロナの冷たい両手をぎゅっと握にぎって、こすって、あたためてくれた。「コロナ、強くならないとだめよ。結局、あなたの問題なのだから、あなたが変われば、周りも変わるわ。いい？」

　コロナは嬉うれしくて、思わず泣いてしまった。ミヤお姉さんは、コロナが泣きやむまで黙だまってそばにいてくれた。あのミヤお姉さんが、コロナのいないところで何を言っていたとしても、関係ない。どうだっていい。そんなことは忘れてしまいたい。

　だいたい、そうだ──ネロさんだって、いつもぐずぐずして頼たよりないコロナを叱しかりつけて、元気づけるために、あんな話をしたのかもしれない。あれは、がんばれよ、という、ネロさんなりのメッセージだったのかもしれない。ネロさんも、知っている人のいない土地でコロナを見つけて、懐なつかしくて、声をかけたのかもしれないし。少しは、ネロさんの寂さびしさをまぎらすことができたかも？　そう覚えておけばいい。

　日ひ陰かげなんかに目をやらず、お日様に照らされた場所だけを見ていれば──ほら、世界はこんなに明るくて、あたたかい。

　コロナは急に空腹を覚えて、ローブのポケットから革かわ袋ぶく

ろを出した。なかに入っているのは、滋じ養ように富んだ魔ま術じゅつ士し用の食べ物だ。といっても、見かけは黒っぽい丸薬で、味もあまりよくはない。それでも、この魔道丸を一ひと粒つぶか二粒で一日なんとか乗りきれてしまう。もう残り少ないけれど、お金はもともとたいして持っていないし、なくなるまではこれだけで我が慢まんしないと。コロナは魔道丸を一粒口にふくんで、ゆっくりと舌の上で転がしながら、徐じよ々じよに唾だ液えきでやわらかくしていって、少しずつ噛かんだ。お師匠様のところでも食事にありつけないことがしばしばあったので、魔道丸には慣れている。なるたけ長い時間をかけて食べるのが、おなかを一いつ杯ぱいにするコツだ。その間は、べつのことを考える。できるだけ、楽しいことを。

　──楽しかったこと。

　嬉しかったこと。

「レニィ、さん……」

　ありがとな、と言ってくれた。

　さんざん迷めい惑わくをかけたコロナに、ありがとう、と。

　一見、不ふ機き嫌げんそうで、無ぶ愛あい想そなかんじで、口もよくないけれど、レニィさんはすごくいい人だった。けなしつつも、コロナをちゃんと一人の人間として扱あつかってくれたように思う。これからどうするのか、と、コロナに訊きいてくれた。コロナなんかのことを、心配してくれたのだ。

　あのとき、本当は、エルデンについても、一人きりでどうしたらいいかわからなくなるのではないかと、不安でたまらなかったのに。

　でも、これ以上、レニィさんの手を煩わずらわせたくない。邪じゃ魔まになりたくない。頼ってはだめだ。一人でなんでもできるようにならないと。

　そう思って、コロナは一人でやってゆくことを選んだ。

　だいたい、レニィさんとは偶ぐう然ぜん、出会っただけだし。ロム・フォウさんや、ババドア・モッドーさんとも、二度と会うことはないかもしれない。もともと一人だったのが、一人に戻もどった。それだけのことだ。

「━がんばらないと、ですね」

　コロナは杖つえで硬かたい地面を叩たたいて、自分にうなずいてみせた。うん。きっと、レニィさんも、この街のどこかで新しい生活を始めていることだろう。自分だけじゃないんだ。そう考えるだけで、少しだけ力がわいてくる。

「コロナだって、がんばりますよ。負けられないべさ」

　でも、何を？

「……それが問題です……」

　とりあえず、やっぱりお金か。先立つものがないと、遅おそかれ早かれ飢うえ死にしてしまう。

　で、お金を稼かせぐのなら、エルデンで侵入クラツ者カー。コロナだってそれくらい知っている。けれど、実際、侵入クラツ者カーって何をするんだろう？　よくわからなくて、道で行き会った人に尋たずねてみたら、エルデンの地下に入って、鶏にわとりや鳥やゾンビをやっつけ、彼らの所持品を売ればいいらしい。それで、誰だれかに（……誰だったっけ？）教えてもらった鶏の迷宮に行ってみると、入り口の前でコント・デ・コントと名乗る人に声をかけられた。「お嬢じょうちゃん、もしかして侵入クラツ者カーやろうってのかい？　へえ！　そうかい、そうかい。ケケケケ。よしよし、じゃあ、なかはとにかく真っ暗だからな。このタイマツを持って行くといいぜ。お代はいらねえよ。タダだ、タダ。さ、持って行きな」

　こんな都会にも、親切な人は結構いる。エルデンも悪いところじゃない。感謝しつつ、いざ入ってみると━さっぱり鶏らしきものがいなくて。おかしいと思いながら、すいすい進んでゆくうちに、崩くずれた岩がん壁ぺきの陰に変な穴を見つけて。そこから降りてみると、真っ赤な髪かみのマリアさんがいて。ようやく鶏さんと対面を果たして。

　でも、鶏さんたちは、すごく怒おこっていた。どうやら、コロナが何か気に障さわることをしたらしい（マリアさんが言うには、タイマツのせい……？）。とにかく、コロナはロム・フォウさんのことを思い出して、鎧よろいを着た大きい鶏さんと、正々堂々、餞せん別べつの剣けんで一いつ騎き打うちをした。力及およばず負けて

しまったが、どこからか現れた黒い何なに某がしさんのおかげで、マリアさんともども死なずにすんだ。

　命拾いはした。

　ただし、収しゅう穫かくはゼロだ。

　明日も地下迷宮に挑ちよう戦せんしてみるべきだろうか。明日は今日よりいいことがあると信じていいのだろうか。

　今までは、明日も今日と同じでいられますように、と願っていた。お師し匠しよう様のところにいられれば、それでよかった。



　けれど、これからは違ちがうのかもしれない。同じ失敗を何度も繰くりかえしていてはだめだ。成長しないといけない──成長？　お師匠様があれほどいろいろ試ためしてくれたのに、ちゃんと魔術を使えるようになれなかった、コロナが……？

「笑っちゃいますね」

　コロナは、くすっ、と笑ってみた。なんだか、いやな気分になる笑い方だった。左手が、我知らずローブのポケットのなかをまさぐっている。青い巾きん着ちやく袋ぶくろ。このおくすりは一日一回だけ。お師匠様にそう言われている。だけど、そのお師匠様とは、もうきっと会うこともない。だいたい、あの人はコロナを捨てたのだ。どうしてあんな人の言うことを守らないといけないの？　このおくすりを、のめば──気分が楽になる。ふわふわする。暗い、黒い、もやもやしたものが、すうっと消えてゆく。そのはずなのに。さっきのんだのに、あまり効いていないような気がする。足りない、気がする。

　じゃあ、もっとのんだら……？

　コロナは巾着袋をとりだして口を開け、そのなかに指を突つっこんだ。

4

「……だからよう、もう時間がたっちまってるし、無む駄だだって言ったじゃねえスか」

「うっせえ、黙だまってろ」

　レニィはコント・デ・コントの後頭部をぶん殴なぐってやったが、残念ながら、やつの言うとおりみたいだ。アンダーグラウンドＤ５メリクル第二迷めい宮きゆう。安物の暗視鏡越ごしに見る石いし壁かべ石いし床ゆか石いし天てん井じようの地下空間は、かろうじてモノの形がわかる程度で、なんだか頭が痛くなってくる。動植物はわりと把は握あくしやすいのだが、壁だの床だのはさっぱりだ。安物買いの銭ぜに失いってやつか。畜生。それもこれも、ぜんぶこいつらのせいだ──と思ったら勝手に手が出た。

「いづっ、な、何しやがる、今はなんも言ってねえぞ！」

「しゃべらなくても、てめえの存在自体がむかつくんだ。糞くそが」

「それじゃあ、今すぐ消えますよ。誓ちかっておめえさんの前には

二度と姿を現さねえ。な、だから、見み逃のがしてくださいよ。これ、このとおり」

「駄だ目めだ」

「なんでだよう。だいたい、俺がおめえさんに何かしたわけじゃねえだろ」

「ああ。俺を騙だまくらかしたのがてめえの弟らしいってことはわかった。べつに、その責任を兄貴のてめえにとらせようってわけでもねえ」

「だったら──」

　そうだ。そのとおり。昨夜、レニィに嘘うそを吹ふきこんだのは、ここにいるコント・デ・コントではなく、その弟のピント・デ・ピント。瓜うり二ふたつの骸がい骨こつ顔で、背せ恰かつ好こうや服装も大差ないため、最初は同一人物としか思えなかったが、よく見ると、たしかにコント野や郎ろうのほうがピント野郎よりも年を食っている。知りたくもないが、やつがみずから語ったところによると、三十一歳のピントより五つ上の三十六歳らしい。

　もっとも、こいつら兄弟は、姿形が似ているだけじゃなく、同じ穴の狢むじなってやつだ。

　初ニユ心ービ者ー侵入クラツ者カーに偽にせ情報を教えこんで失敗させ、あわよくば破は滅めつさせる。そんな糞くだらねえ下げ劣れつで傍はた迷めい惑わくなイタズラを、何が楽しくて兄弟そろってやってやがるのか。レニィには理解できないが、まあ、百ひやく戦せん錬れん磨まの侵入クラツ者カーに詐さ欺ぎでもしようものなら、見つけだされて半殺しにされるか、土と地ち柄がらを考えれば殺されるかもしれない。だが、相手がレニィのような餓が鬼きなら、わりあい安全に陥おとしいれることができるはずだ。

　ようするに、こいつらは、他人を崖がけから突き落とすのが楽しくて楽しくて仕方ないのだろう。それでも、レニィみたいに生せい還かんできさえすれば、「勉強になった」とか言ってすませられるが、運悪く死んだら──シャレにならねえ。なんだか、めっちゃくっちゃ腹が立ってきた。こんな野郎、始末しちまったほうが、世のため人のためじゃねえのか？　今さらこいつの息の根を止めたところで、もう手て遅おくれかもしれないが。

　━死にダイングかけサンダー雷電ボルトを出たところで、レニィにとっつかまえられた骸骨兄コント・デ・コントは、こっちの人違いだと知った途と端たん、偉えらそうにふんぞり返って、「なあんだ。おめえさんが捜さがしてるのは俺じゃねえ、俺の弟だよ。まあ、あの宿は俺も弟もたまに使ってるからな。そういうこともあるかもしれねえが、いずれにしろ、俺には係かかわりのねえ話だ。というわけで、放してくれ。これでも忙いそがしいんでな」

「おい、待てよ。兄貴なら、弟の居所くらい知ってんじゃねえのか」

「さあなぁ」

　それがやけにわざとらしいとぼけたツラだった。レニィは直観した。こいつは何か知ってやがる。少なくとも、ピント野郎の同類だ。レニィは下町仕込みのやり方でやつの胸むなぐらをつかみ、軽くすごんでやった。

「てめえ、人を舐なめくさった態度もたいがいにしろよ？　正直に話せ。さもないと……」

「ちょっ、ちょ、ま━お、おめえさん、目が……ひ、光ってますよ？」

「それがどうした」

「いえ、その、ええと、かなーり、マジで怖こわいっていうか……」

「だから、それがなんだ」

「いや、そ、そんなに、にらまないで。ははは……つまり、その、弟っていってもですね、血がチロッと繋つながっちゃってるだけで、仲がいいってほどでも……」

「仲がよかろうと悪かろうと、どうせてめえも弟と同じ下げ衆すだろうが。蛇じやの道は蛇へびっていうじゃねえか。何か知ってやがるだろ」

「そ、そんな……ケケケケ、あっしは、その、弟にも劣おとる、本当にケチな小悪党でげして。今日も、ほら、メリクル迷宮の前でね、松たい明まつなんか配ったりなんかして━ご存じかどうかしり

ませんが、メリクルってのは、光に興奮して暴れる習性があるらしくてね、そいつをこう、一度確かめてみたくて、ちょうど迷宮に下りようとしてたコロコロうるさいチビちゃんに松明を渡わたしてですね……ところが、いざチビちゃんがなかに入っていったら、ブルッちまって。だって、とんでもない騒さわぎになったら、アレでしょう？　それで、結果も確かめねえで、逃にげてきちまった次し第だいで。所しよ詮せん、あっしの悪事なんざあ、その程度なんスよ……ゲヘヘ……」

「ふん。ろくでもねえな—って、コロコロうるせえチビ……？」

　コロナだった。

　馬ば鹿かコロナは、侵入クラツ者カーでもやるつもりなのか、一人でＤ５メリクル第二迷宮に入っていったのだ。しかも、コント・デ・コントのしょうもないイタズラの餌え食じきにされ、松明を持たされて。その危険性は、コントの案内でＤ５の出入り口前まで行くと、レニィもすぐに理解した。貼はり紙、貼り紙、貼り紙のオンパレード。曰いわく、「この先、光を持ちこむべからず」「暗視鏡がないクソ野郎モウフオは、今すぐここで首をくくって死ネ！」等々。引っ剝ぱがされているものも結構あるが、その上から新しい紙が貼られている。あの阿あ呆ほう、この貼り紙が目に入らなかったのか。「いやあ、あんときはあっしが目につきそうなやつを剝がしといたんで。でも、もう貼りなおされちまってるな。よく見りゃ同じ字だ。誰だれが貼ってんだ？」

　知ったことかよ。つーか、このゴミ屑くずはマジで死ぬべきじゃねえか……？

　そう思いながら、レニィはコントを引きずるようにして、一いつ緒しよにＤ５にもぐったのだった。当然、コントは何度もレニィに理由の説明を求めたが、一いつ切さい応じなかった。正直なところ、レニィにもよくわからないのだ。コントから聞きだした身体的特とく徴ちようや恰かつ好こうから、それがコロナだとわかって、いても立ってもいられず、ここまできてしまったが—俺は、いったいどうしようってんだ？

　だいたい、メリクル第二迷宮に入って、もう一時間ばかり。何度か出くわした鶏人間（？）メリクルの群れには手出しせず（向こうの数が多いから、いくら相手が鶏でもキツそうだし）、ひたすら馬鹿コロナの姿を求めて歩きまわっているのだが、コントに言わせれ

ば「平へい穏おんそのもの」だそうで。「メリクルだの、侵入クラツ者カーだのの死体がそこらじゅうに──みたいなのを期待してたんだけどよう。ちぇっ。拍ひよう子し抜ぬけだぜ。これじゃあまるで、何事もなかったかのようじゃねえか」

　この期ごに及およんで、てめえは何を期待してやがるんだ、何を。

　まったく、呆あきれるばかりだが、たしかに素人しろうと目めにも、とんでもない騒そう動どうのあとみたいには見えない。メリクルの群れと戦せん闘とう中の侵入クラツ者カー集団も何度か見かけたし、むしろ、アンダーグラウンドってのはこういうものなんだろうと、レニィが思い描えがいていた光景に近い。いや、それよりもやや牧歌的というか。もっと言えば、ヌルいというか。先にＤ４を体験してしまったせいかもしれないが。

「なあ、もしかして──」と、コントが腕うでをつついてきた。「あのコロコロチビちゃん、おめえさんの妹か何かだったりするのかい？」

「そんなんじゃねえ」

「じゃあ、なんだよ。アレか？」

「アレってなんだ」

「アレといったらアレだよ。ア・レ」

「ふざけるな。相手は餓鬼だろうが」

「おめえさんだって十分若いじゃねえか。俺の半分も生きてねえだろう」

「俺の倍以上生きて、てめえは何やってやがるんだ」

「……う、うるせえな」

　いきなりコント野や郎ろうの声が小さくなった。お互たがいに暗視鏡をかけているので、表情などはわからないが、どうやら痛いところをつかれたらしい。自覚があるってことか。だったら、もう少しマシな人生送ろうって気き概がいでも持ちゃいいだろうに。

　しかし、本当に、妹でもない、友人とも思えない、偶ぐう然ぜん出会って一時行動をともにし、別れただけ──とは言いがたいけれど、たいして義理もない馬鹿コロナのことが、どうしてこんなに気になるんだ？　やっぱり、あれか。同病相あい憐あわれむ、ってやつか。

　この街に、少なくとも一人は、俺と同じ境きよう遇ぐうの人間がいる。孤こ独どくで、右も左もわからなくて、路ろ傍ぼうの石みたいにちっぽけで、ただひたすら明日の方向へと歩いてゆくしかない、そんなやつが、俺以外にも一人は確実にいる。知らなきゃともかく、俺はそいつの存在を知ってるんだ。そりゃあ、気にもなるさ。あたりまえじゃねえか。くそったれ。

　でも、このままメリクル第二迷めい宮きゆうをほっつき歩いていて、生きているあいつの姿を拝めるのか。それとも、冷たい骸むくろになったあいつを発見して──そのとき俺は、どうするんだ？

　そんなことをつらつら考えていたら、勝手に足が止まった。レニィは石壁に背中をつけて、一つため息をついた。沈ちん黙もくに耐たえられないタチなのか、コント野郎がまた話しかけてきた。

「おめえさん、ええと、名前は……」

「レニィ」

「レニィか。ハッツフォー人だな」

「なんでわかるんだ」

「わかるさ。おめえさんはまだエルデンにきて日が浅いんだろうが、俺は長いからな。ここにはいろんな国の人間が流れてくるからよ。名前の響ひびきでなんとなくわかるんだ」

「そんなものか」

「ああ。で、レニィ、余計なお節介だろうがよ。おめえさん、この街では浮うき世の義理なんざ忘れるこったぜ。妹か恋こい人びとか知らねえが、他人のことにかまってる暇ひまがあったら、自分のために何かしたほうがいい」

「てめえなんぞに説教されたかねえよ」

「そう言わねえで、聞けって。俺はな、これでも元坊主ぼうずなんだぜ。弟もな」

「坊主だと……？」

「そうさ。意外だろう？　いろいろあって、餓が鬼きのころから蘇そ生せい式に興味があってよ。ただ、故郷の寺院には、僧学校出のやつしか入れなかったもんだから、わざわざエルデンくんだりまでやってきて、とある高層寺院にもぐりこんだ。ところがどうだ。人助けがしたいと思って見習い僧になったってのに、やらされるのは道に立っての客引きだ。暗い顔で棺かん桶おけ引きずってるやつを『安いぜ、うまいぜ、速いぜ』って寺院に引っぱりこむ仕事さ。しかも、十日に何人とか、ノルマがある。こなせなけりゃあ、飯も出ねえ、殴なぐられる、蹴けられる。そいつは我が慢まんできても、ノルマの二倍達成を何回かで昇しよう進しん、蘇生式の勉強ができるってんで、ちゃんとした僧になろうとしたら、必死こいてやらなけりゃならねえ。だがよう、俺がいた高層寺院は、めちゃくちゃ料金が高くってなあ。もちろん、そのまんまじゃあ客が寄りつかねえから、『所見料激安！』とか銘めい打うって客をなかに連れこんでから、『手数料いくら施せ術じゆつ料いくら寄進いくら』とどんどん料金をつりあげる。それが常じよう套とう手段だった。でもな━田舎いなか者ものの俺と弟は、要領が悪くて、成績はいつもドンジリさ。あげく、金がなさそうなやつに、高層寺院のなかでもまあ良心的だって言われてた寺院を教えてやったりしてな。それがバレて、半殺しにされて、破門されたうえ、ほっぽりだされて。そのあと、たまたま破門の原因になった例の貧びん乏ぼう人に出くわして、感謝されるかと思ったら……とんでもねえ。罵ののしられるわ、ぶん殴られるわ。なんてことはねえ、良心的って評判だった高層寺院も、じつはボッタクリだったのさ。しかも、身ぐるみ剝はいで、場合によっちゃあ命までとって口をふさぐ、最悪の部類だったんだ。まったく、余計なことはするもんじゃねえな。親切心がかえってアダになることもあるんだ。生き馬の目を抜ぬくこの街じゃあ、そんな話がゴロゴロしてやがるんだぜ」

「ふん……」レニィは後ろ頭をボリボリかいて、軽く首を振ふった。「だからそうなっちまったって、自己弁護のつもりかよ」

「それだけでこうはならねえさ。とにかく、俺が言いてえのは、他人のことなんざ考えても、結局、一ダラーの得にもならねえってことだ」

「他人のことを思ってやってるわけじゃねえ。俺は自分のしたいようにしてるだけだ」

　言ってから、納なつ得とくした。

　なるほど。そうだ。俺はどうしたいんだとか、どうすればいいとか。頭があれこれ理り屈くつをこねて自分を正当化しようとしている間も、俺の身体からだはだいたい勝手に動いてやがる。

「──誰だれがどうとか、結果がどうなるとか、いちいち考えてられるかよ。ここではなんでも自由なんだろ。俺は一人で、なんにも背負ってねえしな。やりたいようにやるだけだ」

「……小こ僧ぞうが。簡単に言ってくれるじゃねえか」

「難しいと思うのは、てめえで難しくしてるだけさ。愛して、憎にくんで、生きて、死ぬ。それが人生のすべて──って、誰かが言ってたしな」

「誰の言葉だ」

「秘密だ」

　レニィは石壁から体を離はなして、前方右手の曲がり角に目をやった。そっちのほうから、足音が近づいてくる。メリクルか？　いや、違ちがう。人間だ。五、六人といったところか。話し声も聞こえる。談だん笑しようしている？　余よ裕ゆうかよ。レニィは迷ったが、少し様子を見ることにした。もし連中があまり柄がらの悪くない侵入クラツ者カーたちなら、Ｄ５に異状がないか尋たずねてみてもいい。とはいえ、一応、剣けんの柄つかに手をかけておいた。連中の先頭が曲がり角から姿を現したとき、思わず抜きそうになった。暗視鏡越ごしの青っぽい白黒の濃のう淡たんで浮きあがったやつのシルエットが、メリクルに似ていたからだ。ただ、メリクルにしてはでかい。声も体つきも、やっぱり人間のようだ。

「……む？　な、何やつ！　ぬ、抜くのか、抜こうというのかッ？　もしや略奪者ルーターか？　き、き、き、貴様……私を創ジエネ世シスの翼ウイングの総帥マスター、ファニー・フランクと知っての狼ろう藉ぜきか！」

「あ、いや……あんたのことは知らねえし、狼藉する気もねえよ」

「そ、そうか。それならばよい──が、待てい、待つのだ、ファニー・フラァァンクッ！　そう言っておいて、こちらを油断させようという魂こん胆たんかもしれんぞ、気を抜いてはならん！　いざ、出あえぃ、皆みなの者ッ……！」

　ファニー・フランクを名乗るメリクルもどきの声を聞きつけて、後ろから五人ばかりぞろぞろ出てきた。もっとも、全員、武装はしているものの、なんだか覇は気きがないというか、緊きん張ちよう感がないというか。ふつうなら、命の危険を感じてもおかしくない状じよう況きようなのに、まるで恐きよう怖ふを覚えない。レニィはとりあえずコントと一いつ緒しよに両手をあげてみせたが、こみあげてくるのはむしろ、戸と惑まどい半分の苦笑ばかりだった。

5

「──なるほどねえ。お嬢じようちゃんも、そう見えていろいろ苦労してきたってわけだな」

「い、いえ、それほどでも……」

「いや、謙けん遜そんするこたあねえよ。おめえさんは立派な苦労人だ。しかも、若い身空でこれから一人っきりで生きてかなきゃならねえとなると、やっぱりたいへんだと思うぜ。俺も小せえころに親を亡なくしちまったんだが、兄貴がいたからよ。いつも二人だったんで、なんとかやってこられたってところもあるからな。あのとき、あの場所で、俺一人だけだったら──なんて考えると、ぞっとしねえ。結局、人間ってやつは一人じゃ生きてけねえからよ。おめえさんも、なんでもかんでも一人でやろうとしねえで、ある程度は他人に頼たよったほうがいいぜ。いや、どうせ、頼らなきゃならねえもんだよ」

「そう……なんでしょうか……」

「そうさ」

　骸がい骨こつみたいな顔をしているけれど、このコント・デ・コントさんは、やっぱりすごくやさしい人のようだ。おくすりをのもうか、のむまいか、迷いに迷ったあげく、道みち端ばたにしゃがみ

こんでいたコロナにわざわざ声をかけてくれ、ここが第九区、からなどカンラクガイという場所だと教えてくれて、いつの間にか隣となりに腰こしを下ろし、悩なやみ相談にまで応じてくれている。夕日に照らされたコントさんの横顔は、心なしかキラキラ輝かがやいて見えた。

　ただ、一つだけ、ずっと気になっていることがあって。

「──ところで、つかぬことをおうかがいしますが、そのう……今朝のことで……」

「け、今朝？」

「はい。鶏さんの地下迷めい宮きゅうの前で、コントさんにお会いした折に」

「お……おお！　そうだったな、俺とお嬢ちゃんが初めて会ったのは、メリクル第二迷宮の前だったな！　へっへっへっ。うん。そうだ。ばっちり覚えてるぜ」

「それで、コントさんは、コロ、あ、わたしに、タイマツを」

「松たい明まつぅ？　メリクルに松明だぁ？」

「……もしかして、忘れてしまわれたんですか？」

「あー……いやあ、それは、な……ったく、またしょうもねえことを、クソ兄貴が……」

「あにき？」

「いや！　いや、いや！　それはこっちの話だ。気にしねえでくれ──そうだ！　つまり、俺も勘かん違ちがいしてたのさ。よかれと思ってしたことが、裏目に出ちまったってわけだ。いや、すまねえ。これ、このとおり。謝るから許してくれ。頼たのむよ。な？」

　たしかに、自分では誰だれかのためにと思ってしたことが、裏目に出ることはよくある。大いにある。ありまくる。コロナが力強く何度もうなずいていると、コントさんもほっとしたように一つ息をついて、元気をとりもどした様子だった。

「──そんなことより、だ！　お嬢ちゃんの今後ってやつを考えねえ

となと」

「今後……と、おっしゃいますと？」

「そりゃあ、これからお嬢ちゃんがどうやって飯を食ってくか、だよ。どうも侵入クラッ者カーはうまくねえ。占せん星せい術じゆつでも得意なら、占うらない師を開業するって手もあるが、それも自信がねえんだろう」

「はい……占いは、大の苦手科目でした……覚えなければいけないことが、たくさんありすぎて、コロナにはちょっと……」

「じゃあ、どうするよ？」

「どうしましょう」

「他ほかにアテはねえんだな」

「皆かい無むですっ！」

「だったら、どうだ。ここは一つ、このピント・デ・ピント様に任せてみねえか」

「ぴんと……？」

「おっと、すまねえ、コント・デ・コントだ。まあ、たいしたことじゃねえから気にしねえでくれ。で、どうだ？　さっきも言ったように、人は一人じゃ生きてけねえ。たまには誰かに頼たよることも必要だぜ。そして、さいわい、おめえさんの前にはこの俺がいる」

「──一人では……生きてけない、ですか……」

「おうよ。その様子じゃあ、おめえさんも実感してるだろ？」

「はい……海より深く、実感しています……」

「じゃあ、迷うこたあねえ。大だい丈じよう夫ぶさ。俺は顔が広ひれえからな。お嬢ちゃんに働き口を世話してやるくらい、わけねえよ。ちょうどこの近くにも心当たりがないでもねえしな。ただ、このとおり、とにかく人間が多い街だ。のろのろしてたら、誰か別のやつに決まっちまうかもしれねえ。俺に任せるなら、今ここで決めてくれ。さあ、どうする？」

「是ぜ非ひ、お願いしますっ！」

「そうこなくっちゃな！　よーし、ついてこい、すぐそこの店だ！」

「はい！　コロナ、コントさんのお顔に泥どろを塗ぬらないためにも、精せいーいつ杯ぱいがんばらせていただきますのでっ！」

「その意気だぜ。へっへっへっ……」

6

　居酒屋ＰＵＢ「高貴ノーブルなるハイパー爆乳チツツ」。

　なんつー名前だ。

　だが、その名に違たがわず、この店の接客係は全員やたらと胸のでかい女で、しかも、例外なくその部分を強調するような衣類を身につけている。というか、肝かん心じんな（？）部分を除いて露ろ出しゆつしまくりだ。そんな女たちがツンとした態度で酒だの食い物だのを運んできて、不心得な客の卑ひ猥わいな冗じよう談だんやボディータッチには容よう赦しやなくビンタで返す。それで、高貴なる爆乳かよ。まあ、ハッツフォーには絶対ない種類の店だろうし、物もの珍めずらしくはあるが、居い心ごこ地ちは決してよくない。何せ━目のやり場に困る。

「おお、どうしたのだ、レニィ君。遠えん慮りよせずに飲むがいいッ！」

　かといって、そう鷹おう揚ように麦酒ビアをすすめてくる端たん整せいな顔立ちの美中年を眺ながめているのも、なんだか。つーか、鳥もどきの兜かぶとを脱ぬいだファニー・フランクが、こんな苦み走ったいい男だってのは、ちょっとした詐さ欺ぎじゃねえのか。どうでもいいことだが。

「……あ、いや、俺、酒は……」

「なるほど、そうだな！　その前にあらためて謝るほうが先だ。レ

ニィ君、それから、コント君だったか。先ほどは君たちを略奪者ルーターと間違えてしまい、誠に相済まなかったッ！」

「それはべつに──」と言いかけたら、隣となりのコントが耳打ちしてきた。「いいじゃねえか、黙だまってうなずいとけば。せっかくおごってくれるって言ってるんだからよ」「……そうじゃなく、俺は──」「まだあのコロコロチビちゃんのことが気になんのか？　あのな、何回も言ってるように、あのままあそこで捜さがしてたって、どうせ見つかりっこねえって。さっきファニー・フランク殿どのも、それらしい騒さわぎはなかったっておっしゃってただろ？　きっと、あのチビちゃん、怖こわくなってすぐに引き返したのさ。今ごろ、どっかで元気にやってるに違いねえよ」「……だといいんだけどな」「大丈夫だって。だいたい大丈夫なもんなんだ。それにこの店、俺もたまにくるんだが、悪くねえだろ。せっかくだから、楽しもうぜ」

　悪くないかどうかは知らないが、楽しむ気にはなれない。

　たしかに、ファニー・フランク＋五人は、コロナがメリクル第二迷めい宮きゅうに入る前からなかにいたらしく、彼らが口をそろえて「いつもどおりだった」と証言している以上、コントが期待したような異常事態は起こらなかったと考えるのが妥だ当とうだろう。しかし、かといって、コロナが無事だと結論づけるのは早計だ──が、まあ、鬼人オーガのときだって、あいつはモッドーの隊商を壊かい滅めつさせておきながら、自分だけぴんぴんしていた。意外としぶといやつなのだ。レニィが心配しなくても、周りに迷めい惑わくをかけつつ、なんとかかんとか生きのびてゆきそうな気もする。レニィだって、他人の身の上を案じていられるほど、余よ裕ゆうがあるわけでもないし。

　そんな思いも頭をよぎって、ちょうど地上に戻もどろうとしていたというファニー・フランクの勢いにおされるまま、第九区、クァラナド歓かん楽らく街がいの端はしっこにあるこの店に連れこまれたのだが。

「さあ、これで謝罪もすんだことだし、諸もろ々もろの事こと柄がらもきれいさっぱり水に流して、飲もうではないか！　乾かん杯ぱいッ！」

「……水に流すってのは、どっちかっつーと、俺が言うことじゃねえか？」

「呵か々かッ！　紳しん士しは細かいことを気にしないのだよ、レニィ君。それが漢おとこというものだッ！」

「漢、ねえ……」

　なんだか、恰かつ好こうからして奇き天て烈れつなやつだが、中身もそうとうヤバイらしい。調子よく相あい槌づちを打ってジョッキの麦酒ビアをぐいぐい飲んでいるコント野や郎ろうなんか放ほうっておいて、さっさと店を出ちまうか。麦酒ビアを舐なめて顔をしかめながら、そんなことを考えていると、ファニー・フランクが咳せき払ばらいをした。

「ウォッホン。ところで、レニィ君。君はいくつかね」

「十六」

「ほう！　若い。若いね。若いということはいいことだ。何しろ、それだけ未来があるということだからねッ！」

「若くたって、明日死ぬかもしれねえだろ」

「それはそうだッ！　まったくもってそのとおりッ！　そう、じつは私が言いたいのはそのことなのだよ、レニィ君！」

「……はあ？」

「まだ若い、エルデンにきたばかりの君が、生き抜ぬくために何が必要かという話だ！」

「何がって──」

「それはズバリ！　クランだッ！」

「クラン？」

　レニィが眉まゆをひそめると、骨付き肉をぺちゃくちゃ食っていたコント野郎が心得顔で口を挟はさんできた。

「クランってのはだな。たとえば、侵入クラツ者カーなら侵入クラツ者カー同士が集まって、みんなで仲よくがんばりましょうってな具合によ。一人より二人、二人より三人のほうが安全だし、何かと都合がいいしな。有志の相そう互ご扶ふ助じよ会かいってとこか」

「うむ……まあ、そのようなものだ」

　ファニー・フランクはうなずいたものの、やや不満そうだ。というか、どうも最初からコント野郎にはいい印象を持っていないらしい。そりゃそうか。コントは骸がい骨こつそっくりの顔もアレだが、この店にきてからも、ファニー・フランクたちやレニィより激しく飲み食いしている。まったく、意い地じ汚きたないったらない。

　レニィはため息をついた。なんだか、ぜんぶどうでもいい。疲つかれた。ああもう疲れちまったぞ、畜生。レニィは投げやりな気分を持てあましつつ、一応、訊きいてやった。

「それで──そのクランとやらが、どうしたって？」

「お、おおッ！　そう、そうだ、そうだった、クランだ！　すばらしい、君が加盟にするのにちょうどいい、将来有望な君のように、前ぜん途と洋よう々ようたるクランがあるのだ！」

「へー……」

「あるのだッ！」

「あっそ」

「きょ、興味はないのかね？」

「べつに」

「な、なぜだァッ！　クランには是ぜ非ひ入っておいたほうがいいぞ！　人は一人では生きていけないッ！　このエルデンではなおさらだ！」

「そういうもんかね」

「き、君は若いから、まだわからんのかもしれないが……本当にそういうものなのだ！」

「なんなら、俺が入ってやってもいいぜ」

　と、コント野郎がニタニタ笑いながら手をあげると、ファニー・フランクは露ろ骨こつにイヤな顔をした。

「率そつ直ちよくに言って、君のような中年男は求めていない！　不要だッ！」

「おめえさんだって中年じゃねえか」

「私は創ジエネ世シスの翼ウイングの総帥マスターだ！　ある程度の年ねん齢れいは人間的な重じゆう厚こう感となり貫かん禄ろくとなる！　そう、それは必要であり、歴史的必然なのだッ！」

「ウホッ。歴史的ときなすったか。すげえすげえ、そこまで言えるたあ、たいしたもんだ。ケケケケ。しかし、俺もエルデンの事情には通じてるほうだと思うが、創ジエネ世シスの翼ウイングなんざ聞いたことがねえな」

「だ、黙だまれェッ！　貴様ごときに我々の何がわかる！　だいたい、何者だ、貴様は！　レニィ君の連れだと思い、何も言わなかったが、貴様のことなど最初から眼中にないのだ！　貴様には一いつ杯ぱいたりともおごらんぞ！　よいな、食ったぶんも自分で払はらえよッ！」

「おいおい、今さらそんなケチくせえこと言いっこなしだぜ、総帥マスター」

「貴様に総帥マスターと呼ばれる筋合いはこれっぽっちもなァーいッ！　この、汚けがらわしい下品な骸骨人間め！」

「がっ、骸骨っつったな？　今、骸骨って言いやがっただろ、このメリクル野郎！」

「だァーれがメリクルだ、骸骨ッ！」

「てめえ、ただじゃおかねえ……！」

　コントとファニー・フランクは互たがいに椅い子すを立ってにらみあった。一いつ触しよく即そく発はつってやつだが、勝手にやってろ、というのがレニィの正直な気持ちだ。創ジエネ世シスの翼ウイングの面々も、自分たちの総帥マスターより、店の雰ふん囲い気きを心配している様子だし。

　なんつーか、シラける。やってらんねえ。レニィは自や棄けになって、麦酒ビアをぐびりとあおった。不ま味ずいものはやっぱり不味いが、これが噂うわさの飲まなきゃやってられねえ気分ってや

つか。もしかして、ちょっとだけ、大人になった？　だとしたら、大人なんてろくなもんじゃねえよな、キオ。少なくとも、あんな大人には絶対なりたくねえ──と、ぼんやり骸骨人間とメリクルもどきに目をやったときだった。思わず声がもれた。「……あ」

「なんだなんだ。ずいぶん盛りあがってるじゃねえか。へっへっへっ。でも、そのへんにしといたらどうだ。他ほかの客もいるんだしよ」

　そう言いつつ、コントとファニー・フランクの間に割りこんできた男に、見覚えがあったからだ。

　その男は、コントに唾つばを吐はきかける真ま似ねをしてから、なれなれしくファニー・フランクの肩かたを叩たたいて、「いや、すまねえ。どうせ、俺の兄貴が何か気に障さわることでも言ったんだろ。まったくどうしようもねえ兄貴でよ。昔から弟の俺に面めん倒どうばかりかけやがる。とはいえ、たった一人の血の繋つながった兄弟だし、放ほうっておくわけにもいかねえしな。これ、このとおり、俺の顔に免めんじて許してくれよ」

「……き、君の顔に免じてといっても、同じような顔ではないか」

「ハハッ！　違ちがいねえや！」

　どうやら、弟は顔のことを言われたくらいでは怒おこったりしないらしい。見た目はそっくりだが、弟のほうが人間ができているのか。あるいは、もっとタチが悪いのか。

「まあ、顔は似たり寄ったりでも、中身はちょいと違ったりするんだぜ。そうだ。おい、酒だ、酒持ってきてくれ！　──ってなわけで、詫わびがてら、とりあえず一杯おごらせてくれよ。ほら、兄貴、おめえもこの方に一言謝れって。いい年して、大人げねえんだからよ、おめえは。あ？　なんだ？　何ウィンクなんかしてやがんだ、気持ち悪わりぃ。ん？　なんだよ、大だい丈じよう夫ぶだって、心配することねえ、金ならあるよ。ついさっき、道みち端ばたでコロコロうるせえチビちゃんを拾ってよ。こいつが偶ぐう然ぜんも偶然、兄貴のことを知ってやがってな。俺を『コントさん』なんて呼びやがるもんだから、思わず兄貴になりすましちまったぜ。へっへっへっ。だから、不細工なツラでウィンクはやめろって。でな、そのチビちゃんが仕事がねえとか言うもんだから、メイデン・メイドを紹しよう介かいしてやって──といっても、売り払ったみて

えなもんだけどな。さすがに人聞きが悪わりぃからよ。とにかく、それで懐ふところがあったけえ――し……って――ぐげっ」

「ここで会ったが百年目ってやつだな」

　レニィはピント・デ・ピントの胸むなぐらをつかんで揺ゆさぶってやった。ピントはまだ状じよう況きようを把は握あくできていないのか、ぐえぐえげえげえ呻うめきながら、ただただ目を白黒させている。兄貴のコントが必死のジェスチャーでレニィの存在を知らせようとしていたのに、気づかなかったのが運の尽つきだ。

　もっとも、今は、昨夜、レニィにＤ４をすすめたことなんてどうでもよかった。

　それどころじゃねえ。

　紹介？　売り払っただと……？

　くそったれ。

　あの――馬ば鹿か。馬鹿コロナ！　いったいぜんたい、何やってやがるんだ！

「そのメイデン・メイドってのはなんだ。てめえ……コロナをどうしやがった！」

7

　お化け粧しようをしたのは初めてだ。

　鏡に映った自分の顔を、こんなにまじまじと見つめるのも、これが初めてかもしれない。

　洗って丁てい寧ねいに梳くしけずった髪かみの毛に。

　おしろいを塗ぬった頬ほおに。

　口紅をつけた唇くちびるに。

　肩かた紐ひもでつっただけの薄うすい服を着せられて、剝むきだしの肩に。

　指で、そっと、ふれてみる。

　――これが、わたし。

「うぅん、いいんじゃなぁい？」

　鏡のなかのコロナの肩の上に顔を出したのは、身み繕づくろいを手伝ってくれたドナさんだ。というより、ほとんどドナさんがやってくれたのだけれど。

　くるくるの黒い髪が長くて、たぶん、コロナより二つか三つ年上のドナさんは、眠ねむそうな目の下にクマができているものの、かわいらしい人だ。でも、顔色がよくないし、疲つかれたようなしゃべり方だし、なんだか具合が悪そうで、心配になる。

「……なぁにぃ？　あたしの顔になんかついてるぅ？」

「あ、いえ、その……お加減がよろしくないのではないかと……」

「いっつもこうだからぁ、気にしないでぇ。てゆうかぁ、他人のこと気にしてる場合じゃないよぉ、ヴァイオレットちゃん」

「え、えと、バイオレット――そ、そっか、今日からそれがコロナの名前ですものね」

「髪と目が紫むらさきだからねぇ。安易だよねぇ。うちの店長ってホンット、バカだからぁ。でもぉ、キレると超ちよう怖こわいからさぁ、逆らっちゃダメだよぉ？　あたしみたいに使いものにならなくされるからねぇ」

「……ドナさんは、使いものにならないんですか……？」

「まぁねぇ。けどぉ、ここでこうして働いてられるだけマシかもねぇ。あたしみたいなのぉ、外じゃ生きてけないしねぇ」

「コロ――あ、ば、バイオレットも、あまり上手に生きてはいけないようです……」

「そっかぁ。でも大丈夫よぉ。ヴァイオレットちゃん、その髪とか

目とか珍めずらしいしぃ、いっぱいお客つくよぉ。かわいいしねぇ」

「か、かかかかかか、かわいいっ？　コロナが、ですか……？」

「ヴァイオレットぉ」

「あぅ、そうでした、バイオレットです」

「かわいいよぉ。マジでぇ」

　ドナさんは、にへら、と笑った。この狭せまい部屋は、お化粧道具や衣い装しようでちらかっていて息苦しいけれど、ドナさんの笑え顔がおを見ると、すごく癒いやされるかんじがする。それに、コロナをさわるドナさんの手つきは、とてもやさしかった。コロナはすっかりドナさんを好きになってしまった。でも──

「終わったか」

　ノックもなく、部屋のドアが開いた。入ってきたのは、耳や鼻にたくさんピアスをつけて、目が緑っぽく、灰色の髪を短くしている男の人だ。緑色といえば、ロム・フォウさんの瞳ひとみがエメラルドグリーンだったけれど、印象がぜんぜん違ちがう。ロム・フォウさんは深い森の色。この人は──濁にごって、腐くさった、水みたいな緑色だ。

　名前は、たしか、ミカエル・クルエルフォート、だったと思う。このお店のなかで一番偉えらい人らしく、みんなからは「店長」と呼ばれている。そして、どうやら恐おそれられているようだ。

　コロナも、ちょっと怖い。この人のことは、なかなか好きになれないような気がする。

「ほう……」その店長さんが、コロナを見るなり、顎あごを撫なでながら目をすぼめた。「思ったより悪くないな」

「ですよねぇ。あたしもぉ、メイクしててそう思──」

「誰だれがお前に意見を訊きいた」店長はドナさんの言葉を冷たくさえぎって、コロナに顎をしゃくってみせた。「こい。店に出る前に教育だ。お前ら女どもは犬のように調教しないと使えないからな」

「あ……は、はい」

「のろのろするな。ドナ、お前もだ」

「……はぁい」

「た、ただいまっ……！」

　コロナは慌あわてて立ちあがったけれど、店長はもう部屋から出ていた。急がないといけない。コロナはだるそうなドナと一いつ緒しよに店長のあとを追って、薄うす暗ぐらい地下の廊ろう下かを少し進み、別の部屋に入った。そこはコント・デ・コントさんとコロナが最初に通された部屋で、応接セットや執しつ務む机などがあり、壁かべには絵も飾かざられている。コントさんはここでコロナを店長に紹しよう介かいして、なぜかお金を受けとると、「じゃあ、お嬢じようちゃん、しっかりがんばるんだぜ」と言い残して去っていった。あのときは心細かったけれど、今はドナさんがいる。店長と二人きりだと空気が重いので、ものすごく助かる。

「──仕事の内容を簡単に説明する。何度も同じことを言うのは面めん倒どうだ。よく聞け」

　応接セットのソファに腰こしかけて、人の目も見ないでそう言う店長の態度は、なんだか横おう柄へいだし。偉い人だから、しょうがないのかもしれないけど。

「うちはお前みたいな年とし恰かつ好こうの女が男を接待して、金を巻きあげる店だ。少女のメイお手伝いデン・さんメイドって名前からして想像はつくだろうが、ようするに常連は全員ロリコン野や郎ろうだと思っていい。お前は十五らしいが、もっと幼く見えるからな。客に年を訊かれたら十二と答えろ。いや、十一でいい。ドナ、次はもっと餓が鬼きっぽく見えるメイクをしてやれ。いいな」

「はぁい」

「返事はしっかりしろ。お情けで置いてやってることを忘れるな」

「……はい」

「次だ」店長はようやくコロナをちらりと見て、「接客の基本を教える。といっても、酒の作り方なんかはあとでドナに訊け。それより大事なことだ。とりあえず、基本姿勢。客についたら、まずここ

だ」と、自分の右みぎ膝ひざを叩たたいてみせた。

「……ここ、とおっしゃいますと？」

「座るんだ。やってみろ」

「え、と……は、はい、それでは、失礼しまして──」

　かなり謎なぞめいた指示だけれど、やれと言われたらやらなければならないのだろう。何しろ、これは仕事だ。説明されたところでは、今後しばらくつづく見習い期間は衣食住が保証されるだけだが、そのうちお給料だってもらえるらしい。コロナはこわごわと店長の右膝──というより、右の太ももの上に、窮きゆう屈くつだけれど、なんとかバランスをとって、行ぎよう儀ぎよく正座することができた。

「こ、これでよろしいでしょうか？」

「……よろしくない。向きが逆だ。初しよっ端ぱなから客にケツを向ける馬ば鹿かがどこにいる。それはオプションで──そうだ、いや、こっちを向くまではいいが……座り方が違う。正座じゃない。違う。横座りも違う。あぐらをかくな。そうじゃなくて、俺の膝をまたぐように座れ──そうだ。これが基本姿勢だ。お前の座る場所は椅い子すじゃない。客の膝の上だ。わかったな」

「は、はい、な、なんとか……でも、きゃっ、ゆっ、揺ゆらさないで、くださいっ……！」

「これも基本料金内のサービスだ。客は足を動かしてお前の反応を楽しむ。いいか、客が喜ぶような反応を心がけろ」

「えっ、あっ、やんっ、ちょっ、と、待って、くだ、さいっ、おまたが──よ、あっ、喜ぶって、ど、どう──あんっ」

「お前の場合、演技する必要はなさそうだな。そんなふうに騒さわいでいれば、客は喜ぶ。ただし、絶対に嫌いやがるな。客がどんなに不細工だろうと、不潔だろうと、臭くさかろうと、嫌な顔をする権利はお前にはない。相手が規定の料金を払はらっているかぎり、な」

「……は、はい。お仕事……ですものね」

「そうだ。のみこみがいいな」

「そ、それほどでも」

「その調子で言うとおりにしていれば、丁てい寧ねいに扱あつかってやる。ドナのように飼い主の手を嚙かんだりしなければ、俺はいい主人だ」

　実際、そう言ってコロナの頭を撫でた手つきは、奇き妙みようなくらいやさしかった。表情も微笑ほほえみに近かったけれど、それはやっぱり似て非なるものだった。店長の笑顔を見ても、コロナの胸はあったかくなるどころか、かえって冷たくなった。理り屈くつ抜ぬきで、この人は悪い人だと思った。店長は平気で他人を傷つける人だ。それを楽しいと感じる人だ。

「よし、一度下りろ」

「……はい」

　コロナは逃にげるように店長の膝から下りながら、自分の決断を疑っていた。もしかしたら、間ま違ちがいだったのかもしれない。この仕事を紹介してもらったこと。コントさんを信用したこと。レニィさんと別れたこと。お師し匠しよう様に出て行けと言われて、あっさりうなずいたこと──こんな自分に生まれてきたこと。ぜんぶ、何もかも、間違いだったのかもしれない。

「ヴァイオレット。お前は客に酒を作って飲ませ、膝の上に座って、くだらない無む駄だ話につきあったり、揺らされたりして、楽しませる。ここまでが基本料金だ。もっとも、これでおしまいという客は少ない。客がお前を気に入ったら、お前に金を握にぎらせる。そうしたら、お前はどうする」

「……ど、どうすれば……？」

「当然、もっと客を楽しませないとならない。その方法は料金に応じて決まっているが、とりあえず、一番安くて、簡単なやり方を覚えてもらう。ドナ、手伝ってやれ」

　店長に命じられたドナさんが、コロナの背中に回って後ろから両手をつかんだ。「……ごめんねぇ。これがあたしの仕事だからさぁ……」耳みみ許もとでささやく、ドナさんの、声。ぞくっとした。ドナさんはコロナに謝っている。どうして？　なぜ謝ったりする

の？　店長はソファにふんぞり返っている。コロナはドナさんに押しだされるような恰かつ好こうで、店長に近づいてゆく。

「いいか。さっきも言ったように、絶対に嫌な顔をするな。それも仕事のうちだ」

「……何を、するんですか……？」

「なんでもするんだ。お前のような餓鬼がこの街で食っていこうとするなら、どうせ苦く界がいに身を沈しずめる以外にない。覚かく悟ごを決めろ」

「く、くがい……？」

「そうだ。他ほかに売るものがなければ、自分の身体からだを売れ。それとも、何かあるのか。才能。教養。なんでもいい。自分を切り売りせずに生きていくための力が、お前にはあるか」

「そ、れは──」

　ない。何もない。本当に、ない。だから、お師匠様に見捨てられた。ミヤお姉さんにも厄やつ介かい者だと思われていた。ネロさんに罵ば倒とうされても仕方ない。それに──あの餞せん別べつの剣けんだって。あれをお師匠様だと思って大切にしようと心に決めていたけれど、きっと、ネロさんの言うとおりなんだ。仮にも魔ま術じゅつ士しに、剣なんて。所しよ詮せん、倉庫に眠ねむっていた貰もらい物で、処分に困っていて、ちょうどいいとばかりにコロナに押しつけただけだろう。

　そんなこと、わかっていた。

　そうじゃないかと思っていた。

　でも、お師匠様だって、断腸の思いで、やむをえず、むしろ、コロナのために、コロナを破門するより他になかったんだって──信じたかった。信じようとしていた。なんて都合のいい妄もう想そう！　コロナなんて、実験にも使えない、不要品でしかないのに……！

　何も、ない。

　こんなコロナが生きてゆくには、なんでもしないと、だめなん

だ。

「ズボンをおろせ」

　店長が上半身をのけぞらせるようにして、視線で自分のズボンを示した。

　ドナさんが、コロナの両手を導く。

　コロナは唇くちびるをきゅっと噛んで、目をつぶった。

8

　おいおい。少女のメイお手伝いデン・さんメイド。なんだよ、この店。外装はあくまでキラキラかつメルヘンで、玄げん関かんホールは鏡張り。そのなかで、道行く者たちにしなを作ってみせる、餓が鬼き、餓鬼、餓鬼。上はせいぜい十六、七か。下は十歳以下に見えるやつさえいた。そんな少女たちが、スケスケだったりヒラヒラだったりする煽せん情じよう的な衣い装しようを身にまとい、コント＆ピント兄弟を無理やり引っぱって店に突とつ入にゆうしようとしたレニィに「いらっしゃいませ」の大合唱だ。まあ、すぐに黒スーツ姿の男が二人ばかり出てきて「なんのご用ですか」とすごまれたが。舐なめるなよ。てめえらなんざ、鬼人オーガやら訓練された狼おおかみやらに比べたら、物の数じゃねえ。

「人を捜さがしてる。どうやらここで世話になってるらしいんでな。つーか、ついさっき、この馬ば鹿かが──」と、レニィはピントの後頭部をはたいた。「いだっ」「この店に紹しよう介かいしやがった餓鬼がいるだろ。そいつを返してもらいにきた」

「突然そんなこと言われましてもねえ」頬ほおに刺青いれずみのある黒服の一人が、ピントを一いち瞥べつして肩かたをすくめた。「うちはしごくまっとうな店で、人買いしてるわけじゃありませんし。返すだのなんだのってのは、ちょっとおかしな言い種ぐさじゃないですか」

「すっとぼけるつもりかよ」

「そういうつもりはないですがねえ。まあ、どっちにしろ、ここには女の子も大勢います。どこか落ちついて話せる場所に──」

「阿あ呆ほう。その手は食わねえよ」

　レニィはいきなり刺青男の顎あごに右の掌しよう底ていを見み舞まい、もう一人の優やさ男おとこっぽい黒服が身構えるより早く、そいつの鳩尾みぞおちに左の肘ひじ打ちを叩たたきこんだ。少女たちの悲鳴がこだまして、コント＆ピント兄弟が「げっ」「お、ま、ばっ」と妙みような声をもらしたが、かまうものか。どうせ、こいつらだってレニィを裏に連れこんでリンチしようとしていたに違いないし、やられる前にやるのが喧けん嘩かの鉄則だ。エルデンだろうが、モルグステン市の下町だろうが、所詮、下げ衆す下げ郎ろうの喧嘩は、度胸、気き迫はく、勢い、そして、何より、数。現状、数はどうしようもないので、前者の三つで相手を制するしかない。レニィはふらふら状態の刺青に足あし払ばらいをかけ、容よう赦しやなく喉のど仏ぼとけを踏ふんづけてから、うずくまっている優男を起きあがらせ、鼻柱に思いきり拳げん骨こつを食くらわせた。「──ぶごっ！」鈍にぶい、いい音がした。鼻血がダラダラ出た。

「おい、コロナはどこだ」

「……こ、こ、コロナ……って……」

「今日、このピント野郎がここに連れてきた餓鬼だ。どこにいる。教えろ」



「し、知ら……ない、俺は、さっき、しゅ、出勤したばっかり、で……」

「あっそ。だったら、てめえに用はねえ」

　レニィは顔面血だらけの元優男を殴なぐり倒たおし、少女たちや

少数の客がキャーキャー悲鳴をあげたりギャーギャー騒さわいだりあたふた逃にげたりしている店内をぐるりと見まわした。やっぱりコロナはいないようだ。まあ、でも、強きよう行こう突破するなら、わざわざ店の人間に訊きく必要もねえか。

「ピント、てめえが案内しろ。コロナを連れて行った場所だ。まさか忘れちまったってことはねえだろ」

「……ば、馬鹿野郎、おめえさん、なんてことを……」

「そ、そうだ、こんなことして──ピ、ピント、お、おお俺たちだけでもずらかろうぜ。今なら、まだ──」

「おい！　コント・デ・コント様とピント・デ・ピント様が、わざわざ兄弟そろって餓鬼を取り返しにきてやったぞ！　おとなしく渡わたせば、ピントが受けとった金は返してやる！　責任者、出てこい！　いいか！　コント・デ・コントと、ピント・デ・ピントが──」「って！」「おめえさん、何を……！」大声で叫さけぶレニィの口を、コントとピントが両側から大おお慌あわてでふさいだが、もう遅おそい。店の奥のドアから飛びだしてきた別の黒服二人も、コントとピントを見み逃のがしはしないだろう。もちろん、レニィだって、地じ獄ごくまででもこの兄弟を引きずってゆくつもりだ。でも、その前に、一働きしてもらわねえとな。レニィは兄弟の襟えり首くびを引っつかんで、迫せまりくる黒服のほうへと突つき飛ばした。「どぅわっ」「ごっ」「ぼっ」「めっ」こうして黒服の突進を止めておいて、順々に、しかし、息つく間も与あたえずに、一人の延えん髄ずいに手刀！　もう一人の顎に膝ひざ！　ドガボゴッ！　それで戦せん闘とう不能になったかどうかは知らないが、再びコントとピントをつかまえて、黒服どもが出てきたドアの向こうへと突とつ貫かんだ。そこは薄うす暗ぐらい廊ろう下かだった。右手に厨ちゆう房ぼう、その先にもドア。左手にもドアがいくつか並んでいる。「どこだ、ピント！」「……つ、突き当たりの階段を……」「よし、こい！」レニィはあらがうコントとピントを蹴け飛とばしつつ走る。「待て、こらぁ……！」後ろから黒服どもが追ってくる。店の騒ぎを知って、外から駆かけつけてでもきやがったか。くそったれ。階段。階段か！　だったら──と、コントとピントを突き落として、レニィ自身は駆け降おりる。踊おどり場で回収したコントとピントを、またぶん投げる。兄弟はもう、どこかがおかしくなっちまったのか、転げ落ちながら、ゲラゲラギヒョギヒョ笑っている。なぜかレニィもわりと楽しくなってきた。楽しんでいる場合じゃないが。階段もすぐに終わった。地下一階。右手奥の──

あのドアか。とくに根こん拠きよはなかったが、レニィにはわかった。直感ってやつだ。疑う必要はない。レニィはコントとピントを、ほとんど担かつぐようにして走った。いくら瘦やせているとはいえ、大の男二人を、だ。それなのに、軽い！　どうやら、俺もおかしくなっちまったらしい。それでもいい。レニィはあっという間にそのドアの前まできて、蹴り開け――ようとしたら、勝手に開いた。

　開いたドアの向こうには、鼻やら耳やらにピアスをつけた灰色の髪かみの男が立っていた。ドアを開けたのもそいつらしい。なんだか妙に薄気味の悪い男だが、それよりもなんでこいつ、ベルトを外して、ズボンのファスナーが下りてやがるんだ……？

「あ、ら、ミカエル……さん」

「ピントか。なんの用だ。というより、なんの騒ぎだ。お前は――」ミカエルと呼ばれた男は、駆けつけてくる黒服をちらりと見てから、ロム・フォウとはまったく違ちがう、不快な緑色の瞳ひとみにレニィを映した。「嫌いやな目つきだな、餓が鬼き。営業妨ぼう害がいの主犯はお前か」

「その餓鬼よりも幼い連中を使って金を稼かせいでやがる下げ衆すの親玉はてめえだな」

「俺は単なる雇やとわれ店長だ。親玉じゃない」

「言い逃のがれかよ」

「事実を言っているだけだ」

「御ご託たくはいい。コロナは――」

　と、ミカエルにつめよろうとしたレニィは、その後ろに信じられないものを見た。

　いろいろな意味で信じられない。

　あのボサボサだったスミレ色の髪の毛が、きれいに整えられ、まっすぐになっていて。野や暮ぼったい、というか、時代錯さく誤ごな魔ま術じゆつ士し装しよう束ぞくなんかじゃなく、ピンク色の――ドレス、とでもいえばいいのか。薄手で、てらてらしていて、肩かたがべろっと出ていて、なんつーか、あいつにはまったく似合わ

ない──こともないのだ。これが、不思議と。きれいに化け粧しようなんかもしてやがって。あのとおり体はちんまりしているものの、ちょっと、本当にちょっとだけだが、レニィはドキッとした。う、かわいいじゃねえか、とか思ってしまった。少なくとも、やつと抱きあうようにしてこっちを見ている黒髪の女よりは、ずっとかわいらしかった。

　でも、昨日別れたときよりも十倍大人っぽくて、百倍いいかんじのコロナが、あんな恰かつ好こうで。ミカエルのズボンのファスナーが下りていて。ここはいかがわしい店で。ミカエルは店長で。

　それは、つまり──

「れ、レニィさん、どうして……ここに？」

　コロナは、かわいそうに、震ふるえていた。ぶるぶるぶるぶる震えていた。すげえ震えまくっていた。おい。マジかよ。なんだよ。何されたんだ？　コロナ。てめえ、まだ十五じゃねえか。俺より年下じゃねえか。まだそんな年じゃねえだろ。違うだろ。コロナ。おい。コロナ。おい、おい、おい、おい……！

「てめえ……」

　レニィはミカエルをにらみつけた。全身の血がわきたつ。風を、感じた。髪が逆立って、空気がバチバチいった。ミカエルは、明らかに怯ひるんだ。闖ちん入にゅう者しやをとりおさえようとしていた黒服連中の腰こしが引けて、コントとピントは「ひいっ」「うあっ」と尻しり餅もちをついた。

「コロナに、何をした」

　ミカエルは生なま唾つばをのみこむだけで、答えない。

「何をした」

「……ただの、新人教育だ」

　ようやく返事をしたミカエルの声は、か細かった。ただ、こいつの腐くさった目は死んじゃいない。まだ力がある。意固地な、ちっぽけな、力が。生意気な。そうだ。そうだよ。生意気だよー。やっちゃえ！　やっつけちゃえ！　ふっ飛ばしちゃえ（だめだよ）！　力を貸すよ（だめだ！）？　やろっ！　やっちゃおう！　そうだ

（だめだよ、レニィ）。うるせえ。ねじ伏ふせてやる。めちゃくちゃに引き裂さいて──この、緑色の目を。あの、エメラルドグリーンの瞳が。ロム・フォウ。ああ。ロム・フォウが言う。『精せい霊れいとうまくつきあうすべを知らないで、彼らの力を濫らん用ようすると、いつか魂アニマを奪うばわれてしまう』

　──駄だ目め、なのか……？

　そうか。

　駄目なんだな、キオ。

　レニィは深呼吸して、少し気を静めてから、ゆっくりと剣けんの柄つかに手をかけた。大だい丈じよう夫ぶだ。やつらの力は借りない。俺はきっと抑おさえてみせる。

「もう一度だけ訊きく。コロナに何をした。ちゃんとわかるように話せ。ふざけたことぬかしやがったら、叩たたっ斬きる」

「……まだ、たいしたことはしちゃいない。おそらく、お前が心配するようなことは」

「本当だな」

「嘘うそをついても得はなさそうだ」

　さっきからミカエルは、ゆっくりファスナーを上げながら、じわじわとあとずさっている。何か企たくらんでやがるのか。だが、脅おどしをこめて少しだけ剣を抜ぬくと、ぴたりとミカエルの動きが止まった。レニィはそれを確かく認にんしてから、ピント・デ・ピントの肩を乱暴に蹴ったくった。

「金を出せ。やつにもらった金、ぜんぶだ」

「……は、はい……」

「つーわけだ。金と引き換かえに、コロナは返してもらう……！」

　そう宣言するなり、レニィは剣を鞘さや走らせる真ま似ねをして前進した。当然、丸腰のミカエルは下がらざるをえない。意外と油断のならない身のこなしで、部屋のなかへ──ミカエルは奥の執しつ務む机に駆かけよって、その脇わきに立てかけていた剣を手にとっ

た。そのときにはもう、レニィはコロナの腕うでをとっていた。

「帰るぞ、コロナ」

「……レニィ、さん……」

「こい」

「でも……でも、コロナ……」レニィを見上げるコロナの両目が、こらえきれない涙なみだで濡ぬれはじめた。「コロナ……何も、できないから……コロナには、なんにもないから、こんなことでも、しないと……生きてけないです。しょうがないしょや。だって、コロナ……」

「そんな話はあとだ。このままここにいるか、俺についてくるか、お前はどっちがいい」

「それは──」

　身体からだは心よりも正直らしい。コロナの両手が、しがみつくように、ぎゅっとレニィの腕をつかんだ。それは明確な答えじゃないと誰だれかが言っても、レニィは絶対に認めない。

「行くぞ」

　コロナはまだ迷っている様子で、黒い髪かみの女のほうへ目をやった。少し苛いらついたが、その女が力強くうなずいたのを見て、ようやく決心がついたようだ。

「……はい……」

「よし。じゃあ、騒さわがせて悪かったな」

「それですむと思うか」

　当然、ここまでやっておいて、「はい、さよなら」で片がつくとは、いくらなんでも思っていない。ミカエルはすでに剣を抜いているし、黒服連中も棍こん棒ぼうを手にコントとピントを引きずって、部屋のなかへぞろぞろ入ってきた。つまり、完全に包囲されていて、逃にげ場はなく、状じよう況きようは最悪に近い。どういうわけか、あの黒髪の女が「もぉいいじゃないのよぉ、お金は戻もどってくるんだし、あのこ、どうせこの仕事には向いてないからぉ

──」とミカエルにとりすがったが、すげなく振ふり払はらわれた。
「どけ。ここまで虚こ仮けにされて、黙だまって帰すわけにはいかない」

「……だよな、やっぱり」

　まあ、モルグステン市の下町で、極道モブスタどもを間近に見て育ったレニィも、そのあたりのことはだいたい理解できる。かといって、こちらが下手に出れば、どこまでもつけあがるのがこういう手合いの習性だ。とにかく、先手をとって一時的にでも優位に立たないことには、まともに話もできない。ましてや、レニィは餓鬼きだ。金は返すから、なんて甘い要求が通るはずはなく、それなら倍よこせ、と言われて追い払われるのがオチなので、こんな荒あらっぽい方法をとるしかなかった。

　とはいえ、後先考えず、ただ突つっこんできたわけでもない。

「わかった」レニィは剣を鞘に納めて、一つ息をついてみせた。
「コロナを返してもらえるなら、落とし前はちゃんとつける。煮になり焼くなり好きにしてくれていい」

「ほう」

「……レニィさん！」

「お前は黙ってろ、コロナ。で、いいな。これで手打ちってことで」

「まあ、妥だ当とうなところだろう」

「話がわかるじゃねえか」

「レニィさん、そんな……！」

「じゃ、そういうわけで」

　レニィはうるさいコロナを抱かかえるようにして──コントとピントに手を振ってみせた。

「自分で蒔まいた種ってやつだ。芽が出て花が咲さいて実が熟したら、しっかり自分で摘つまねえとな。兄貴のほうは弟の連帯責任ってことで、仲よく面めん倒どうみてもらえよ」

「……へ？」「俺──たち……？」

　コントとピントは、二人とも自分を指さしてぽかんとしている。

　レニィはうなずいてやった。

「あたりまえだ。もともと店長サンにババ引かせやがったのは、いったい誰だよ。ピント、てめえだろうが」

「──えっ、いや！」「それは、でもっ……！」

「連れて行け」

　ミカエルの命令で、コントとピントは黒服連中に引き立てられていった。まあ、何をされるのかわからないが、命まではとられないだろう──たぶん。いずれにしても、さんざん他人を陥おとしいれ、迷めい惑わくをかけたあの兄弟には、とびきり苦くていい薬になるに違ちがいない。

9

　今日も今日とて日が暮れて、明日は明日の風が吹ふく。

　もっとも、クァラナド歓かん楽らく街がいの一日は始まったばかりらしい。

　モルグステン市ではお目にかかれないような、派手なネオンサイン。どぎつく着き飾かざった女たち。欲望にぎらつく男たち。眠ねむらない街ってやつか。その必要があれば、徹てつ夜やくらいなんでもないが、基本的に早はや寝ね早起きがモットーの俺には、本来、縁えんがなさそうな場所だ。もちろん、それは俺だけじゃなく──こいつだって。

　コロナはレニィの斜ななめ後ろを歩いている。つかず離はなれず、というよりは、離れずつかず。だいたいうつむいていて、たまに顔を上げてレニィの姿を確かく認にんする。例の古典的な魔ま術じゅつ士し装しよう束ぞくに着き替がえ、木の杖つえに、背中には剣けんもくくりつけているが、化け粧しようは落としていないの

で、なんだか妙みような具合だ。今のツラなら、やっぱりあの衣装のほうが似合う。

　ただ、なんとなく、あの恰かつ好こうはレニィの魔法剣と同様、封ふう印いんしたほうがいいような気がする。

　だって、変な男に気に入られて、つきまとわれたりでもしたら、面倒くせえだろ……？

「コロナ、お前」レニィは振り返らずに尋たずねた。「どこだ、宿」

「あ。はい、えと……外で」

「外ぉ？　てめえ、まさか、昨日も野宿しやがったのか」

「ちょうどよい芝しば生ふがありましたので……何か、まずかったでしょうか？」

「明らかにまずいだろ。あんな店もあるくらいだしな。寝てる間に、何されるかわかったもんじゃねえ」

「……そう……ですね。気をつけます。これからは、できるだけ、人目につかない場所に」

「そうじゃねえだろうが！」

「ほ？」

　足を止めて振り返って怒ど鳴なったレニィを、コロナが小首を傾かしげて見上げている。なぜか、心臓が。不整脈？　しかし、こんなのでも、ちゃんとすれば、結構見られるんだな──って、何を考えてやがる、俺。コロナだぞ。馬ば鹿かコロナ。こいつがどんなことをしでかしたか、忘れるな。モッドーの隊商を壊かい滅めつさせて──あれもそうとうな惨さん劇げきだよな。サンランドじゃなけりゃ、市中引き回しのうえ磔はりつけ獄ごく門もんにされても文句は言えねえ。今回だって、ピント野や郎ろうに騙だまされて、もう少しでとんでもないことに。おかげでこっちが危ない橋を渡わたる羽目になった。まあ、それは自じ業ごう自得というか、自分で選んでやったことだが。

　そう。

　レニィはいても立ってもいられなくなって、コロナを助けた。放ほうっておけない。そう思ったのは、レニィの勝手で。もしレニィが介かい入にゅうしなければ、コロナはあの店で働いて、いやな目に遭あいつつも、それなりに生きていったかもしれない。たとえレニィが見ないふりをしても、ああいう世界は厳然と存在していて、そこに生きる人間がいるのも事実なのだ。コロナがその住人になったとしても、おかしくはない。似つかわしくないとは思うが。でも、そうなりかけていた。欺あざむかれた結果とはいえ、コロナはそっちへ進もうとしていた。レニィが連れ戻もどしたのだ。あとはもう知らねえ、好きにやれ、とは言えない。少なくとも、変態野郎にイタズラされる危険のない寝ね床どこくらいは見つけてやるべきだろう。

「とりあえず、今日は俺が部屋を借りてる宿にこい。空き部屋は──なんだか繁はん盛じょうしてるっぽいから、ねえかもな。まあ、しょうがねえ。狭せまいけどな。俺は床ゆかでいいから、てめえはベッドを使え」

「え……で、でも」

「なんだ。なんか問題あるか」

「そのう……お、男の人と、同じ部屋で、なんて……」

「馬鹿、てめえなんか襲おそうかよ！」

「そんなっ。コロナは最初から対象外ということですかっ！　ひどい！」

「ったりまえだ。てめえみたいなちんまりした餓が鬼きに欲情するほど見境なしじゃねえ！」

「で、ですが、ドナさんは、コロナのことをかわいいとおっしゃってくださいましたもの！」

「ドナだか旦だん那なだかバナナだか知らねえが、そいつの目が腐くさってんじゃねえのか」

「そんなことありません！　ドナさんは、コロナにやさしくしてくださいました！　コロナはいいですけど、ドナさんのことは悪く言わないでくだ──ぁ……」

　と、不意にコロナが口をつぐんでうなだれた。なんだ。どうしたんだ。何か変なことでも思い出しちまったか。それとも、急に具合でも悪くなったか。レニィは「おい……」とコロナの肩かたにふれようとしたが──よけられた。

「……やっぱり、だめです。ご厚こう意いは、とても嬉うれしいのですが……コロ、あ、わたし、調子に乗って、また……」

「いや、俺はべつに──」

「だめなんです！」

　スミレ色の目は、レニィが気け圧おされるくらい真剣だった。それ以上に、せっぱつまっていた。何がこいつを追いつめてるんだ？　こいつはなんで泣いてるんだ……？

「──コロナは……わたしは、一人でちゃんと生きてけるようにならないと。そうしないと、いつまでたっても、いらないこです。どうせ──誰だれにも、必要とされてないですから。コロナは、邪じや魔までですから。迷惑ですから。コロナだって、それくらいわかりますよ？　どれくらい、コロナが、いらないこか……知ってます。それでいいなんて、思ってないです。コロナだって、いやです。こんな自分がいやです、嫌きらいです。大嫌い。死んでしまいたい。消えちゃいたい。どうしてコロナは生まれてきたんですか？　なんでお父さんとお母さんはコロナを生んだですか？　あげく、すぐいなくなって。お父さんも、お母さんも、おばあちゃんも、おじいちゃんも、お兄ちゃんも、みんなコロナを置いて死んじゃって。無責任だって思うコロナが、嫌い！　いなくなればいいんです！　でも、できないから……！　コロナは、いやなこです！　誰にも必要とされないのに、本当は好かれたいし、だいじにしてもらいたいし、やさしくしてもらいたいし、そのために生きていたいんです！　でも、無理でしょや。わかってますよ？　だから、コロナは、一人でちゃんと生きてけるようになりたいです。ならなきゃです。それで、コロナは、コロナにやさしくしてあげます。コロナのことを、ちゃんと好きになってあげたいです。だから、そのために、もう誰かに頼たよっちゃだめなんです。一人でなんでもしないと、だめなんです……！」

　呆ぼう然ぜんとして立ちつくしているレニィに向かって、コロナはぺこりと頭を下げてみせた。

「助けていただいて、ありがとうございました。本当に、嬉しかったです。このご恩は、いつか立派なコロナになったときに、必ずお返しします」

　そして、コロナは行ってしまう。

　レニィに背中を向けて走りだす。

　一人きりで。

　小さいくせに。お人ひと好よしで、すぐ騙されるくせに。魔ま術じゆつもろくすっぽ使えないくせに。一人で、なんとかしようと。頼りない、瘦やせた、ちっぽけな背中を、レニィはただ見送っている。

　あいつを止める権利が俺にあるのか？　その理由は？　根こん拠きよは？　その必要は？

　──と、十メーテルも行かないうちに、コロナがこけた。

　ああ。

　そうだ。理由なら、ある。つまり、いつもと一いつ緒しよだ。

　レニィはコロナに駆かけよって、助け起こした。

「コロナ」

　俺がそうしたいから、そうする。

　間ま違ちがってるって言うなら、誰でもいい、俺を否定しやがれ。

「所しよ詮せん、人は一人じゃ生きてけねえらしいぞ」

　スミレ色の瞳ひとみが、うるんで、揺ゆれている。

　口紅をつけた唇くちびるが、震ふるえている。

「考えてみりゃあ、たしかにそのとおりだ。俺だって一人で生きてきたわけじゃねえ。お前もそうじゃねえのか。一人で何もかもやるなんて、誰にもできっこねえよ」

「……ですが……コロナは……」コロナはぶんぶん首を振ふって、涙なみだをまきちらした。「コロナは！　レニィさんとは違います……！　今まで一人じゃなかったとしても、コロナは、皆みなさんの期待をことごとく裏切って！　そもそも、期待なんかされてなかったかもしれないけど！　だから、お師し匠しよう様は、ミヤお姉さんは、こ、コロナを――コロナ……が、いらない、くて、こんな……もの！　こんなもの……！」

　突とつ然ぜん、コロナが背中の剣けんを鞘さやごと地面に叩たたきつけた。おい、いいのかよ。それ、お師匠様が餞せん別べつにくれた大事な剣だったんじゃ？　いや――そうか。それは実際、コロナにとっては大切なものだったのだ。だからこそ、か。

「これって……皮肉ですか？」

　コロナは、ふふふ、と笑った。

　痛い、レニィの胸を軋きしませる笑い声だった。

「コロナはいらないこで、この剣もいらないもので。きっと、ネロさんが正しいんですね。コロナは、ずっと騙だまされてきたんです。今も騙されてるんです。騙されてたんです。こんなもの、ネロさんの言うとおり、古いだけの、安物で、がらくた同然なんです。コロナと同じです。たぶん、これって、お師匠様からの最後のメッセージですね。おまえはがらくたなんだよって。そんなものをだいじにして……本当に、ばかみたい」

　レニィはひび割れたコロナの声を黙だまって聞き、崩くずれそうなコロナの姿を見つめていた。

　なんだか、一歩踏ふみだせば、ぜんぶおじゃんにしてしまいそうで、少しだけ怖こわい。

　だが、何もしないでいることのほうが、おそらく、もっと怖い。

　レニィは地面から剣を拾って、鞘を払はらい、その剣身を眺ながめた。

「たしかに古いけど、いい剣だな。コロナ、てめえがいらねえっていうなら、俺にくれよ。捨てるにはもったいねえ代しろ物ものだ」

「……いい、ですよ。さしあげます」



「本当だな？　俺はこれでも剣には結構くわしいほうだからな。そのネロってやつが何者か知らねえけど──」

「……兄あに弟で子し、です。偶ぐう然ぜん、行き会って」

「はっ、魔術士かよ。魔術士風ふ情ぜいに剣のことがわかんのか」

「そんなこと言ったら、お師匠様だって──」

「どうでもよくなってほっぽりだした不ふ肖しようの弟子に、わざわざ薬だのなんだの持たせやがったお師匠様、か」

「それ、は……」

「こいつはいい剣だ」

　レニィは剣を鞘に納めて、コロナに押しつけた。

「誰だれがなんと言おうと、お前がそう信じるなら、俺も信じてやるよ」

　そして、なかば強ごう引いんに、無理やり持たされた剣を、しかし、コロナはぎゅっと抱だきしめた。

　その仕し種ぐさが──なんだか、やけにいじらしく見えて。

　レニィは思わずコロナを抱きすくめようとして、おいおいそれはまずいだろと自制し、頭を撫なでるだけにとどめた。まあ、その、あれだ。親をなくした仔こ猫ねことか、子犬とか、そんなかんじか？　思い返せば、下町時代には、そういう犬猫を発見し次し第だい、近所の悪わる餓が鬼きどもを動員して世話をするシステムを、せっせと構築したものだった。つまり、これって俺の習性かよ？

　レニィは胸むねーいつ杯ぱいに夜の空気を吸いこんで、吐はきだした。

「──よし、帰るぞ。明日もとりあえずアンダーグラウンドだ。お前もつきあえよ」

「……コロナがご一緒しても、迷めい惑わくじゃないですか」

「俺だって、右も左もわからねえ初ニユ心ービ者ーってやつだ。正直、一人じゃ心こころ許もとねえ部分もあるからな。それに、お前、魔ま術じゆつは微び妙みようでも、剣はわりと使えてるし」

「そう……ですか？」

　コロナの表情に、少しだけ明るさが戻もどってきた。それを見てほっとしてる俺は、結局もう何かの罠わなにかかって抜ぬけだせね

えのか。しかも、これが、好きこのんで自分からかかったんだから、まったく始末に負えねえ。

「ああ。だから、今日はさっさと飯食って、早く寝ねねえと」

「ね、ね、寝る？」

「……また変なこと考えてねえか？」

「い、いえ、えと、そのう──本当に、襲おそわないでくださいね？」

「バーカ、襲わねーっつってんだろうが」

　少なくとも、今はまだ、な。

　──いや、未み来らい永えい劫ごう絶対ねえって、それは。

第4話
いつか咲く花

1

　でも、まあ、つーか、なんだかもうね。疲つかれちまったよ、俺は、実際。毎度毎度のことだけどな。何回同じことやらかせば気がすむんだって話だけどな。いや、同じことばかりでもねえんだけどな。バリエーションはいろいろあって。たとえば、いつだったかな。ちょっと前だ。こんなことがあった。あれは、そう、Ｄ９の喪そう神しん街がいオレストロに行ったときのことだ。

「……あ、あのう……れ、レニィさん……」

「あ？　なんだ」

「え、えと、非常に、申しあげにくいのですが……」

　オストロスに入ってから、二時間くらいたっていただろうか。レニィは朝からコロナや他ほか数名の侵入クラツ者カーとともに半ハーフ死者デツドどもをしばき倒たおして、売れば結構金になるアリステルを集めていた。

「じ、じつは、コロ──あ、わたし……」

「だから、なんだよ」

　あのときはたしか、三体の半ハーフ死者デツドをなんとかぶっ倒したあと、一休みしていたんだった。むごたらしい不完全な死と腐ふ敗はいと腐ふ臭しゆうとに支配されたオレストロは、休きゆう憩けいしていても心が安まるような場所ではないとはいえ、それでも機会があれば少しでも体力気力を回復させて、次なる戦せん闘とうにしっかり備える。それが一人前の──いや、まだまだ半人前というか初ニユ心ービ者ーに近いが、とにかく侵入クラツ者カーってものだ。にもかかわらず、コロナのやつは、何か言いたいことがあるならさっさと言えばいいものを、さんざんぐずぐずしたあげく、こうきやがった。

「お、お手洗いに……行けたらなぁ、なんて……」

「あのなあ……」

いいですかー。侵入クラツ者カーたるもの、トイレはアンダーグラウンドに入る前にちゃーんとすませておきましょうねー。アンダーグラウンドのなかでは気を抜けませんからねー。悠ゆう長ちょうにションベンなんかしてられませんよー。とくに女の子は男の子みたいにさっと立ちションするわけにもいかないですからねー。わかりましたかーコロナの阿あ呆ほうー？　わかってませんねー？　わかってたらこんなことにならねえはずだもんな？　つっても、しょうがねえか。生理現象だ。がまんさせたって限界があるだろうし。レニィは深々とため息をついて、近くの物もの陰かげを指し示した。

「行ってこい。素す早ばやくすませろよ」

「も、申し訳ありません……で、では！　コロナ、行ってきます！」

コロナは駆かけだした。走っていった。魔術はからっきしだが、身体能力はなかなかのもので、足もわりと速い。すぐにコロナの背中が小さく──って。

「おい！　コロナ、てめえ、どこ行くつもりだ！」

「ほ？」

急停止して振ふり返ったコロナは、もう二十メーテルほども離はなれた場所にいた。

「いや、ほ、じゃねえだろ！　なんで用を足すのにそんな遠くまで行く必要があるんだ！　そこらの陰でぱぱっとすませばいいじゃねえか！」

「そ、そんなの無理です！　コロナ、これでもれっきとした女の子なんですから！」

「何が女の子だ、十万年早はええっての！　いいから戻ってそのへんで──」

「やです！　だって、恥はずかしいしょや！　お、音とか、聞こえたら……」

「聞きたかねえよ、んなものはよ！　アホなことぬかしてねえで、さっさと──ぅ……！」

レニィは「後ろ！」と注意をうながすより早く、コロナに向かって突とつ進しんした。叫さけぶのはそれからにしようと思ったのだが、コロナは何を勘かん違ちがいしたのか、踵きびすを返して逃にげだそうとしやがった。もっとも、逃げようったって、そうはゆかなかった。コロナはすぐに行く手を阻はばまれた。衝しよう突とつしたのだ。鎧よろいを着た人間の半ハーフ死者デツドと。「ひやっ……！」背の低いコロナは尻しり餅もちをついてそいつの胸甲にぶつけた額をさすっていたが、んなことやってる場合じゃねえだろうが。反応しろ、反応！　遊んでるんじゃねえんだぞ！　レニィは全速力で走りつつ長ちよう剣けんを抜き放ち、コロナを飛び越こして半ハーフ死者デツドに身体からだごと突つっこんでいった。自分でもかなり無茶だと思ったが、そうでもしないとコロナがやばかった。レニィの長剣はやつの胴どう鎧よろいに弾はじかれて火花が散ったが、かまうものか。レニィは勢いを殺さずに抱だきつくようにしてやつを押し倒した。目の前を火花じゃなくて星が舞まい散ったのはその直後だった。殴なぐられた？　鈍どん器きで？　「──レニィさん！」血？　死ぬ？　味方の声？　「レニィさん……！」「──っせえ……！」死ぬかよ。これくらいで死んでたまるかよ。レニィは組み敷しいた半ハーフ死者デツドの首を両手で思いきりねじ曲げて、起きあがろうとして、顔を上げて、二、三体の新手の姿を認めて、その先はよく覚えていない。気がつくと、仲間の女医術士ナースヴィヴィアンの膝ひざの上だった。死にかけはしたものの、どうやらなんとか半ハーフ死者デツドをやっつけることができたらしい。ただ、あのあと、モリー・リップス・アサイラムに行って頭のなかを変な機械で調べてもらったりして、たいへんだった。そんなことがあった。いや、他にもまだある。つい最近だ。Ｄ13のテトルアープに行ったときは、逃とう走そうした下等蜥蜴とかげ人じんをコロナの馬ば鹿かが深追いしたせいで、十匹以上の下等蜥蜴人に囲まれてえらい目に遭あった。たまたま近くを通りかかった赤毛と魚顔と無口な男と魔ま術じゆつ士しとでかい派手なやつとちびっこい女医術士ナースの一団に顔見知りが交じっていなければ、確実に死んでいただろう。つーか、あいつら、やたらと強かったな。あんなの見ると、俺もいつかは──とか思っちまうよな。

まあ、所しよ詮せん、叶かなわぬ夢というやつなのかもしれないが。

何しろ、明日をも知れぬこの身だ。

いや、明日どころか。

「──とりあえず、説明してくれ」

　レニィは横で鶏にわとりっぽい生き物を抱きしめて震ふるえているコロナに小声で尋たずねた。

「なんでこんなことになっちまってるんだ」

「……さ、さあ、コ──あ、わたしには、皆かい目もく見当が……」

「じゃあ、俺が手短に教えてやる」

「は、はい。お願いします」

「コロナ。お前のせいだ。お前が悪い。お前が元げん凶きようだ。わかったか。つーか、わかれ」

「わ、わかりました。ぜんぶコロナの──ええっ！　そっ、そうなんですか！」

「たぶんな。正確にいえば、てめえがそいつを抱いてるせいなんじゃねえかと思うけどな」

　レニィだけでなく、コロナも、ヴィヴィアンも、オークリッド首長国生まれのサトーも、顚テン聖セイ虞グ出身の生き真ま面じ目めな権ゴン堂ドウも、皆みな、暗視鏡をかけているので、日の光の下にいるようにはっきりとは見えない。ただ、そいつの輪りん郭かくはだいたいわかる。そいつというのは、コロナが抱いているやつのことだ。ちょっとでかすぎる鶏──なんかじゃない。そいつには鶏よりずっとしっかりした手足がある。メリクルだ。体高五十サンチくらいで、メリクルとしては小さいが。たぶん、まだこどもなのだろう。仔こメリクルだ。

　今日、アンダーグラウンドのなかではわりあい危険度が低いとされているＤ５のメリクル第二迷めい宮きゆうで、コロナは隊列の最さい後こう尾びにつけていた。先頭はサトー。その斜ななめ後ろに権ゴン堂ドウ。ヴィヴィアンがまんなかで、レニィ、コロナの順だった。ついさっきのことだ。五匹のメリクルに出くわして、前衛のサトーと権ゴン堂ドウだけでは持てあまし気味だったから、レニィも前に出た。「コロナ、お前はヴィヴィをカバーしろ！」「了りよう解かいしましたです！」返事はまあよかった。それで信じたのが間違いだった。サトーが一匹、権ゴン堂ドウが二匹、レニィが二匹のメリクルをぶった斬ぎり、振り返るとコロナがいなかった。

「おい、コロナ！　てめえ、どこ行きやがった！」呼んだら、ちょっと戻もどった地点の角からすぐに出てきた。キーキー鳴く仔メリクルを抱いて。「あ、このこですか？　どうも迷子さんのようでして……」とかわけのわからねえことを言いくさって。それから間もなくだった。メリクルどもが集まってきた。レニィたちはあれよあれよという間に包囲されてしまった。メリクルの数は――二十か。もしかしたら、三十くらいいるかもしれない。どうする？　どうすりゃいいんだ……？

「もはやこれまでか」

　権ゴン堂ドウがぽつりと呟つぶやいてモトロール刀を抜ぬいた。モトローリィの鍛か冶じ士し〝鱗スケイ男ルマン〟が鍛きたえた「千日雨」。長い黒くろ髪かみを頭のてっぺんで結ゆっている権ゴン堂ドウは、剣の腕うでも立つし、なかなかの美形だが、頭はあまりよくない。とにかく、馬鹿正直すぎるのだ。ただ、直情径行とも違い、なんだか悟さとりきったようにいつも落ちついていて、今も冷静そのものに見える。というか、物事を深く考えないタチなのだろう。

「このうえは一匹でも多く道連れにして死に花を咲さかせるのみ」

「……マジかよ。うええぇ。やってらんねーなくそ」

　そう悪態をついたサトーは、もう十年以上も侵入クラッ者カーをやっているらしいが、いまだにその日暮らしから脱だつ出しゆつできず、どうやら脱出する気もあまりないようだ。オークリッド首長国の伝統的な武器だというマドゥーの使い手だが、レニィから見てもそれほど上手に扱あつかえているようには見えない。上達しようという気合いも感じられない。やる気がない。愚ぐ痴ちばかり多い。

「だいたいさあ。死に花って権ゴン堂ドウおまえメリクルなんかいくらぬっ殺したって死に花とか咲かねえから。どう考えてもこれ無む駄だ死じにだから。誰だれにも顧かえりみらんねー哀あわれな死だから。うええぇ。ああああぁぁまいったなあちくしょう。なんでまたこんなガキどもと組んじまったのかなあ。なあレニィなあコロナてめえらマジで死ね呪のろわれろくそガキ死ね死ね死ね死ね死ね」

「も、申し訳ありませんです……」

「コロナ、こんな阿あ呆ほに謝んな。たしかにお前は最悪だけどな。文句垂れるしか能がねえ糞くそサトー野や郎ろうも似たようなもんだ」

「なんだとコラ。レニィてめえやんのか？」

「やらねえよ、馬鹿。状じよう況きよう見ろ。何やるっつーんだよ。明らかにそんな場合じゃねえだろ」

「状況？　はっ、それがどうしたよ。どうせ死ぬんだからよ。メリクルがてめえを殺そうが俺がてめえを殺そうが同じことだろうが」

「じゃあ、俺があんたをぶっ殺しても同じだな」

「いきがるんじゃねえぞてめえ。ひよこくせえガキの分際で俺を殺せるつもりかよ！」

「もうよせ、サトー」権ゴン堂ドウがため息をついて、ヴィヴィアンをちらりと見た。「──すまぬな、ヴィヴィ殿どの。我らがいたらぬばかりに」

「こういう仕事ですし、それ相そう応おうのリスクがあることは承知していますから」

　雇やとわれ医術士のプロ意識というやつなのか。ヴィヴィアンは平静を保っているようだ。

　それにしても、権ゴン堂ドウはたしか二十五で、サトーが二十七。レニィとコロナがこの二人とアンダーグラウンドにもぐるようになったのはつい最近だが、彼らは何年もつるんでいるらしい。権ゴン堂ドウも、何がよくてこんな男と行動をともにしているのやら。まあ、それもこれも何もかもぜんぶもうすぐ終わりかもしれないわけで、そうしたら俺もあれか。馬鹿コロナとの短い腐くされ縁えんもきれいさっぱり終しゆう了りようってわけか。レニィは舌打ちをした。冗じよう談だんじゃねえぞ、くそったれ。しかし、メリクルどもめ、なんで一気に襲おそいかかってこねえんだ──と、いきなりだった。

　サトーがコロナに近づいて、奪うばいとろうとした。奪う？　何を？

　キーキーうるさい仔メリクルを、だ。

「……な、何するんですか！　や、やめてください！　乱暴は……！」

「黙だまれガキいいからよこせこのくそチビ！」

「や、やです！」

「やじゃねえ！　よこせ！」

「──おい、サトー、てめえ、何やってやがんだ、こんなときに……！」

「うるせえ俺には考えがあるんだよ！」

　サトーは制止しようとしたレニィを振ふりきって、なおもコロナから仔メリクルを強ごう奪だつしようとしている。

「考えだと……？」

「そうだ！　そいつを人ひと質じちにするんだよいや人質って変だけどよ人じゃねえから。まあいいやとにかくそいつを盾たてにして逃にげるんだグッドアイディアだろうが！」

「盾って……」

　レニィは前後のメリクルどもを見た。なんだ？　ざわめいてやがる。足が止まってる？　五メーテルか、四メーテルか。連中はそこで一いつ斉せいに止まって、それ以上接近してこようとしない。盾。こども。人質？　そうか。なるほどな。そういうふうにも考えられる。そいつはたしかにグッドアイディアかもしれないが──かもしれないが？　なんだってんだ？　俺は、何を迷ってるんだ……？　コロナが叫さけんだ。

「そんな、そんなの……！　このこ、まだこどもです！　かわいそうでしょや！　人質とか、よくないです！　だめですよ！」

「ああ？　ふざけんじゃねえぞボケ。そいつは異界フリー生物クスだ。でかかろうが小さかろうが育ってようが育ってまいが関係あるかよ！」

「か、関係、ありますよ！　あるに決まってます！」

「よくわかんねーなあガキの言うことはよ！　てめえだって異界フリー生物クスばんばん殺してんだろうが！　そのチビすけだってすぐにでかくなんだぞ。そしたら殺してオッケーで今はダメってのはおかしいだろうがよ！」

「そっ、そ、それ、は……それは、でも……」

「コロナ」

　レニィはコロナの手からさっと仔こメリクルを奪いとった。暗視鏡越ごしだからよく見えなかったが、たぶん、その瞬しゆん間かん、サトーは「しまった」というかんじの表情を浮うかべたと思う。コロナはどうだろう。わからない。レニィは長ちよう剣けんの刃はを仔メリクルの首に突つきつけた。

「サトーの言うとおりだ」

「……は」サトーが、ほっとしたような、ちょっと卑ひ屈くつっぽい、むかつく笑い方をした。「はは。なーんだ。てめえもそこまで間ま抜ぬけじゃねえってことか。ちゃあんとわかってんじゃねえか。それでいいんだよそれで。びびらせんじゃねえよくそガキが」

「──れ……レニィ……さん」

　やはり、コロナの顔は見えない。そもそも、レニィはもうコロナを見ていない。見たくもない。そんな声、出すんじゃねえよとレニィは思う。一瞬、俺もお前と同じようなこと考えちまったけどな。迷いそうにもなった。それは事実だよ。でもな。所しよ詮せん、俺らがやってるのはそういうことなんだ。サトーは気にくわねえけど、同じ穴の狢むじなってやつで。結局、外側にどんな皮を一枚かぶってるか、それだけの違ちがいで。だったら──せめて、サトーごときにはやらせずに、自分の手を汚よごさないと。

「メリクルども。こいつの命が惜おしかったら、道をあけろ」

　共通語が通じるとは思えなかった。それでも、凶きよう悪あくな殺人者のようにドスをきかせた声で、そんなことを言い放ってみせる必要がどうしてもあった。まったく、くだらねえよな。わかってるさ。わかってるんだ。本当に。だが、左ひだり腕うでででがっちり抱かかえている仔メリクルは、怯おびえきっていて、身を硬かたくするばかりで、ほとんど抵てい抗こうもせず、あまりに無力だっ

た。たとえ、今、こいつを殺さずにすんだとしても、いつか殺すかもしれない。そんなことも考えずに侵入クラツ者カーだなんだとはしゃいでいた自分が、ひどく愚ぐ劣れつに思えた。

2

―あれから、レニィさんとは一言も口をきいていない。

なんとかＤ５から無事に脱だつ出しゆつすることができて、こどものメリクルも殺さずにすんで、権ゴン堂ドウさんたちと別れて、「死にダイングかけサンダー雷電ボルト」に戻もどって―ご飯を食べて、部屋に帰って。その間、レニィさんとはずっと一いつ緒しよだったのに。話をするどころか、目をあわせることさえできなかった。

今、部屋にいるのは、コロナ一人だけだ。

レニィさんは共同風ぶ呂ろに行っている。コロナは先にお風呂をすませて、あとは寝ねるだけだ。少し前に空きが出て、移ってきたばかりの「二人部屋Ｓ」は、かなり狭せまいけれど、二段ベッドがある。上の段はコロナ。下の段はレニィさん。カーテンを閉めれば、一応、ちょっとしたプライベートスペースができあがる。コロナは自分だけの場所でタオルケットと毛布にくるまり、眠ねむろう、眠ろう、眠らなきゃ、と、さっきから念じていた。だって、眠ってしまえば、余計なことを考えずにすむはずだから。

考えたくない。何も。頭のなかを真っ白に染めてしまえればいいのに、と思う。

わかっているのだ。コロナは、よおく、わかっている。答えはいつだって一つだ。同じ答えだ。ぜんぶ、コロナが「だめなこ」だから。考える必要なんかない。本当は、レニィさんに相談したいことがあったのに。しないと、いけなかったのに。できなかった。とても相談できる雰ふん囲い気きではなかった。コロナが愚おろかなことをしたせいだ。どうして、愚かなことをしてしまったのか。それは、コロナが、ばか、だから。だめ、だから。

だって、今もまだ、あのこどものメリクルが死ななくてよかっ

た、きっと、あのメリクルの群れのなかに、お父さんやお母さんがいたんだろう、あのこは今ごろ、お父さんとお母さんに甘えているだろうか──なんて、心のどこかで思っている。サトーさんが言ったことは、たぶん、正しいのに。大きいメリクルだったら殺してもよくて、小さいメリクルはいけないなんて、おかしいのだ。侵入クラツ者カーは、異界フリー生物クスを、殺す。殺して、奪うばって、それでお金を稼かせいで、食べて、寝る。侵入クラツ者カーは、そういう仕事だ。それがいやなら、やめればいい。やめたところで、誰だれも困らない。困るのは、自分だけだ。そう。困る。お金がないと、困る。お金がないと、生きてゆけない。この部屋だって、お金を出して借りている。食べ物も、お金がないと食べられない。それに──それだけじゃなくて。困ることは、他ほかにもあって。たくさん、あって。

　コロナは枕まくら元もとにたたんである魔ま術じゆつ士し衣に手をのばして、ポケットのなかを探さぐった。今日はがまんできそうもなかった。青い巾きん着ちやく袋ぶくろのおくすりは、一日一回だけ。だから、ぜんぜん問題ない。それなのに、どうしてか、何かに敗北してしまったかのような、みじめな気持ちになる。ただ、それも、おくすりが効いてくるまでの話だ。おくすりが効いてきたら、ほかほかして、ふんわりして、ほんのりしあわせな気分にひたることができる。ふと、思い出す。お師し匠しよう様のお屋や敷しきで修しゆ行ぎようしていたときのことだ。身体からだも心もなんだかすごくつらい時期があって、わけもなく涙なみだがあふれ、無数の針が刺さってでもいるかのように全身が痛くて、痛くて、たまらなくて、一日中「ああああうううう」と唸うなりながら転がりまわっていた。見かねて、お師匠様があのおくすりをくれたのだ。それが最初だった。ほかほかするおくすり。ああ。ほかほかしたい。ぐっすり眠りたい。楽になりたい。いつの間にか、コロナは泣いていた。呼吸がおかしい。ちゃんと息ができない。だめだ。だめになっちゃう。おくすり、のまないと。コロナは震ふるえる手で青巾着袋の口を開けた。ガチャッ──と、ドアが開いた。

　レニィさんだ。レニィさんがお風呂から戻ってきたんだ。コロナはタオルケットに口を押しつけて、必死に息を殺して、青い巾着袋を隠かくした。カーテンを閉めているのだし、コロナが何をしているのかなんて、レニィさんには見えない。そんなことも考えられなかった。余よ裕ゆうがなかった。なぜだかとても恥はずかしかった。知られたくない。レニィさんには、レニィさんにだけは、知られたくない。知りたくもないだろうし。

でも、レニィさんはいいひとだから。やさしい、ひとだから。きっと、心配する。こんなコロナでも、レニィさんは気にかけてくれる。見捨てないでいてくれる。迷めい惑わくばかりかけているのに。どうして、だろう。わからない。コロナには、わけがわからない。部屋の明かりが消えた。ベッドの下の段がギシッといった。カーテンを閉める音がした。レニィさんが、すぐ下にいる。今、ため息をついた。深い、ため息だった。

「──コロナ。もう寝てんのか」

「は、はい」

思わず、返事をしてしまった。レニィさんは苦笑いをしたみたいだった。

「はいって、おかしいだろうが、馬ば鹿か」

「……ご、ごめんなさい……」

「あ？　お前──」

「……はい」

「いや、なんでもねえ」

なんでもない、と言いながら、明らかに訝いぶかっているような口ぶりだった。もしかしたら、気づかれたのかもしれない。声が、涙声だ。ふつうの声じゃない。でも、結局、レニィさんはそのことにはふれなかった。しばらく、沈ちん黙もくがつづいた。重苦しく、それでいて、ちょっぴりあたたかい静せい寂じやくだった。ほんの少しだけ、コロナの胸がほかほかしている。それは、たぶん、レニィさんが──レニィさんのほうから、声をかけてくれたからだ。レニィさんの声こわ音ねは、怖こわくなかった。怒おこっているかんじではなかった。ほっとした。じつは、もう終わりなんじゃないかと思っていたからだ。今度という今度は、いいかげん、レニィさんも愚ぐ鈍どんなコロナに愛あい想そをつかして、捨てられるんじゃないかと。そうなっても仕方ないと。あたりまえだと。そうならないほうが、むしろ変だと──思っていた。本当は、ずっと、そのことばかり考えて、考えて、怖くて、考えたくなくて、考えないようにしていた。

「コロナ」

「……はい」

「お前、なんつーか……大だい丈じよう夫ぶか」

「だ、大丈夫です」

「何が大丈夫なんだよ」

「わ、わかりません、けど……」

「だったら、適当に返事するんじゃねえよ」

「……ごめんなさい……」

「いちいち謝んな」

「ですが──」

「なんか、俺がお前を責めてるみてえだろ。まあ、お前もそんなふうに思ってるのかもしれねえけどな」

「そ、そんなことは、決して」

「俺が訊きいてるのは」

「……はい」

「この商売、な。やってけるのかってことだよ。昼間みたいなことは、これからいくらでも起こるだろうし、そのたびにうだうだ言ってたら──死ぬだろ、きっと」

　死ぬ。

　そうだ。

　死んでしまうんだ。

「俺は、そう簡単に死ぬつもりはねえ」

　レニィさんは、強い。

　いつも眉み間けんに皺しわをよせて、まっすぐ前をにらみつけている。

前へ、前へと、進んでいる。でも。

「……コロ、ナ──わたし、は……」

どうなんだろう？

死にたくない。生きたい。それはそうだと思う。どちらかといえば。なんとなく。けれど、どうしても生きなければいけない理由が、動機があるのかと訊かれたら、即そく座ざに答えられるだろうか。そんなふうに考えている時点で、ない、ということだ。死んでしまったら、死んでしまったで、それはそれで、べつに。どうせ、いらないこだし。役立たずだし。一人でいても、何かできるわけじゃないし、誰だれかがそばにいると、世話を焼かせっぱなしで。今日、今夜、ここにいるのも、あのとき、レニィさんが助けにきてくれたからだ。そうでなければ、コロナは今ごろ、あのいかがわしいお店で働いていただろう。おそらく、あのお店でも、あまりうまくできなくて、誰かに迷惑をかけていただろう。

「……迷惑を……かけたくない、です。みなさんの足を、引っぱってしまうので──どうしても。それが、いやで……」

「そんなのしょうがねえだろ。まだ慣れてねえんだし。サトーなんか、十年以上も侵入クラッ者カーやっててあのざまなんだ。たやすくはねえよ」

「慣れたら、ましになるって──そう思いますか？　こんなわたしでも」

「心がけ次し第だいじゃねえのか」

「心、がけ」

「ああ。覚かく悟ごっつーか。必要だろ、やっぱ。俺も……」

レニィさんの声が急に弱々しくなって、途と切ぎれかけた。

なんだか、すごく不安だった。

レニィさんは揺ゆらがないで欲しい。前を歩いていて欲しい。

だけれど、それは、コロナの押しつけがましい勝手な願いだ。

「正直、な。俺も甘かった。サトーごときに思い知らされるなんて、卦体けつた糞くそ悪いよな。でも、あいつだって、腕うではさっぱりだけど、今日まで生き残ってきたんだ。俺らよりは知ってんだよ。どうするべきか。どうしなけりゃならねえか。それは違ちがうだろって否定すんのは簡単だよ。他ほかに方法があるならな。けど、なかった。権ゴン堂ドウみたいに、とにかく殺やられるまで殺りまくるか。ヴィヴィアンと同じく、さっさとあきらめちまうか。そんなとこだった。サトーがあの手を思いつかなかったら、たぶん、死んでただろ。ってことは、あいつは正しかったんだ。胸むな糞くそ悪くてもな。あれが最善だった。俺は、俺らは、それを……認めざるをえねえ。認めるべきなんだ。覚悟ってのは、そういうことだよ」

「認めれば……強く、なれますか？」

「知るかよ。でも、生き残る可能性はいくらか高くなるだろ」

　生き残って──生きて、どうするんですか？

　そう尋たずねたかったけれど、尋ねられなかった。その問いは、レニィさんを困らせてしまうに違いない。なぜなら、コロナだって、そんなことを訊かれたら、困ってしまう。答えられない。だから、コロナはしくしく痛む胸を押さえて、またあふれてきそうな涙なみだをこらえ、口をつぐんでいた。黙だまっていることしかできなかった。今、何か言えば、泣き叫さけんでしまいそうだった。

「まあ、焦あせっても仕方ねえ」

　レニィさんは短くため息をついて、呟つぶやくように言った。

「前から決めてたよな。明日は文書館だ。一日休んで、少し頭冷やせば、ちょっとは気分も変わんだろ。俺も、お前もな」

　コロナが「おやすみなさい」と声をかけたのは、それからずいぶんしてからだった。

　それでも、レニィさんは、眠ねむそうな声で「おやすみ」と返してくれた。

　王立中央文書館に〝文書クイーン館の・オブ・女王ライブ様ラリー〟と呼ばれる人物が住みついていると耳にしたのはつい最近のことだ。

『――できたら、魔ま法ほう剣けんは封ふう印いんしたほうがいいよ。機会があれば、知識のある魔術士に診みてもらったほうがいいかもしれない』

　ロム・フォウにそう言われてから、ずっと考えてはいたのだ。

　つまり、いったい何が原因で、自分の身に何が起こって、どうなっているのか、きちんと知りたい。いや、今後のためにも、是ぜ非ひ知らなければならない。そのためには、コロナみたいなちんまりインチキ魔術士ではなく、物知りで見る目があるちゃんとした魔術士に相談するべきだろう。

　ただ、これはエルデンで侵入クラツ者カー稼か業ぎようを始めてからわかったことだが、それなりの魔術士というのは存外少ない。レニィ自身、魔術士の侵入クラツ者カーと組む機会も何度かあったが、彼らの魔術は拍ひよう子し抜ぬけするほどたいしたことがなかった。正直、あのときコロナがぶっ放した特大花火級の火の玉は、そこそこのものだったんじゃねえかとさえ思うほどだった。

　とはいえ、同じ魔術で、線せん香こう花火から打ち上げ花火まで幅はばがあるようでは、とうてい実用に耐たえない。剣だって、大きければ当然威い力りよくはでかいが、そのぶん筋力がいるので、使いこなせるサイズのものを選ぶ。自分の意思で、自分の肉体で、きっちり制せい御ぎよできてこそ、力なのだ。

　だからこそ、「魔法剣」がなんなのか、知りたい。「精せい霊れい憑つき」について、馬ば鹿かコロナのたどたどしい説明なんかじゃなく、正確な情報が欲しい。理解したい。

　そう思い、知りあった魔術士には、それとなく尋ねてみたものの、はかばかしくなかった。まあ、話をした魔術士の数自体、さして多くないのだが、とにかくやつらは知らないことを知らないとは言わない。とりわけ、「精霊憑き」の詳しよう細さいや「魔法剣」に話が及およぶと、「それについては魔術の深しん淵えんをわずかばかりでものぞきこんでいない者に理解しうる内容ではないので貴

方あなたに話しても仕方ない」だの、「知らないというわけではないのだが、君に話すことが君のためになるという確信は持ちえないので、この場では差し控ひかえさせていただく」だの、回りくどい言い訳ばかりで、「ようするに、よくわからねえってことか」などとレニィが確かく認にんしようものなら、「そのようなことは一言たりともいっていない。私の言葉をどう解かい釈しやくしたらそうなるのか。これだから一いつ般ぱん人じんと魔術に関する話をするのは嫌いやなのだ。ああ、嫌だ嫌だ」と、まあ、たいていそんなかんじでへそを曲げてしまう。

　コロナを見ていると信じられないが、魔術士という人種は、もともとかなり扱あつかいづらい連中らしいのだ。サトーあたりに言わせると、「我わが儘ままで自分勝手で愛あい想そがなくてがめつくて変態のエゴエゴスティッククソ野郎モウフオ」。それが標準的な魔術士像で、人を選えり好みしない権ゴン堂ドウですら、その意見を否定しなかった。

　もっとも、ごくごく一部の使える魔術士は、範囲Ａ攻撃Ｅ魔術Ｍでいっぺんに複数の異界フリー生物クスに打だ撃げきを与あたえるという、離はなれ業わざをやってのける。そんなアタリを期待して、魔術士を仲間に加えたがる侵入クラッ者カーは結構いるのだが、だいたいハズレだし、サトーにとってはコロナもそのうちの一人だったわけだ。なんでも、「魔術士は見た目で判断できない」のが常識のようで。それどころか、「みょうちくりんな風ふう体ていの魔術士ほど腕が立つ」と信じている者もわりといて。「俺はアタリに賭かけたってことだよわかる？　そんで見事に負けたわけだよちっくしょうやってらんねーなあああぁぁくそ。とっくに結果わかってたのにめんどくさくてなんもしなかったのが間ま違ちがいだよな。うえええぇ。マジホントすげえうぜえむかつく」とか、昨日、別れ際ぎわにぶつくさ言っていたサトーとは、たぶん、もう二度と組むことはないだろうが。

　ともあれ、適当な相談相手が見つからない以上、精霊憑きだの魔法剣だのの話は、当分、そのままにしておくしかない。そう考えはじめていた矢先だった。あれは、四日前か。〝文書館の女王様〟のことを教えてくれたのは、鉄鎖の憩い場で偶ぐう然ぜん行き会ったファニー・フランクだった。「おお、これはこれは、レニィ君ではないかッ！　一別以来だね、元気にしているかね、ん？　もし、何か困ったことがあるなら、なんでも相談してくれてかまわんよッ！　何？　ほうほう、知りたいことが？　魔術のことか！　う

む。それならば、〝文書クイーン館の・オブ・女王ライブ様ラリー〟を訪ねるといいッ！　読書が趣しゆ味みの博学多識な私も、わからないことがあったら、彼女に訊きくことにしているのだ！　少々変わった女性だが、彼女は非常に物知りだよ！　私が言うのだから間違いなァァ──いッ！　私の名前を出したまえ、親身になって話を聞いてくれるはずだ！　おそらくね！　ところで、どうかね、我が創ジエネ世シスの翼ウイングはいつでもウェルカムウェルカムだよ？　さあ、さあ！　私の胸に、ドオンッと飛びこんでくるのだッ！」

　やつの羽根っぽい胸に飛びこむのは遠えん慮りよしておいたが、方々で確認したところ、〝文書館の女王様〟はたしかに実在するらしい。魔術に関する著作などもあるらしい。どうやら本当に博識のようだ。そうでなくとも、文書館にはやたらとたくさんの本があるらしいので、調べれば何かわかるかもしれない。行ってみる価値はあるだろう。で、きてみたわけだが。

「──ファニー・フランクの知りあい、ねぇ？　で、精霊憑きぃ？　ふぅん……魔法剣、かぁ。へぇ～……」

　まあ、〝文書館の女王様〟というくらいだから、当然、女だろうとは思っていた。いや、死にダイングかけサンダー雷電ボルトのエレクトラ・マーダーみたいな美女をちょっぴりイメージしていたことも否定しない。あるいは、白はく髪はつのばあさんとか。本に埋うもれて、本の化ばけ物ものみたいになっている人間の化石みたいな生物とか。そんな想像は、だが、結果として、すべて裏切られた。

　彼女は──見た目、二は十た歳ちとか、その少し上とか、その程度で、ブルネットの髪かみにはちょっと寝ね癖ぐせがついていて、眼鏡めがねをかけている。縁ふちの細い、シャープな印象の眼鏡だ。本ばかり読んでいると、目が悪くなりそうだし、それはいい。いいのか？　よくわからないが、どうも眼鏡ばかりに目がいってしまう。正確にいうと、目のやり場に困って、いつも最終的には彼女の眼鏡に視線が落ちつく。

　だって、なんつーか──ちゃんと着ろよ。服とか。なんでセーターだけなんだよ。しかも、そのセーター、でかすぎだし、素す肌はだの上に直接着てて、胸むな元もととか開きまくりで、肩かたとかべろっと見えて、し、下着は……？　それより、下はどうした、下は！　ズボンとか！　スカートとか！　穿はくもんだろ、ふつ

う！　つ、つ、つーか──パンツ、穿いてんのか、あれ。あ、いや、見てねえぞ。俺は見てねえ。断じて見てねえ。でも、なんか、ちらっと──こう、な……。

　そんな恰かつ好こうで、人が行き交かう文書館のロビーのソファにゆったり座って、足組んだりしてんじゃねえよ。

　組みかえるなよ。

　頼たのむって。

　やめろ。

「あ、あの……」

　女王様の向かいのソファで、レニィの隣となりにちょこんと座ってもじもじしていたコロナが、こわごわと顔を上げた。

「ひ、一つ、お尋たずねしてもよろしいでしょうか」

「なぁに？」

「あの」

　コロナの顔が真っ赤だ。そりゃそうか。たぶん、レニィも似たようなものだろう。しかし、コロナはがんばった。よくぞ訊いてくれた。

「その……たいへんお訊きしづらいのですが、つまり、えと……お、おぱんつは、穿いてらっしゃるんでしょうか……？」

　そうだ。

　俺もそれが訊きたかったんだ──って、アホか、俺は。いや、でも、気になっていたことはたしかだ。気にならないほうがどうかしている。気になってしょうがないからこそ、できれば、事実をちゃんと受け止めたうえで、しっかり対処したい。対策を講じたい。

　だが、女王様はそんな間も与えてはくださらなかった。

「あは」

　そう短く笑って、ぺろりとめくってみせやがったのだ。

　レニィは、見た。

　見てしまった。

　──初めて、見た。

　なぜだか猛もう烈れつに悔くやしくて、レニィは猛然と立ちあがり、声を荒あらげてしまった。

「穿けよ！　パンツくらい！」

「やぁだ。なんか嫌きらいなんだもの。束そく縛ばくされるの、やなの」

「そういう問題じゃねえだろ！」

「じゃぁ、どぉゆう問題なの？」

「は、恥はずかしくねえのか、あんた！」

「べっつにぃ」

「露ろ出しゆつ狂きようが！」

「そんなんじゃないってば。ただ、服がやなだけ。誰だれだってあるでしょぉ。やなことの一つや二つ」

「そりゃ、あるけどな！　いやでも服くらい着るだろ！」

「それが常識だから？」

　女王様は足を組んで、右手の小指で耳の穴をほじくりながら、ため息をおつきになった。



「悪いけど、トモヨさんは常識とか興味ないの。くっだらない。そんなもの死に絶えて滅ほろびちゃえばぁ？　とか思うよ、実際。もうさぁ生まれて育ってきてるだけでみんなすっげぇ調教されてるじゃない？　それなのに、これ以上自分のことがんじがらめにするなんて馬ば鹿かげてるでしょぉ？　服は嫌いだから着なぁい。で

も、少ぉしだけ寒いからセーターだけ着てるの。少年さぁ。きみが赤面しようと勃ぼつ起きしようと夢精しようとトモヨさんの×××ネタにして××××しよぉとぜぇんぜん関係ないわけ。トモヨさんは、トモヨさんの好きなようにやるの。わかるかな？」

「理解はしたけどな、俺はあんたをネタになんかしねえよ！」

「うっそぉ」

「本当だ！」

「えぇ~つまんなぁい」

「なんだ、そりゃ！」

「だって……」

　どうやらトモヨさんという名らしい女王様は、せつなげな吐と息いきをおもらしになり、眼鏡の奥の黒に近い青色の両目を細めた。

「好みのタイプなんだもん」

「はぁっ？」

「たべちゃいたい」

「……た、たべ……？」

「いぃい？」

「よくねえ！　いいわけねえだろうが！」

「なぁんだ。ざんねん」

　そう言いつつも、トモヨさんの目はまだレニィを見すえている。やたらと熱っぽい視線だ。というか、欲望丸出しだ。レニィも性欲だのなんだのはたぶん年相そう応おうにあるので、硬こう派はを気どるつもりはないが、それにしたってこうあからさまだと、正直、引く。むしろ、怖こわい。先ほど女性の深しん淵えんを垣かい間ま見みてしまったばかりなだけに、余計、恐おそろしい。とにかく、こういう女は苦手だ。ファニー・フランクめ。あのメリクル野や郎ろうめ。なんて女を紹しよう介かいしやがる。そもそも、あんな変

態中年の言うことなんて信じた俺が馬鹿だったんだけどな。甘あめえんだよな、俺も。ああ、超最低ＳＵＣＫだ。超最低ＳＵＣＫ、超最低ＳＵＣＫ、超最低ＳＵＣＫ。ありえねえぞ、畜生。

「──でぇ。用件なんだっけ？」

「しかも、振ふりだしかよ……」

4

　どうしてだろう。

　なんだか、胸がむかむかする。

　ついてこなければよかった、と思う。

〝文書クイーン館の・オブ・女王ライブ様ラリー〟ことトモヨさんに用があったのはレニィさんだ。コロナは関係ない。今だって、トモヨさんは、レニィさんのことだけを見つめて、レニィさんだけに向けて、何やら話している。

「だからねぇ～、下層エレメンタルプレーンっていわれてる要素精せい霊れいの世界は、ほんとぉはプレーンじゃなくて……とかゆってもわかんないか。ん～と、トモヨさんとかレニィくんとかがいるこの世界──物マテ質リアル世レイ界ヤーって呼んだりするんだけど、この世界のすぐ下にあるようなイメージかな？　半分重なっちゃってて。で、相そう互ごに影えい響きようしあってるわけ。要エレ素メンタ魔ルマジ術ツクってのがわりかし簡単なのはそのせいなの。これって魔ま術じゆつ士しでも勘かん違ちがいしてること多いよ。勘違いってゆっても、理論なんて辻つじ褄つまさえあってればなんでもいいっちゃぁいいんだけどね？」

「俺はそもそも魔術士じゃねえからな。その下層なんちゃらってのもよく知らねえし」

「知らなくても、相互に影響しあっちゃってるのが、レイヤー」

「レイヤー？」

「そぉ。世界の区分けの話。レイヤーとプレーン」

「そんなわけのわからねえ用語、いきなり出されてもな。理解不能だ」

「そりゃぁそうだよ。まぁ、どうせこの話は、お姉様クラスじゃないと頭では理解できても実感はたぶんできないしね」

「お姉様？」

「トモヨさんのお師し匠しよう様」

「なんで師匠がお姉様なんだ。姉貴が師匠なのか？」

「のん。ちゃうよ。それが決まりなの。そぉ呼ばないと殺されちゃうんだよ？」

「どんな師匠だよ」

「こわぁぁ～いよぉ。トモヨさんなんて不ふ肖しようの弟で子しだからね？　つらぁ～く、つらぁ～くあたられまくりの修しゆ業ぎよう時代でしたよぉ。トモヨさん魔術とかダメダメだし。てゆぅかさぁ、興味なくってねぇ～」

「魔術士……なんだろ、あんた。それなのに、魔術に興味ねえのかよ」

「なぁい。魔術なんてしょっぱいよぉ。レニィくんのほうがずぅぅっと興味あるな」

「だから、そういうのはよしてくれ。見せるな。やめろ。もう動じねえぞ。慣れたからな」

「つまぁんない。でも、さわってみると、また違う世界が拓ひらけるよ？」

「いや。べつにそんなもの拓きたいと思ってねえから遠えん慮りよしとく」

　レニィさんは、最初と比べてずいぶん冷静に対処するようになってきたけれど、トモヨさんの変な部分をちらっと見てしまったりすると、さすがに少しだけ顔が赤らむ。それは仕方ないことだとコロ

ナも思うのだ。だって、あんなものを見せられれば、誰だれでも──コロナでも、つい見てしまうし、トモヨさんは太ってはいないものの、ちょっとむちむちしていて、女の人、というかんじがする。肉感的、というのだろうか。足はきれいだし、胸も大きい。コロナとはぜんぜん違う。自分もいつか大人になって、あんなふうになるだなんて信じられない。いや、おそらく、ならないだろう。なれるはずがない。だって、同い年くらいの女の子と比ひ較かくしても、コロナは背が低くて、やせっぽちで、胸もほとんどなくて、ウエストもくびれていなくて、ようするに、幼児体型、というやつなのだ。きっと、ずっと、このままだ。

　それはしょうがない。

　しょうがない、と、あきらめることには慣れている。

　でも、なんだかんだいって、レニィさんとトモヨさんが結構ふつうにしゃべっているところを見ると──うまく表現できないのだけれど、ずくん、と、心臓に鈍にぶい音が響ひびいて、気分が暗く、暗くなってしまう。やってらんないしょや、という気持ちになる。持ちなおそうとしても、目の前でレニィさんとトモヨさんが仲よさげに話している。コロナはぽつんと一人だけ仲間はずれだ。

　考えてしまう。レニィさんは、なんでコロナを連れてきたんだろう？

　そんな必要、なかったのに。レニィさん一人だけでくればよかったのに。コロナは宿で寝ねていればよかったんだ。どうせ、体調もよくない。頭も重い。それに、レニィさんだって、コロナなんかいないほうが楽しいはずだ。コロナがいるから、レニィさんは気を遣つかっている。男の人なら誰だって、トモヨさんみたいな女の人に迫せまられれば、悪い気はしないはずなんだから。それくらい、コロナにだってわかる。コロナも、身体からだは幼いかもしれないけれど、心はこどもじゃないのだ。経験はないけれど、知識はそれなりにある。お師匠様のお屋や敷しきにいたときのことだ。リーデットさんという姉弟子さんがいて、男の子のことをみんなにいろいろと話して聞かせていた。リーデットさんは、コロナにも男の子について事細かく教えてくれた。男の子と女の子が恋こいをすると、どうなって、何をして、どうやって、どうなる、とか。たぶん、コロナがいちいち怖がったり、のぼせて倒たおれそうになったりするのがおもしろかったのだろう。その後、リーデットさんは、男の子の弟子さんと恋人同士になって、あんなことや、こんなことをして、

それがお師匠様にばれて、追いだされてしまったけれど──知っているのだ。コロナだって、わかっている。レニィさんは、目つきは悪いし、口も悪いけれど、若いのに剣けんが上手だし、心も強い。いいひとだ。いいひとだから、コロナを見捨てないで、世話を焼いてくれて、助けてくれて。今も、そばにいるのに、コロナは一人で。わかっている。わかっている？

　何を？

　本当に？

　何が……？

　わかっていない。

　何も、わかっていない。

　何も、考えたくない。

「──で、精霊憑つきっていうのは、つまり……レイヤーの境界が、とりわけ曖あい昧まいってゆぅかね。すっごくＬＥＰの影響受けやすい状態が持続している生物個体とくに人間のことなんだけど、まぁ、そぉゆぅ体質ってゆぅか性質は、親子間で遺伝するわけでもないみたいで、少なくとも今のところ確かく認にんされてなくて。偶ぐう然ぜんっぽいんだよねぇ～」

　何も考えたくない。

「偶然、ね。とりあえず、俺の親だの兄弟だのにそんなやつはいなかったっぽいな。つーか、俺だっていきなりこうなっちまったんだ」

　何も考えたくない。

「ふぅん……でも、要素魔ま術じゆつって、ようするに精霊憑き状態を一時的に、限定的に、人じん為い的につくりだすわけだからね。それに、人工的に精霊憑きを生みだすぅなんてことも結構やってる人いるみたいだし。その意味では不思議じゃないけど。ふつうさぁ、わかるんだよね。精霊憑きって」

　何も考えたくない。

「わかる？」

　何も考えたくない。

「そぉ。誰でもってわけじゃないかもしれないけど、トモヨさんにはわかるよ？　めったにいないけどね、精霊憑きなんて。そのトモヨさんとしては、レニィくん精霊憑きじゃぁないと思うけど。ところで──ちょっぴり気になってたんだけど……レニィくんのその目って、生まれつきじゃないでしょぉ？」

　何も考えたくない。

「ああ。前は黒だったよ。はっきりしたことはわからねえけど、どうやら薬のせいらしい」

　何も考えたくない。

「くすり？　やばいくすりぃ？」

　何も考えたくない。

「さあな。それはこいつに訊きいてくれ」

　何も考えたくない。

「……あのぉ～。もしもぉ～し？」

　何も考えたくない。

「コロナ？　おい」

　何も考えたくない。

「コロナ！」

「……は」

　何も──

　考えたくないのに。

「はい？　え？　ほ？　な、何か？」

「いや、何かじゃねえよ。聞いてなかったのか」

「も、申し訳ござりませんです。あの、ちょ、ちょっと、その……えと、物思いにふけってしまっておりまして」

「物思い……？」レニィさんは不ふ審しんげに眉まゆをひそめた。「なんか、物思いってよりは、ぼけーっとして何も考えてねえってかんじだったけどな」

「……そんなこと、ないですよ。考えてました。ちゃんと。いろいろ。コロナだって━わたしだって、考えることくらい、できますよ。ばかに……しないでください」

「馬ば鹿かになんかしてねえよ。つーか、どうしたんだ、お前？ちょっと変だぞ」

「ふつう……ですよ。コロ━わたしは、いつもこんなかんじです。ぜんぜん、ふつうです」

「そうかよ」

　レニィさんは一つため息をついて、唇くちびるをひん曲げた。

　ずくん、とした。

　胸が、痛い。

　いきなり目の前が暗くなったような気がする。

　機き嫌げんをそこねてしまったのだろうか。そうかもしれない。そして、レニィさんは頭にきて、腹を立てたあげく、コロナを見捨てるのだ。出て行けと言うのだ。お師し匠しよう様みたいに。役立たずはそういう運命だ。そうなったら、そうなったで━かまわない。いい。だって、しょうがない。こんなコロナだから、仕方ないのだ。

　がんばらないといけない。それはわかっている。

　でも、何をがんばればいいのだろう。

　何をどうしたら、今よりましなコロナになれるのだろう。

だいたい、コロナは何をしたいのだろう。

どうしたくて、ここにいるのだろう。

コロナは……なんで、生きてるの？

その目的は？

意味は？

―価値は……？

「おくすりは」

コロナはローブのポケットに手を突つっこんだ。あのとき、レニィさんにのませたおくすりの黄色い巾きん着ちやく袋ぶくろは、ない。入っていない。部屋に置いてきた。どうせもう中身は空なのだ。持っていてもしょうがない。一日一度きりのおくすりが入った青い巾着袋はあるが、これも中身はもう少なくて、あと二錠じようだけだ。

そういえば、昨日、切れたおくすりをどうすればいいか、レニィさんに相談しようと考えていたんだった。でも、あんなことがあって、できなかった。それでよかったのかもしれないとも思う。おくすりを補ほ充じゆうするにしても、お金がかかることくらい、コロナだって知っているのだ。そこまでばかじゃない。で、お金なんて、ない。コロナがへまばかりするものだから、一部屋借りて、食べてゆくだけでかつかつだ。レニィさんの装備だって、サトーさんから格安で譲ゆずってもらうまでは、エルデンにきたときの使い古した武器と防具だった。傷いたんで、今にも壊こわれそうで、やむをえず買い換かえたのだ。無む駄だ遣づかいはできない。コロナのおくすりなんかのためにお金をかけるなんて、もったいない。そう思って、ずっと言いだせなかった。何日か前に、レニィさんに訊かれた。「お前さ、薬のんでる？　なんか、最近、のんでるとこ見ねえような気がするんだけど」コロナは嘘うそをついた。のんでますよ。ちゃんと、のんでます。レニィさんの前でのんでないだけですよ。だって―その、えと……なんだか恥はずかしいですし。「薬のむのがなんで恥ずかしいんだよ。わけがわからねえな、お前は」レニィさんは、変なところで鋭するどい。ひょっとしたら、ばれてしまうかもしれない。コロナはレニィさんの前で、青い巾着袋のおくすりをのんでみせた。ほら。のんでますよ。大だい丈じよう夫ぶで

すよ。コロナは、大丈夫です。

　大丈夫だと、思っていたのだ。

　レニィさんと一いつ緒しよなら、大丈夫だと。

　理由はよくわからないけれど、そう思えた。

　実際、おくすりがなくても、朝、時間はかかるものの、ちゃんと目覚められるようになってきていた。

　おくすりなんかなくても、平気かもしれない。

　そう思いはじめていた。

「──わたしがレニィさんにのませたおくすりは、今、手て許もとにありませんが、お師匠様がわたし用に作ってくださったものです。効能は、滋じ養よう強きよう壮そう・体力増強・体質改変。朝起きがけに服用するように言われていました。昼食後のおくすりと成分は同じだったと思います。寝ねる前のおくすりは別のようでした。魔ま術じゅつ士し以外は決して口にしてはいけないと教えられていたのですが、間ま違ちがってレニィさんにのませてしまいました。それについては、反省しています。本当に、ごめんなさい、レニィさん」

「あ？　ああ……それは、まあ、もうすぎたことだからな。今さらどうしようもねえし──つーか、やっぱ変だぞ、お前」

「そうでしょうか。そうかもしれませんね。でも、もしそうだとしても、レニィさんには関係ないです」

「関係ねえって……」

「今は、レニィさんのことですよね。そのことでここにきたんですから、わたしのことはいいです。放ほうっておいてください」

「んなこと言ったって」

「申し訳ありませんが」

　コロナは立ちあがった。

なんだか、自分の身体からだが自分のものではないみたいだ。

あれは、誰だれの声？

わたし？

コロナ……？

透とう明めいの厚い膜まくか何かで、全身が覆おおわれてしまっているかのように、肌はだが空気にふれている感覚さえない。

「もう何もお話しすることはないので、わたし、先に帰っていいですか。気分がすぐれないんです。帰って、休みたいんです」

それに対して、レニィさんやトモヨさんがどう反応して、何を言ったのか、コロナはまるで覚えていない。その場を離はなれたという実感すらなかった。歩いたのだろうか？　走ったのだろうか？　わからない。ただ、硝子ガラス張りの立派な建物から出た瞬しゅん間かん、急に気持ち悪くなって、吐はきそうになって、足許がふらついて、何につまずいたわけでもないのに、転んでしまった。まあ、べつに珍めずらしいことではないけれど。コロナは昔からよくこける。レニィさんがそばにいるときは、とっさに支えてくれた。「気をつけろよ、馬ば鹿か」舌打ちをして、そんなふうに罵ののしりながらも、レニィさんはやさしかった。不意に、恐おそろしくなった。

一人で、勝手に、帰ってきてしまった。レニィさんはどう思っただろう。きっと、勝手なやつだと怒おこっているに違いない。嫌きらわれてしまったかもしれない。いや──コロナのことなんかもともと嫌いで、でも、レニィさんはやさしいから、今までがまんしていてくれただけかもしれない。今回のことで、堪かん忍にん袋ぶくろの緒おが切れてしまったかもしれない。もうだめかもしれない。取り返しのつかないことをしてしまったのかもしれない。

見ると、膝ひざがすりむけて、血がにじんでいた。

コロナはよろよろと立ちあがって、文書館の玄げん関かんに目をやった。

謝りたい。

戻もどらないと。

　でも、謝ったところで、許してもらえるだろうか。

　もし、許してもらえなかったら……？

　だけど、謝らなかったら、たぶん、もう終わりだ。終わりだ。終わってしまう。それは、いやだ。やだ。やだ。コロナは歩く。自分のものではないかのような足を引きずって歩く。鈍にび色いろの魔導兵が守っている玄関をくぐる。足が重い。天てん井じようが高い。気持ち悪い。息が苦しい。ロビー。遠くはない。すぐそこだ。レニィさん。ごめんなさい。もうしません。コロナ、変でした。おかしかったです。許して欲しいです。お願いだから、許してください。どうか。コロナは祈いのるように呟つぶやきながら歩く。ロビーにはソファがたくさん並んでいる。奥のほうだ。窓まど際ぎわ。いた。レニィさん！　レニィさん……！　コロナは──すとん、と、床ゆかに座りこんだ。

　二人は、さっきまでは向かいあっていたはずなのに、並んでソファに腰こしかけていた。

　寄り添そっていた。

　おでことおでこをくっつけていた。

　目をつぶっていた。

　今にも、唇くちびるがふれあいそうな距きよ離りで。

「──わたし……邪じや魔まだ」

　ああ。

　何も。

　何も、考えたくない。

　考えたくない。

　もう、何も。

下層エレメンタルプレーン（トモヨに言わせれば本当はプレーンではなくレイヤーで、元エレ素メンタ世ルレ界イヤーというらしいが）と、人間が目で見ているこの世界、物マテ質リアル世レイ界ヤーとは、半ば重なりあっているといっても過言ではないくらい密接な関係にある。なんでも、元素世界の働きがなければ、物質世界は「唯ただ在るのみ」の世界で、静止した状態が永遠につづき、そうなると、当然、生命も糞くそもないらしい。物質世界にとって、元素世界はそれくらい重要な役割を果たしているのだが、元素世界もまた、物質世界がなければ「唯在るのみ」の世界である──といったあたりから理解があやしくなってきて、もうなんのことやらさっぱりというかんじだけれど、とにかく、人間は元素世界の影えい響きよう下にある。ただし、直接その働きを意のままに操あやつることはできなかった。そう。過去形だ。できるようになった。魔ま術じゆつによって。

トモヨ曰いわく、魔術は元素世界の働きを操作するべくして編みだされ、やがてその技術から派生する形で別の物質世界、つまり異界との連れん絡らく手段が生まれた。これが召しよう喚かん魔術というやつで、今ではごく一部の凄すご腕うでの魔術士しか使えないというが、そんなことはどうでもよくて、原始魔術、精せい霊れい魔術ときて、現在の要素魔術となる、いわゆる「魔術」の始祖が──どうやら、まあ、あくまでトモヨが言うにはだが、精霊憑つきたちだったらしいのだ。

ようするに、古来、精霊憑きは、先天的な魔術士だった。

魔法剣とは、精霊憑きたちが、「魔」＝「超ちよう常じよう的な恐ろしい力」を「法剣」＝「剣に宿らせる」という意味で、彼らが用いた古い魔術の一種だった。

だが、精霊憑きがのちの魔導王たちのように支配者となり、征せい服ふく者しやとなることはほとんどなかった。

精霊憑きが用いた「先天的な魔術」には致ち命めい的な欠けつ陥かんがあったからだ。

精霊は、人の心を食くらう。

『──あたしもくわしくはないけれど、精霊とうまくつきあうすべを

知らないで、彼らの力を濫らん用ようすると、いつか魂アニマを奪うばわれてしまう』

　ロム・フォウもそう言っていた。

　そして、あのとき、鬼人オーガ戦ウオ士リアーをまっぷたつにしたあとの、異様な脱だつ力りょく感。大事な何かを持ち去られてしまったかのような喪そう失しつ感。何かに、何かが、削けずられた。あるいは、食われた。もしくは、奪われた。何かが欠けてしまったのだが、それが何かわからない。レニィはたしかにそんな感覚に襲おそわれたのだった。

　あれは怖こわかった。あんなことをつづけていたら、きっと俺はなくなる。消えてしまう。

　だから、ロム・フォウの忠告が頭にこびりついて離はなれなかったし、トモヨにも会った。

　トモヨは、額と額をくっつけて精神マインド探査サーチとやらを試みた結果、レニィについて、精霊憑きではないが、そうなりうる素質があり、なんらかのきっかけでそうなる可能性も否定できない状態、と判断した。たぶん、コロナの薬は、魔術士の間で俗ぞくに「精神ブレイン解放クラッ剤カー」と呼ばれている種類のもので、それを服用したことが引き金になって、潜せん在ざいしていた特とく殊しゅな性質が目覚めたのではないか。また、コロナの頭とう髪はつ、瞳ひとみの色は、明らかに魔術士育成過程の体質改変による副作用で、そうとう強力な薬物を投とう与よされたものと思われる。そこまでやるのは必ずしも一いつ般ぱん的な手法ではないので、くわしいことはわからないが、今のんでいる薬もかなり強い作用があるのかもしれない。いずれにせよ、今でも稀まれに生まれる精霊憑きが、早ければ十代前半、遅おそくとも三十歳くらいまでに持続的な喪そう心しん状態に陥おちいることはよく知られている。そうでなくとも、物質世界よりも元素世界に関心が向いて、人より精霊と親しむようになるのだという。それで、彼らは精霊憑きと呼ばれるのだ。レニィの場合も、そうならないとはかぎらないので、その気があるなら、今のうちに手を打っておいたほうがいい——というのがトモヨの意見だった。

　レニィも同意した。当然だ。魂マニアを奪われるだとか、喪心状態に陥るだとか、精霊さんとお友だちになるだとか、冗じょう談だんじゃない。

　もっとも、手を打つといったって、何か方法があるのかという話だが――これが、あった。

　暗示術だ。

　トモヨが言うには、暗示術というやつは、抵てい抗こうすればするほど効果がなく、積極的に受け入れれば受け入れるほど高い効果が望めるらしい。レニィの願望が暗示術の目的と合がつ致ちするのであれば、必ずそうなるだろう。そうなる、と信じることがまず大事で、あとはトモヨの腕うで次し第だいだが、やつはやたらと自信ありげだった。「魔術は興味ないけど、こぉゆぅのは大好きなの。だって、かぁいぃ男の子をトモヨさんの言いなりにするのに便利なんだもん」

　とりあえず、その手の暗示にだけは絶対にかかるまいと心に決めて、レニィはトモヨに暗示術を施ほどこしてもらった――らしい。じつは、そのあたりのことはよく覚えていない。なんだか、薄うすぼんやりしていて、気がついたら終わっていたというかんじだった。終わったら、なんとなく大だい丈じよう夫ぶだという気分になっていた。不思議だったが、もともとわけのわからない状態だったのだ。悪くなってはいないだろう。トモヨは相談料などを一いつ切さい要求しなかったので、その点もほっとした。ああいう女だから、ちょっと引っかかるものはあったが、正直、助かった。もし、大金を請せい求きゆうされでもしたら、結構やばかった。

　宿に戻もどると、コロナはもうカーテンを閉めて、おそらく眠ねむっていた。声をかけても返事はなかったが、気配は間ま違ちがいなくあったし、調子が悪いとか言って先に帰ったのだから、寝ねせておいたほうがよさそうだと思った。晩飯のときにもう一度、起こそうとしたが、やはり反応がなくて心配になった。そういえば、コロナは少し様子がおかしかった。あのメリクル第二迷めい宮きゆうでの出来事のせいなのか。他ほかに原因があるのか。わからなかったが、何度か名を呼んだだけで、あきらめてそのままにしておいたのは――たぶん、一日ぐっすり眠れば、またもとに戻っているだろう、と思っていたのだ。何かへまをして、落ちこんで、毛布にくるまったまま部屋の隅すみで寝てしまったり、ふて寝したり、そういうことは、これまでも何回かあって。でも、次の日には元気になっていて。

　気にはしながらも、今回もそんなものだろうと、たかをくくっていた。

　さすがに少々寝つきは悪かったが、ちゃんと睡すい眠みんをとって、いつもの時間に目が覚めた。

「コロナ、朝だ。起きろよ」

　レニィは、毎朝、上の段のコロナにそう声をかけてから、共同の洗面所で顔を洗い、歯を磨みがく。それから部屋に戻ると、コロナはだいたい起きてはいるものの、まだぼんやりしていて、カーテンを開けた上の段で座っていたり、窓から外を眺ながめていたり。レニィがもう一度「おい、何ぼーっとしてんだよ。目ぇ覚ませ。しゃっきりしろ」とか声をかけて、コロナがあやふやな返事をして──それがいつもの朝だった。

　今朝は違った。上の段は、まだカーテンが閉まったままだった。

「コロナ？」

　寝ているだけか。寝ね坊ぼうか。ふつうに考えれば、そうだ。そんな日だってある。昨日のことがなければ、レニィもそう思っただろう。

「コロナ……寝てんのか？」

　それに、本当は──そう、本当は、あやしんでいたのだ。

　今回は違う。いつもとは、何かが違う。そんな予感があった。でも、そんなことは考えたくなかった。決定的な証しよう拠こがあったわけではないし、何より──面めん倒どうだった。

　俺は、コロナの世話係じゃねえんだから。俺だって、まだ十六の、未熟で、甘ったれの、若造にすぎない。なんで俺がいちいちコロナの機き嫌げんをうかがって、絶えず気にかけて、あれこれやってやらなきゃならねえんだよ？　自分でやれ。やれんだろ。お前だって、やらなきゃならねえだろ。いつまでもよちよち歩きの赤ん坊じゃいられない。誰だれだってそうだ。例外はない。あまり甘やかすのもよくない。コロナのためにもならない。俺は──俺だって、それなりにたいへんなんだよ。一人で立って、歩いてくってのは、まったく、楽じゃねえ。

　なんのかの言って、モルグステン市での暮らしはぬるま湯だったんだ。下町でも、屋や敷しき町でも、独立剽騎士団の教練所でも、結局、黙だまっていてもメシは食えたし、寝ね床どこもあった。そ

ういう意味での危機感がなかったから、親父おやじ殿どのがどうしただの、家がどうしただの、教官がむかつくだのとの悪態をついていられた。余よ裕ゆうがあった。切せつ迫ぱくしていなかった。

　今は、違う。

　ぜんぜん違う。

　今日に一生懸けん命めいでないと、今日を生き抜ぬけない。明日を見つめていないと、すぐ道に迷う。明日ばかり見ていると、何かにけつまずく。どうすりゃいい？　考えないといけないような気がするのに、考えていると、あっという間に時間がすぎる。時間がすぎるほどに、金がなくなってゆく。稼かせがないといけない。そうなると、もう明日なんか見えなくて。見えないとなると、見たくてたまらなくなって。

「コロナ」

　もがいていた。

　今の俺は、いつも何かを見失いそうで、自分自身に必死にしがみついていた。

　それだけで精せい一いつ杯ぱいだった。

「コロナ、開けるぞ。いいな？」

　──お前のことが、見えてなかったんだ。

「開けるからな」

　レニィは二段ベッドの梯はし子ごに足をかけて、カーテンを引き開けた。

　コロナは、起きていた。

　横向きに寝て、こっちを見ていた。

　布ふ団とんもかけずに、ローブを脱ぬいで、下着すらもはだけた姿だったのに、レニィは驚おどろかなかった。むしろ、呆ぼう然ぜんとしてしまった。

　コロナのスミレ色の目が、おかしかった。

　まるで、鏡みたいだ。

　レニィを見ているのに、見ていない。

　もちろん、顔にも表情がない。

「……コロナ……？」

　数秒か、十秒くらいだろうか。じっとコロナを見つめていて、はっとした。レニィは手をのばして、コロナの唇くちびるの前にかざした。呼吸は、している。まあ、そんなふうに確かく認にんしなくても、胸が動い──って、この馬ば鹿か、し、下着がずれて──レニィは慌あわててコロナにタオルケットをかけたが、それでもぴくりともしない。ふと、コロナが手に何か握にぎっていることに気づいた。青い巾きん着ちやく袋ぶくろだ。コロナは数種類の薬をそれぞれ色違いの巾着袋に入れて持ち歩いている。そのなかの一つなのだろうが、正直、どの色の袋がなんの薬なのか、レニィはさっぱりわからない。たしか、朝の薬は黄色い巾着袋だったような覚えがあるので、これは別だろうが──ということは、まだ今朝は薬をのんでいないのか。たしか、以前、薬をのまないと、ちゃんと起きられないとかぬかしていたから、この状態はそのせいか。

「おい、コロナ。朝の薬は……」

　訊きいても無む駄だだろうと思ったが、案の定だった。レニィはコロナの足あし許もとに丸められていたローブを手にとり、広げて、ポケットのなかをまさぐった。どれだ。袋。これじゃねえ。これは魔ま術じゆつの触しよく媒ばいか。この袋は──魔道丸ってやつか。食い物だ。袋。ねえぞ。どこだ。ポケットのなかじゃねえのか。どこだ。どこにある？　あれか？　ベッドの隅すみ。ベッドと布団の間に何かが押しこまれている。これか……？　あった。これだ。間ま違ちがいねえ。色つきの巾着袋だ。いくつかある。黄色い巾着袋もあった。あったことはあったのだが。

　さわっただけでわかる。

　どれもこれも、空だ。

　何も入っていない。

「……なくなった……のか？」

　いつだ。

　いつからだ？

　わからない。

　昨日は、のんでいた──ような、気がする。一昨日おとといはどうだった？　その前は？

　薬──それがコロナにとってどれくらい重要なのか、必要なのか、レニィには判断がつかない。だいたい、その効用さえよくわかっていないのだ。ただ、トモヨの話を聞いて、わかったこともある。魔術士ってのは──異常だ。少なくとも、レニィのような一いつ般ぱん人じんには、魔術士の考えていることは理解できない。精せい霊れい憑つきだか魔法剣だか魔術だかブレインクラッカーだかなんだか知らないが、自分や他人の精神や肉体をいじくりまわしてまで、力が欲しいのか？　なんでそこまでしなけりゃならないんだ？　心身を鍛きたえて、剣の腕うでを磨みがいて、それでいいじゃねえか。魔術士は、素質のあるこどもをさらって、自分の弟で子しにしてしまうという。迷めい惑わくな話だ。ひでえ話じゃねえか。ふざけるんじゃねえ。もしかして──もしかして、こいつも──コロナも、そうやってお師し匠しよう様とやらにめちゃくちゃにされて、そのあげく、薬をのまないといられない身体からだにされちまったのか？　そうなのか……？

「畜生……！」

　レニィは黄色い巾着袋を思いっきり握りしめて、床ゆかに叩たたきつけようとしたが、やめた。そんなことをして、どうなる？　単なる八つ当たりじゃねえか。この巾着袋をずたずたに引き裂さいたところで、何がどうなるわけでもない。じゃあ、どうすりゃいい？　何がどうしてこうなってるんだ？　レニィは上の段のへりに膝ひざをつく体勢になり、巾着袋なんかうっちゃって、コロナの頬ほおをそっとさわってみた。名前を呼んだ。コロナ。コロナ。肩かたを揺ゆさぶった。コロナ。おい。コロナ。聞こえねえのか。俺の声、聞こえんだろ？　わかるよな？　コロナ。俺だよ。コロナ。返事しろよ。なんでだよ。なんで届かねえんだよ。コロナ！　コロナ……！

　無駄なのか？　もうどうにかなっちまってるのか？　俺のせいか？　俺が見ていてやらなかったから？　俺にそんな義務が？　いや。そうじゃねえ。義務とか、責任とか、なんだとか、そんなことはどうでもいいんだ。とにかく、俺は今、ひどく慌ててる。恐おそれてる。コロナがこのままだったらどうする？　いいのか？　それはそれで、しょうがないんじゃねえの、なんて思えるか？　無理だ。思えない。理由なんか知ったことか。そう思えないからには、何かしないと。何か。何か。でも、いったい何を……？　レニィはコロナを抱だきしめようとした。なんだかよくわからないが、そうしたかったのだ。だが、いざやるとなると、ためらった。そうするのがいいことなのだという確信が持てなかった。そのときだった。

「……何……」

　コロナの口が動いた。スミレ色の目がレニィを映した。

「……してるんです……か……」

「な、何って」

　俺は――と、答えかけて、答えが見つからなくて、レニィは奥歯をギリリと噛かみあわせた。

　でも、違う。そうじゃない。妙みようだ。

「……あなたは……だれ……？」

「あ？」

「……だれ……レニィ……さん……」

「あ、ああ」

「……もう……いい……」

　コロナは、ふふ、と静かに笑った。

　唇だけが、かすかに引きつるように、笑う形にゆがんだ。

「……もう……いいです……」

「何が――何が、いいんだよ」

「……ぜんぶ……」

「よ、よくねえだろ。何がぜんぶだよ。おい、コロナ、てめえ、ふざけんなよ！」

「……じゃあ……壊こわしてよ」

「はぁ？」

「壊してよ。コロナを、壊して。処分して」

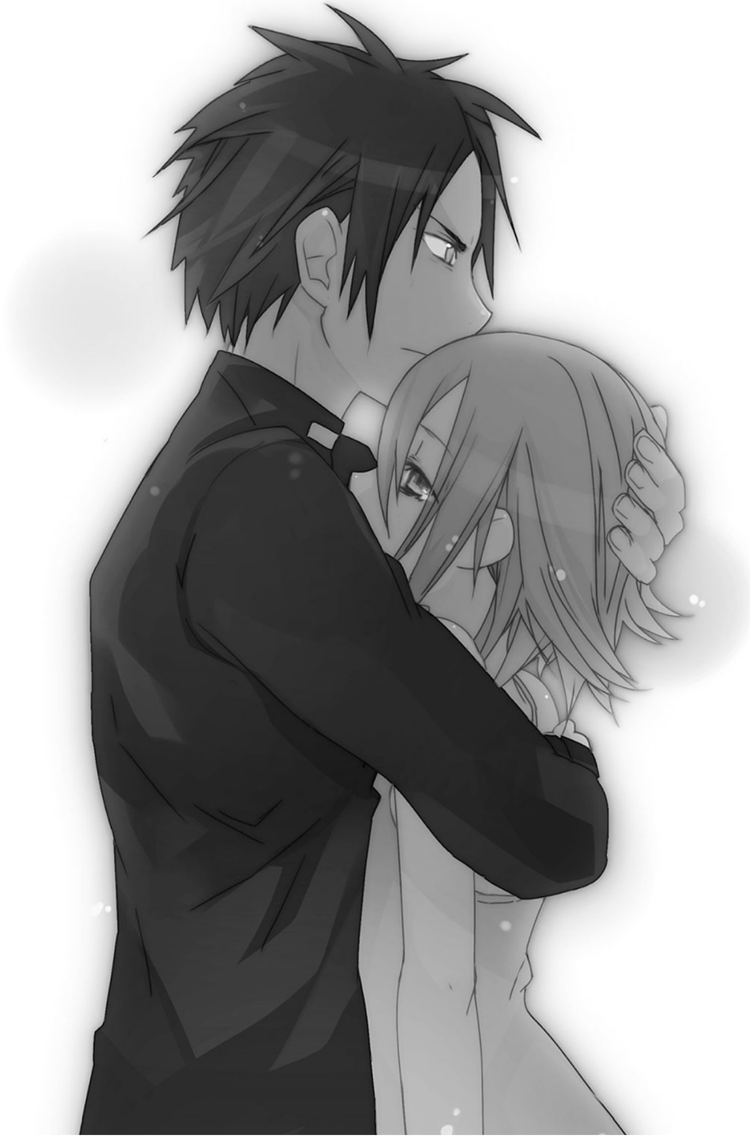
　コロナは両手をゆっくりと動かして、顔を覆おおった。

　その声が、やけに平板で、生身の人間のものじゃないみたいで、気色が悪かった。

「もうだめだから。それができないなら捨ててください。廃はい棄きしてください。だるいんです。起きあがれないです。もう動きたくありません。動けそうもありません。放ほうっておいてください。どうせいらないんです。不必要な存在なんです。お願いだから捨ててください。壊してください。ここにいないでください。見ないで。見ないでください。コロナを、見ないで」

　しかし、最後にコロナはぽつりともらしたのだ。

　それだけは、今にも泣きだしそうな声で。



―たすけて、と。

　レニィはもう迷わなかった。コロナを力ちから一いつ杯ぱい抱きしめた。なんだか悲しくなるほど小さいコロナの身体は、最初、少しだけあらがったものの、すぐに力を抜ぬいた。理り屈くつ抜きで、守らなきゃいけないと思った。こいつを守ってやらないと。俺

が守らないと。助けてやる。俺がやってやる。心配するんじゃねえ。俺がいる。

「……薬、だな？」

　そうだ。薬だ。レニィはコロナを左ひだり腕うでで抱いたまま、さっき投げた巾きん着ちやく袋ぶくろを右手でとりよせて口を開いた。やはり、ない。薬は入っていない。ただ、袋の裏側に紙か布みたいなものが縫ぬいつけてあって、それに何か書いてある。字だ。Egruuling 10mg Ipcec'io-meltona 8mg Mahhatom'anam 7mg……見慣れない単語だが、薬の成分だろうか。そうだ。いつだったか、コロナが言っていた。薬がなくなったら、魔術士か錬金士に頼たのんで、作ってもらわないといけないと。だったら、どうして薬が切れたのに――いや。そうか。わかった。薬を買うのだって、おそらく金がかかる。コロナはそれを気にしてやがったんだ。

　レニィたちは、侵入クラッ者カー稼か業ぎようを始めたはいいが、正直、余分な金なんてない。死にダイングかけサンダー雷電ボルトはかなり良心的な宿だから、なんとか屋根の下で寝ね起おきすることはできているが、二人部屋を一つ借りて、飯を食うのがやっとで、装備が傷いたんだときなんかは冷や汗あせが出る。まあ、いざとなれば、家から持ちだして、エルデンについてから王立銀行に預けた虎とらの子の貯金で、一巡じゆん月げつは食いつなげるのだが、これは保険みたいなものだ。最後の最後まで使うつもりはない。

　そんなギリギリの暮らしが、もう一巡月以上つづいているのだ。

　しかも、一昨日みたいなことが何度もあった。

　それでもへこたれず、少しすればけろりとして、また失敗して、でも、懲こりずに――そんなコロナに、呆あきれつつ、元気づけられていた。まったく、よくやるよ。ちっとも進めやしねえくせに、前を向こうとして。馬ば鹿か、そっちは後ろだろ。こっちだって。引きずり戻もどすと、コロナは照れたように笑って、ごめんなさい、と頭を下げて。わかってんのかな、こいつ、と思いながら、手を引いて歩く。コロナがやたらとずっこけたり、ぶっ倒たおれたり、ふらふらしたりするものだから、いい具合には進めない。だけどな。一人じゃねえんだって思える。下を向きそうなとき、逃にげだしたいとき、お前と手をつないでいることを思い出して、俺は踏ふみとどまる。

　それがどれだけ大事なことで、俺を支えているか、お前は気づいているだろうか。

　お前がいなければ、この道はもっと平へい坦たんで、俺はすいすい進んでいたかもしれない。

　でも、逆に、道みち端ばたの石に一度つまずいただけで立ちあがれなくなって、そのまま行き倒れていたかもしれない。

「待ってろ」

　レニィはコロナをベッドに寝かせなおして、タオルケットの上から毛布をかけ、巾着袋を集めた。青。黄色。赤。緑。とりあえず、これだけか。コロナはまだ両手で顔を覆ったままだ。その全身が震ふるえている。小さく嗚お咽えつがもれている。こんな状態のコロナを一人で残してゆくのは後ろ髪がみを引かれる思いだったが、どうしようもない。とにかく、今は急ぐことだ。

「すぐに戻るからな。俺は絶対にお前を見捨てたりしねえ。いいか。俺を信じろ。俺は帰ってくる。わかったな。待ってろよ。ここで、俺を待ってろ」

6

　──とはいうものの、エルデンは広く、レニィはまだ土地勘かんがあるというほどこの街を知らず、何かアテがあるわけでもない。一応、エレクトラにコロナのことを頼んで、死にダイングかけサンダー雷電ボルトを飛びだし、その勢いのまま第一王立銀行で三万ダラー引きだしたところで、レニィの足が止まった。さて、どうすりゃいい？

　薬。薬といえば、汎Ｐ大陸Ｃ医術Ｍ士会Ａの認にん可かのもと、錬金士が生成するとか聞いたことがある。錬金士……？　どこにいるんだ？　そういえば、エルデンのどこだかに、錬金Ａ士組合Ｇのエルデン支部があるとか、ないとか。そのどこだかって、どこだよ？　しょうがねえ、誰だれかに訊きくか。そう思い、鉄鎖の憩い場でつかまえた気のよさそうな眼鏡めがねをかけた男に尋たずねてみたら、「僕の名前を一度で覚えることができたら、教えてあげて

もいいですよ」「あ？　名前……？」「ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒです」「な、何？　ヨグ……サイケンレン……？」「残念でした。次の機会をせいぜい楽しみにしていてください。どうせ無む駄だでしょうけれどね。では、さようなら」とか笑え顔がおで言って立ち去ってしまった。なんだよ、あれ？　まあ、いい、別のやつに──と四囲に視線を巡らせているうちに、思い出した。

　コロナは、薬がなくなったら、魔術士か錬金士に頼んで作ってもらわないといけないと言っていた。

　──魔術士。

　そうか。魔ま術じゆつ士しなら、知っているやつがいるじゃねえか。しかも、そいつの居場所はわかっている。あそこに行けば、やつに会える。変な女だが、物知りなことは物知りだ。やつに訊けば、たぶん何かわかるだろう。きっと、手がかりくらいはつかめるはずだ。もっと確実性の高い方法があるのならそれに越こしたことはないが、そんなものがあったら苦労していないし、何もしないよりはマシに違ちがいない。善は急げってやつだ。

　レニィは駆かけだした。さいわい、第五区の鉄鎖の憩い場から第一区の王立中央文書館までは、そう遠くない。目と鼻の先とはいわないまでも、走ればすぐだ。息が切れようが、汗が噴ふきだそうが、かまわずに、休まずに、レニィは走った。とにかく人の多い第五区に比べると、お上品で無駄に立派で厳おごそかですらある街並みの第一区の一角に建つ、やや青みがかった強化硝子ガラス張りの王立中央文書館。守衛の魔導兵どもを尻しり目めになかに駆けこむと、空調のおかげで涼すずしくて、瞬しゆん間かん、一息つきたくなったが、がまんするというよりも身体からだが休きゆう憩けいを拒きょ否ひした。ロビーの階段を駆けあがって三階へ。館内巡じゆん回かい中の魔導兵に出くわしたときはさすがに少しだけ足をゆるめたが、それ以外はほぼ全速力で廊ろう下かを走って、第五秘文書室。ここだ。館内をいろいろ捜さがしてみたのだが、見つからなくて、数名しかいないらしい人間の司書に尋ね、ようやく判明したあの女の居場所がここだった。書しょ棚だなと書物にほとんど占せん領りようされていて、独特の古くさいにおいのせいで、なんだか息苦しく、狭せま苦くるしい部屋だ。レニィは書棚と書棚の間を身体を横にしてすり抜ぬけながら、奥を目指した。あの女は──いた。床ゆかに敷しいた毛布の上に腰こしを下ろし、かたわらに並べた数十冊の書物を次々と手にとって、開いて、閉じては戻し──あれで読ん

でいるのか。信じがたいが、ぶつぶつ何か言いながら、時折、唇くちびるを指でつまんでうなずき、目を通す書物を選んだりしているので、ただ眺ながめているわけではないのだろう。それにしても、まるで俺に気づきやがらねえ。どういう集中力だよ。だが、こっちから声をかけようにも、呼吸が。声が出ねえ。痛いてえ。胸とか、喉のどとか、横っ腹とか。レニィが「あーくそ……ったれ、が、はぁ、はぁ、がー……！」とか呟つぶやきつつ、汗あせをぬぐいながら必死で息を整えようとしていると、〝文書館の女王様〟はようやく顔を上げて眼鏡の位置をなおした。

「あれ？　レニィくんどぉしたの？　トモヨさんに愛の告白？」

「しねえよ！」

「なぁんだつまんない。あ。愛なんかなくてもセックスはオッケ～だよ？」

「俺はオッケーじゃねえ！」

「今どきの若者にしては真ま面じ目めなんだね」

「あんたが不真面目すぎるんだ！」

「ひょっとして童どう貞てい？」

「関係ねえだろ……」

「あるよぉ～」

「なんでだよ」

「トモヨさんがレニィくんの初めての女になるなんて、想像するだけでぬれぬれだもん」

「死にてえか？」

「やん」

　トモヨは、昨日と違う色だが同じ形のセーターだけという、だらしないというかふしだらな、服装ともいえない恰かつ好こうだ。下着さえ着けていないので、昨日でだいぶ慣れたはずなのだが、やはり目のやり場に困る。正直、この女とは係かかわらないほうがいい

ような気もする。だが、今は緊きん急きゆう事態なのだ。

「あんたに、頼たのみがあってきた」

「頼みぃ……？　筆下ろし？」

「違う。断じて違う」

「じゃぁ興味ないや」

「べつに、あんたにおもしろがってもらうために頼むわけじゃねえ。助けて欲しいんだ」

「ふぅん……ストレートだね？」

「回りくどいやり方は好きじゃねえし、急いでるんでな」

　レニィは巾きん着ちやく袋ぶくろをトモヨに見せた。

「薬が欲しい。昨日、コロナが俺にのませたって言っただろ。あれと同じやつだと思う。見てくれ。袋のなか。素人しろうと考えだけど、これって薬の成分とかじゃねえか」

「かして」

　トモヨはレニィから渡わたされた巾着袋のなかを一いち瞥べつしただけで、何もかもを察したように「なるほどねぇ」と軽くため息をついた。

「レニィくんこれのんだの一度きり？」

「ああ」

「もぉのんじゃだめだよ。童貞のまま一生終えることになっちゃうかも」

「はぁ？」

「廃はい人じんになるよ」

「な──」

「これは、ね」

　トモヨは黄、緑、赤の巾着袋を示してみせた。

「いわゆる精神ブレイン解放クラツ剤カーなんかじゃない。脳を破は壊かいして脳内物質の量を人じん為い的に増減させるためのお薬。スマッシュとかクラッシャーとか呼ばれることもある。向精神薬の成分も入っているし、作用は薄うすめてあるけど。これって昨日一いつ緒しよにいたこのお薬だよね？」

「あ、ああ」

「もしかして、あのこ、寝ね起おきがすごく悪くて、いつもぼんやりしてて、単純な作業もミスしがちで、物覚えが悪くて、情緒不安定で、落ちこむと人が変わったようになったりしない？」

「……なんでわかる？　つーか、今、まさにその状態で──」

「体毛と虹こう彩さいの異常変色。身体能力の向上。高い被暗示性。そして、自じ我がの崩ほう壊かい傾けい向こう」

「なんだよ、それ」

「愚おろかな魔ま術じゆつ士しの犠ぎ牲せいになった哀あわれなこどもたちは、たいていそうなるの」

「……犠牲……？」

「人には二種類あってね。魔術士か、それ以外か」

「ちょっと待て」

「魔術士じゃない人間は、いくら努力しても無む駄だ。どんなにあがこうと本当の意味での魔術士にはなれない。才能がない魔術士は屑くずにも劣おとるの。それなのに、自分はそぉじゃないと思いたいがために、あがいて、もがく。本来は潜せん在ざい能力を開放するだけで突とつ破ぱできる壁かべを、いろいろな手段で、ずるをしてでも、なんとか越こえようとする。その壁を乗り越えたところで、絶望的な差は、断絶は、埋うめることなどできないのにね？　だって、魔術士としての差は、その先にあるんだから。手前でつまずいてちゃ話にならない。スタート地点に立っていないのと同じ」

「……あんた、何を言ってるんだ」

「あのこ、なんていったっけ」

「コロナだ」

「そぉ。そのコロナちゃんは、そういう馬ば鹿かで身の程ほど知らずな魔術士に、頭のなかも身体からだもいじくりまわされて」

「だから、あんたは、何を……」

「もぉ壊こわれかけている」

「何……？」

「これは」

　トモヨは巾着袋をぶらぶらさせてみせた。

「ぶっ壊すためのお薬を薄めたもの。一いつ瞬しゅんで完全に壊れてしまわないように、繋つなぎ止めるためのお薬。断だん崖がい絶ぜつ壁ぺきをゆるやかな坂に変えるためのお薬なの」

「……俺でもわかるように言ってくれねえか」

「のまないと、すぐに壊れる。のんでいても、いつかは壊れる。ゆっくりと、壊れてゆく。こうゆえばばわかる？」

「それは……たしか、なのか」

「もちろん。ちなみに、こっちは」

　トモヨは微び笑しようさえ浮うかべてうなずいてから、青い巾着袋を指した。

「合成麻ま薬やく。トラキソフォン。通つう称しようトラック。身体依い存ぞんはほとんどないとゆわれてるし、作用もさして強いものじゃないけど、ふつうの人間なら、セックスのときなんかに使うとそれなりにいいかも。なぁんとなくしあわせになって、やる気が出る。原料も手に入りやすいし、わりと簡単に生成できるから、外げ道どうの錬金士がたくさんいる闇やみ市いちに行けば、いくらでも手に入るんじゃない？　他ほかではどうか知らないけど、エルデンでは最近流は行やってるみたいだよ？　ヘヴィなドラッグじゃなくて、ライトなトラックって。結局はドラッグだけどね」

「ドラッグ……だと？」

「そぉ。ドラッグは嫌きらい？」

「あたりまえだ！」

「どぉして？」

「どうしてって──」

　理由はいろいろある。自分が望むと望まざるとにかかわらず、心がねじ曲げられるなんて気持ち悪いし、キオのこともあるので、その周辺で暴利を貪むさぼる連中にはどうしても腹が立って仕方がない。だが、そんなことはどうでもよかった。レニィは思いきり握にぎり固めた右の拳こぶしで、自分の腿ももを殴なぐろうとしたが、やめた。無意味だ。阿あ呆ほなことやってんじゃねえよ。他にやるべきことがあるだろうが。何か、あるはずじゃねえのか。でも──ええい、くそ、頭が働かねえ。ちっともまともに考えられやしねえ。俺は、ひどく混乱しちまってる。めちゃくちゃだ。ああ。だけど。もっとめちゃくちゃなのは、コロナなんだ。めちゃくちゃにされたんだ。そんなやつを、あいつは、お師し匠しよう様だなんて。あいつは、そんな鬼き畜ちくを、信じて。剣けんを──そうだ、餞せん別べつの剣。お前が信じるなら、俺も信じるだなんて。俺は。

「ねぇ」

　トモヨが立ちあがった。

「レニィくんとコロナちゃんって、どぉゆう関係？」

「……べつに、どういう関係でもねえよ」

「レニィくんは、コロナちゃんのこと、好きなの？」

「そういうんじゃねえ」

「じゃぁ、なんでそんなに必死なの？」

　トモヨは心底から不思議そうに首を傾かしげて、レニィの頬ほおをそっとさわった。

「苦しいの？　悲しいの？　つらいの？　レニィくん。いぃ表か情

お」

「……よせ」

　レニィはトモヨの手首をつかんで、どけた。

「やめてくれ。どうせわからねえだろ。あんたには。あんただって魔術士だもんな。魔術士って──よくわからねえけど、そんなもんなんだろ。力を、求めて。もっと、もっと、力が欲しいって。でも、そんな力、なんになるんだ。力なんて、てめえと大事なやつを守って、生きていけりゃ、それだけありゃあ、もういいじゃねえか。十分だろうが」

「うん」

「俺は、いらねえ。精せい霊れい憑つきなんて知るか。魔法剣なんざ使えなくていい。魔術なんて、糞くそ食くらえだ。俺は、いい」

「うん」

「俺はただ、偶ぐう然ぜん、コロナと知りあって、しばらく一いつ緒しよにいて、あいつが苦しんでて──どうにかしてやりたい。それだけなのに」

「うん」

「……何も、できないのかよ。力が、ないからか？　これも、力なのか……？　けど、なんか違ちがうだろ。違うよな」

「うん」

　トモヨは右手をレニィの胸のまんなかあたりにあてた。

「そう。違うよ。本当の力は、ここにあるの。レニィくん、きみの命。命を使って、思うこと。望むこと。願うこと。そして、叶かなえること。それが、本当の力。魔術なんてくだらない。だから、トモヨさんは興味がない。レニィくん。トモヨさんがいぃこと教えてあげる」

「……なんだ」

「トモヨさんは、お薬をどうにかしてあげられる。それも、このお

薬よりもマシなお薬。坂をもぉっとゆるやかにするお薬」

「それ、本当……か……？」

　膝ひざの力が抜ぬけそうになった。支えてくれたのはトモヨだった。いや、トモヨは抱だきついてきたのだ。

　ふわりと、甘い、蜜みつのようなにおいがして、脳の奥が痺しびれた。

　トモヨは百七十五くらいあるレニィよりも、十四、五サンチほど背が低い。

　いやにやわらかいトモヨの身体からだは、ぴったりと、吸いつくようにレニィとくっついた。

「交こう換かん条件」

「……何と、だよ」

「なんだと思う？」

　トモヨが上うわ目め遣づかいで見つめてくる。

　レニィは、なぜだかトモヨをふりほどいてはねのけることができない。

「ちょうだい」

「……だから、何を──」

「レニィくんの初めて」

「は……？」

「しよ」

「な」

「ここで。今すぐ。大だい丈じよう夫ぶ。ここにはトモヨさんとレニィくんしかいない。いてもいいけど。トモヨさんは平気でも、レニィくんは恥はずかしいでしょぉ？」

「そりゃあ……」

「悪くない条件だと思うけど？　トモヨさんは、やさしいよ。いろいろ教えてあげる。なんでもしてあげる。気持ちいいこと、たくさん。狂くるわせてあげる。トモヨさんのこと、忘れられなくしてあげる」

「いや、ちょっ──でも、そいつは……」

「いいでしょぉ？　それとも、恋こい人びとでもいるの？」

「いねえけど」

「好きな人は？」

「い、いねえよ、べつに、そんなの──」

「トモヨさんのこと、嫌きらい？」

「き、嫌いっつーか……き、昨日知りあったばかりで、好きも嫌いも……」

「じゃぁ、問題ないね？　しよ」と、トモヨがレニィの股こ間かんに右手を這はわせてきた。とっさに阻そ止ししようとしたが、互たがいの身体が密着している状態では、どうにもならない。「──ば、やめ……！」「やだ。やめないよ、トモヨさんは。それに──やめる必要なさそうだよ？　身体は正直」「よ、せっつってんだろ！　う、動かすなボケ！」「かぁわいい。いぃ声。トモヨさんもドキドキしてきたよ。もっと悪戯いたずらしたい」「す、んじゃねえよ！　やめろって！」「どぉして？」「どうしても、何も、俺は──」

　俺は。

　そりゃあ、その欲望があるってことは否定できない。エロいことばかりが頭をよぎってしょうがないときだってある。硬こう派はを気どるつもりもない。正直、今だって、このままトモヨとやっちまってもいいんじゃねえかと思う気持ちもある。頭がぼんやりして、理性なんか吹ふっ飛びそうで、性欲ってやつはどうしようもなく荒あら々あらしくて、強敵すぎて、負けてしまいそうで。だいたい、トモヨの言うとおりだ。負けちゃいけない理由は？　なんで俺はここで踏ふんばってるんだ？　いいんじゃねえか？　悪くない条

件。まったくだ。いい思いをして、しかも、コロナの薬まで手に入る。コロナを助けてやれる。いったい、なんの不都合がある……？

　コロナを。

　──コロナ。

　ああ、くそったれ。

　駄だ目めだな。

　やっぱり、駄目だ。

　やりたくなったから、やるとか。誘さそわれて、その気になったから、やるとか。なんつーか、そんなものじゃねえんだ。他ほかのやつはどうか知らない。でも、俺にとっては、違う。違うと思う。こんな形は駄目だ。絶対に後こう悔かいする。よくねえと思うんだ。

　俺にとっても。たぶん、トモヨにとっても。

　そして、おそらく、なんとなく、コロナにとっても。

「すまねえ」

　レニィはトモヨの両りよう肩かたをつかんで、一気に身体を押し離はなした。

　トモヨはきょとんとした表情でレニィを見上げた。

「……なんで、そこでレニィくんがトモヨさんに謝るの？」

「知るかよ」

　レニィは首を振ふって、深く息を吐はいた。

「なんか、そんな気がしたんだ。あんたにも失礼なんじゃねえかって」

「失礼？　何が？」

「だから、知らねえっつってんだろ。とにかく、駄目だ。あんたの条件はのめねえ。薬は──なんとかする。この街は広いからな。錬金

士でも、魔ま術じゆつ士しでも、探せばいくらでもいるだろ。そうだ、赤毛の──なんつったっけな。ＺＯＯか。あのクランにも、たしか魔術士がいた。結構すげえ魔術ぶっ放してやがったし──」

「ＺＯＯ……？　あぁ、サフィニア」

「知ってんのか」

「ちょぉっとね」

「そうか。まあ、いいや。とりあえず、あんたにはいろいろ教えてもらって、助かったよ」

「トモヨさんとしては、レニィくんに教えてあげたいことは、もっと別にあったんだけど」

　レニィはそれには答えず巾きん着ちやく袋ぶくろを回収して、トモヨの深い青の瞳ひとみを真正面から見つめた。

「じゃあ、邪じや魔ましたな」

「……ふった女を、そういう目でまっすぐ見ちゃだめだよ、レニィくん」

「ふったとか、そういうつもりはねえよ。ただ──そんな気持ちも、なんの覚かく悟ごもねえくせにやっちまうってのは、どうも俺の趣しゆ味みじゃねえような気がする。それだけだ」

「トモヨさんはかまわないよ？　気持ちとかめんどくさいし、いらない」

「俺はかまうんだ。悪いな。急いでるんで、もう行かなきゃならねえ」

「そっ……かぁ。うん。バイバイ」

「ああ」

「あ、レニィくん」

　背を向けかけたレニィを呼び止めたトモヨは、なんだか少し戸と惑まどっているみたいな、困っているような、おかしな顔つきをし

ていた。

「──サフィニアなら……銀行にいるかも。第二のほう。ＺＯＯのたまり場がそこにあるって、前、サフィニアに聞いたことがあるから」

「銀行……？　第二っつったら、第十一区か」

　妙みようだとは思った。どうしてトモヨは、わざわざそんなことを。だが、あやしみはしなかった。あやしむ余よ裕ゆうがなかったのか。それとも、トモヨを信用したのか。そもそも、これでいいのか。正しい選せん択たくなのか。

「わかった。行ってみるよ。ありがとな」

「うぅん」

　なぜだか、首を横に振ってみせたトモヨも訝いぶかしげだった。なんだか気になったが、今は急がないと。レニィは踵きびすを返して小走りで書しよ棚だなの間に突つっこんでいった。後ろはもう見なかった。振り返っている場合じゃなかった。レニィは走った。文書館を出ると、一度乾かわきかけた汗あせがすぐに噴ふきだしてきた。第十一区。北だ。マキシマムＡＭドラゴン・ストリートを、ひたすら北へ。北へ。第一区を出て、高層寺院が建ちならぶ第十三区へ──もう入りかけたところだった。行く手に五、六人の男たちがたかっていた。しゃがんだり、だらしない姿勢で立っていたり。どいつもこいつも人相が悪くて、友だちにはとうていなれそうもないし、絶対になりたくもない風ふう体ていだったが、エルデンではとくに珍めずらしくない人種だ。とはいえ、係かかわりあいにならないに越こしたことはない。かといって、連中を避さけるために、大回りするのも馬ば鹿からしい。さいわい、道も広いし、ぶつかりさえしなければ、どうということはないだろう。とにかく、無視だ、無視。レニィは、むしろ足を速めて連中の横を駆かけ抜ぬけてしまおうとした。あとから考えると、甘い、甘すぎる判断だった。あんな見るからに悪そうなクソ野郎モウフオどもが、昼間っから、第十三区という特とく殊しゆな場所の入り口で、ただ暇ひまつぶしにだべっているとでも？

　そんなわけがない。この先は第十三区。彷徨Ｒえる Ｓ魂区Ｗ。人が高い金と引きかえに救いを求める場所だ。連中は獲え物ものを待っていたのだ。

「―おっ……！」レニィは思いっきり転てん倒とうした。連中とすれ違ちがいざまに、足をひっかけられたのだ。やべえ―と思ったときにはもう、二、三発、ぶん殴なぐられ、蹴け飛とばされていた。

7

―なんで生きてるんだろう。生きててもいいことなんかないのに。迷めい惑わくなだけなのに。害虫みたいなものだ。みんなにいやな顔をされても、何度となく追い払はらわれても、生きている。生きることにしがみついている。みっともない。早く死んじゃったほうがいいのに。消えてしまいたい。どうせだめなんだ。コロナはだめだ。ずっとだめだって言われてきた。そのとおりだった。なんで生きてるんだろう。どうしてまだ生きてるんだろう。

死ねばいいのに。

コロナなんか、死ねばいい。

死のう。

もう死んじゃおう。

ごめんなさい。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、お兄ちゃん、おじさん、おばさん、お師し匠しよう様、ミヤお姉さん、ああ、あとは思い出せない、ごめんなさい。やっぱりコロナはだめでした。お父さん、お母さん、せっかく生んでくれたのに、ごめんなさい。こんなコロナでごめんなさい。本当にごめんなさい。何をやってもだめで、ごめんなさい。もう考えるのもいやで、ごめんなさい。生まれてきて、ごめんなさい。生きてきて、ごめんなさい。希望がなくて、ごめんなさい。

解決法は一つしかないんだ。死ぬしかないんだ。死ねば、ぜんぶ終わるんだ。

コロナは、だから、死のうと思います。死なせてください。どうか、死なせて。

それなのに、手が動かせない。足も動かない。手て錠じようをか

けられて、足にも枷かせが嵌はめられている。猿さる轡ぐつわを噛かまされて、舌を噛み切ることもできない。ベッドに紐ひもで縛しばりつけられている。エレクトラさんがやったんだ。どうしてこんなことをするんだろう。どうしてコロナを死なせてくれないんだろう。放ほうっておいて欲しいのに。好きにさせて欲しいのに。唯ゆいーいつ、自分自身で選ぶことのできる方法なのに。でも、それなら、どうしてもっと早く選ばなかったんだろう。できたはずなのに。いつでもできたはずなのに。

　できなかった。

　なぜ……？

　いたからだ。

　あのひとがいたからだ。

　いてくれたから。

　レニィさん。

　レニィさん。

　レニィさん。

　レニィさん。

　けれど、やっぱり、もうだめだと思う。コロナなんかがそばにいちゃいけなかったんだ。レニィさんには、コロナなんかじゃなくて――トモヨさんでもいいし、もっときれいな、やさしい、ちゃんとした女の人が似合う。レニィさんが誰だれか他ほかの女の人と仲よくしている場面を想像する。違う。想像じゃない。昨日、実際に見た場面だ。ああ、痛い。痛い。胸が痛い。きりきり、ずきずきする。レニィさんが離はなれてゆく。コロナを置いて、どこかに行ってしまう。そう思っただけで、つらい。つらすぎる。それは、だけど、レニィさんにとってはいいことに違いない。コロナなんかにかかずらっているよりも、ずっといいはず。こんな、だめな、コロナには、価値が、なくて、レニィさんの、そばには、いられ、なくて、いない、ほうが、よくて、どこにも、居場所なんか、コロナには、なくて――だから、死ぬしかない。

　さよならしたい。

　コロナとお別れしたい。

　でも、それはつまり、レニィさんにも二度と会えないということで。

　とても、寂さびしい、ことで。

　会いたい。会いたいです。会いたいよう。レニィさん。どこですか。どこにいるんですか。コロナは、もういなくなってしまいそうです。壊こわれてしまいそうです。そうしたら、レニィさんは、泣いてくれますか。コロナのために、悲しんでくれますか。そんなふうに意い地じ汚きたなく自分を確かく認にんしようとする、薄うす汚ぎたなくて、ずるいあたしなんて、死ねばいい。

8

「おほ！　見ろよ、アンギー。こいつ三万も持ってんぜ。キラッキラのＧＭ合金貨三枚！　下ろしたてだな、こりゃあ。ワッハハ！」

「だから言っただろうが。あんなに急いでんのはなあ、蘇そ生せい式の金が足んなくて、慌あわてて銀行で下ろして戻もどってきたとか、だいたいそういうのだって」

「けどよォ、アンギー。銀行だったら第二のほうが微び妙みように近くね？　なんでここ通んだよ？」

「さあな。どっちにしても、賭かけは俺の勝ちだぜ、ボンゴ。一万以上持ってたんだからよ」

「チッ、わかったよォ。ちくしょう、てめえのせいだぞ、おら！」

　ドガンと蹴けられた。顔面だ。痛いてえ。くそ。容よう赦しやねえな。アンギー、ボンゴとかいう二人以外の三人がかりでうつぶせに押さえつけられて、手も足も動かせないので、抵てい抗こうなんてできるものじゃない。もちろん、剣けんもとりあげられた。ずいぶんあちこち痛い。口のなかだの、顔のどこかだのが切れて、出血も結構している。打だ撲ぼくは数知れず。肋ろっ骨こつにヒビが入っているのかもしれない。あー痛いてえ。痛えな。背中にのって

いるやつが身動きするたびに、息が止まりそうになる。そこそこ喧けん嘩か慣れしてるつもりだったのに。まあ、油断していて、一対五で、しかも先手をとられてしまえば、こんなものなんだろうが、それにしても呆あっ気けなかった。あっという間だった。情けねえ。

「さあて、アンギー、どうするこいつ？」

「そうさな。とるものとったら用はねえが、後あと腐くされがねえように始末しちまうか」

「ワッハハ。まったく、てめえは悪だなァ、アンギー。おい、小こ僧ぞう、覚えとけよ。恨うらむなら、ギャプ・ド・レエのアンギーを恨め。いいな、わかったか？　同じくギャプ・ド・レエのボンゴさんは幽ゆう霊れいが大の苦手だからよォ。俺のとこには絶対に化けて出てくるんじゃねえぞ」

「なんだ。ボンゴ、てめえ、幽霊なんか信じてんのか」

「信じるも何もよォ、俺、見たんだよ。初めて強ごう姦かんしてこの手でぶっ殺した女がよォ、何回も何回も枕まくら元もとに立ちやがってよォ。生身の人間と違ちがって幽霊は殺せねえから手に負えねえ」

「ハン。おおかた、そいつは罪の意識ってやつがてめえに見せた幻げん覚かくだろうさ。いや、待てよ。んなことはありえねえか。てめえに罪の意識なんて高こう尚しようなものがあるはずねえものな」

「ワッハハ。違いねえや！　じゃあ、そろそろ殺やっちまうか！」

「……ろ、され、て……」

　終わりなのか。冗じよう談だんじゃねえ。ふざけるな。まだだ。終わるわけにはいかねえんだ。レニィは口のなかにたまった血をペッと吐はきだし、力をふりしぼって身をよじった。

「─めえら……んぞに、殺されて、たまるか……よ……！」

「お！　こいつ、まだあきらめてねえっぽいぜ、アンギー！　ワッハハ！　同じ殺すでも、こういうやつのほうがおもしれんだよなァ！　ただ黙だまって殺されるやつよりもよォ！」

「まったく、てめえは物好きの変態だな、ボンゴ。まあ、できるだけ手早くすませろよ。一匹から三万ゲットできたんだ。今日はついてる。こういう日はどんどん稼かせがねえと損だ」

「わかってるって。まあ、見てろよ、アンギー。すぐに泣いて頼たのんでくるぜ。早く殺してくださいお願いしますってな。ワッハハ。おい、そいつ、仰あお向むけにしろ」

　レニィは仰向けにされる瞬しゅん間かんに隙すきができるだろうと期待したが、その前に顔を踏ふまれて、ボンゴの靴くつの裏を舐なめる羽目になった。「━ぉぐっ……」痛いというより、屈くつ辱じょく的だった。頭に血がのぼって、悔くやしさで血管が破は裂れつしそうで、殺す、ぶっ殺す、ぜってえ殺してやる、殺す、皆みな殺ごろしにしてやると渦うず巻まく殺意は、だが、どこかで何かに蓋ふたをされたようにせき止められて、気力が萎なえそうになる。一瞬、もう駄だ目めかもしれないと思った。ふざけるなとすぐに思いなおした。その途と端たん、ボンゴが「おら、うまいか、うまいって言え！　おら！　ワッハハハ！」と馬ば鹿か笑わらいしながらレニィの口のなかに靴の先を突つっこんでグリグリやった。「おぼごぼご」やべえ。マジでやべえ。涙なみだが出そうだ。俺、かなり恰かっ好こう悪いな。あーあ。何やってんだろ。阿あ呆ほうみてえに必死になって。駆かけずりまわって。あげく、これかよ。糞くそ悪党の靴なんか食わされて、ごぼげえとか言って、苦しくて、吐きそうで、泣きそうで、何やってんだよ。このままでいいのかよ。さんざんいびられて、もっと恥はじくせえことたんまりやられて、惨みじめったらしく死ぬのかよ。レニィ。レニィ・ブランディク。それでいいのか。てめえは本当に、それでいいのか。

　よくねえ。

　いいはずがねえだろうが。

　コロナ。コロナはどうする？

　あいつは、俺を待ってる。あいつは、馬鹿だから。どれだけ騙だまされて、虚こ仮けにされて、いいように利用されても、人を信じようとする、信じずにはいられない、とんだお人ひと好よしの馬鹿だから。壊れかけた心を抱かかえて、絶望の淵ふちから転げ落ちそうになりながら、あいつは待ってる。きっと、俺を信じて、待ってくれてる。

「──ワッハハハ！　ワッ──は？　な、なんだ、こいつ……」

　と、ボンゴがレニィの口から靴を引き抜ぬいて、一歩あとずさった。

「め、目が……光って……？」

　そうだ。裏切るわけにはいかねえ。そうだろう？　そうだよな？

　──そうだよ。

　そうそう！　やっちゃおうよ？　やらないとやらないと。ぶっとばしちゃえ！

　ああ。そうだな。そうなんだ。風よ吹ふけ。炎ほのおよ燃えろ。俺に力を。俺を通して表現するがいい。俺はここにいる。お前らはどこにいる？　ここにいるよ。いるよ。いるんだよ。すぐそばに。こい。こいよ。くるんだ。いくよ。いくよ。いくよ。でもいけないよ？　いけないよ？

　なんでだ。

　壁かべ。

　高く、分厚い、障しよう壁へき。

「……ぐああああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁ……！」

　破れ。突き破れ。壊こわしてしまえ。こわして。こわれて。こわ、れて。だめだ。だめだ。だめ、だ。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。頭が。痛い。痛い。頭が。痛い。痛い。頭が。痛い。痛い。頭が。痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

　狂くるう。

　狂いそうだ。

　狂っちまう。

　壊れる。

「な、なんだ、いきなり……あ、アンギー、なんか変だぞ、こいつ！」「間ま抜ぬけ野や郎ろう、そんなことは見りゃあわかんだろうが！　おろおろしてねえで、面めん倒どうなことになる前に、その小僧をさっさと殺しちまえ！」「お、おう！　そ、そうだな！　おい、てめえら、動かねえようにそいつをちゃんと押さえろ！　俺が首をぶった斬ぎって──」「怨Ｓｙ款冥Ｇｒｕｍ愛死雷」

　何か魔ま術じゆつの呪じゆ文もんらしきものにつづいて、雷らい鳴めいのような、とんでもない数の硝子ガラスが一いつ斉せいに砕くだけ散ったかのような、ものすごい音が轟とどろいたことは覚えている。レニィは、しかし、それどころではなかった。頭ず蓋がい骨こつが。脳みそが。軋きしむ。揺ゆれる。ゆがむ。痛い。あ、あ、あ、あ、と声がもれる。なんだ。いったい何なんだ。痛いてえ。死ぬ。死にそうだ。いっそ殺してくれ。ひと思いに殺してくれ。誰だれか。でも、もう少しだ。もう少しで乗り越こえられそうな気がする。いや。壊して。粉々に砕いて。壁を。そうしたら、俺は──俺は、どうなっちまうんだ……？

「レニィくん」

　俺は。

　──俺を。

　俺を、助け起こして。

　俺を、呼ぶのは、誰だ……？

「レニィくん、しっかりして。しっかりしてくれないと、キスしちゃうよ？」

「……あ」

　この声、は。

　レニィはまだ疼うずいて仕方ない頭を無理やり振ふって、手で顔をぬぐった。うわ。ひでえ。唾だ液えき。血液。鼻水。いろんなもので汚よごれているだけでなく、じくじく、ずきんずきん、やたらと痛い。

「わかる？　トモヨさんだよ」

「……あ、ああ……なんとか、な……」

「呼ぼうとしたんだね、精せい霊れい」

「そう……なのか……？　わからねえ……」

「じゃぁ、レニィくんが呼ぼうとしたんじゃなく、あっちが呼びかけてきたのかも。危険なことだよ、それって」

「危険……」

「暗示かけといてよかった──のかな？　微び妙みようだね。トモヨさんがこなかったら、あぶなかったし。だけど、よかった。間に合って」

　トモヨはそう言うと、自分の胸に思いきりレニィの頭を押しつけて、ぎゅっと抱だきしめた。なんか──あれだな。母親とかって、こんなかんじなのかな。俺の養母は、俺とは目もほとんどあわせないような女だったし、継まま母ははっつーか、キオの母親も似たようなものだったから、わからねえけど。トモヨが母親なんて、お笑い種ぐさだけどな。

　でも、ひどく安心する。

　餓が鬼きのころ、俺はきっと、こんなぬくもりが欲しかったんだ。親父おやじ殿どのから俺の養育費を受けとっていた養父母の家は、下町のなかではわりと裕ゆう福ふくだったけれど、貧びん乏ぼうでも、ちゃんと父親がいて、母親がいて、兄弟がいて、そんな家が俺はうらやましかった。どんなにあがいても、手に入れられないものだと知っていたから。

　けど、俺は──もう餓鬼じゃねえ。

「汚れちまうぞ、服」

「いぃよぉぜんぜん。服は新しいの買えばいぃもん。レニィくんはそぉはいかない」

「……そりゃそうだろうけどな。つーか、あんた、なんでここに──」

　レニィははっとしてトモヨの胸から顔を離はなし、あたりを見ま

わした。おい。マジかよ。

「死んでんのか……？」

「どうかなぁ。トモヨさんなりに手加減はしたけどね。いぃよ、死ねば。レニィくんにひどいことする人はトモヨさんが許さない」

「魔術、かよ」

　アンギーも、ボンゴも、その他の三人も、全員地面に横たわっている。指先をぴくぴくさせている者はいるが、あれを生存の証あかしと見ていいのかどうか。何しろ、真っ黒焦こげとまではゆかないまでも、身体からだのあちこちが焼け焦げて、煙けむりが立ちのぼっている。えらく焦げくさい。

「──あんた、魔術には興味がないんじゃなかったのか」

「興味はそんなにないよ？　魔術なんてくだらない。ただ、才能のあるなしは別だし、トモヨさんは魔術士だから、何もかも素す直なおに正直にとはゆかないの。レニィくんも秘密にしといてね。トモヨさんのオリジナル魔術。黒魔術。愛と★ラヴデス死の雷サンダーボルト。トモヨさんがすっごい魔術士だってことは誰にも教えてない。お姉様とか、見破ってる人はいるかもしれないけど」

「ああ……よくわからねえけど、誰にも言わねえよ」

「じゃぁ、それが交こう換かん条件」

「は？」

「お薬。知りあいに腕うでのいぃ外げ道どうの錬金士がいるから作ってもらいに行こ。すぐできるよ」

「……いいのか？　そんなんで」

　トモヨはその問いには答えずに、ほとんど抱きあげるようにしてレニィを立たせた。それから、セーターの袖そで口ぐちでそっと顔をふいたり、怪け我がの具合をやさしくたしかめたり──なんだか薄うす気味が悪くなるくらい丁てい重ちようで、いたれりつくせりといったかんじで。

「しょぉがないよ。惚ほれたほうが負け」

「ほ、惚れ……？」

「本気で好きになっちゃったみたい。レニィくんのこと。トモヨさんはもともと年下の童どう貞ていは好きなんだけど、それだけじゃぁないかも。性欲じゃなくて恋こい？　おかしいね、トモヨさん。レニィくんのためならなんでもしてあげたい」

「あ、いや……それは、でも、な……」

「いぃよ。レニィくんは気にしないで。片思いでもいぃの。トモヨさんは報むくわれない恋に胸を焦がして泣き暮らしてだけど大好きなレニィくんのために奴ど隷れいみたいになんでもかんでもしてあげてため息の数だけ思いを募つのらせながら咲さかない花のまま枯かれていつか悲しく散ってゆくの。冗じよう談だんだよ？　さぁ、行こ」

　トモヨは、何かに酔よっているかのような調子で好き勝手に喋しやべりまくったあげく、いきなりレニィの手を引いて歩きだした。レニィはあらがわなかった。トモヨの力が意外と強かったこともあるが、レニィが弱っていたせいでもある。けれども、それ以上に、トモヨに逆らう気にはなれなかった。今ここでトモヨの厚こう意いを無にするような真ま似ねをしては、バチがあたると思った。

「……でもな。せめて外に出るときくらい、下になんか穿はけよ」

「レニィくんがそぉして欲しいなら、そぉしよぉかな」

「して欲しいっつーかな……」

「うそ。聞くよ。レニィくんの言うことなら」

　トモヨは振ふり返って少しだけ笑ってみせた。

　──まったく、わけのわからねえ女だ。

9

　記き憶おく。たいせつなもの。それでいて、あやふやなもの。も

ろくはかないもの。しっかりと抱きしめて、いつまでも忘れないで、一つたりともなくしたくないのに、少しずつ失われてゆくもの。たとえば、昨日の朝ご飯はなんだったっけ。一昨日おとといは誰だれと何をしていたっけ。お父さんの顔。お母さんの手。おばあちゃんの声。おじいちゃんのにおい。たまにおんぶしてくれたお兄ちゃんの背中。もうどれもこれもぼんやりしている。うかうかしていると、すっかり忘れてしまいそうで、怖こわい。怖いと思えているうちはまだいいけれど。その恐きよう怖ふさえも──何もかも、どうせなくしてしまうのに、このうえ何を積み重ねてゆけばいいんだろう。いずれ記憶も身体もぼろぼろになって、死んでしまうのに、なぜ生きてゆかないといけないんだろう。

　ずっと泣いてばかりでした。

　つらいことばかりでした。

　みんなにいつもいつも愚ぐ図ずだ無能だ役立たずだバカだノロマだウスノロだ邪じや魔まだ消えろと言われて、何も感じないはずがないでしょう？　へらへらしているのだって、本心から笑っているわけじゃない。そんなのあたりまえでしょう？

　たった一つだけだったんです。

　わたしを支えていたもの。

　──記憶。

　家族のあたたかい記憶。

　お師し匠しよう様が誉ほめてくださったときの記憶。

　誰かがやさしくしてくれたときの記憶。

　でも、それもいつかこぼれ落ちて、わたしはすべてを忘れて、やっぱりゴミクズで。だからお師匠様にも見捨てられて、放ほうりだされて、あてもない旅に出て。エルデンを目指していたなんて、嘘うそだ。とっさにそれくらいしか思いつかなかった。目的地なんてなかった。何もなかった。何も考えられなかった。ただ涙なみだが止まらなくて、風が吹ふいていて、鳥が飛んでいて、わたしは泣くのをやめようと空ばかり見上げていて、姿を隠かくそうと、いなくなってしまおうと、道を外れて、森へ向かって、そのまま歩いて、歩いて、歩いて、疲つかれ果てたら地面に寝ねそべってしまお

う。そうしたら、そのうち死ぬだろう。死んで、動物の餌えさになれば、こんな自分でも少しは役に立てるかもしれない、と思って。それなのに──寂さびしくて。すごく、寂しくて。人の気配を求めて、迷いこんだ場所は鬼人オーガの集落で。あのとき、なんで逃にげたんだろう。逃げなくてもよかったのに。黙だまってこの身をさしだせばよかったのに。おかげで、たくさんの人に迷めい惑わくをかけて。わたしは何をやっているんだろう。やっぱり、何をやってもだめだ。そして、この思いも、絶望すらも、わたしは失ってしまう。

ああ。

なんて無意味なんだろう。

生まれてこなければよかった。

生きていたってしょうがない。

もう、無理。

これくらいで、許してください。楽にさせてください。

「少しは落ちついたか」

「……はい」

嘘ばっかり。

わたしは相変わらずベッドの上の段に寝ている。もう縛しばられたりはしていない。カーテンは閉めていないけれど、毛布を頭からかぶって、目をつぶっている。しばらく前にレニィさんが薬をのませてくれた。レニィさんはあの薬をどこから手に入れてきたんだろう。お金はどうしたんだろう。訊ききたいけれど、訊いても仕方ない気がする。

どうでもいい。

レニィさんは床ゆかに座っているみたいだ。二人きりだ。それが、何？　どうでもいい。もう外は暗くなってきつつあるようだ。どうでもいい。なんだか、ぜんぶ、どうでもいい。

「苦しいとか、どっか痛いてえとか……なんかあったら、言えよ」

「……はい」

「薬、な。前のやつより効き目が弱いらしい。だから、のんだあとのかんじがちょっと違ちがうかもしれねえけど、がまんしろ」

「……はい」

「がまんするな」

「……はい」

「てめえ、人の話、聞いてねえだろ」

「……はい──いえ……聞いて、ます。ちゃんと」

「そうかよ。まあ、どっちでもいいけどな。てめえがどう思ってようが、何を言おうが、俺は俺のやりたいようにやるだけだ。コロナ」

「……はい」

「お前、言ったよな。どうせ自分はいらない、不必要な存在だって」

「……はい」

「俺はそうは思わねえ」

　いつだったか、お師匠様のお屋や敷しきで、ミヤお姉さんがそんな話をしてくれたことがある。たしか、「コロナ、あなたはもしかしたら自分のことをいらない人間だ、世界にとって不要な部品だと思っているかもしれないけれど、それは間違いよ。生きとし生けるものはすべて何かの役割があって生まれてくるし、そのおかげで世界は調和を保っているの。一見、邪魔そうなものでも、それがないと崩くずれてしまうバランスというものがある。魔ま術じゅつではそのバランスの構造を真理と呼んで、それを解き明かすことは究極的な目標の一つなのよ」とか、そんなことを。

　覚えている。まだ、覚えていた。少しだけ、ほっとした。

　けれども、本当にそうなのだろうか。コロナがいなくなることで、本当に何か不都合が生じるのだろうか。そうとは思えない。た

ぶん、変わらない。コロナがいなくなっても、きっと世界は変わらずにつづいてゆく。ミヤお姉さんは、魔術もそれなりにできて、しっかり者で、面めん倒どう見みがよくて、みんなに慕したわれていた。だからそんなふうに信じられるんだろう。所しよ詮せん、ミヤお姉さんには、コロナの気持ちなんて理解できない。誰だれかに必要とされている人に、誰からも必要とされない無価値な人間のことがどうしてわかるだろう。わかるはずがない。

　レニィさんだって、同じだ。

「俺は──」

　それで、レニィさんもミヤお姉さんと同じようなことを言うんだ。

「俺には」

　同じ、ことを。

「お前が必要だ」

　同じ──

　じゃない……？

「そう決めた。決めたなんて言うと、妙みようだと思うかもしれねえけどな。でも、気持ちとか、感情とか、そういうのは揺ゆれ動くもんだろ。ふらふらして、強い風が吹ふけばどっかに行っちまう。そいつを繫つなぎ止めるのは、結局、自分の意思だと思うんだ。俺は意地っ張りだからよ。一度こうと決めたら、殺されたって曲げるつもりはねえ。俺は決めた。俺にはお前が必要だってことにする。誰がなんと言おうとな」

「……ことに、する、なんて……変ですよ。おかしいです」

「かもな。でも、もう決めちまったんだ。しょうがねえ」

「……しょうがなく、ないです。考えなおせばいいじゃないですか。簡単なことです」

「簡単かどうかはお前が判断することじゃねえだろ。これは俺の問題だ」

「……勝手、ですね」

「ああ」

「勝手すぎます」

「そうだな」

「勝手、すぎて──」

　ああ。

　何も考えられない。どうしたらいいのかわからない。だって、今まで、そんなことを言ってくれた人は誰もいなかった。一人もいなかった。言って欲しかった。誰でもいい。たった一人でもいい。そう言ってくれる人がいれば、生きてゆける。生きてゆこうと思える。そう言ってくれる人がどこかにいるって、信じたかった。信じないと、とても立っていられなかった。

「餓が鬼きのころの話だけどな」

　レニィさんの声に耳を傾かたむける。あふれそうな涙なみだを懸けん命めいにこらえて、一言一句、聞き逃のがすまいとする。すべて覚えておきたい。忘れてしまうかもしれないけれど、少しでも、ほんの少しでも、刻みつけて、残してゆきたい。生きたい。生きてゆきたい。

「猫ねこを飼ったんだ。母猫は見あたらなくて、仔こ猫ねこだけ三匹。なんかで死んじまったんだろうな。見つけたときはもうかなり弱ってて、二匹は駄だ目めだった。一匹だけだったんだ。でも、なんとか生きのびたはいいものの、乳はちゃんと飲まねえし、歩くのもやっとで、とにかく手間がかかって仕方なかった。そのくせ、何かにつけぴーぴーうるさくて──こっちは寝ねつけねえし、眠ねむったら眠ったで潰つぶしちまいそうになるしで、まいったよ。だけどな。いなくなっちまったら、やけに寂さびしかった。やりきれなかった。恰かっ好こう悪いけどよ。ちょっと泣いたよ」

「……死んで、しまったんですか」

「ああ。医術士にも診みてもらったけどな。病気とかじゃなく、やっぱり、生きてけるだけの体力がなかったみたいだ。あいつが冷たくなるまで、抱だいてたんだ。飼うからには、死ぬまで面倒見

るって、最初から決めてたからな」

「レニィさんにとって……コロナは、そのこと同じということでしょうか」

「そういえば、ぴーぴーうるさくて手がかかるところはよく似てるかもな」

「……コロナは、猫さんじゃないです」

「あたりまえだ」

　レニィさんが立ちあがる気配がした。

　コロナも起きあがらないといけないと思う。

　今すぐには無理でも、そのうち起きあがることができそうな気がする。

「お前はお前以外の何ものでもねえよ」

10

　鉄鎖の憩い場の近くに、「ベンテン・カフェ」という店がある。無む駄だに頑がん丈じようそうな建物の一階をぶち抜ぬいた広い店てん舗ぽのなかには椅い子すが一脚きやくもなく、いわゆる立ち飲みスタイルなのだが、奥のカウンターで茶を買う者はあまり多くない。馬ば鹿かみたいに高いからだ。

　まあ、喉のどが渇かわいて仕方なければ、店内で勝手に飲み物や食い物を販はん売ばいしているやつもいる。値段はそっちのほうが遥はるかに手て頃ごろだし、そもそも、ベンテン・カフェを訪おとずれる連中の目的はたいてい飲み食いではない。喉を潤うるおして腹を満たすのはついでみたいなもので、むしろ、客の目当ては壁かべ一面に貼はりまくられた無数の紙切れだ。

「──しかし、またあんたらと組むことになるとは思ってもみなかったな」

「うっせえぞガキ。そいつはこっちの台詞せりふだボケ。権ゴン堂ドウがぎゃあぎゃあぎゃあぎゃあぎゃあ言うからしょうがなく組んでやってるだけで俺はおまえらのツラも見たかねえんだ本当は糞くそ。死ね」

「よせ、サトー。いかなる経けい緯いであろうと、組むと決断した以上、仲間同士だ。背中を預ける者に対してはそれ相そう応おうの態度というものがあろう」

「はいはいはいはい。権ゴン堂ドウ様は大人ですねえ俺よっか二個下なのになあ。まったく偉えらいよおまえは最高だよ最高。最高すぎてむかつくからもう肛こう門もんぶっちぎれるまで脱だつ糞ぷんして死んじまえ」

「……権ゴン堂ドウ、あんた、よくこんな根こん性じよう腐くさったやつとつきあってられるな」

「うむ。慣れとは恐おそろしいものだ」

「慣れるまでがまんしてきた理由がわからねえよ」

「このように見えて、最低なまでに最悪ではないところもなくはないのだ。おそらく」

「おそらく、ね」

「じつは、少々自信がなくなってきた。ベンテンに貼り紙を貼っても、梨なしの礫つぶて。余人の貼り紙を頼たよりにこちらから同行を申しこんでも、すべて断られた。それほどサトーは評判が悪い」

「おい待て権ゴン堂ドウ。なんで俺のせいって決めてんだよ。おまえのせいかもしれねえだろああ？」

「そうとは思えぬ。私一人ならばよいのだがどうかと、何度か耳打ちされたからな」

「ああぁそうですかそいつはよかったですねえ。だったら俺みてえなファッキンサノバビッチなんか放ほうっといてどっかの誰だれかと一いつ緒しよに楽しくアンダーグラウンドでハッスルすりゃよかっただろ馬鹿じゃねえの？　だから脳がトコロテンで髪かみはポニーテールなんだよおまえはよ」

「私の髪形はポニーテールなどではない。顚テン聖セイ虞グにおける成人男性の標準的な髪形の一つで、馬バ尾ビ結ユイという。何度言ったらわかるのだ」

「……いや、権ゴン堂ドウ、それ、たぶんポニーテールと似たような意味じゃねえかな」

「そうなのか。ならば、サトーの言うこともあながち間ま違ちがいではないということなのだな。うむ。すまぬ、サトー。私のほうが誤っていたようだ」

「はっ、いいんだよわかりゃあよ。まあこれに懲こりて俺に口答えとか意見とか二度とするんじゃねえぞ糞うぜえからな。わかったかポニーテール」

「それとこれとは話が別だ。しかし、やはりポニーテールと呼ばれるのはどうも気にくわぬな。なぜだろう」

　なぜだろうも何もないような気がしてならないが、権ゴン堂ドウがサトーのクソ野郎モウフオとつるんでいられるのは、この性格のおかげかもしれない。マイペースというか、ちょっとずれているというか、なんというか。とにかく、そうでもなければサトーに耐たえられるはずがないし、耐える必要性なんて見いだせないだろう。レニィだって、今朝、ベンテン・カフェで権ゴン堂ドウに声をかけられたとき、内心、サトーさえいなけりゃなと思ったものだ。とはいえ、こっちは贅ぜい沢たくを言える立場ではないし、権ゴン堂ドウはそれなりに頼りになるので、今、こうして五人でＤ13上層テトルアープにきているわけだが。それにしても、雇やとわれ医術士のヴィヴィアンが権ゴン堂ドウたちの依い頼らいを断らずに同行しているのは、意外というより不思議だ。

「わたしは、規定の分け前さえもらえるのであれば、相手がどなたでもかまいませんから」

「へっ。相手なんか選んでらんねえの間違いだろ？」

　そんなありがたい存在に対しても、サトーの悪態は止まらない。

「レニィ、おまえはこの稼か業ぎよう始めてまだ日が浅あせえから知らねえだろうがこの女はその筋じゃあちょっとした有名人なんだよ。この女を雇うのは俺らみてえな下の下の下かなーんも知らねえ

間抜けの阿あ呆ほか。それかあれだな。この女の見た目に騙だまされた目が節穴の盆ぼん暗くら欲よくボケか」

「言葉がすぎるぞ、サトー」

「どこがすぎてんだよすぎてねえよぜんぜん。俺は事実を言ってるだけなんだからな。この女は疫やく病びよう神がみなんだよ。この女と一緒にアンダーグラウンドにもぐって死んだ侵入クラツ者カーの数を聞いたら誰だってびびって逃にげだしちまう。それでなかなか仕事にありつけねえのさ」

「私はそうは思わぬ。ヴィヴィ殿どのは誰の求めにもこだわりなく応じるがゆえに、未熟な輩やからと行動をともにする機会がどうしても多くなる。それがために同行者のなかから幾人もの死者が出るのだとしても、それ以上の命を救ってもいるはずだ。げんに、我々とてヴィヴィ殿に助けられてきたではないか」

「そりゃおまえらだけだろ。俺は怪け我がなんかほとんどしてねえから関係ねえよ」

「おぬしは逃げ足だけは速いからな。負傷せぬのも道理だ」

「おまえみてえに猪ちよ突とつ猛もう進しんの単純トコロテン馬鹿じゃねえんだよ俺は。いいか？　昔っから本当に強つえぇやつってのは勝てる勝負しかしねえもんなんだ」

「それではおぬしは一生勝負などできぬな。私の見立てでは、おぬしはコロナにも勝てぬぞ」

「おいおいおいおいコロナのマメチビには勝てんだろ！　いくらなんでもよ！」

「いいや、無理だ。おぬしは才能素質を云うん々ぬんする以前に怠たい惰だすぎる。当然、レニィにも勝てぬ。間違いなく、おぬしはこのなかで最弱にして一番の役立たずだ」

「ああぁそーですかそーですか。だけどな。そんなふうに発破かけても無む駄だ無駄無駄ですから。働かねえやる気ねえテキトーだらしねえそれでも死なねえお気楽人生は俺のポリシーなの。俺はこうやってずっと生きてくの永遠にフォーレヴァー。わかったかよポニーテール」

「ポニーテールはよせ！」

「似たようなものだっつーんでおまえさっき俺に謝ってやがったじゃねえかよ！」

「いや、やはりポニーテールとは違う。よいか、この馬バ尾ビ結ユイは我が祖国で古来──」

　と、なんだかまあ、仲がいいんだか悪いんだかよくわからないが、相あい性しようは悪くない二人なのだろう。初ニユ心ービ者ーのレニィから見ても、正直、能力的には二人で一人前といったところで、うだつのあがらない侵入クラツ者カー以外の何物でもないとはいえ、それでもこっちよりはマシだ。何しろ、俺ときたら、餓が鬼きで、経験が浅くて、とくに利口なわけでもないし、特別な人脈があるわけでもなく、この手に握にぎっているのは安物の剣けんとちっぽけな未来だけ。その未来とやらも、ひどく不確かで、あると信じていないとすぐに消えてしまう幻まぼろしみたいなものだ。それでも、この歩みを止めるわけにはゆかない。

「──サトー、権ゴン堂ドウ。じゃれあうのはそのへんにしとけ」

　レニィがそう声をかけると、権ゴン堂ドウが愛用のモトロール刀「千日雨」を鞘さやから抜ぬいた。

「──む。どこだ」

「前方左。ちょうどよさげなのがいる。五……六匹か」

「ほう。私が二匹。レニィが二匹。サトーが一匹というところか。相手にとって不足はない」

「うえええぇ。俺もやんのかよめんどくせえ。俺はいいよ遠えん慮りよしとく。俺よりかコロナのほうが強つええんだろ？　だったら俺は後ろでヴィヴィ様守ってっからあとはおまえらよろしく」

「何がよろしくだ。恥はじというものを知らぬのか、おぬしは」

「阿呆かおまえ俺がそんなもん知ってたらこんな人生送ってねえだろうが」

「なるほど。もっともだ」

「あっさり納なつ得とくしてんじゃねえよ糞くそポニーテール」

「だから、ポニーテールではないと何度言ったら──」

　またかよ。きりがねえな、こりゃ。さすがにヴィヴィアンも、呆あきれたようにため息をついてるし。もちろん、俺も呆れまくってる。コロナだけだ。隊列の最さい後こう尾びにつけているコロナは、杖つえをぎゅっと握りしめて、思いつめたようなスミレ色の目で、まっすぐ前だけを見すえている。いつもはぴーぴーうるさいのに、今日はほとんどしゃべらない。たまに、会話のなかでコロナの名前が出たときだけ、ぴくりと反応する。ずいぶん緊きん張ちようしているみたいだ。

「コロナ」

「……は、はい」

　レニィの呼びかけに答えた声も、表情も、びくついている。そりゃそうか。そんなもんだよな。あんなふうに失敗して。あんなことがあって。一応、迷めい惑わくかけた連中と、また顔をあわせて。怖こわいよな。サトーには容よう赦しゃなく罵ののしられたし。俺もあえて弁護はしなかった。やっちまったことはやっちまったことだから、それは受け止めてゆかないとならない。俺たちの手のなかにあるちっぽけな未来を信じるためには、やっぱり、少しずつでも強くなってゆかないといけないから。

「俺らが突つっこむ前に、お前の魔ま術じゆつ、ぶちかましてやれ」

「──え……？」

　コロナだけではなかった。サトーも、権ゴン堂ドウも、ヴィヴィアンさえも、息をのんでレニィを見た。それはそうだろう。コロナが魔術をろくすっぽ使えないインチキ魔術士だということは、彼らも知っている。もともと、権ゴン堂ドウたちは、コロナの魔術に期待して誘さそいをかけてきたのだ。コロナも彼らの前で何度か魔術を使ってみせたが、てんで駄だ目めだった。相変わらず手品のほうが何倍もマシといったかんじで、はっきりいって、お話にならなかった。

「あんたらの言いたいことはわかるよ。でも、べつに問題ねえだ

ろ。成功したら儲もうけものだし、失敗したって突とつ撃げきの合図くらいに思えばいい。何か不都合があるか？」

「不都合というか……」

　何か言いかけて口ごもった権ゴン堂ドウのあとを、サトーがつづけた。

「なんでそんな無む駄だなことやらなきゃならねえんだよ。あのな糞ガキ。俺らは遊びにきてるんじゃねえんだぞ？　仕事だ仕事金のためだ金稼かせぎ。占うらないじゃねえんだからよ。あたるも八はつ卦けあたらぬも八卦とか馬ば鹿かじゃねえのふざけんなよボケ」

「んなことはあんたに言われなくてもわかってる。つーか、あんたにだけは言われたくねえ」

「うむ。その点については私も同意する。サトー、おぬしに何か言う資格はない」

「うっせえな権ゴン堂ドウおまえ殺すぞこら？　なんで俺の味方しねえんだハゲ」

「おぬしの腕うででは私を殺すなどとうてい不可能だし、私は禿はげていない。しかし、レニィ。結果どうするにせよ、唐とう突とつにそのようなことを言いだした理由くらい訊きかせて欲しいものだ」

「理由、か。そうだな……」

　レニィは下等蜥蜴人の群れに目をやって、剣の柄つかに手をかけた。

「俺がそうしたいから、じゃ駄目か」

　──じつは、こんなことをトモヨに言われた。錬金士に薬を生成してもらい、死にダイングかけサンダー雷電ボルトに帰ろうとしたときだった。「そぉいぇば人には二種類いるって言ったよね。魔術士か、それ以外。コロナちゃんはどっちかな」どっちなんだよと訊いたが、トモヨは答えず、思わせぶりに微笑ほほえんで「またねん。たまに遊びにきてくんないとトモヨさん夜よ這ばいしちゃうよ？」と言い残して去っていった。それから、レニィはずっと考えていた。コロナの小さな手にも握られているはずのちっぽけな未来を、

コロナは──俺たちは、どうしたら信じられるだろう？

「コロナ。お前、十五だよな」

「……はい」

「俺は十六だ。陳ちん腐ぷなたとえだけどな。花でいったら、つぼみみたいなもんだろ。まだ咲さいてねえ。いつ咲くかもわからねえ。咲かないままかもしれねえ。でも、まだ、つぼみなんだ」

　勝手に押しつけられた人それぞれでばらばらの可能性を、俺たちはいったいどうすればいい。

　望んだわけじゃない。欲しくてもらったものばかりじゃない。失いたかったわけじゃない。奪うばうことでいつも満たされるともかぎらない。つまずきながら転がりながら進むこの道の果てに何があるのかさえわからない。本当は、俺たちには明日なんてないのかもしれない。ただひたすら、今日、今日、今、今の連続にすぎなくて、たどりついた明日はいつの間にかもう今日になっていて。未来ってやつがそんなものじゃないと、誰だれが言える？　どうしたら信じられるも何も、信じるほうが馬鹿で。しかも、この道はいつ途と絶だえてしまってもおかしくなくて。

　だから、意外とコロナのほうがまともかもしれないと、俺は思ったんだ。

　もういい。ぜんぶどうでもいい。自分を終わらせてしまいたい。そう。世界はたしかに暗い。絶望に満ちている。明るい世界を夢想するには、俺たちはあまりにもちっぽけすぎる。せめて道しるべが欲しい。正しさを教えて欲しい。助言が欲しい。正解をくれよ。

　でも、たぶん、誰もわからないんだ。俺にもわからないんだ。わからないってことしかわからないんだ。わからないなりに、間ま違ちがいかもしれない答えを出しつづけるしかないんだ。

「ゆっくりでいいんだ。何ヶ月かかろうと、何年かかろうと──」

　無力な俺たちには、それしか生きるすべがない。

　レニィは隊列の後ろに移動して、コロナの手をつかんだ。



「たとえ咲かなくたって、俺はいつまでも待ってやるよ」

「……いつ、までも？」

「ああ」

　レニィがうなずいてみせると、コロナは瞳ひとみを閉じて、深呼吸した。

　それから、目を開けて、レニィには微笑みかけただけだった。コロナはサトー、権ゴン堂ドウ、ヴィヴィアンを見まわした。

「コロナ、やってみます。やらせてください」

「はっ。よくわかんねえしめんどくせえしもう勝手にしろボケ」

「異存はない」

「右に同じです」

「──ありがとうございます！」

　コロナは深々と頭を下げてから、突然、レニィの胸に頭ず突つきをした。一いつ瞬しゆん、わけがわからなかったが、どうやらレニィに抱だきついたつもりらしい。馬鹿。いきなり何しやがるんだ。しかし、レニィが何か言う前に、コロナは身をひるがえして隊列の先頭に出た。ローブのポケットから触しよく媒ばいをとりだす。両手で杖つえを握にぎりしめて、精神を集中させる。呪じゆ文もんの詠えい唱しようがはじまった。

「熔Ｄｅｌ隷Ｙｏ誹……！」

『薔薇のマリアVer1　つぼみのコロナ』了

あとがき

　コロナとレニィについて少しだけ書こうと思います。二人の物語は『薔薇のマリア』を書きはじめる前から僕の頭のなかにありました。実際、彼らは実質的な最初の『薔薇のマリア』である『Ver0』に登場しています。コロナとレニィは、本編の主人公マリアローズと同じ時期に同じ街で暮らし、ときおり顔をあわせながら、別々の道を歩いています。彼らが見るエルデンは、マリアローズが見るエルデンとは違ちがうでしょう。マリアローズにしか見られないものもあれば、彼らにしか見えないものもあるはずです。その意味では、『つぼみのコロナ』はもう一つの『薔薇のマリア』なのかもしれません。ですから、レニィとコロナの物語は『薔薇のマリア』本編と無関係ではありませんが、基本的には独立したお話です。『薔薇のマリア』をご存じない方にも楽しんでいただける──と思います。いずれにしても、もしかしたら、こういう形の『薔薇のマリア』もあったかもしれない、そんなことを考えながら書いた物語を、ようやく文庫として皆みな様さまにお届けすることができて、まずはほっとしています。

　毎度のことながら短くて恐きよう縮しゆくですが、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関わったすべての人々、そして今、本書を手にとってくださっている皆様へありったけの愛と感謝をこめつつ、次こそ『VI』をお届けすることを約束して、筆を置きます。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア Ver1

つぼみのコロナ

十じゆう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア Ver1　つぼみのコロナ』平成18年8月1日初版発行

平成20年7月30日六版発行

BOOK☆WALKER